

令和元年度

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業

拠点校 研究報告書

2020年3月31日

関西学院高等部

巻頭言

関西学院高等部

部長(校長) 枝川 豊

関西学院高等部の源流は、131年前の1889年に関西学院普通学部として誕生した時に遡ります。アジアやアフリカなど世界各地で活動した宣教師で医師でもあった **Walter Russell Lambuth** によって創立された関西学院は、当初から国際的に開かれた学校であることを使命としてきました。本校は、「凡ての人の僕たれ」という聖書からの言葉を大切にしています。常にキリスト教を通して、他者に仕え世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心や真摯な態度を備えた人格を培うことを教育の根幹に据えています。

ますます混迷を深める現在の世界情勢を考える時に、「グローバル化」、「グローバル社会」、あるいは「グローバル人材」とは何かを改めて問い直す必要に迫られています。グローバルと言えば外の世界に目を向けがちですが、生徒たちには広い世界にはばたくと同時に、国内の諸問題にも関心を持ち、内側にも目を向けることができる真のグローバルリーダーとなって欲しいと考えています。また、これから迎える **Society5.0**、その社会において「誰一人置き去りにされない持続可能な社会」を目指すことを目標とする **SDGs**。その目標達成のために私たちは取り組みます。

「他者に、世界に仕える使命感」をこの現代の社会に生かし、また、関西学院の根幹にあるキリスト教主義教育に基づいたスクールモットー“**Mastery for Service**（奉仕のための練達）”を体現する「世界市民」として、一人一人が「平和な社会を築く担い手」となることを、本事業の目的としています。

内容

巻頭言	1
拠点校による2019年度の研究開発実施状況について	3
研究開発の活動実績一覧	5
1. 生徒の活動	5
2. 対外会議・他校への視察・発表会・研究会等参加（教職員の活動）	7
3. 普及活動	7
4. その他	7
今年度の研究内容と評価の概要	8
【研究内容1の具体的な内容とその評価】	10
【1学年全体プログラム「ソーシャル探究」について】	42
(研究内容1総括) グローバルな社会課題を探究するためのカリキュラム開発	55
カリキュラムアドバイザー 関西学院大学准教授 時任 隼平	
【研究内容2の具体的な内容とその評価】	58
【研究内容3の具体的な内容とその評価】	71
本研究における評価方法の展望と年度報告	91
関連する取り組みについて	94
(資料1) 教育目標を考えるための、外部ファシリテーターによるワークショップの開催について	96
(資料2) 海外交流アドバイザーによる、探究型国際交流プログラムの新規開拓について	106
(資料3) Classi社とのe-ポートフォリオにおける新機能の共同開発について	120
Classi株式会社 石川 翔一 高野 誠史	
(資料4) 成果普及のための「ICT×探究学習カンファレンス2020」の実施について	148

拠点校による2019年度の研究開発実施状況について ～SGH事業での課題を踏まえたWWL事業でのプログラム開発～

今年度の拠点校関西学院高等部の取り組みは、総括すると今後の活動の基盤づくりに時間をかけた1年であった。「SGH事業での課題と反省を踏まえたプランニング」を基軸に、「全ての教職員が同じゴールを見据えた上で、学校を変革するために本事業に取り組むためのマインドセットの醸成」と「本事業の指定終了後も、人的にも経済的にも自走できるための体制づくり」に取り組んだ。今後、連携校等へ本校の取り組みをプロトタイプとして広げていくためにも、今年度はこのような根本的な見直しの時とした。

1. 今年度の本研究開発の構成

本校は2018年度までSGH事業の指定校であった。よって今年度は、「昨年度までSGH事業で実施されていたプログラムを継続して受講する生徒（高校2年生・3年生）」と「WWL事業としての新規プログラムを受講する生徒（高校1年生）」が存在した。

これを受けて、実際の研究開発実施内容としては、以下の2つに分かれた。

(1) 高校1年生対象：

WWL事業として新規に開発した、教科横断型、PBL型授業「グローバル探究・BASIC」の実施と、来年度に新規開講される「グローバル探究A（AI活用）」「グローバル探究B（ハンズオンラーニング）」「グローバル探究C（グローバルスタディ）」の開発

(2) 高校2・3年生対象：

基本的には昨年度までのSGH事業の内容を継承しつつも、その課題を解決するために、WWLで新規に導入する要素を取り入れたプログラム「Global Study II,III（以下それぞれGSII・GSIII）」の実施

ただし、両者は全く異なるプログラムではあり得ない。本校のWWL事業は、以下に述べる通り、あくまで昨年度までのSGH事業の果実をもとに、そこから見えてきた課題を徹底的に抽出した上で、それらを解決し、より充実した探究型の学びを推進するために構築したものである。

2. SGH事業の課題と反省

関西学院高等部は、キリスト教主義に基づく一貫校である関西学院の強みを活かし、「高大連携」と「国際協力」を軸にSGHを展開した。SGH1年目は、「国際協力」に関する学びをオムニバス形式で展開したものの、発展性や一貫性、全体的なビジョンに欠けた。2年目からは、「世界を体験する・世界を学ぶ・世界のために行動する」という方針を立てて展開し、最終年度には3年生向けに、海外の高校生との問題解決に向けた実践指向の通信型授業（詳しくは【研究内容3】 p.71にて）を試行した。その5年で得られた課題と反省を、後継事業であるWWLCで活かすことを出発点としている。

以下に本校のSGH事業での課題と反省についてまとめる。

(1) 「学び方」について

- ① SGHが後年には「主体的な学び、アクティブラーニング」へと舵を切るなか、学習内容（国際協力）に重きを置きすぎた感があり、「学び方」の深化が浅かった。
- ② 必須とされた「課題研究」を本校独自の40年以上の歴史を持つ読書科での論文作成で対応する予定だったが、文献主体の論文作成を中心とする読書科とSGHとの有機的な連携がうまくいかなかった。
- ③ SGH後半では、PBLに取り組むなかで、より実践的で多岐に渡る能力（たとえば、情報収集、分析から計画、広報、議論、振り返りなど）の養成が必要という見解に至ったものの、それらの能力を適正に評価する仕組みを構築できなかった。

(2) 「体制」について

- ① 一部教員に負担が偏る傾向にあり、業務量のバランスが崩れると共に、学校としての一体感に欠けた。
- ② 一部の有志生徒を対象にした、一部の「特別授業」に特化した取り組みになりがちで、教科や HR 活動、行事といった学校全体への効果波及が限定的であった。
- ③ 「高大連携」を軸に、大学教員の協力を得ながら進めたものの、学びの内容の組み立てや学び方については高等部教員によるところが大きく、それらにおいて大学教員や運営指導委員等外部の人たちから継続的にアドバイスをもらえる体制が不足した。

3. WWL 事業での重点目標

2.のような SGH 事業での課題と反省点を踏まえ、WWL 事業においては以下を重点目標とした。

- ① 学校全体として取り組み、全ての学校活動を巻き込む動きを作り上げること
- ② 全教員で時代に即した教育目標の見直しを行い、育むべき力の明確化と共有を行うこと
- ③ 学校全体で、ICT を用いたアクティブラーニング型授業を推進する体制を作り上げること
- ④ 実践や実地研修（フィールドワーク）を踏まえた上での、より深い探究学習への挑戦
- ⑤ 読書科をはじめとする他教科との連携
- ⑥ 人権講座やホームルーム活動、クラブ活動、宿泊行事等、課外活動との連携
- ⑦ 探究学習の評価方法の確立
- ⑧ 継続的に外部の企業や有識者からアドバイスをもらえる体制の構築
- ⑨ すべての基盤となる、教員の働き方改革の推進

4. 本研究開発報告書の構成について

これまでの内容を踏まえて、本研究報告書の記載内容は以下の通りの構成とした

- (1) 研究内容 1: 高校 1 年生を対象に、WWL 事業で新規に開発したプログラム
- (2) 研究内容 2: 高校 2 年生を対象に、SGH 事業のプログラムを継承・改善したもの
- (3) 研究内容 3: 高校 3 年生を対象に、SGH 事業のプログラムを継承・改善したもの
- (4) 関連する取組: 3.で述べた重点目標を意識した中で、当初計画外の取り組みとして
生み出されたもの

なお、この中でも、(1)が WWL 事業として新規に開発したプログラムであり、その総括を本事業のカリキュラムアドバイザーである、関西学院大学の時任隼平准教授にして頂いた (p.55 より)。

また、SGH 事業からの課題であり、新規プログラム開発に必須である評価方法の確立については、校務分掌として置いた WWLC 委員会の中に複数名からなる評価担当を置いた。本報告書では、WWL 事業における評価方法の展望と今年度の実施報告について、評価担当の責任者が記した (p.91 より)。

研究開発の活動実績一覧

1. 生徒の活動

＜研究開発のスケジュール＞

期日	プログラム名	対象
4月	11 Global Study(GS) II オリエンテーション	2年生
	17 Global Study(GS) III A/B	3年生
	18 GS II (グローバルゼーション/福田先生)	2年生
	24 GS III A/B	3年生
	25 GS II (グローバルゼーション/福田先生)	2年生
5月	8 GS III A/B	3年生
	9 GS II (グローバル経済と開発/栗田先生)	2年生
	15 GS III A/B	3年生
	16 GS II (グローバル経済と開発/栗田先生)	2年生
	24 GS III A	3年生
	29 GS III A/B	3年生
	30 GS II (まとめ)	2年生
6月	5 GS III A/B	2年生
	6 GS II (事前学習)	2年生
	19 GS III A/B	3年生
	20 GS II (子どもの権利と教育/岩坂先生)	2年生
	26 GS III A/B	3年生
	27 GS II (子ども権利と教育/岩坂先生)	2年生
7月	5 GS III A/B	3年生
	10 GS III A	3年生
8月	2~10 カンボジア研修	2年生
	5 “AI 活用” for SDGs	2年生
	6~8 関西学院世界市民明石塾	2年生
9月	5 GS II (2学期イントロダクション)	2年生
	6 グローバル探究 BASIC 受講希望者説明会	1年生
	11 GS III A/B	3年生
	12 GS II (国連とジェンダー/西野先生)	2年生
	13 グローバル探究 BASIC (体験授業①/時任先生)	1年生
	18 GS III A/B	3年生
	19 GS II (国連とジェンダー/西野先生)	2年生
	20 グローバル探究 BASIC (体験授業②)	1年生
	24 グローバル探究 BASIC 本登録	1年生
	25 GS III A/B	3年生
	26 GS II (国際協力/山田先生)	2年生
27 グローバル探究 BASIC (日本の貧困問題/能島氏)	1年生	

10月	2	GSⅢ A/B	3年生
	3	GSⅡ(国際協力/山田先生)	2年生
	4	グローバル探究 BASIC(世界の貧困問題/坂西氏)	1年生
	11	GSⅢ B	3年生
	16	GSⅢ A/B	3年生
	17	GSⅡ(まとめ)	2年生
	18	グローバル探究 BASIC(個人プレゼン)	1年生
	23	GSⅢ A/B	3年生
	24	GSⅡ(カンボジア研修報告)	2年生
	25	グローバル探究 BASIC (グループプレゼン)	1年生
30	GSⅢ A/B	3年生	
11月	3	GSⅢ文化祭プログラム	3年生
	7	GSⅡ (発表準備)	2年生
	8	グローバル探究 BASIC 準備(FW 事前準備)	1年生
	14	GSⅡ(高校生討論会事前学習/アンナ・シュラーデ先生)	2年生
	15	グローバル探究 BASIC 準備(観点と問い作成)	1年生
	20	GSⅢ A/B	3年生
	21	GSⅡ (発表:日本が抱える問題をクラスメートに紹介+解決方法の提言)	2年生
	22	グローバル探究 BASIC 準備(観点と問い作成続き)	1年生
27	GSⅢ A/B	3年生	
12月	5	GSⅢ B	3年生
	6	グローバル探究 BASIC (フィールドスタディ①)	1年生
	9	グローバル探究 BASIC (フィールドスタディ②)	1年生
	10	グローバル探究 BASIC (フィールドスタディ③)	1年生
	13	グローバル探究 BASIC まとめ	1年生
1月	9	GSⅡ (学びの振り返り/時任先生)	2年生
	10	グローバル探究 BASIC (成果物作成準備)	1年生
	16	GSⅡ (経験から得た学びを次のアクションにどうつなげるか)	2年生
	17	グローバル探究 BASIC (クラス内中間発表会)	1年生
		WWLC 文部科学省視察	1年生
	23	GSⅡ (グループ発表準備)	2年生
	24	グローバル探究 BASIC (クラス内中間発表会)	1年生
	30	GSⅡ (グループ発表準備)	2年生
	31	グローバル探究 BASIC (振り返り・再構築)	1年生
WWLC 運営指導委員会・検証委員会		—	
2月	14	グローバル探究 BASIC (発表準備)	1年生
	20	GSⅡ (グループ発表①)	2年生
	21	グローバル探究 BASIC (最終発表会①)	1年生
	26	グローバル探究 BASIC (最終発表会②)	1年生
		GSⅡ (グループ発表②)	2年生

2. 対外会議・他校への視察・発表会・研究会等参加（教職員の活動）

2019/6/28	2019年度 SGH・WWL コンソーシアム構築支援事業合同連絡協議会
2019/8/19~30	インドネシア・バリ島、フィリピン・イロイロ現地訪問
2019/12/13	啓明ビジネスプランコンテスト
2019/12/14	中部大学春日丘高等学校「HARUHIGAOKA SDGs GLOBAL MEETING 2019」
2019/12/17	ひょうごグローバルリーダー育成推進懇話会
2019/12/21~22	全国高校生フォーラム
2020/2/13~15 2020/3/13	新科目ハンズオンラーニング関連研修／広島県、福井県
2020/2/23~3/13	ミャンマー、インドネシア、カンボジア、フィリピン現地訪問
2020/3/11	新科目ハンズオンラーニング関連研修／西宮市役所

3. 普及活動

(1)成果発表会

- ・2019年度 SGH 全国高校生フォーラム 2019年12月22日 東京国際フォーラム ホール E2等
発表者：1年生（4名）
テーマ：日本の貧困
- ・探究学習×ICTカンファレンス2020 ICTでより深める探究学習のデザイン
2020年2月24日 Classi株式会社、関西学院高等部 共催
全大会、基調講演、パネルディスカッション、分科会

(2)WWLC 紹介リーフレット 発行

(3)高等部 HP に WWLC ページの開設(今後、随時更新予定)

4. その他

- (1) ALネットワーク拠点校・連携校拡大会議
日時：2019年6月27日（木）13：00～14：00
- (2) 文部科学省視察
日時：2020年1月17日（金）14：30～17：30
- (3) 運営指導委員会・検証委員会
日時：2020年1月31日（金）14：00～17：30

今年度の研究内容と評価の概要

研究内容 1

1年次はSGHから継続するGLPを「グローバル探究 BASIC」と改め続投。関心のある生徒を選抜し、知識の習得・活用・探究のバランスを考慮しながら、AI活用・国際協働・ハンズオンラーニングの手法を用いた2年次の選択必修授業に向けて、探究授業の基礎を学ぶ。

また、第1学年全体を対象として3学期の1学期間で「ソーシャル探究」を行った。「グローバル探究 BASIC」受講者は授業の司会や他の生徒にアドバイスをを行う等、自分たちが学んできた内容を今度は他者に教えることによってさらに深い学びに導く形をとっている。

《研究方法》

1. 新科目「グローバル探究 BASIC」を新設、またその科目のシラバス作成。
2. 探究授業における評価の開発、実施。
3. 「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という目標を達成するために、探究授業におけるフィールドスタディの実施。
4. 学年全体の取り組みとして、週1回のホームルームの時間を利用した「ソーシャル探究」を実施
5. 来年度に新規開講される「グローバル探究 A (AI 活用)」「グローバル探究 B (ハンズオンラーニング)」「グローバル探究C (グローバルスタディ)」の開発

<研究開発の実施により明らかになったこと、および成果>

1. 探究学習のプロセスである、【①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現】のサイクルを、本校のカリキュラムと学習目標に適応したシラバスを作成することができた。
2. 生徒の授業内/成果物に関する学びと思考を評価するルーブリックを作成することができた。
またそのルーブリックを用いて複数の教員が協働して評価にあたり、成績を算出するに至った。
3. 学外の団体のご厚意とご協力により、学外の10か所においてフィールドスタディを実施することができ、生徒はその内3か所を訪れることができた。
4. 「ソーシャル探究」では、自分たちが学んできたことを誰かに伝えるという作業が自らの学びを振り返り、さらに深める意味でも大きな意味を持つ作業であることを再認識することができた。
5. 新規開講科目のシラバス作成を通じて、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」を繰り返す探究活動を基本としたカリキュラムが開発できた。

研究内容 2

2年次は、SGHから継続するGLPを続行。特別科目「グローバルスタディ (GSII)」では、大学教員も授業を担当する。

《研究方法》

1. 特別科目「グローバルスタディ (GSII)」において、「世界を知る」ことを目標に、各テーマの専門の大学教員から深く学ぶ
2. 「自分の学びを取り巻く社会と自分以外の社会との接点」を探るべく、学んだテーマに基づいたグループ発表を行う。

<研究開発の実施により明らかになったこと、および成果>

1. 「グローバリゼーション」「グローバル経済と開発」「子どもの権利と教育」「国連とジェンダー」「国際協力」という国際的な社会的課題について、深く広く学ぶことができた。
2. 上記5つのテーマを、日本における問題と結びつけ、自分がその問題を解決する主体となるような解決策の発表を行うことができた。

研究内容 3

3年次は、SGH 実施期間の在籍生徒に対し、選択科目として、引き続き「グローバルスタディ (GS) III」を実施。SGH で設定した、1年次の「世界を体感する」、2年次の「世界を学ぶ」というテーマを受けての3年次の目標「世界のために行動する」に沿って PBL 型授業を行う。社会問題を身近な問題としてとらえ、その状況や原因、背景などを分析し、そこから自分たちにできる解決策を立案し、実行することをサポートしていく。そのなかで、問題の分析や理解、チーム内での意識共有や役割分担、企画、広報、各方面との調整、実施、振り返りといった、社会で求められる実践的なスキルを養う。

《研究方法》

クラスを 2 つに分割し、インドネシアとの通信型授業に取り組むチームと、難民支援のプログラムや生徒の興味関心のある社会問題を身近にとらえ、「私たちにできること」をテーマに企画の実践に取り組む。

<研究開発の実施により明らかになったこと、および成果>

1. 問題解決のための具体的な行動を通して実践的なスキルを養うという GSIII の共通目標は、インドネシア通信授業でも Meal For Refugees や「私たちにできること」の取り組みでも、概ね達成された。取り組む社会課題と解決策は、相手との議論、地域団体とのインタビュー、各情報媒体でのリサーチから自ら選択して決断し、進めていくことを重みに置いているため、主体的に行動する生徒が多く目立った。
2. 典型的な PBL 型学習の効果といえば、アポイントを取得するためのビジネスメールの作り方やテレアポの経験、ターゲットを想定した効果的な広報 (SNS や動画作成)、綿密な計画や効果的なプレゼンテーションの作成と実践といった実務的能力が培えた。

【研究内容 1 の具体的な内容とその評価】

<探究型カリキュラムの開発のために>

科目	グローバル探究 BASIC	学年	1	単位	1
活動の目標	1. 社会を知る 自分の周りの世界で何が起きているかについて、生徒が語るができる 2. 社会の中の自己を知る 自分の周りの世界に自分がどう関わっているか、接点を持っているかについて、生徒が語るができる				
教材	自作プリント・学びの記録シート・iPad (Classi / ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク				
留意点	1. テーマ設定などについて、生徒たちが自分で決めるように教員は留意する 2. フィールドスタディ、得られる知見などが予定調和にならないように教員は留意する				

<スケジュール>

- ・詳細の年間スケジュールについては、資料 1 参照
- ・授業は 60 分授業 / 毎週金曜日の放課後 15:45-16:45

第 1 フェーズ：知る SDGs/自分の関心/生の声/仲間/ 授業形態などを「知る」 【課題の設定】	① 9/13	・ガイダンス：「学びの記録」の記入方法 ・SDGs のランキング作成
	② 9/20	SDGs カードゲーム「× (クロス)」
	③ 9/27	日本の貧困問題 外部講師 能島 裕介 氏
	④ 10/4	世界の貧困問題 外部講師 坂西 卓郎 氏
第 2 フェーズ：探る 自分の関心/フィールドスタディ(FS) 先の活動や課題/観点と問い/FS 先の 生の声を「探る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑤ 10/18	・フィールドスタディ先候補 2 つについて個人発表 (45 秒) ・フィールドスタディのグループ作り
	⑥ 10/25	・フィールドスタディ先候補 2 つについてグループ発表 (2 分間) ・訪れたい FS 先の投票
	⑦ 11/8	フィールドスタディにおける学びの手法「観点と問い」の理解
	⑧ 11/15	フィールドスタディ先についての知識の整理と「観点と問い」の作成
	⑨ 11/22	フィールドスタディ先についての「観点と問い」の作成の続き
	FS 12/6	フィールドスタディ 1 回目
	FS 12/9	フィールドスタディ 2 回目
	FS 12/10	フィールドスタディ 3 回目
	⑩ 12/13	・フィールドスタディのまとめ (6 つの観点) の指示 ・アクションプランについて考えるための大学生による講義
	第 3 フェーズ：共有する 中間発表・最終発表を通じて学び/発 見/課題/アクションプランを「共有す る」 【整理・分析】 【まとめ・表現】	⑪ 1/10
⑫ 1/17		中間発表 (6 グループ)
⑬ 1/24		中間発表 (4 グループ)
⑭ 1/31		再解釈と再構築 1
⑮ 2/14		再解釈と再構築 2
⑯ 2/21		最終発表 (5 グループ)
⑰ 2/26		最終発表 (5 グループ)

<各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

第1フェーズ：知る 【課題の設定】

1. このフェーズでの目標

目標 1) 生徒たちが、SDGs が身近な問題であり、自分たちの生活に結び付けていくことが大事だと大体説明できる。

目標 2) 生徒たちが、SDGs の問題が社会でどんなことが起こっているかを具体的な例を挙げて説明できる。

目標 3) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。

目標 4) 生徒たちが、協働するグループワークなどに積極的に参加し良い授業の雰囲気をつくることができる。

目標 5) 生徒たちが、学びの記録ワークシートのねらいを理解して記入ができる。

2. 具体的な活動

① 9/13

「学びの記録」(資料2参照.)の記入方法を学ぶ。SDGs の基礎知識や考え方を習得するために、SDGs カードを用いて各 SDGs のランキング作成を行う。個人ワークによるランキング作成、その個人ワークをペア/グループで共有、その後改めてグループワークでランキングを再作成させ、他グループ/クラスで共有した。

② 9/20

金沢工科大学が作成した SDGs カードゲーム「x (クロス)」を用いて、SDGs の問題をより具体的に考えるきっかけとした。特にトレードオフという概念を紹介するにあたりこのカードゲームは大変有用であった。また、ゲームという性質を用いて、活発な意見交換や楽しい授業の雰囲気作りを目指した。



③ 9/27

日本の貧困と教育に関する問題について実際に従事されている講師(尼崎市理事 能島裕介氏)を招き、実際の活動事例を学んだ。日本における相対的貧困の現状について講義をしていただいた後、その原因や、背景について考えるグループワーク(マナポートと付箋を用いてグルーピング/ネーミング)を行った。そのグループワークの成果物にコメントをしていただく形で、能島さんのお考えや実際の活動を、貧困の連鎖というキーワードを用いてご紹介いただいた。



④ 10/4

世界の貧困と平和に関する問題について実際に従事されている講師（財団法人 PHD 協会 事務局長 坂西卓郎氏）を招き、実際の活動事例を学んだ。海外における女性の貧困や教育について、絶対的貧困の立場から、海外からの研修生にも来ていただいております。日本の問題、世界の問題、どちらに取り組むべきなのか、という問いについて前回同様グループワークを行い、坂西さんにコメントをしていただく形で、坂西さんの想いをさらに伝えていただいた。



3. 活動の評価方法

- ①9/13 ②9/20 については体験授業のため、成績算出のための「学びの記録」は評価せず。ただし、受講者の選定のために「学びの記録」を評価。
- ③9/27 ④10/4 の学びの記録を回収し、教師が内容を採点。
- 「学びの記録」のルーブリック

	知識/技術	または	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。情報が整理されている。		知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。		多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。		感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

4. 検証

- 目標の達成度・課題

・目標 1)2)について

生徒のポートフォリオ（資料3参照）と「学びの記録」（資料4参照）を読む限り、概ね達成できたのではないかと考える。SDGs という用語を初めて聞く生徒がいる状態からのスタートであったが、SDGs について「教えられる」のではなく、自分達から「考える」という切り口の授業①②であったため、より主体的に「知る」経験になったと思われる。また、授業③④を通じて、遠い世界の国のことではなく身近な問題であり自分たちと接点があるということを、それらの問題に真正面から取り組む組織の方々の生の声と直接的な問いかけを通して感じる事ができたのではないかと考える。

・目標 3)について

授業回数上、各自の関心を広げ深めるまでには至ることができなかったことが課題である。授業の構成上、貧困、教育、平和などの各テーマにおいては理解を深めることはできたが、それ以外の SDGs の項目や別のテーマについて考えたり調べるといった、しっかりとした機会を与えることがこの段階ではできなかった。そのため、この目標 3)については、第2フェーズの導入部分をこれに充てることとした。

・目標 4)について

ポートフォリオ（資料3参照）を読む限り、概ね達成できたと考えられる。初めて話す仲間もいる中で、授業①～④全ての授業において、グループワークを入れ、小～大グループの中で意見を共有させた。マナボード、付箋、ロイロノートなどの教材を使うことでより活発に互いの意見を交換し、自身の意見が深ま

り広がっていることを生徒たちは感じたようである。またカードゲームを早い段階で使うことが活発なグループワークを促進させたと感じる。

・目標 5)について

「学びの記録」を読む限り、これも概ね達成できたと考える。しかしながら課題も多く存在する。授業者が生徒にこれを書かせるタイミングの確保やリズムが難しく、生徒たちがこれを書くことが授業の中心になってしまうような場面が散見された。また、「学びの記録」のねらいは生徒たちに示したものの、具体的なルーブリックを示して即時的なフィードバックを加えることまでには至らず、各生徒が次に向けてどのように改善すればよいか提示できなかったことが最大の課題であった。この課題については成績の算出方法について>の項目で後述する。

・まとめ

以上のことから【課題の設定】という観点からこの第1フェーズを整理する。この第1フェーズは、生徒たちが【課題の設定】をより具体的に行うための準備期間、つまり課題について考え始めるきっかけや入り口として、概ねその目標は達成できたのではないかと考える。

5. 今後改善すべき点

- ・生徒への「学びの記録」のルーブリックの事前提示と即時的フィードバックを行う。
- ・教育、貧困、平和、以外のテーマについて考える機会を提示する。
- ・【課題の設定】について、授業数的に可能であれば、自分が取り組むテーマまでを決めるフェーズとする。
(ただし、今回はフェーズ2の授業⑤までの宿題、授業⑤そのものまでを【課題の設定】とした)

第2フェーズ：【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】

1. このフェーズでの目標

- 目標 1) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。
- 目標 2) 生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールドスタディ（FS）を通じて、語るができる。
- 目標 3) 生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。
- 目標 4) 生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語るができる。
- 目標 5) 生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

2. 具体的な活動

⑤ 10/18

- ・事前に出されていた宿題は以下の通り。

「SDGs の中で自分の関心のあるテーマをしばり、その課題解決に取り組んでいる団体の中で自分が FS で訪れたい団体 2 つを紹介し、その理由をまとめる。それらについて 4 5 秒で発表を行うために、ロイロノートで発表資料を作る。また、発表資料について調べたことを学びの記録にまとめておく」

- ・上記宿題について、各自が 4 5 秒の発表を行った。聴く側は「関心チャート」（資料 5 参照.）を用いて、他者の関心と自分の関心とが重なる部分を探した。同じ関心をもつ者同士がお互いに声を掛け合い、グループを作成。結果、10 グループが出来上がった。

⑥ 10/25

- ・事前に出されていた宿題は以下の通り。
「グループとして訪れたい FS で団体 2 つ（関学から 1 時間ほどで行ける距離）を調べ、その理由をまとめる。それらについて 2 分間で発表を行うために、ロイロノートで発表資料を作る。」
- ・上記宿題について、各グループが 2 分間の発表を行った。聴く側は「フィールドスタディ先候補シート」を用いて、自分が FS で訪れたい団体に投票を行った。



- ・最終的に FS 訪問先となった団体は以下の通り（敬称略、順不同）。

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン / 大和証券株式会社 / 国際ボランティア NGO NICE /

宝塚つばめ学習会 / 認定 NPO 法人フードバンク関西 / 神戸市役所 / 株式会社大栄 /

積水ハウス株式会社 / 国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）未来 ICT 研究所 /

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン

⑦ 11/8

- ・生徒が FS という学びの手法について理解するために、インタビューや聞き取りを行う際に用いる「観点と問い」というフレームの概念について学びを深めた。生徒たちは 5 分ほどのモデルスピーチを 2 回にわたって「観点と問い」がない場合とある場合とでメモを用いて聞き取り、ある場合の聞き取りやすさや内容の深まりをグループワークの中で実感した。つまり、良い聞き手とは、入念な下調べに基づいた予備知識を持っていて、事前に自分の中で聞きたいことが整理されている人であることを生徒と確認した。生徒は「学びの記録」を用いてこの活動を行った。
- ・その後、「フィールドスタディに向けた観点と問いの設定ワークシート」（資料 6 参照）を用いて、訪問先についての下調べを行い、そこから生まれる「観点と問い」の作成に時間を用いた。



⑧ 11/15

生徒たちは各グループに分かれ、訪問先に関する知識を模造紙 1 枚にまとめると共に、授業⑦に引き続き形で「観点と問い決定シート」（資料 7 参照）を作成した。「観点と問い」についてはグループごとに教員に発表をし、その都度フィードバックやアドバイスをもらい、何度も修正を行った。

⑨ 11/22

- ・FS 先が全グループ確定。授業⑧に引き続き、「観点と問い決定シート」の内容を深める時間をとった。
- ・模造紙をポスターのように用いて、各グループが交代で FS 先の紹介と自分たちの「観点と問い」についての発表をポスター発表形式で行った。
- ・自分たちが担当する FS 以外で訪れる団体 2 つを挙手で決定した。



フィールドスタディ実施

- ・授業⑨の後、各グループは空き時間を用いて、FS に行く前に、FS 先にご挨拶と「観点と問い」を伝えるために教員同席のもと電話をした。
- ・各グループに教員 1 名引率。
- ・集合時間/行き方/模造紙の内容/観点と問いについては、各グループがロイロノートを使って他の FS 参加メンバーに事前に伝達。
- ・訪問後はお礼状を郵送。

⑩ 12/13

- ・以下の 6 つの観点に従って、生徒たちに FS で得た情報をロイロでまとめることを冬休みの宿題として指示した。

観点 1) フィールドスタディで再確認できたこと

(インターネットや著書を通じて既に知っていたことを直接現場で確認できたこと)

観点 2) フィールドスタディで新しく知った知識

観点 3) フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちの考え (想いや信念等)

観点 4) フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちが向き合っている課題

観点 5) フィールドスタディに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと

観点 6) フィールドスタディ先の現場の人たちが向き合っている課題に対して、高校生である自分たちができること

- ・FS で学んだことからアクションプランを考えるきっかけとするために、関西学院大学国際学部の学生が福島での FS を基に起こしたアクションについて講義を行っていただいた。自分たちが経験で得た学びをどのように実践につなげるか、生徒たちは「学びの記録」に考えを記入した。

3. 活動の評価方法

- ⑤10/18 ⑦11/8 ⑧12/13 の学びの記録を回収し、教師が内容を採点。
- 「学びの記録」のルーブリック (フェーズ 1 と同様)

	知識/技術	または	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。		知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。		多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。		感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

4. 検証

- 目標の達成度・課題

- ・目標 1)について

授業⑤⑥での個人発表/グループ発表を通して、自分の関心のある社会的課題について公に述べる機会を2度提供することができた。さらには授業⑦⑧⑨の中で「観点と問い」を深める過程の中、そのFS先が抱える課題と向き合い、自分の関心とその団体が取り組む課題とをリンクさせなければならない場面があった多々あったため、自分の関心が説明できるようになるという目標は概ね達成できたと考える。

しかしながら、授業⑤⑥の発表について、教員側が明確なルーブリックを用意して、各個人、各グループにフィードバックをするような機会を提供できなかった。これをすれば、生徒たちはさらに明確に自分の関心を述べられるようになったと思われる。

- ・目標 2)3)について

授業⑦⑧⑨において、自分の明らかになった関心に実際に社会で取り組んでおられる団体を探してその取り組みをまとめる模造紙の作成、その団体にインタビューを行うための「観点と問い」の作成、それらのまとめをポスター発表風にクラスメートや教員に説明するなどの活動を経て、概ね達成することができたと考える。また、フィールドスタディで用いる技術的な手法についても、ポートフォリオや「学びの記録」(資料8参照)を見る限り、しっかりとしたフレームでインタビューなどを行う重要性を学んだ生徒が多々見られた。

さらには実際のFSに赴き、自分たちが用意した問いを実際に投げかけた。それぞれの訪問を引率した教員の意見としては、用意した問いのみならず、得た回答を基にその場でさらに質問を生み出していく場面が多々見られたとのことである。

- ・目標 4)について

生徒たちがFS先に訪れる前に事前に電話をかけてご担当者との実際のやりとりを見る限り、生徒たちは普段の学校生活では経験することのない緊張感や引き受けていただいたときの安堵感などを含む雰囲気に含まれていた。FS先への交通手段や交通費、かかる時間も教員が関わることなく自分たちで調べ、他の参加者に伝える責任を負った。FSでは担当者の方々へのご挨拶や御礼を伝える礼儀、質問の切り出しや敬語の使い方など、主体的に相手に配慮を見せる場面が多々見られた。

社会との接点を10グループが十分に作り上げた点からするとこの目標についても達成できたと考えられるが、「楽しさ」という観点ではそれを確認する尺度がなかったことが課題である。社会との接点を持ったことによる気づきや学びをまとめるポートフォリオを通じた問いを本来ならば設定しておくべきであったと思われる。

- ・目標 5)について

授業⑩を通じて、「学びの記録」(資料9参照)を読む限り、学んだことからアクションを起こすことの面白さと難しさについて、生徒たちは大学生の実際の話聴いて実感したようである。アクションを起こすことに伴う現実的なハードルをいかに協働して理解を得ながら超えていくか、その土台となるパッションの部分など、生徒たちはその大学生から多くのヒントを得たように思われる。この目標についても概ね達成できたと思われる。

- ・まとめ

【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】という観点からこの第2フェーズを整理する。

【課題の設定】については、フェーズ1からの引き続きで、自分のFS先を決める授業⑤⑥を用いて行った。授業⑦⑧⑨の「観点と問い」を深める活動もそうではあるが、その団体のみならず、それを取り巻く社会的なニュースや知識を得るといった、下調べの時間がさらに多くあれば、というのが実感である。課題

を設定するに至る土台となる知識の部分をさらに深めることがさらに今後必要になると思われる。フェーズ1と含め、ここの充実がカギである。

【情報の収集】について、社会と接点を持つきっかけとなるFSは大変有効であったと考えられる。本やホームページにある知識だけでなく現場で働かされている方々の生の声を得るという経験、実際に現地訪問に至るまでの「観点と問い」の作成に時間をかけた点については、学びをより深めた。

【整理・分析】については、活動としては授業⑩の最後に出した冬休みの宿題にとどまっている。

以上の点からすると、フェーズ2は、【情報の収集】が主な活動であったが、生徒たちが主体的に自分たちが必要だと思われる知識や問いを収集、作成し、アクションを起こすための自分たちなりの答えを得るための回答やさらなる知識を得ることができた点では、このフェーズ2における目標は概ね達成できたと考えられる。

5. 今後改善すべき点

- ・課題の設定の土台となる社会的課題やFS先の情報について深く調べる時間をしっかりと確保する
- ・授業⑤⑥で実施したFS先についての個人発表(45秒)、グループ発表(2分間)についてもルーブリックを用いて評価する。
- ・FSに赴くことで得た大きな部分での気づきや学びをまとめるポートフォリオによるまとめを実施する。

第3フェーズ：【整理・分析】【まとめ・表現】

1. このフェーズでの目標

- 目標1) 生徒たちが、観点1～5に従って、FS先で学んだことを内在化して、発表することができる。
- 目標2) 生徒たちが、観点1～5に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。
- 目標3) 生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会で起こしていく方向性を考えることができる。
- 目標4) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

2. 具体的な活動

⑩ 1/10

生徒たちは、翌週の間接発表に向けて、冬休みの宿題であった6つの観点で整理したFSのまとめを、以下の5つの観点にロイロノートにまとめた。

観点1)FS先の活動概要

観点2)自分たちの観点と問い

観点3)FSで直接確認できたこと(相手のリスポンス、直接見たこと)

観点4)現場の人たちはどのような課題をどのように語っていたか/それを聞いてどう思ったか

観点5)高校生である自分たちが当該テーマについてできること

- ・具体的にどのようなことならできそうか
- ・それが実現可能な根拠

その後、中間発表時に用いる、「生徒相互チェック表」(資料10参照)の使い方を説明した。このチェック表は、生徒がお互いに発表を評価するのが目的ではなく、その発表をどのように聞き手がとらえたかを教員がチェックする表であることが目的であることを説明した。また、このチェック表を用いて教員が中間発表を評価する旨も伝えている。なお、このチェック表の観点は以下の通りである。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。

観点 3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。

⑫ 1/17

- ・教室を3つに分け、6グループによる発表を行った。
- ・発表は12分間、質疑応答は10分間、ロイロノートを発表資料として使用。
- ・質疑応答の中身の深まりのために、オーディエンスはそのFSに行った者を優先的に配置した。
- ・生徒たちは、「中間発表用 生徒相互チェック表」を用いて発表を聴いた。

⑬ 1/24

- ・教室を2つに分け、4グループによる発表を行った。
- ・その他は授業⑫と同様。

⑭ 1/31

・Classi のコンテンツボックスにアップされた中間発表動画を見ながら、「中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】」（資料1 1参照）を用いて、観点3つにフォーカスして発表を見直す活動を行った。ワークシートを埋めていきながら、それぞれの観点がどうだったか、自分の意見、グループの意見を共有していき、良い発表やそうでない発表の共通点などを明らかにしていくねらいであった。当初の授業予定では、他グループと自グループの動画まで見るものだったが、動画配信トラブルにより授業時間が短縮となり、全員を3つの教室に分けてなんとか他グループのものを見直すにとどまった。

- ・また、教員による「中間発表の評価」についてもClassi のコンテンツボックスにアップし、どのグループがどのように評価されたかを全て明らかにした。
- ・宿題として、コンテンツボックスにアップされている自分のグループの動画と教員による「中間発表の評価」を見ながら、「振り返りシート」を用いて自分のグループの発表を見直すことを指示。

⑮ 2/14

・「中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】」を用いて、各グループで、観点5つについて3分ずつ、各自の意見を共有する活動を行った。

- ・ワークシートに基づいて、各グループでパワーポイントの作成を開始した。
- ・翌週の最終発表の順番の抽選を行った。
- ・Classi のアンケート機能を用いて、この1年間の学びに対する以下の2つの質問を配信。

設問1 【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に)

設問2 【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。(400字を目安に)

⑯ 2/21

- ・視聴覚教室にて、5グループによる発表を行った。
- ・発表は10分間、質疑応答は6分間、パワーポイントを発表資料として使用。
- ・生徒たちは、「最終発表用 生徒相互チェック表」を用いて発表を聴いた。中間発表時は観点は3つであったが、最終発表時は以下の5つの観点をを用いてチェックが行われ、教員もこれに従い発表を評価した。

観点1) FS先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。

観点3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。

観点4) 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

観点5) 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

⑰ 2/27

- ・授業⑯と同様。

3. 活動の評価方法

- ⑫⑬の「中間発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点。

「中間発表 相互チェック表」の評価のルーブリック

	観点ごとのチェック/知識や考えの深まり	発表者のFS先の情報に対する自分の気づき
A	発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。	FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。
B	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。	気づきや感想がやや短絡的、表層的である。
C	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。	気づきや感想が短絡的、表層的である。

- ⑫⑬の10グループの中間発表を動画で見直し、以下のルーブリックで評価。また、それぞれの観点別にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して、Classiのコンテンツボックスにアップした。

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らなかったか）が明確である。
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。
観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。
観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

- ⑩⑪の「最終発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点。

「最終発表 相互チェック表」のルーブリック

	観点ごとのチェック/知識や考えの深まり	気づき/ひらめいたこと/変化した考え/新しく知ったこと
A	発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。	自分の考えと、発表の内容とが、つながりを持った深い「気づき」などとして記述されている。
B	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。	気づきや感想がやや短絡的、表層的である。
C	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。	気づきや感想が短絡的、表層的である。

- ⑩⑪の10グループの最終発表を動画で見直し、以下のルーブリックで評価。また、それぞれの観点別（中間発表時の観点3つに、観点を2つ追加）にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して、Classiのコンテンツボックスにアップ。

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らなかったか）が明確である。
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。
観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。	
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。
観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。
観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。
観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

- 授業⑮の後に、Classiのアンケートを配信し、以下のルーブリックで評価。

設問1	設問2
【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまで目指さないといけないか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に)	【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。(400字を目安に)
自分の思考の変化についてメタ的に分析することが出来ており、分析した内容が具体的に記述されている。	A 課題を解決していく上での「問題点」を的確に見つけ出せており、さらに、その「問題点」について自分なりの視点で具体的な対策を講じている。
自分の思考について分析できているが、思考の変化についてメタ的に捉えることが出来ておらず、直感的な内容が記述されている。	B 課題を解決していく上での「問題点」が「課題そのもの」の難易度に依存する内容しか見つけ出せておらず、その「問題点」の解決策が課題解決そのものと直結している。または、対策が具体的にでない。
自分の思考について分析できておらず、内容が不透明。または、文字数が著しく足りない。	C 課題を解決していくうえでの「問題点」を明らかにできておらず、対策が直感的なものに過ぎない。または、文字数が著しく足りない。

4. 検証

- 目標の達成度・課題

- ・目標 1)について

中間/最終発表における観点 1) (FS の目的意識) について、中間発表時と最終発表時であまり改善が見られなかった。評価のランクが上がったのが 3 グループあった半面、ランクが下がったのグループの 3 グループいた。自分たちの問題意識と FS 先の訪問目的や FS 先との関係が見えにくいということは、おそらくは問題意識がまだ自分ごとになりきれていないためではないかと思われる。社会的課題と自分との接点をさらに近づける活動が必要なかもしれない。

中間/最終発表における観点 2)(FS の問題点)について、中間発表時と最終発表時であまり変化が見られなかったものの、中間発表時から B を超える比較的高い評価がついているグループが多かったためだと思われる。事実、6 グループが最終発表において、A もしくはそれに近い評価を得ている。FS 先で得た現場の生の声を活かそうとする姿勢が多く見られたことは大変良かったのではないかと考える。

- ・目標 2)について

10 グループ中、1 グループを除き、9 グループすべてが最終発表の観点 4)5)において B 以上の評価を得ているものの、及第点には少し物足りない、という印象である。観点 4)のパワーポイントの使用については、A が 5 グループ、A-が 2 グループと、レベルの高いスライドがいくつか見られた。対照的に、観点 5)についてはほぼ全グループが B にとどまった。10 分を超える発表において、どうしても原稿から目が話せない場面が多々見られたためだと思われる。日頃の短い発表から聴衆を意識した発表の方法を心がけさせたい。

- ・目標 3)について

中間/最終発表を見る限り、自分たちが FS で得た知見を基に、自分たちに何ができるか、というローカルの視点に立ってアクションを起こそうとするプランがいくつか見られ、中間/最終発表における観点 3)の評価がそれにあたる。10 グループの内、評価が 1 ランク下がったのが 2 グループ、1 ランク上がったのが 4 グループ、変わらないのが 4 グループ (全て B 以上、また最高評価の 1 グループ含む) であった。アクションを起こすきっかけを考えることができる、というこの目標については、これらの評価を見る限り概ね達成できたと考えられるが、惜しまれるのは実際にアクションを起こす機会を与えられなかったことにある。実際に活動の中に取り入れられるかは別にして、アクションを起こすまでがカリキュラムにあれば違った結果になっていたと思われる。

そのような中でも、FS に行ってから自分たちで学校外の団体にさらにアンケートを行ったり、再度 FS 先に問い合わせをするなど、予期せぬアクションも見られた。そのようなアクションがあったことは大変意義深いことだと思われる。

- ・目標 4)について

生徒が Classi のアンケートに記入する形で記録したポートフォリオ (資料 1 2 参照) を読む限り、生徒たちの多くは、この授業で深めた学びを、客観的に認知しており、それらを言語化できていた。「授業を通じた自分の学びに対する意識の変化をメタ的に分析できていたかどうか」という設問 1、「授業を通じて経験した問題点に対してどのように解決しようと試みたか」という問題解決能力に関わる設問 2 について、A: 7 点、B: 5 点、C: 3 点で評価したところ、そのどちらにおいても平均点が 6 点を上回った。自分がどのように学びと向き合ってきたかについて、何を学んだかという知識面ではなく、どのように学んだきたか、という学びの過程や深まりについて自分自身で把握できている点については、生徒たちのこれからのさらなる学びの広がりや深まりを期待させると共に、この授業自体がそのような学びを少しでも提供できた結果ではないかと思われる。

- ・まとめ

【整理・分析】【まとめ・表現】という観点からこの第3フェーズを整理する。

【整理・分析】【まとめ・表現】で期待する観点については事前に教員側はルーブリックで示していたものの、また生徒たち自身としても発表する内容や情報があったとしても、うまく自分たちの学びや考えを発信できなかったという印象である。授業時間外を使ってパワーポイントの作成、話し合い、などをしなくてはならず、クラブ活動や遠距離の通学など、時間的制約が生徒の生活の中にもあったのではないかと推察する。

自分たち、他のグループの発表の動画を見直す活動は、【整理・分析】において大変有用であったと思われる。生徒たちの振り返りシートを見ても、実に内省的、建設的なコメントが多く記載されていた。また、2回発表がある、というのは、フィードバックを受けて改善する余地が与えられるという点で、これも【整理・分析】する上で大変有用であったように思われる。

【まとめ・表現】としては、中間/最終発表の内容と評価は、この授業そのものの大きな2つの目標：

1. 「社会を知る」自分の周りの世界で何が起きているかについて生徒が語ることができる
2. 「社会の中の自己を知る」自分の周りの世界に、自分がどう関わっているか、接点を持っているか生徒が語ることができる

以上の点から判断するに、生徒たちがそれを概ね達成できた証拠ではないかと思われる。

5. 今後改善すべき点

- ・フェーズ3において、時間的制約が伴うものの、実際にアクションを起こす期間、機会があれば生徒たちの探究の深まりが一層増していたはずである。
- ・自分たちの発表資料などを作成する、あるいは原稿を覚えるなどの発表そのものを準備する時間の確保や工夫が必要である。

<成績の算出方法について>

テストを行わない探究授業ではあるが、大学進学のための資料として成績を算出せねばならなかった。以下のように評価物を生徒たちの学びを2つに分類して評価し、配点調整を行い、100点満点で成績を算出した。

1) 生徒の授業内の学び/思考：40点

授業	評価物	回数	配点	最高合計点	評価者
普段の授業	a)学びの記録	5	A:2点 B:1点 C:0点	10点	田中
中間・最終発表	b)生徒相互チェック表	4	A:4点 B:2点 C:0点	16点	西室
振り返り	c)ポートフォリオ	1	1つの設問につき (設問は合計2) A:7点 B:5点 C:3点	14点	上田

2) 生徒の成果物に関する学び/思考：60点

授業	評価物	回数	配点	最高合計点	評価者
中間発表	a)中間発表の内容 (動画チェック)	1	観点3つ:A:6点 B:4点 C:2点	20点 (に換算)	時任/田澤/三木/上 田/田中/西室
最終発表	b)最終発表の内容 (動画チェック)	1	観点5つ:A:6点 B:4点 C:2点	40点 (に換算)	時任/田澤/三木/上 田/田中/西室

採点すべき評価物が多くあり、且つ教員としての時間的制約もあるため、授業担当者のみならず、このカリ

キュラムに関わる全ての教員（最大6人）で評価を行った。それを可能にするために、またできるだけ評価の信頼性を高めるために、次のような手段をとった。

- ・各評価におけるルーブリックをできるだけシンプルな3段階とした
- ・評価が分かれる発表のような評価については一人が基準となる評価をまず行い、それに倣って別の教員が評価を行う手順（等価）をとった

各評価物につき評価担当者を割り当てた評価をする、あるいは成績をつける上での課題、あるいは今後の改善点としては以下の点が挙げられる。

- ・ポートフォリオを活動の区切りごとにタイミングよく頻繁に行うことで、生徒たちはさらに自分の学びを客観的に振り返る機会を得ることができ、さらにはその先の授業で反省を活かして意識的に挽回しようとする機会も与えられる。今年度であれば、45秒や2分間の発表を行った直後、FSに行った直後などではポートフォリオの記入を呼び掛けるべきであった。
- ・前述したが、「学びの記録」については、平常授業での学びや考えの深まりの記録であるため、次の授業までには評価をし、フィードバックする必要がある。フィードバックについては担当教員の負担も考え、ルーブリックに基づいた点数の表示と、考えの深まりが見られる部分に下線を引くだけの、簡易なもので構わないと考える。そのような即時的なフィードバックを心がけると、生徒たちに改善しようとする機会が与えられるので、より学びが深まっていくものと思われる。

< グローバル探究 BASIC 資料 >

資料1：年間シラバス

2019年度 WWLC グローバル探究-BASIC 年間学習指導案										2020.02.19					
＜社会を知る・社会の中の自己を知る＞															
授業回数	日	担当	フェーズ目標	学習目標	授業内容(大項目)	授業内容(小項目)	準備物	授業時間外学習	提出物	評価対象					
第1フェーズ	①	9月13日	時任		・SDGsという言葉の意味を説明することができる ・SDGsの17のゴールについて説明することができる ・同じグループのメンバーが考えるSDGsの優先順位と自分が考える優先順位の相違点/共通点を説明することができる	ガイダンス、SDGs入門	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク(学びの記録ワークシート記入指導) SDGsの自分の価値観からみた優先順位づけ ペアで優先順位づけ/順位づけの判断根拠発表	17SDGsのカード マナボード 優先順位シート	なし	学びの記録	学びの記録			
	②	9月20日	西室		・SDGsの問題を「身近に感じていること」「自分ごと」として感じる ・トレードオフという概念を、身近なこととして理解する	SDGsカードゲーム	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク トレードオフ・SDGs概念・ゲーム説明 ゲーム オナジナルカード作り	カードゲーム 台紙紙 黄色、青色カード ペー 音楽・スピーカー	なし	学びの記録	学びの記録			
	③	9月27日	飯島 田中		生徒が、リアルな人が来て、自分の強の中での想像と現実社会を繋ぎ合わせる ・身近にあるSDGsの課題「日本における子どもの相対的貧困」について具体的に説明できる ・自分の関心がある課題ははっきりしつづける ・協働する集団作り、役割の役割を分ける ・学びの記録ワークシートのねらいや記入方法を理解している	1 異国 と 4 異文化 に関してローカルな活動実践を通して ・自分の関心のある課題について、そのような課題の解決に実際に取り組んでいる先達がいることを知る	1 異国 と 4 異文化 に関してローカルな活動実践を通して ・自分の関心のある課題について、そのような課題の解決に実際に取り組んでいる先達がいることを知る	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク/簡単なレクチャー ワーク (異国の原因)付録でグループ 簡単なレクチャー ワーク (学びの記録)	マナボード 付録	テーマについて関心のある事柄のニュースをロイコで提出、共有	学びの記録	学びの記録		
	④	10月4日	飯島 田中		生徒が、リアルな人が来て、自分の強の中での想像と現実社会を繋ぎ合わせる ・平和について知る、考える ・実際に現場で働いている人を知る	1 6 平和 に関してPHD協会の活動実践を知る	1 6 平和 に関してPHD協会の活動実践を知る	0-15 15-30 30-45 45-60	アイスブレイク/簡単なレクチャー ワーク (物販/日本の問題に取り組み発表/付録で「トビ」) 簡単なレクチャー ワーク (学びの記録)	マナボード 付録	・テーマについて関心のある事柄のニュースをロイコで提出/共有 ・発表資料 (ロイコ) 作成 SDGsの中で自分の関心のあるテーマを1つ選んで、行きたい場所の紹介 その理由を述べる →ロイコに提出 (10/17) ・発表資料作成に関わる学びの記録ワークシート作成	学びの記録	発表資料 (ロイコ)	学びの記録	
第2フェーズ		10月11日			中間試験のための休講										
	⑤	10月18日	田中		・生徒が、自身の関心をもとめ、その関心と関わる団体や人々について調査を行う ・生徒が地域 (ローカル) において、様々なSDGs (異国・教育・平和、その他) の取り組みをしている団体や人々の活動を知る ・生徒がどの団体を訪れるかについて、グループで協働して意思決定、発表資料を作る	個人発表 ・9つのグループ作り ・フィールドワーク準備の決定	個人発表 ・9つのグループ作り ・フィールドワーク準備の決定	0-15 15-30 30-45 45-60	1 A45枚の発表 (教員は評価/発表後に短く「トビ」) * (生徒間の評価) 9つのグループ(4-5人)作り (5つ共通する生徒同士で) グループで行きたい団体を2つ選定/ロイコ発表資料作り	発表資料 (ロイコ) 作成 ・行きたい場所の紹介2つ ・その理由を述べる →ロイコに提出 (10/24) →中休み、昼休みに小教室2つを分け、グループで話し合い	学びの記録	関心チャート 発表資料 (ロイコ)	学びの記録		
	⑥	10月25日	田中		・生徒が、協働してフィールド先の発表を行う ・生徒が、他のグループの発表を聞き、他のフィールド先についての情報を得て、関心をもとめる	・グループ発表準備 ・グループ発表 ・投票	・グループ発表準備 ・グループ発表 ・投票	0-15 15-30 30-45 45-60	発表準備 各グループ2分間で発表 (教員/生徒間の評価、短く「トビ」) 自分が参加したいグループ2つ (A-1)から投票、決定 (備註は教員で行い、後日Classで発表)	フィールド先発表シート フィールド先投票用紙		発表資料 (ロイコ)	発表資料 (ロイコ)	学びの記録	
		11月1日			文化祭のための休講										
	⑦	11月8日	時任		・生徒がフィールドスタディという学びの手法について理解する ・生徒が、フィールドスタディで訪ねる「観点」と「問い」について理解する ・生徒がフィールドスタディに向けて「観点」と「問い」を設定する	フィールドワークの手法について学ぶ	フィールドワークの手法について学ぶ	0-15 15-30 30-45 45-60	授業内容説明、「観点」「問い」を理解するワーク/独自メモ 「観点」と「問い」を理解するワーク/観点メモ 観点先についてペアで議論する 「観点」「問い」についての下調べ		(中休み、昼休みの話し合いの場確保)	学びの記録	学びの記録		
	⑧	11月15日	時任		・生徒がフィールドスタディ先を自分のフレームワークで適切に整理する ・生徒が社会との観点を自ら作り出す楽しさを知る	グループワーク	グループワーク	0-15 15-30 30-45 45-60	授業内容説明、観点先に訪問に関する知識をまとめる 観点先に訪問先に関する知識をまとめる 「観点」と「問い」の設定 続き (本未定)修正、再提出を試みたりができた)	模造紙 色ペン 観点と問いシート	・「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる ・観点先を完成させる	観点と問いシート	観点と問いシート		
	⑨	11月22日	西室		・生徒がフィールドスタディに向けた「観点」と「問い」を定める ・生徒が自分の行き先以外の訪問先を2つ決める ・生徒が教員と一緒に訪問先に電話をする日を決める	グループワーク	グループワーク	0-15 15-30 30-45 45-60	授業内容説明、「観点」「問い」を定める 「観点」と「問い」を定める 「観点」と「問い」を定める/行き先を決める 教員と訪問先に電話をする日程決め	模造紙 色ペン 観点と問いシート		観点と問いシート	観点と問いシート		
		11月29日			最終前日のための休講										
	⑩	12月13日 13:30	時任		・生徒がフィールドスタディで得た情報を中間発表・最終発表に向けて整理する ・経験から得た学びを実践につなげるイメージを持つ	フィールドスタディのまとめ	フィールドスタディのまとめ	0-15 15-30 30-45 45-60	情報の整理/中間発表、観点6つ リアクション 大学生による質疑提供 (経験で得た学びをどうつなげるのか) *		次回までロイコカードに以下の6つの観点をグループでまとめてくる ①②③④⑤⑥で再確認できたこと⑦⑧で新しく知った知識⑨⑩で分かった疑問 の人のための考え⑪⑫で分かった現場の人が抱える課題⑬⑭⑮と変わったイメージ⑯⑰⑱の現場の課題に対して高校生ができること	学びの記録	発表資料 (ロイコ)	学びの記録	
	第3フェーズ	⑪	1月10日	時任 西室		・2学期のフィールドスタディで学んだことを内面化する ・以下の6つの観点について、フィールドスタディで得た学びを整理し、まとめ、自分たちが取るアクションを考えると発表まで発表させる ①フィールドスタディで再確認できたこと (インターネットや書籍を通じて既に知っていることを直接現場で確認することができた) ②フィールドスタディで新しく知った知識	発表準備	発表準備	0-15 15-30 30-45 45-60	発表の観点紹介・中間報告のスケジュール発表 中間報告の5つの発表準備、情報のまとめの作業 作業 最後に発表資料再確認 (フィールドワーク)の観点の説明	→ロイコカード	・小教室1/2で中休み、昼休みを用いて発表準備	発表資料 (ロイコ)	発表資料 (ロイコ)	
⑫		1月17日	西室 田中 二本		・生徒が、FSについて発表し2分質疑10分を行う (ロイコ) (中身準備・最終プレゼンのための下書き) ・生徒がフィールドワーク(以下)の観点で行い、意見交換を行う ①FSについて観点と問いを理解できたか ②現場の人たちがどのような観点をどのように感じていたか ③現場の人たちが自分たちが当時テーマについてできることは現実的なのか	中間報告 (6グループ)	中間報告 (6グループ)	0-15 15-30 30-45 45-60	グループ3つによる発表 同上 グループ3つによる発表 同上	・3教室 (第17号・第27号・第37号) ・学びの記録 (相互評価表)		相互評価表	相互評価表	教員評価表	
⑬		1月24日	西室 田中		同上	中間報告 (4グループ)	中間報告 (4グループ)	0-15 15-30 30-45 45-60	グループ3つによる発表 同上 グループ2つによる発表 同上	・2教室 (第27号・第37号) ・学びの記録 (相互評価表)		相互評価表	相互評価表	教員評価表	
⑭		1月31日	西室		・生徒が、動画で中間発表を見直し、グループで意見を共有し、教員の評価も参考にすることで、自分の発表に活かす学びとする	再観視と再確認①	再観視と再確認①	0-15 15-30 30-45 45-60	発表の観点紹介・動画を自分からワークシート記入 動画を自分からワークシート記入 動画を自分からワークシート記入 意見を共有/まとめ	・中間発表の動画 (Class) ・ワークシート	・自グループの発表の振り返り (ワークシート)	振り返りシート	振り返りシート	振り返りシート	
		2月7日			入試前日のための休講										
⑮		2月14日	西室		・生徒が、動画で中間発表を見直し、グループで意見を共有し、教員の評価も参考にすることで、自分の発表に活かす学びとする	再観視と再確認②	再観視と再確認②	0-15 15-30 30-45 45-60	自グループの見直しをグループで共有 発表準備 発表準備 発表準備	英語メディア教室		振り返りシート	発表資料 (ロイコ)	振り返りシート	
⑯		2月21日	西室 田中		※10分授業 ・生徒が、発表10分質疑10分6分を行う (VCR) ・生徒がフィールドワークを行い、意見交換を行う	最終プレゼン	最終プレゼン	0-15 15-30 30-45 45-60 60-75 75-90 90-100	発表① 発表② 発表③ 発表④ 発表⑤ 発表⑥ 発表⑦	視聴覚教室		相互評価表	相互評価表	発表資料 (VCR)	教員評価表
⑰		2月26日	西室 田中		※10分授業 ・生徒が、発表10分質疑10分6分を行う (VCR) ・生徒がフィールドワークを行い、意見交換を行う	最終プレゼン	最終プレゼン	0-15 15-30 30-45 45-60 60-75 75-90 90-100	発表① 発表② 発表③ 発表④ 発表⑤ 発表⑥ 発表⑦	視聴覚教室		相互評価表	相互評価表	発表資料 (VCR)	教員評価表

資料2：学びの記録のサンプル

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

第 回授業 (年 月 日)	年 組	氏名：
----------------	-----	-----

本日得た新しい知識や技術	自分の意見／他者の意見／考察

資料3：生徒のポートフォリオ（第1フェーズ分）からの抜粋

① 9/13

- ・今日の話し合いで、相手の意見を聞き自分の考えを改めて考え直したり、比較する事はとても大切だと感じました。そうする事で、相手の考え方や人間性が感じられたり、より意見に具体性が出てきたり、更に他の問題点や改善点が見つかったりすると思ったからです。
- ・SDGsは17項目ありますが、今回のように優先順位を決めたとき17項目全てを関連づけることができ、全てが繋がっていると感じた時、私は「教育」と「ジェンダー」に興味が湧きました。なぜなら、今このポートフォリオを書いている間にも学校に通えず水汲みをしている子どもがいること、内戦の影響で学校自体がない地域の子どもたち、性のために差別を受けている人などが世界中には数えきれないほどいるということを私たちは疑問に思うべきだし、その現状に向き合って「知る」ということが重要だと感じたからです。
- ・今世界で考えられているSDGSについて私たちの意見をみんなで共有し合って、他の人の信念や価値観など普段一緒にいてもあまりほんとに話し合う機会もないので、内側にあるものをちゃんと向き合って話し合って知るということが大切なのだと思いました。
- ・自分たちの意見をちゃんとぶつけ合って結論を出すことでみんなが納得して誰かがふてくされることなく気持ちよく次の課題に行くことができるので話し合いというのはすごく大事なことなんだと思いました。1人で学習するのも、集中力が持つのでいいと思うのですが、グループワークをすることによって楽しんで学習することが出来るし、2人、3人、4人……と学習を共にすることで元々持っている知識量も2倍、3倍、4倍……になっていくと思うのでたくさん知らなかったことも教えてもらうこともできるしもちろん向こうが知らなかったことも教えてあげることもできるし、そこで団結力も生まれるし、コミュニケーション力も鍛えられるので、グループワークで活動するのもいいなと思いました。

② 9/20

- ・身近にある物から、SDGsについて考えること。SDGsは、国内だけでなく世界的な目標であるから、今までずっと、私が何か考えたりしたところで解決する話でないあまり関心を持っていませんでした。しかし今回の授業の中で身近なこととSDGsを関連づけて学ぶことで、私が何かをして目標を達成できるかどうかではなく、SDGsが私達の生活にどれほど影響を及ぼすものなのかを、正しく理解することが大切なんだと理解したからです。
- ・何かを解決しようとして、他を犠牲にしてしまうと意味が無いので全体的に見ながらバランスよく解決しなければならない事を学んだ
- ・1つの問題を解決するための対策にはいい面もあるけど悪い面もあってその対策がほかの問題に悪影響を与えてしまうことがあるので1つの問題だけで考えるのではなく他の問題との関わりも考えていくことが大切だと思いました。
- ・リソース×リソース＝アイデアのミニゲームをもっとやりたいと思った。楽しみながら、SDGsの身近な問題について知ることができ、ダメ元でも素早くアイデアを出す訓練になると思ったから。
- ・違うアイデア×違うアイデアを考えるときはとても難しいが、今までに出ないようなアイデアが出るし、いきなり簡単には出ないようなアイデアが出てくる。

③ 9/27

- ・ペアワークをしてみて、今回も話したことも無い人とペアになってみんなでちゃんと意見を出し合っただけで学習できるか不安だったのですが、みんなでちゃんと意見を出し合っただけで、協力して学習することが出来たので良かったです。
- ・本当に根本的な事になるかもしれないのですが、この話をして頂くまでは、私も相対的貧困について、

知らなかったことが多いので、相対的貧困についてあまり知らない人が多いのではないかなと思ひ、まずその事を知ってもらうことが大事だと私は思ひました。相対的貧困の人は見た目では分かりにくいので、きっと政府の人や学校の先生、裕福な人は貧困で悩んでいる人がいることに気付かないで普通に過ごして、そんな相対的貧困で悩んでいる人の解決にも目を向けようとしなないかもしれないので、こんな悩みを持っている人がいるってことを少しでも色々な人に知ってもらえると、権力を持っている人というか、この国を変える力のある人の耳に届くかもしないし、そうなるだけでも解決に近づくのではないかなと思ひたからです

- ・貧困と聞くと、発展途上国が1番に思ひ浮かんでいました。今日、日本の子供の7人に1人が貧困だと聞いて少し驚いた自分がいました。私は毎日3食食べて、学校に通って、友達と遊びに行ったり、旅行に行ったりしていて普段生活をしている中でそれが特別なことだと感じたことはあまりなかったけど今日話を聞いて、自分が学校に通ったりしていることは当たり前なことではないということに改めて気づきました。塾に通っていたことも、受験に合格したことも自分にはそういったことに対して十分な環境があったからだとすることに気づきました。そういった環境に自分を置いてくれた家族に感謝しないといけないなと思ひました。したいことをすることが難しい環境にいる人のことを考えて生活していこうと思ひました。

④ 10/4

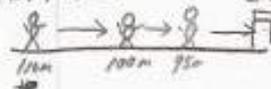
- ・今まではまずは国内のどこを完璧にしてから国外のことをするべきだと思ひていた。国内で集めた税金で国内を支援するべきだし、何より日本をもっといい国にするべきだという考えだった。けれど、今回の授業を国内と国外の違いは何だと考えてみると途端に分らなくなった。身近な人から助けるべきだ！と思ひていたけど私の身の回りの人で助けが必要な人が誰かもわからないし、国内の助けが必要な人は『私の知らない人』ばかりだと思ひます。外国の人でも『私の知らない人』だ。それに外国の方の方が全体的に見ると死の危険が高い貧困だ。でも国内の貧困も虐待などという形で死の危険は存在する。本当に難しいし、考えてもぐるぐると答えは出ない。この答えをこのwwlcのプログラムが終わるときには少しでも見つけられるのだろうか。
- ・授業の最後の方に言っていた日本の釜ヶ崎のような身近な問題を見落として海外のことを考えたりしているということがあったのですが、掘り起こせば今の日本にそういうものって多いと思ひるのでまずは身近な問題から取り組むことが大切だと思ひます
- ・スシラさんのように実際差別を受けたことのある人や貧困に苦しんでいる人のお話をきいて現実に少しだけでも近づいた気がした。スシラさんは研修生として自身が日本にくることができたため、自分の国との違いに気づくことができたが、世界中には他の生き方、考え方があっても知らず生きている方々が圧倒的に多い。日本にいる私たちも話に聞くだけで実際に目の当たりにしたことのある人は少ない。もっと外の世界に出て違いに実際に自分で気づき、どう行動に移すのか考えたいと思ひた。
- ・きちんと発表にのぞめるようしっかりと準備したのに一番最初に手を挙げることができなかつた。発表後の先生方からの質問に、そんな物事の捉え方もあるのかと驚かされた。→物事を「否定的」に見ることが大切。なんでもすぐに納得・鵜呑みにしない。

第4回授業 (2019年10月4日)

本日得た新しい知識や技術	自分の意見/他者の意見/考察
<p>NGO → 海外で活動 11.12.17</p> <p><海外における絶対的貧困、女性問題></p> <ul style="list-style-type: none"> 世界で1分間に10人が死んでいる (4.8秒に1人)(毎日18000人) ↳ 肺炎、マラリア、下痢 17% 9% 7% ネパールでは!? 赤んぼを病院で見てもうえない、 産まれても病院にいけない(母親も) スラムの子どもたち 未成年が1割、130万人 10~17才だと2割 権利の大切さ スラムの子どもたち にきくと ↳ 親に守られる権利 日常的に虐待をうけている!! 内戦で子どもや女性が一番被害を受ける → 逃げる → 衛生× ↳ 最下層(カスト制) ダリットとは!? → 不可触民、暴力、レイプ、人身売買 無理矢理結婚させられたりする ↳ 全員が差別をうけているわけではな!! 教会がとても多い 38人中(35) 3人しか読み書きができない < 7.8% (識字率) 	<p>自分の意見/他者の意見/考察</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学、奨学金返さないがおいと思った。 → 良い制度(私学) 貧困層は 飢えずに大どろ → 良いものを食べれない、ストレス? (自分) スライドの意味 私は同じ歳の別々の国の子どもたちに思えた。 思った以上に命が失われていておどろいた。自分たちは本当にめまわしていると思った。 日本でもよく虐待のニュースをよく聞くがそれとは違う。命に関するものは、はいていると思った。 また、親の勝手な気持ちで子どもが嫌な目に合うという所は日本と同じだと思った。 (私は食事系のもんだと思えた。その地でしかわからないこともあると思うを見ただけではわからない) 日本と似ている。生き物を取り扱うものはあまりよくない 差別のひどさが伝わってきた

能島 裕介

第1回授業 (2019年9月27日)

本日得た新しい知識や技術	自分の意見/他者の意見/考察
<p>※ たった30秒で職業を考える。 ← 思いっぴんぐをどんどん言って広げていく 正しい答えが生まれてくる!!</p> <p>※ 尼崎市 理事等がされている。能島さん 中全体の子ども・教育政策 - 子どもサポート 学校に行っている子供 → 学校が社会に出れば → 進路をよく考えていく 学校とは世界が変わる</p> <p>「席の配置による学力差」個人の学力の差サポートは学校だけでなく 家庭のしている (子供の視点で考えていく) → 進路</p> <p>「日本の子供の貧困」 貧困と考えるとき世界の姿を先に思い浮かべイメージ (詳しい) 情報: 日本人7人に1人は貧しい → 相対的貧困 ※ 見え目は分かるが正しいのが特徴</p> <p>※ カ国における水準から比べて貧困かどうか → 所得で決まる 日本と 発展途上国の生活水準は 別物。 食事(生活の中)・用具(クラブX) ← 経験 Down・ヤングアワー 貧困は必ずしも貧乏ではない</p> <p>※ 外国からは分かりにくい ※ 母子家庭の貧困率が高い ← 60% 母子家庭 ※ 虐待との相関が高い ← 最近では虐待のニュース多い 現代社会でも問題になっている</p> <p>最新のニュースとの関連性 何か発件したこと 思い浮かべること 大切 様々なジャンルを作って あるジャンルからあるジャンルへのつながり (矢印で示したりする) 分かる → 分かる → 分かる</p> <p>親の経済的貧困 ↔ 教育格差 ↔ 子供の低学力 ↔ 不登校 が循環している</p> <p>社会の中で連鎖してしまう → 元となる要因が存在し、でもその前に 子供要因がある。</p> <p>人にそれぞれスタートラインが違う  スタートラインが同じであれば 努力の度 > 一般 能力の度</p> <p>貧困の問題とは 人が連鎖し、人によって要因の中の要因が 変わっていくこと</p> <p>「国」 財政支出 △ 国も大きく関わっている。 国内総生産 からの支出のグラフが分かること 教育は (北欧) → (家庭) における問題・仕事</p> <p>概念が違つたの、結果として全く違つたものに! 収入源の 日本は 家庭の負担 (多い) 格差が起こる (学校外活動) が多い</p> <p>貧困のほうでは、努力の以前に (意欲・経験・学力) が多い</p> <p>① どのような立場、立場がなくなっている</p>	<p>「貧困」と聞くに思い浮かべて「日本」ではなく僕たちが 「世界」を先に思い浮かべ、世界の貧困の方が学びとして 情報が入ってくる。メディアで流されてきているの、 メディアや学校での学びという範囲の中で、貧困 = 世界での出来事という内容に収まっていることに 気付いた。僕もあまり日本の中での貧困に対しての 情報や知識はない。</p> <p>今回、日本の貧困について考える - 情報を得る ことでできて、早速自分の頭に新たな(授業・ 読書)を中心とした) 学びの世界を作ることができ た。</p> <p>日本の家庭の貧困は知られていないが意外と 深刻な問題であることがわかった。</p> <p>物価が高いという経済問題が 収入などの 家計問題の圧迫につながる。家計の事情が 家族の問題につながる (例 専業主婦) などが 原因となって 今夜 別居や再婚といった 家庭生活・人間関係問題が生まれる。 山 (貧困)</p> <p>他者 親が関与する、 ↳ 親がワークしてその分の収入は子どもに 16歳の人間からこそ生まれるアイデア、 意見がたくさんあるのだ。</p> <p>↓ 納得した。視点を考えることによりして全く異なる 考えが生まれる。23歳 (中学1年生) と 16歳 (高校1年生) ではまた自分の意見も違つた ところ</p> <p>1つ問題・要因が起こると、その1つだけでも、 他に影響し、社会にさらにマイナスを作ってしまう ことになる。国の政治が悪いのであれば、国が 北欧のように 税を増やし 公費福祉に力を 入れればおもしろいと考えられるのではないかな?</p> <p>いろいろなデータから日本の政府の子供の未来に 対しての意欲が足りないことがわかってきている。</p> <p>痛板のアイデアにも賛成 お金なくても子供に自信を持たせる 構えを もって作っていく 貧困が原因で起こって しまう格差は縮まるのでは?!</p>

資料5：関心チャート

自分が興味あるテーマ	今回考えた訪問先	SDGsの枠組みでは、どれにあてはまるか？ あてはまると思うものをすべて選んでみよう。
		①貧困 ②飢餓 ③健康と福祉 ④教育 ⑤ジェンダー ⑥安全な水 ⑦エネルギー ⑧働きがいも経済成長も ⑨産業と技術革新 ⑩人や国の不平等 ⑪まちづくり ⑫つくる責任つかう責任 ⑬気候変動 ⑭海の豊かさ ⑮陸の豊かさ ⑯平和と公正 ⑰パートナーシップ

CSR

No.	クラス	番号	氏名	興味のあるテーマ	SDGsの枠組みでは、どれにあてはまるか？ あてはまると思うものをすべて選んでみよう。	もっと知りたいと思った部分 自分の関心が引っかけた部分
1					1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17	
2				ジェンダー	1 2 3 4 ⑤ 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	なぜANAがジェンダーについて取り組むのか。その社に何の意義があるのか。
3				森林、海	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 ⑭ ⑮ 16 17	自分の905は世界から。組織にどうやって取り組むのか。
4				貧困、競争	① ② 3 4 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 ⑯ 17	どんな競争があった？ 貧困へのつながりは？
5				母子家庭	① ② ③ ④ ⑤ 6 7 ⑧ 9 ⑩ 11 ⑬ 13 14 15 ⑯ 17	母子家庭のつながりって？ 包摂SDGsって何ですか、おせ？
6				片親	① 2 3 4 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	果してして、違いがあるのか。 なぜ？ → 解決策について。
7				スタートアップ	① 2 3 4 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	日本では電気のあたり。 海外での問題。自分に何ができる？
8				フェアトレード	1 2 3 4 ⑤ 6 7 ⑧ 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	具体的に、日本人が取り組むべきものは何かあるか？
9				モビリティ 2テ-ミ-オン	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 ⑪ 12 13 14 15 16 17	自分たちも利用可能な場所。 土地による問題の違い。
10				差別	① 2 3 ④ 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 ⑯ 17	個人にきく→リアルなことを知り、 社会的なことであれば解決策がわかる。147
11				経済発展	1 2 ③ 4 5 ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑬ 12 13 14 15 ⑯ 17	どんな技術で発展させるのか。 一部の人しか出せない解決策。
12				差別	① 2 3 4 ⑤ 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	どんな差別があるのか。 国際問題 → 日本で出来ることは？
13				教育	1 2 3 ④ 5 ⑥ 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	SDGsとつなげる。その上でどう世界 から、その中で具体的に何ができる。
14				女性、ジェンダー 平等	1 2 3 4 ⑤ 6 7 ⑧ 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 17	どんな活動をして どんな目的を持った団体なのか。
15				海	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 ⑮ 16 17	海は自然にも出来る活動なので、 知識も関係なく行動出来る。

フィールドスタディに向けた“観点”と“問い”の設定

グループ：	訪問先：	メンバー：
-------	------	-------

訪問先について、インターネットや文献でわかっていること

自分達がヒアリングする時の“観点”

観点：私たちは、	の観点からヒアリングを行う
----------	---------------

ヒアリングをする際の“問い”（文末を必ず？にする）

1)

2)

3)

グローバル探究 Basic 観点と問い決定シート

観点：	問い1：	？
	問い2：	？
	問い2：	？
【この問いが生まれた背景】		

観点：	問い1：	？
	問い2：	？
	問い2：	？
【この問いが生まれた背景】		

観点：	問い1：	？
	問い2：	？
	問い2：	？
【この問いが生まれた背景】		

観点：	問い1：	？
	問い2：	？
	問い2：	？
【この問いが生まれた背景】		

資料8：授業⑦のポートフォリオと学びの記録（生徒のサンプル）

ポートフォリオ

- ・メモを取るとき、全てを書き留めようとしないこと。実際に比べてみてよく分かったが、全てを書き留めようとすると、結局どこが一番重要なかが分からなくなる。しかし観点を定めて聞くことで、相手が話している内容を理解して聞くことが出来、また自分の意見や疑問点などを洗い出す余裕まで生まれる。フィールドワークの現場でも、観定の定まった有意義な時間にできるようにしっかりと準備したいです。
- ・今日、4分30秒のスピーチのメモを取って見て、先生も普通に話す時よりも遅くハッキリと話して下さっていたのにも関わらずとても大変で、自分たちの行きたい企業へ行く前に、どのようにしてメモを取るのか、どのような観点でお話を聞いて、どのような問いを持ってその企業へ行かせて頂くかを学んで、メモを取ることも大変だし、観点だけでも沢山あるし、問いを持っていくと簡単に言っても、インターネットにもう既に記載されていることは聞いても相手の人や自分にとっても無駄な時間になると思うので、きちんと考えないといけないなと思いました。インターネットにもう既に記載されていることは思った以上に多く、インターネットに記載されていないことは私たちの知らない事に当たると思うのでそれを探すのが元々わからないため難しく、苦戦してしまっていたのですが、知識面での問だけでなく、向こうで働いている人にしか分からない、思っている事や感じていることなどをお聞きするのもいいことなのではないかなと思いました。

学びの記録

本日得た新しい知識や技術	自分の意見/他者の意見/考察
<p>レポート < Aの弱点 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・英検①の自信 語学の壁 ↑ 教科②、グループ③ (英やくしている → すずんでしまった) x ・サッカーに時間④ → 授業⑤ + 家族 常働 ↓ 2week 1回 フランスレストラン × どっちを大切にするか 家族のじかん、さく <p>・話し手の住む世界</p> <p>いる人なことをしてる中から話してくれる ← 1部分!!</p> <p style="text-align: center;"> 話した事 知りたい事 話した事 言いたい事 </p> <p>知りたいたいことをぶつける!! そうでないと自分の考えを深められない!!</p> <p>Point</p> <p>お題 知たために... 予備知識</p> <p>聞きたいこと「観点」「問い」</p> <p>・観点... 着目ポイント</p> <p>・問い... 「?」でおわる1センテンス</p> <p>自分の立場、友達、立場...</p>	<p>グループの子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全てを成しとげようとしてる ・努力型(やり方をかえない) ← 友 <p>私にはないところ</p> <p>私は先生の言ったことをそのまま書いているがグループの他の人は自分で考えをまとめて、それを書いている</p> <p>↑</p> <p>そっちの方がわかりやすい!! (問いに対する答えが - 発でわかる!!)</p> <p>自己流の時はいったことをそのまま書いていたが知りたいたい事と話したい事が合致するとしっかりもらさずに聞けるし、自分の考えも含めながら書くことができる!!</p> <p>そのまま書く → ただの知識となると思う</p>

本日の授業で知った新しい知識（事実）

他者や自分の考え・意見

福島県のイメージは？

実際の福島

→ 観光地にもなっている

○ 福島ガイド

絶対に安全な野菜も!!

毎日150種以上モニタリング

風評被害と戦う。

(自) 原発の問題

放射線

まだ復興しているか

分からない。

(先) メディアで得るイメージと
現地での経験と分かることに
大きな差。

(先) 自分たちにできる範囲

で
アクションを

起こすのが大事。

(参) 文化祭で福島食品の販売 — 分かってもらわないと。

英語で書かれたポスター — 見たい人しか見ない

生協で福島たす — 主体性に欠ける。

保育支援施設イベント — さほさほでボランティアをした
していたメンバーがいた。

白
題
点

・ 学生には実績、信頼が無い。

・ Step1. 信頼関係の確立。

①. 内容の決定

②. 足りない知識を収集

→ 福島のことではない。お母さんのこと

④. 実践。

(自) 伝えたいとだけ

じゃなくて

受け手のことについても

考えないといけないのが

大変そう!!

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

- ① 協力が決定不安にせず信頼関係を築く。
 - ・子どもとあそぶ
 - ・お母さんたちに関きとり調査
→ 本音で話してくれるまで。
 - ・毎週企画書作成して
さぼさほの方からの信頼を得る。

- ② 相手にとって意味のある内容に
することが大切。
 - ・まず目標を明確に決定。
 - ・手段について、いくつも案を出し
徹底的に比較・妥協していく!!

- ③ 知識不足 = 理解不足。
 - ・子どもが食べられないもの。
 - ・昼寝時間。

現実と理想の
違いを理解する

- ・小目標を設定する
- ・1つ1つ120%で。
- ・大人のかたを借りる。
→ 大学の専門の先生に来てもらう

- ④ 信頼関係がないと実践もできない。

(自) ③がすくく大事
相手のことについて
何も知らなかったら
良い手段も
考えられない!

(先)。せったり福島の
野菜はムリ!!!と
思ってる人に
理解させるのは
無理。

- ・若年層への
情報リテラシーの
定着。
- ・基礎研究の
面白さも広める
- ・一般人の目線から意見。

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

グローバル探求BASIC 中間発表会 学びの記録 (相互評価表)		月	日	組	番	氏名
※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。						
観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。						
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたいか）が明確である。	評価【 】	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	
B	FS先についての情報は正確に調べているが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。					
C	FS先についての情報が調べてはいるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに繋がっていない。					
観点② 意識疎立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。						
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」（当事者の声）が明確である。	評価【 】	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「何を語ったのか」（当事者の声）が見えにくい。					
C	FS先の人たちの人さまについて訪問者として感想を述べているだけである。					
観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。						
A	当該テーマについて何ができているかが具体的にあり、自分たちの意識を反映しそれが実現可能であることを証明できている。	評価【 】	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	
B	当該テーマについて何ができているかが具体的に示さされているが、それが実現できることが証明できていない。					
C	何ができているかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。					
他の人が訪れたFS先は自分の想像していた通りの施設でしたか？現場の人たちの「課題」に思いもよらなかったリアリティを感じましたか？「気づいたこと」をまとめよう。						

グローバル探求BASIC 中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】

動画のグループ名	
----------	--

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりしているかどうか。
A どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らなかったか）が明確である。
B FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

□発表者の問題意識は何ですか？

□発表者の訪問の目的は何ですか？（観点と問い）



☆この2つは一致していると本当に納得できますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。
A 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

□施設設立の目的/目標/取組は何ですか？

□現場の人たちの具体的な問題点/課題は？

□現場の人たちのリアルな「声」はどんな「声」？

--	--

☆この3つの項目は、ストーリーとして

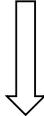
分かりやすくつながっていますか？

「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、限りある高校生としてそれが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示さされているが、それが高校生に実現できることが証明できていない。
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

□ <振り返り> 当該テーマ/問題意識/訪問目的

□ 提案内容 (What/Who/Where/When/Why/Which+How)



☆この2つにつながりを感じますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

☆どこを工夫すれば実現可能性はもっと上がる？

□ グループのまとめ

☆発表のハイライト☆

□ 発表全体の中で、一番伝えたいことが伝わってきた場面、一番発表内容に魅力を感じた場面 / どのような要素がそうさせていた？

場面
(分、内容)

要素

■ 発表全体の中で、一番工夫や改善が必要な場面、一番理解ができなかった場面 / どのような要素がそうさせていた？

場面
(分、内容)

要素

観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

一番効果的だと思うスライドは何枚目？/どんな点が良い？

枚目

工夫を必要とするスライドを2つ挙げよう/どう工夫する？

枚目

枚目

観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

※自分の発表のみコメントしよう

自分の発表の仕方について、工夫すべきところはどんな点？

--

設問1：【意識の変化について】

他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に)

・私のグループでは、中間発表の際の最後の項目「高校生にできること」の案として、「私たち世代に身近な話題を通して呼びかけることで、一人一人に自分達の考え方を見直してもらおう」という案を発表をしました。私は、一人一人に問題意識を持ってもらうことが、問題の解決に向けてまず重要だと思っていたので、自信を持って発表しました。しかし、この案に対しての先生方のフィードバックを見た時、私たちの案だとまだまだ改善すべき部分があると気付かされました。先生方のコメントとしては、『「一人一人に考えてもらう」というのは、具体的なようで具体的ではないと思う。』というものでした。私は、「一人一人が考える」というのは、きちんとしたアクションだと思っていました。中学生時代の作文でも「よく考えて行動することが大切だと思う」などの文を書いたこともありました。しかしよく考えてみると、「考える」というのは、5wもなくざっくりとしすぎていて、確かにあまり具体的ではないな、とはっ...っとさせられました。先生方からのこのフィードバックは、私のずっと持っていた「考える」ということは立派なアクションだという固定概念を壊したように思います。現に、最終発表のプレゼンの「高校生にできること」の内容は、一度白紙に戻して一から考え直すことにしました。『高校生のアクションとして「考える」というのは具体的ではない。』自分達の意見を深めるためにも、とても重要なことを教わったように思います。

・私が活動に際して驚いたことは主体的な学びがどういうものなのかということです。もちろん、説明会でも自分から積極的に学びに行く姿勢が大切だと言われていて、自分の意思が大切だということはある程度認識しているつもりでした。しかし、約10年間所謂受動的な学びしかしてこなかった私にとって、主体的な学びは想像以上に自分に委ねられていると感じました。

例えば、FSでどこに行くか、何を聞くのか、学びに行くのかといったことも全て自分たちで決めることには驚きました。振り返ってみると主体的な学びなんだからそのくらい当たり前だろうと思えますが、今まで全く経験したことがなく、未知への恐怖を感じました。

WWLCを受けると決めたときは、普段と違う様式の授業は面白そうだとしか感じていませんでした。しかし、学ぶ内容やそれをこれからどう繋げるのかを全て自分で考え、決めるというのは決して易しいものではないということを実感しました。

設問2：【問題点の克服】

現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。（400字を目安に）

・活動の際に一番困ったことは、意見が割れてまとまらない事態が多々発生したことでした。HRのグループワークでは、意見がなかなか出ずに困ることがあります。しかしwwlcにおいて、意見が出ないということはまずなくて、一人一人がきちんと自分のやりたい事や、目指している終着点の像を明確に持っています。すると、逆に意見がたくさん出て、なかなかまとまらなかったり、また、仮にまとまったとしても一人一人の描く像に若干のズレがあることで「これは違うんじゃないの?」と、言い合うことが多々ありました。焦りから口調が強くなったり、投げやりな気持ちになることも正直、ありました。しかし、そんな時でも私が気をつけたのは「誰か一人を孤立させない」ことです。三対一で責めたり、一人で抱え込ませて悩ませる、ということは絶対にしないために、常に周りに気を配るようにしました。また、誰かと誰かがぶつかり合った時、その二人は周りが見えておらず、冷静さも失っています。そんな時は、第三者が中立な立場になって両者の意見を取り持ちました。そうすることで、私のグループは支え合いながら活動できたと思います。振り返ると、私にとってwwlcの時間は、プレゼン方法や社会問題について学ぶだけでなく、社会に出た際に役立つ人間関係の築き方を少しでも盗むため奮闘する時間となっていたように思います。

・問題点は、学んだことを実際に活かそうとする力や意識がないことです。私は知的好奇心は強い方だと自負しているのですが、学べたらで満足してしまい、得たことを実際に社会をよりよくするために使おうとする意識が低く、また、最終的にこうしたいという目標はたてられても、そこに至るまでの具体的で現実的な手段や段階を考える力が弱いと感じました。

これを解決するために、意識については、学ぶ前と後で自分の意識がどのように変わったか、得たことがどのような問題につながるのかを考えました。また、活かす力をつけるために、まず、問題解決のために必要な具体的なことを考え、問題を細分化し、次に、それらについて、自分が使える手段を用いてどのようなことができるのかを考えました。ですが、中間発表では問題を細分化しすぎて、問題全体とのつながりが見えなくなってしまったので細かい問題に注目しながら、全体を見る意識も常に持つておかなければならないと感じました。

【1学年全体プログラム 「ソーシャル探究」について】

■「ソーシャル探究」授業の概要

「ソーシャル探究」は、「自分たちのすぐ近くにあるたくさんの問題を知ろう」をテーマに、週1回のホームルームの時間を利用して、第1学年全体を対象として3学期の1学期間で行った授業である。「グローバル探究 BASIC」が希望者35名だけを対象とした2学期間の授業であるのに対して、「ソーシャル探究」はその縮小版という形で行っており、自分たちで興味のある社会課題(ソーシャルイシュー)ごとにグループを作り、リサーチし、発表する(プレゼンテーション)という流れは一緒であるが、そのソーシャルイシューに関連した企業・団体・組織に実際に伺ってインタビューするという部分については割愛して行ったものである。また、ソーシャルイシューについても、「グローバル探究 BASIC」とは異なり、こちらから6つのテーマを提示し、その中から選ぶ形にし、探究授業初学者でも容易に授業に入っていけるように工夫した。なお、「ソーシャル探究」の授業においては、「グローバル探究 BASIC」受講者は授業の司会や他の生徒にアドバイスをを行う等、自分たちが学んできた内容を今度は他者に教えることによってさらに深い学びに導く形をとっている。

<授業スケジュール>

2019年度 1年生3学期WWLC活動予定表							2020.1.9
<自分たちのすぐ近くにあるたくさんの問題を知ろう>							
授業回数	日	担当者	授業形態	授業内容	授業内容(小項目)	準備物	授業時間外学習
①	1月24日	田中	視聴覚教室にて合同	<ul style="list-style-type: none"> WWLC生徒によるデモンストレーションプレゼンを聞く SDGsについて学ぶ 社会課題が身近にも存在することを学ぶ 今後のスケジュールについて説明を聞く 	15分 デモプレゼン「女性の社会進出」 20分 SDGsについて座学で学ぶ 10分 今後のスケジュールを確認する	<ul style="list-style-type: none"> SDGs説明プレゼンテーション 積水ハウスグループ生徒のプレゼンテーション 	
②	1月28日	WWLC生徒+担任	各HR	<ul style="list-style-type: none"> 興味のあるソーシャルイシューについて、ワークシートを完成させる。 興味あるソーシャルイシュー毎にグループを作成し、こちらから提示したフォーマットを埋める形で5分間のプレゼンを作成する。 	30分 個人作業「ワークシート完成」 10分 6つのグループ作り 5分 グループ毎にプレゼンを考える	<ul style="list-style-type: none"> ソーシャルイシュー集 個人ワークシート 運営マニュアル 	
	2月4日			学校行事のため休止			
③	2月19日	WWLC生徒+担任	各HR	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーション順番の決定 プレゼンテーションの準備 			
④	2月25日	WWLC生徒+担任	各HR	<ul style="list-style-type: none"> クラス内で各班発表し、質疑応答、審査を行う(5分×6グループ) 	40分 各グループプレゼン 5分 評価	<ul style="list-style-type: none"> 発表フィードバックシート 	
⑤	3月9日	田中	礼拝堂にて合同	<ul style="list-style-type: none"> 各クラス優秀班1つの発表を全員で聞く WWLC生徒班の発表を全員で聞く 2年生WWLC必修選択授業、および2年生校外HRへの導入 	45分 5分のプレゼンテーション×9クラス 10分 デモプレゼン「フードロス」 10分 授業まとめ、次年度への導入		

■各回の授業内容

○第1回授業：1/24（火） 導入

視聴覚教室での学年合同で、探究授業の導入となる授業を行った。導入授業では、「Reduce Go」や「TABETE」といったフードロステーマとしたアプリを題材にしながら、SDGsの説明や様々な社会課題（ソーシャルイシュー）が身近にあることを説明した。また、「グローバル探究 BASIC」受講生の中で「LGBTQ」についてリサーチしているメンバーに、プレゼンテーションのデモンストレーションを行ってもらい、探究授業の導入とした。

教員が一方向的に説明するだけでなく、自分たちのクラスメートが「LGBTQ」といった内容についてプレゼンテーションしている姿は、やはり生徒にとっても新鮮であったようで、非常に印象的な授業になったと感じている。

○第2回授業：1/31（火） ソーシャルイシューの設定

第2回の授業は、各クラスで「グローバル探究 BASIC」受講生進行のもと行った。まず「探究ナビ Social issue 資料集」を配布した。これは、Classi 連携サービスにある探究ナビから活用してきたもので、「食品ロス」「食料自給率」「再生可能エネルギー」「安定したエネルギーの供給」「温暖化現象」「異常気象」の6つのテーマについて、その概要や関連キーワード等が書かれており、それらソーシャルイシューについて容易にリサーチを始めることができるように工夫されている。

この6つのソーシャルイシューから自分にとって興味のあるものを選んだのち、ソーシャル探究ワークシートを埋めていく形で授業を進めていった。最後に、興味のある（選んだ）ソーシャルイシューごとにグループを作り、そのグループでプレゼンテーションができるように準備を進めていくよう指示をして授業を終えた。若干、グループごとにその人数に差異が出てしまったが、今回はあくまで自分にとって興味のある問題を取り上げることを目的にしたいと思ったので、人数の調整等を行わず、そのままグループを作成した。なお、プレゼンテーションについては、ロイロノートスクールを用いて、こちらでプレゼンテーション資料のテンプレートを作成し、そのテンプレートを埋めていく形で作成するように伝えた。「探究ナビ Social issue 資料集」およびソーシャル探究ワークシートとも、初学者にとっても非常にわかりやすい形でまとめたこともあり、大きな問題もなく授業を終えた。

お試し版

未来を拓く「探究」シリーズ

探究ナビ

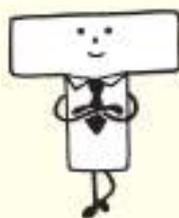
Social issue 資料集



※国際連合広報センターホームページより

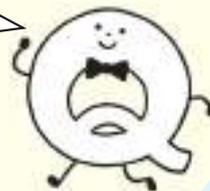
この資料集で解説しているSDGsは「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)」の略。国際連合の会議で採択された、2030年までに世界が達成すべき目標のことです。貧困や差別といった課題を克服し、世界が将来の世代にわたって発展していくために定められました。

実は2015年まで、「ミレニアム開発目標」というSDGsに似た目標がありました。この目標の大部分は達成されましたが、まだ世界には多くの課題と苦しむ人が残っています。そのためSDGsでは、「地球上の誰一人として取り残さない」ことが第一とされています。



SDGsの目標は17のゴールと169のターゲットに分けられるんだ。この資料集では、ゴールごとに2つのキーワードについて解説するよ。キーワードはみんなにとって身近なもの。キーワードを通して身の回りの問題に気づき、世界に似た問題がないかを考えてみよう。

まずは気になるキーワードの解説を読んで、疑問に感じたことを調べてみよう。その問題について詳しくなったら、問題を解決するにはどんな行動が必要か、自分なりに考えてみよう！



キーワード一覧

目標	キーワード	ページ	目標	キーワード	ページ	目標	キーワード	ページ
1 貧困をなくそう	奨学金	P.2	7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに	再生可能エネルギー	P.14	13 気候変動に具体的な対策を	温暖化現象	P.26
	子どもの貧困	P.3		安定したエネルギーの供給	P.15		異常気象	P.27
2 飢餓をゼロに	食品ロス	P.4	8 働きがいも経済成長も	働き方改革	P.16	14 海の豊かさを守ろう	乱獲	P.28
	食料自給率	P.5		ブラック企業	P.17		養殖	P.29
3 すべての人に健康と福祉を	医療格差	P.6	9 産業と技術革新の基盤をつくろう	AI	P.18	15 陸の豊かさも守ろう	絶滅危惧種	P.30
	医療保険	P.7		インターネットの普及	P.19		農業の後継者不足	P.31
4 質の高い教育をみんなに	教育格差	P.8	10 人や国の不平等をなくそう	所得格差	P.20	16 平和と公正をすべての人に	難民・移民	P.32
	高等教育無償化	P.9		地域格差	P.21		テロリズム	P.33
5 ジェンダー平等を実現しよう	ジェンダー指数	P.10	11 住み続けられるまちづくりを	防災・防犯	P.22	17 パートナリシップで目標を達成しよう	国連	P.34
	育児休暇	P.11		超高齢社会	P.23		NGO・NPO	P.35
6 安全な水とトイレを世界中に	バーチャルウォーター	P.12	12 つくる責任つかう責任	フェアトレード	P.24			
	水の価格	P.13		捨てられる製品	P.25			



目標2 飢餓をゼロに

キーワード
2-1

「食品ロス」

「食品ロス」とは？

捨てられた食品のうち、食べられる部分が残っているもののこと。世界全体で毎年約13億トンもの食品ロスが発生しており、食料の偏在や環境への負荷、経済悪化への影響が問題視されている。

600万トンを超す, 食べ物のムダづかい



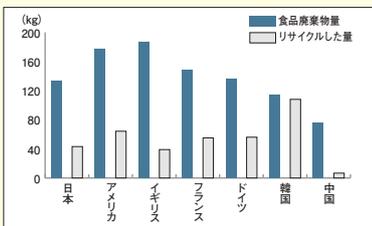
Qちゃんは日本でどのくらい食品ロスが出ているか知っている？**年間で約646万トン**も出ているんだって！**国民一人あたり、年間50kgも食べられるものを捨てている**みたいだよ。言われてみると、賞味期限が切れてしまったお菓子とか、傷んでしまった野菜をたくさん捨てている気がするよ。

その話、この間ニュースでやっていたよ。**食品ロスの半分は家庭から出ている**んだって。でも、無理に賞味期限が切れたものを食べるわけにもいかないし、どうすればいいんだろうね。それに、残りの半分は企業から出ているんでしょ。どんなタイミングで食品ロスが出ているんだろう。



コンビニやスーパーは売れ残った食べ物を捨てているけど、これも食品ロスなのかな。作る過程でも、作り損なった商品は捨ててしまっていると思う。でも、**品質や安全には代えられない**し…。どうやって対策すればよいらう…。

2015年度 国別の食品廃棄物量・リサイクル量



※農林水産省「海外における食品廃棄物等の発生及び再生利用等の状況」をもとに作成

Tちゃん、左の図を見て。こんなグラフがあったんだけど、食品廃棄物を出している国が多いみたい。でも、その分たくさんリサイクルしている国があるね。**食べ物のリサイクルって、どうやって行っているの**だろう。たくさんリサイクルしている国は、リサイクルのルールや仕方が違うのかな。



料理をするのにガスや電気が欠かせないように、食べ物を作るにはたくさんのエネルギーが必要じゃ。ゴミとして廃棄する際も、適切に処理しないと有害な物質を生み出してしまうことがあるから、コストをかけてきちんと処理しないとイケないのじゃ。このように、食品ロスは環境にも経済にも悪影響を与えているのじゃ。また、日本はたくさんの食べ物を海外からの輸入に頼っておる。わざわざ外国から大量に輸入してきて、それを捨ててしまっているのだとしたら、問題だと思わんかな。



調べるとさらに広がる！
🔗 関連キーワード

食品廃棄物／食品リサイクル法／賞味期限・消費期限／フードバンク／ドギーバッグ

興味のタネ

(課題になりそうなこと)

気になる用語やトピック、内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」
で調べてみよう！





目標2 飢餓をゼロに

キーワード
2-2

「食料自給率」

「食料自給率」とは？

食料自給率は、国内で消費される食料をどれだけ国産でまかなえているかを表す指標。日本の食料自給率は先進国の中でも低く、多くの食品を外国からの輸入に頼っているのが現状だ。

納豆は国産でも、大豆は外国産？



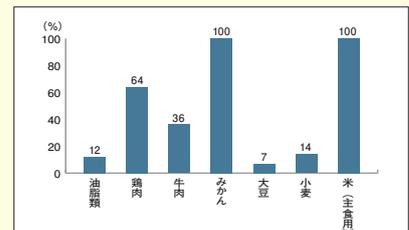
ねえQちゃん、日本の食料自給率が低いって話、聞いたことある？食料自給率って、国産の食べ物をたくさん食べれば上がるでしょ。じゃあさ、みんなが**国産の食材だけを食べれば簡単に上がる**ってことなんだよね。どうなのかな。

うーん、それだと外国でしか作っていない食べ物は食べられないよ。日本で作っている食べ物も、そんなにたくさんあるのかな。**足りないから、外国から輸入している**でしょ。無理に国内の食材だけを使うことにしたとして、本当にお腹いっぱい食べられるのかな。



今調べてみたら、大豆や食用油はほとんどが外国産みたい。でも、国内にも大豆の名産地があるし、納豆は大豆の加工品だよ。なんで納豆は国産品が多いのに、大豆は外国産が中心なんだろう。**昔からなじみのあるものなんだし、国内でたくさん作っていてもおかしくない**と思ったんだけど。なんでこんなに食料自給率が低いのかな。

品目別の食料自給率（2017年）



※農林水産省「日本の食料自給率」をもとに作成

品目によって、食料自給率が高い、低い理由があるんだろうね。日本はすでにたくさんの食べ物をほかの国から輸入しているけど、それってほかの国の農業にも大きな影響を与えているってことだよ。それも考えないと。ところで、**食料自給率はどのくらいが理想なんだろう**。ほかの国はどうしているのかな。



日本の食料自給率は、カロリーをベースにした計算で約38%。一方で、カナダは264%、オーストラリアは223%と、日本の何倍もの自給率を誇る国だってあるんじゃない。ところで、食料自給率には「生産額」をベースにした計算方法もある。この計算方法だと、カナダは121%、オーストラリアは128%、日本は65%となる。日本の食料自給率がグンと上がって、ずいぶん差が縮まるのう。なぜ二つも計算方法があるんじゃないろう。それに、なぜ全然違った数字が出てくるんじゃないろうなあ。



調べるとさらに広がる！
② 関連キーワード

カロリーベース／生産額ベース／食の欧米化／フードマイレージ／食料安全保障

興味のタネ

(課題になりそうなこと)

気になる用語やトピック、内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」
で調べてみよう！





目標7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに

お試し版

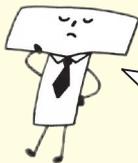
キーワード 7-1

「再生可能エネルギー」

「再生可能エネルギー」とは？

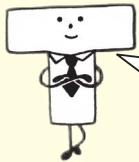
石油・石炭などの「いつかなくなる」エネルギーに対して、太陽光、水力、風力、地熱など自然界に常に存在する「なくなるしない」エネルギーのこと。利用時に二酸化炭素を出さないという特徴もある。

発電電力量が6分の1の暮らしを想像しよう



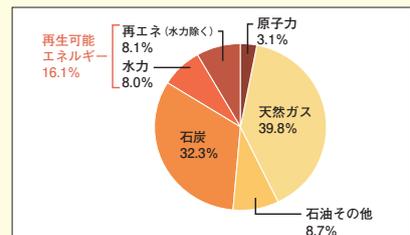
へえ～、「再生可能エネルギー」って、いくら発電しても資源がなくならないんだ。すごいな。どんどん導入しようよ。全部の建物の屋根に太陽光発電装置をつけたり、空き地に風力発電装置をつくらせたら、日本の発電電力量をそっくりまかなえたりして。

そんなにうまくいかな。そもそも装置を全部につけるのは無理だよ。それに太陽光発電装置は雨や曇りの日は役に立たないだろうし、風力発電装置だって風のない日は動かないでしょ。



あっ、日本の発電電力量の内訳データを見つけたよ。再生可能エネルギーは、水力発電を入れて16.1%、全体の約6分の1か。これはほかの国と比べて高いのかな、低いのかな。日本の電気を全部まかなうには、発電電力量を6倍にする必要があるということだね。逆にもし今すぐ、再生可能エネルギーだけで暮らさなきゃいけないとしたら、どんな生活にすれば実現可能だと思う？

発電電力量に占める割合（2017年）



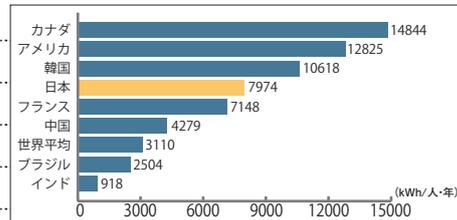
※資源エネルギー庁「なっとく！再生可能エネルギー」より

テレビ、スマートフォン、照明、エアコン…、何から節約すればいいんだろう。いや、でも、電気を使う量を現状の6分の1にしなきゃいけないんだから、そんな身近な努力だけじゃ限界があるよね。大きく電力消費量を減らすには…うーん、日本の電力って、何に使われてるんだ？



そもそも、日本人が持続可能な生活をするには、どれくらいの電力を使うのが適切なんじゃろうか。一人あたりの電力消費量を見てみると、日本は主要国の中では4番目。世界全体の電力の4%を消費しておる。消費量が多い国と少ない国には、使い方や発電方法にどんな違いがあるんじゃろうな。

主要国の一人当たりの電力消費量（2016年）



※一般財団法人 日本原子力文化財団「原子力・エネルギー図面集」より



調べるとさらに広がる！
🔗 関連キーワード

バイオマス／発電コスト／固定価格買い取り制度（FIT）／パリ協定

興味のタネ

（課題になりそうなこと）

気になる用語やトピック、内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」
で調べてみよう！





目標7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに

お試し版

キーワード 7-2

「安定したエネルギーの供給」

「安定したエネルギーの供給」とは？

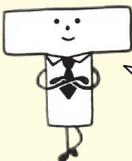
人々が日常生活や経済活動を滞りなく行うために、十分なエネルギーが途切れずに供給される状態。必要なエネルギーは国や環境によって異なる。日本の場合は電気、ガス、ガソリン、灯油など。

日本は停電に何時間まで耐えられる？



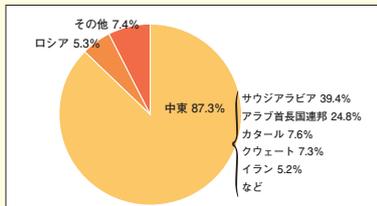
昨日の停電はびっくりしたね。スマートフォンはつながったから、インターネットで調べたらこの辺りだけの停電だってわかったけど、もし何かの事情で**日本全域が1時間停電したら、どんな影響が出るだろう**。考えてみると、生活って24時間365日、電気が供給されることを前提に成り立ってるよね。

そうだね。もし何かの事情で電気が使えなくなったら、それ以外のエネルギー、例えばガスやガソリン、石油だけで生活を成り立たせることってできるんだろうか。やっぱり電気が一番大事なのかな。



電気にしても、それ以外のエネルギーにしても供給が止まったら、きっとそれぞれ困ることが出てくると思うよ。常に使えるためには原料を確保しておかないといけないね。電気の原料って、今のところほとんどが石油や石炭とかの地下資源なんですよ。ガスも地下資源だよ。石油はいつかなくなるって聞いたけど、いつまでもつのかな。

日本の原油輸入先 (2017年度)



※一般財団法人 日本原子力文化財団「原子力・エネルギー図面集」より

確か、日本ではそういう資源はほとんど採れなくて、輸入してるんだよね。

左図によると、原油はほとんど中東の国・地域から輸入してる。そもそも遠いから輸送も大変だろうし、原油以外の資源も含めて、**エネルギーの供給が途絶えないような対策**ってされてるのかな。



世界のエネルギー事情に目を向けてみるとどうじゃろう。エネルギーは足りるんじゃろうか。もし不足しそうなら、エネルギー源の開発が必要じゃ。それでも足りないときは各国にうまく配分せんといかん。どうやって決めたらよかろうなあ。自分の国にどれくらいエネルギーがあれば、「足りている」と言えるんじゃろう。



調べるとさらに広がる！
🔗 関連キーワード

エネルギー自給率 / オイルショック / 国際エネルギー機関 (IEA) / エネルギーミックス

興味のタネ
(課題になりそうなこと)

気になる用語やトピック、内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」
で調べてみよう！





目標13 気候変動に具体的な対策を

キーワード 13-1

「温暖化現象」

「温暖化現象」とは

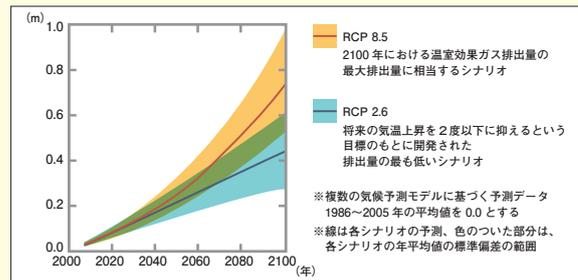
世界の平均気温は1880～2012年の期間で0.85度上昇している。1900年代半ば以降の温暖化は、工業化に伴う二酸化炭素濃度の増加によるものであることがほぼ確実で、早急な対策が求められている。

温暖化現象が南の国を沈める？



温暖化現象が及ぼす影響の一つに、「海面の上昇」があると聞いたから調べてみたよ。
この予測によれば、悲観的なシナリオだと60～80年後には最大82センチ、温暖化対策がうまくいった場合のシナリオでも25センチ以上、海面が上昇するんだって。標高が低い場所は、水没してしまうかもしれないよね。日本は大丈夫なのかな。

世界の海面水位の上昇予測



※環境省「気候変動に関する政府間パネル (IPCC) 第5次評価報告書」より

うん、日本も心配だけど、南太平洋の島国であるキリバスやツバルはもっと差し迫っているらしい。海面の上昇が進んだら人が住めなくなる恐れがあるから、住民の移住を考えていると聞いたことがあるよ。そうなったときの受け入れを表明した国もあるんだって。



国が沈むかもしれないなんて本当に大変なことだよ。二酸化炭素を排出してきた先進国の一員として、温暖化現象を食い止めるために自分でできる範囲のことをやろうと思うよ。

同じ気持ちだよ。でもさ、これだけスケールの大きな問題だよ。関心を持つ一部の人が個人レベルで取り組むことに、どこまで温暖化現象を防ぐ効果があるんだろうか、とも思ってしまうんだ。二酸化炭素の排出量を一気に減らせるようなよい対策、ないのかな。



温暖化対策が難しい理由の一つは、二酸化炭素排出量の減少と経済成長が簡単には両立しないからじゃ。この両立をめざそうと各国は工夫を重ねている。政治の面では、例えば「炭素税」という、化石燃料に課税する方法がある。日本でもこれに近い「地球温暖化対策のための税」が導入されておるな。科学技術の面では、「CCS」という二酸化炭素を地中に埋める技術が日本を含め世界で試みられておる。これらの効果、メリット・デメリットはどんなものじゃろう。ほかにも効果的な対策はないかな。



調べるとさらに広がる！
② 関連キーワード

IPCC (気候変動に関する政府間パネル) / パリ協定 / 環境難民 / 環境税 / CCS・CCUS

興味のタネ

(課題になりそうなこと)

気になる用語やトピック、内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」
で調べてみよう！





目標13 気候変動に具体的な対策を

キーワード
13-2

「異常気象」

「異常気象」とは

気象庁は「過去30年の気候に対して著しい偏りを示した天候」、世界気象機関は「平均気温や降水量が平年より著しく偏り、その偏差が25年以上に1回しか起こらない程度の大きさの現象」と定義している。

異常気象が「異常」でなくなる？



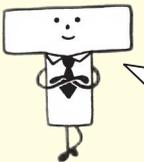
すごい雨だね。A県で今の時期にこんなに雨が降るのは20年ぶりなんだってさ。
このところ「〇年ぶりの異常気象」なんてニュースをよく聞くから、気象庁のホームページで調べてみたんだ。異常気象っていうくらいだから珍しいのかと思っていたら、**日本でも世界でも毎月何件も発生している**みたいで、ちょっと驚いたよ。「異常」といえなくなっているのかな。

2018年に起きた異常気象(抜粋)

モンゴル南西部~中国北西部	低温(1, 9, 12月)
北日本~中国北西部	高温(3~8月)
東日本~西日本	大雨(6~7月)
インド	大雨(6~9月)
ヨーロッパ中部及びその周辺	少雨(2, 5~11月)
米国北東部~南部	多雨(2, 5, 8~12月)
オーストラリア南東部	干ばつ(1~9月)

※気象庁「世界の年ごとの異常気象(2018年)」より

それは異常気象が増えているってことなんだろう。過去の発生件数と比べてみたいね。数だけではなくて、「異常」の種類や度合いについても、昔と比べてどうなのか気になるよ。もし件数が増えていて、度合いも深刻になっているとしたら、人間の活動のせいなのかな。



どうだろう。気象って様々な条件が複雑に絡んでいるし、地球の歴史に比べたら数十年なんてごく短い期間だから、簡単に「〇〇が原因」「過去に例がない深刻さ」と結論づけるのは難しいと思うよ。ただ、**こうした気候変動に地球温暖化が関係している**と考える専門家は多いみたいだ。

原因が特定できないとすると、予測は難しいのかな。
いずれにせよ、異常気象によって被害も出ているわけでしょ。原因がすぐにわからないとしても、対策はしておきたいよね。日本や世界ではどんな対策がなされているんだろう。



国連によると、1978~1997年の気候変動による経済損失額は約100兆円だったのに対し、1998~2017年は約252兆円と、約1.5倍になったそうじゃ。損失額が大きい気候災害はどんな種類のもので、損失額が増えた理由はなんじゃろうか。また、同じくらいの台風、同じくらいの暑さでも、場所によって被害の大きさは異なると考えられる。何が違いを生むのじゃろう。



調べるとさらに広がる！
🔍 関連キーワード

ブロッキング現象/テレコネクション/ヒートアイランド現象/気象災害/異常気象分析検討会

興味のタネ
(課題になりそうなこと)

気になる用語やトピック、内容を自由に記入しよう。

「リサーチガイド集」
で調べてみよう！



I Classi で配信されている「ソーシャルイシュー集」を読んで、自分が一番興味あるソーシャルイシュー（社会問題）を選んで、○をしよう！

	「食品ロス」とは？
	「食料自給率」とは？
	「再生可能エネルギー」とは？
	「安定したエネルギーの供給」とは？
	「温暖化現象」とは？
	「異常気象」とは？

II そのソーシャルイシューにあなたが興味を持ったのはなぜですか？その理由を書いてみよう！

--

III 興味を持ったソーシャルイシューに関する記事の中で、一番気になったこと、関心をもった部分を記事の中から抜き出してみよう！

--

IV 興味を持ったソーシャルイシューは、今後その問題がより深刻になった場合、あなたやあなたの周りにどのような影響を与えるでしょうか？その問題が今後もっとも深刻な状況に陥ったと仮定して、自分の生活にどんな影響が出るか、予想されるものをすべて書いてみよう！

--

V 記事の中段に「調べるとさらに広がる！関連キーワード」が4つもしくは5つ記載されています。それらのキーワードについて iPad を使って意味を調べ、それぞれのソーシャルイシューとどのような関連があるか、調べてみよう！

キーワード	その意味	ソーシャルイシューとの関連

VI iPad を使って、そのソーシャルイシューに関連する最近のニュース記事を3つ探して、その内容を書いてみよう！

VII そのソーシャルイシューを解決するプランを、次の条件でそれぞれ考えてみよう！

もし、お金や労働力等、一切の限界がないとすると、どのような解決策がありますか？
もし、高等部全体でそのソーシャルイシューに取り組むとすると、どんな解決策がありますか？
あなたが明日からすぐできる解決策は、どんなものがありますか？

○第3回授業：2/19（火） ソーシャルイシューリサーチ活動

第3回の授業は、抽選で翌週のプレゼンテーションの順番だけ決めたのち、残り時間はグループごとにリサーチの続き及びプレゼンテーションの準備を行った。

○第4回授業：2/26（火） プレゼンテーション

各クラス決められた順番でプレゼンテーションを行った。グループによっては、テンプレートとして与えたロイロノートではなく、自分たちでパワーポイント資料にまとめているグループもあり、質の高いプレゼンテーションも見受けられた。

発表者以外は、「ソーシャル探究最終発表相互チェック表」を用いて、発表者へのフィードバックを記入しながら、発表を聞く形をとった。

参考資料3：「ソーシャル探究最終発表相互チェック表」

ソーシャル探究 最終発表会相互チェック表		月 日			組 番 氏名		
※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。							
観点①	ソーシャルイシューを選んだ理由が明確かどうか？	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：
A	どのようなきっかけでそのソーシャルイシューを選んだのか、目的（何を知らなかったか）が明確である。	評価【 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス					
B	ソーシャルイシューについての情報は明確に調べてあるが、興味や関心との関係が見えにくい。						
C	ソーシャルイシューについての情報が調べてあるだけで、自分たちの興味関心に触れていない。						
観点②	ソーシャルイシューの解決策が確かにその問題を解決できるものであり、かつ斬新であるか	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：
A	その解決策は、その課題を確実に解決することができ、しかも誰も思いつかなかったような新しいものである。	評価【 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス					
B	その解決策は、確かにその課題を解決できる可能性は高いが、多くの人が思いつく、もしくはすでに行われているものである。						
C	その解決策で、本当にその課題が解決できるのか疑問が残る。						
観点③	解決策を実行した場合のシミュレーションがなされているか	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：
A	解決策を実行した場合のシミュレーションがなされており、発生する別の問題やどうすればよいかまで検討されている。	評価【 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス					
B	解決策を実行した場合のシミュレーションはなされているが、発生する別の問題のみしかりサーチされておらず、不十分である。						
C	解決策を実行した場合のシミュレーションが不十分であり、発生する別の問題についても十分にリサーチされていない						
観点④	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：	ソーシャルイシュー：
A	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意が感じられる。	評価【 】 疑問に思ったこと・意見・アドバイス					
B	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。						
C	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。						
気が付いたこと・ひらめいたこと・考え方が変わったこと・新しく知ったこと等をメモしておこう							

○第5回（最終回）授業：3/9（月） 全体発表会

本来であれば、この日に各クラス評価の高かったグループのプレゼンテーションを学年全体の前で聞く予定だったが、新型コロナウイルスによる休校措置に伴い中止となった。

■「ソーシャル探究」授業を終えて

本授業を終えて感じたことは大きく2つある。

1つは、本授業を進めていく中で、「グローバル探究 BASIC」受講生のレベルの高さ、もしくは探究授業の可能性を大きく感じたことだ。自分たちが学んできたことを誰かに伝えるという作業は、自らの学びを振り返り、さらに深める意味でも大きな意味を持つ作業であることを再認識した。自ら学び、それを伝える中で、次の疑問を持ちさらにリサーチすることが探究授業の効果であり、それを大きく感じた。

もう1点は生徒たちの潜在能力の高さである。今回、学年全体を対象とする上で、探究授業の初学者でもわかるように、取り組みやすさ、入りやすさを非常に気にしながら授業を設計したわけだが、実際にやってみると、もっとやりたかったという意見を多く聞くことができた。特に、最初の段階でソーシャル 이슈を6つに絞ったことは、物足りなさを感じた生徒も多く、探究授業を行っていくうえで、必要以上に生徒を守るではなくある程度突き放しながら進めていく重要性を感じた。またそういった意味でも、授業の最後の部分が新型コロナウイルスによる休校措置で中止になってしまったことは、非常に残念である。

（研究内容 1 総括）グローバルな社会課題を探究するためのカリキュラム開発

～グローバル探究 BASIC とグローバル探究のデザイン～

関西学院大学 高等教育推進センター准教授
カリキュラムアドバイザー 時任隼平

ここでは、生徒がグローバルな社会課題を探究するためのカリキュラムについて解説する。本事業では、生徒が SDGs を経済・政治・教育・芸術等の様々な観点から探究するための学びの場として、高校 1 年次対象の「グローバル探究 BASIC」を実施した。また、高校 2 年次対象の「グローバル探究」を開発し、2020 年度より実施予定である。2020 年度には新たに高校 3 年次対象の新規授業についても開発し、3 年間を通じた体系的なカリキュラムとして完成させる予定である。以下、グローバル探究 BASIC 及びグローバル探究の教育目的・学術的枠組みについて説明する。

（1）科目の教育目的

2019 年度に実施したグローバル探究 BASIC の教育目的は、「①社会を知る」と「②社会の中の自己を知る」の 2 点である。「①社会を知る」とは、生徒が生活する地域やそこでの文化的・社会的・歴史的な活動に目を向け、それらを解釈することで自分の人生を生きるということを社会文化的・歴史的な営みとして理解することを意味する。「②社会の中の自己を知る」とは、生徒が①で得た情報と自分自身の人生と結び付けて考えることができるようになることを意味する。具体的には、「自分は当該テーマについて何ができるのか」を考察することで、生徒が現時点でできること、今後やっていきたい事などについてイメージを持つことができるようになることを目指している。

1 年次では、生徒が社会を探究するための第一歩として「社会と社会の中の自己」について考える場を設け、2 年次以降の探究への基本的（BASIC）な学びを促す。

2 年次（2020 年度）からは、グローバル探究を実施予定である。グローバル探究の授業では A（AI 活用コース）、B（ハンズオンラーニング）、C（グローバルスタディ）の 3 つの分野別授業を展開するが、ABC 全てにおいて「③専門的な学術的視座から社会にどのような働きかけができるのかを考える」ことを共通の目的として設定した。ここでいう専門的な学術的視座とは、単に現地見学や体験活動によって得た学びの観点から当該テーマを理解しようとするのではなく、専門家や専門書籍等で得たアカデミックな知見を活用しながら当該テーマに向き合うことを意味する。具体的には、A～C において下記のような知識・技術を修得することによって生徒が当該テーマに関する専門的な学術的視座に立つことができるようになることを意図している。

A : AI 活用コース

- ・ AI の定義を明確に理解する
- ・ AI が社会においてどのように活用されているのかを理解する
- ・ AI の社会的役割について理解する
- ・ AI の基本的技術を理解し、その技術を活用することができるようになる（プログラムを書くことができるようになる）
- ・ 課題解決と AI 活用のイメージを持つことができるようになる

B: ハンズオンラーニングコース

- ・エネルギー（原発）と核（原爆）をテーマとし、それぞれの基本的な構造・歴史を理解する
- ・社会におけるエネルギーと核に係る諸問題を理解する
- ・エネルギーと核に関するハンズオンラーニング（サービス・ラーニング）を通して、現地で学びを得るだけでなく、自分の働きかけによって受け入れ側（当該テーマに関わる人々）に対して一助となる活動を模索する

C: グローバルスタディコース

- ・文化とは何か、異文化とは何かを理解する
- ・グローバルイシューの1つとして、地球温暖化に関する理解を深める
- ・異なる文化背景をもった人たちとの交流方法について体験・理解する
- ・異なる文化背景をもった人たちとの協働方法について体験・理解する
- ・異なる文化背景をもった人たちと、地球温暖化について対話を行い双方の考えについて理解を深める

(2) WWLC 事業におけるカリキュラム開発の学術的枠組み

2019年度に開発したグローバル探究 BASIC 及び2020年度以降に実施予定のグローバル探究、3年次実施予定の授業は全て、教師によって一方的に規定された知識を効率的に伝達しようとする方法ではなく、生徒自身が主体的・対話的に活動することによる深い学びを促す「社会構成主義 (Social Constructivism)」の学術的前提に立ってデザインされている。

日常的に学校教育において行われている知識伝達型の授業は、知識を教師が事前に構造化し、効率的に伝達しようとする。そこでは、生徒の学びを行動主義心理学の観点から捉え、教師が与えた刺激（教授）によって生徒が反応（記憶）すると考える。教育の効果はペーパーテストで測定され、教師の教授した知識を制限時間内に答案用紙に正確に書き込んだ量で成果が問われる。そこでは、生徒自身が何を考えたのかは重要なこととして捉えられない（久保田 2000）。

一方、社会構成主義では、生徒の学びを取り巻く社会的・文化的な状況に着目し、教師によって教授された知識を記憶したのかではなく、生徒自身が社会との関わりの中でどのような知識を自ら構成していったのかが問われる（東村 2004）。社会構成主義では、いつどのように役立つのかが分からないパッケージ化された知識はあまり意味を持たない。知識を実際に使う状況から切り離してパッケージ化することよりも、実際に使う状況に飛び込む中で、その場で必要とされる知識を帰納的に生成していく力を重視する。

本事業では「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」のスパイラルを繰り返す探究活動を基本とした社会構成主義に基づくカリキュラムを展開していく。以下、そのための具体的な特徴について解説する。

特徴（1）生徒が自ら構成した知識を記録すること

本事業では、2019年度の開発した「学びの記録」を用いて、生徒が自ら構成した知識を記録する。これは、生徒自身が探究活動を展開する中で「自分は何を得たのか」を経験レベルだけでなく知識レベルでも語るこ

ができるようになることを意図している。学びの記録には、新しく知った知識や技術を記載するだけでなく、それに対する自己の解釈、他者の解釈を書き込む欄が設けられており、知識を単に記録するのではなく、知識を扱った文脈と共に記録できる仕組みになっている。

特徴（２）社会との直接的な繋がり場を体験すること

本事業では、全ての授業において社会との直接的な繋がり場を設定する予定である。これは、知識が教科書や専門書の中でのみ扱われたものではなく、実社会の中で生きた知識として埋め込まれていることを生徒自身が体験に基づいて理解することを意図している。対面だけでなく、ICTを活用したオンラインのコミュニケーションを通して、教室だけでなく国境を飛び越えた繋がりを実現する。

特徴（３）３年間のカリキュラムの土台にある”Mastery for Service”の考え方

本学は私学教育を展開する学校教育機関であり、その礎には”Mastery for Service”（奉仕のための練達）というスクールモットーが存在する。隣人や社会全体に仕えるために自らを研鑽するというこの考え方を実現するために３年間のカリキュラムに埋め込んだのが、Service Learningの学習理論である。Service Learningとは、学生が実社会での活動において地域の人々と交流・協働する事を通して主体的に学ぶ事ができる利点に加え、地域に対してもサービスを通じた利益が生じる教育プログラムである（JACOBY 1996, 津止 2009, 時任 2015）。１年次、２年次は社会との関わり方を体験し、専門的な知見を収集しつつ、３年次には社会との関わりの中で社会課題の解決に生徒自身が関わることを通してMastery for Serviceの体現を目指す。

【参考文献】

久保田賢一（2000）構成主義パラダイムと学習環境デザイン．関西大学出版部

ケネス・J・ガーゲン（1999）An Invitation to Social Construction．東村知子（2004）（訳）あなたへの社会構成主義．ナカニシヤ出版

JACOBY, B. and ASSOCIATES. (1996) SERVICE-LEARNING in Higher Education. Jossey-Bass, San Francisco

津止正敏（2009）学校教育とボランティア活動を巡って－本書の論点整理－．桜井正成，津止正敏（編）ボランティア教育新地平－サービスラーニングの原理と実践－．ミネルヴァ書房，京都

時任隼平，橋爪孝夫，小田隆治，& 杉原真晃. (2015). 過疎地域におけるサービス・ラーニング受け入れに関する研究. 日本教育工学会論文誌, 39(2), 83-95.

【研究内容2の具体的な内容とその評価】

<探究型カリキュラムの開発のために>

科目	Global Study II	学年	2	単位	1
活動の目標	1. 「世界を知る」ことを目標に、各テーマごとに専門の大学教員から深く学ぶ 2. 「自分の学びを取り巻く社会と自分以外の社会との接点」を探り、3年生に向けてアクションへのトランジションを行う				
教材	自主プリント				
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員による2回の講義が終わった後には、必ずClassiのアンケートを配信し、授業での気づきの記録としてポートフォリオを作成する ・評価は授業への出席率、授業ノート、Classiアンケート、発表の内容を対象に行った。国内外のフィールドワーク、大学の発表会や外部イベントへ自主的に参加したものには加点をした。 				

<スケジュール 毎週木曜日 15:45~16:25>

1 学期	4/11	1学期オリエンテーション・イントロダクション		
	4/18	【グローバルゼーション①】外部講師：関西学院大学名誉教授 関西学院大学総合政策学部 福田豊生先生		
	4/25	【グローバルゼーション②】外部講師：同上		
	5/9	【グローバル経済と開発①】外部講師：関西学院大学 経済学部教授 栗田匡相先生		
	5/16	【グローバル経済と開発②】外部講師：同上		
	5/30	まとめ：Global Mindset & Your Episodes 西室（GSII担当）		
	6/6	事前学習	西室（GSII担当）	
	6/20	【子どもの権利と教育①】	外部講師：関西学院大学教育学部 岩坂二規先生	
	6/27	【子どもの権利と教育②】	同上	
2 学期	9/5	2学期オリエンテーション・イントロダクション		
	9/12	【国連とジェンダー①】	外部講師：関西学院大学総合政策学部 西野桂子先生	
	9/19	【国連とジェンダー②】	同上	
	9/26	【国際協力①】	外部講師：関西学院大学 国際教育・協力センター 山田好一先生	
	10/3	【国際協力②】	同上	
	10/17	まとめ	西室	
	10/24	カンボジア研修報告	カンボジア研修参加生徒	
	11/7	【発表準備：日本が抱える問題をクラスメートに紹介+解決方法の提言】	西室（GSII担当）	
	11/14	【高校生公開討論会事前授業：移民問題について】	外部講師：関西学院大学 産業研究所 アンナ・シュラーデ先生	
	11/21	【発表：日本が抱える問題をクラスメートに紹介+解決方法の提言】	西室（GSII担当）	
3 学期	1/9	【学びの振り返り】	外部講師：関西学院大学 高等教育センター 時任隼平先生	
	1/16	【経験から得た学びを次のアクションにどうつなげるか】	同上	
	1/23	【発表準備：GSIIで学んだ5つのテーマ別のグループ発表】	西室（GSII担当）	
	1/30	同上		
	2/20	【発表：GSIIで学んだ5つのテーマ別のグループ発表】	西室（GSII担当）	
	2/26	同上		

<授業内容>

【グローバルゼーション①②：関西学院大学名誉教授 関西学院大学総合政策学部 福田 豊生先生】

授業内容

Globalization が促進している世界において、Global Mindset、すなわち「グローバルに生きていくための姿勢」が問われている。「グローバル」な世界とは一体何か、という抽象的な問いかけから、一人一人が具体的にどのような生き方の姿勢が問われているのか、ということをご自身の経験を交えながら分かりやすく解説していただき、主に3つの点を大事にするように高校生にメッセージを送ってくださった。

- 1) Growth Mindset (知識や技能はいくらでも伸びると思う姿勢)
- 2) Identity Capital (自己能力を高めるために自分に投資する姿勢)
- 3) 主体的に自分で考え行動すること

生徒レポート

設問1：福田先生が考えるグローバルとは？

- ・みんなが一樣ではなく、多くの人が世界のあらゆる物事に疑問を持ち、新しい発見をすること。また海外の人と競争でき、国際的な評価を得られる能力を持つ人が増えること。
- ・世界レベルのスタンスで物事を考えられるようになること。英語を学んでそこから世界の様々な話を出来るようになるのではなくみんなが自分で考えて何にでも疑問を持って取り組むことで世界中が繋がっていくことのできる世界を作っていくこと。
- ・ひとことでいうと「違いがわかること」。そのためには自分の中の柱が必要。それをするために自分で研究し工夫して新しいものを作ることに面白さがある

設問2：福田先生のお話を聴いて、自分にとっての一番の「発見」「学び」は何か？

- ・最も大事なものは知識でもスキルでもなく自分の心の持ちようだという事。これからの社会の展望について我が国では仕事なくなる、と言った風に悲観的な側面しか広く知られていないが心の持ちようでポジティブに捉えることが可能だという事。
- ・言語が二の次というのに驚いた。これまで自分の考えでは、グローバル人材になるためにまずコミュニケーションをとれるような英語の習得が何より今一番必要だと思っていたので、才能がなくても自分で変えられるものの見方やつけられる知識を増やしていくことが大切と気づけた。また何事にも疑問を持たないと何かを変えられる、発見できるような人にはなれないと考えさせられた。
- ・意識しないと成長しない。そのため、今を先送りにせず、主体的に自分で考え行動する。人との出会いを逃さないために、体験から得た感動を活かすために常にアンテナを張る。

【グローバル経済と開発①②：関西学院大学経済学部 栗田匡相先生】

授業内容

全人口の40%以上が1日2ドル以下で生活をする貧困状態にあり、そのような貧困の世界というのはどういう状態にあるのか、ということをご自身が取り組んでいる途上国での調査の例を挙げながら解説していただきました。1回目の授業では、具体的に貧困を疑似体験するために、栗田ゼミの学生も加わり、途上国体感ゲームを行った。すごろくでサイコロを振りながら、途上国特有の出来事を経験しながら、幸せとは何か、生きがいとは何か、ということをご自身の経験の中で考えるゲームであった。2回目の授業では、途上国の問題を解決するような政策を立案するために、ゼミ生と授業が始まるまでにアポを取り、日々の生活の中で取り組むことのできる解決策を考え、それを英語で3分間、パワーポイントを使いながら発表するという内容であった。それぞれの発表では、大学生のフィードバックを得ながら学びを深めることができた。

生徒レポート

設問1：栗田先生の2回分のお話やコメントを通じて、自分にとっての一番の「発見」「学び」は何か？

- ・やっぱり実際足を運んでる人の言葉は違うなということ。もちろんそれが全てではないだろうし、主観が入ったりしているかもしれないが、それも1つ確かな現実である。メディアなどの媒体はごく一部のことしか報道していなかったり、またネットなどでは無駄に誇張したりしている。真実を知るにはやはり自分の目で確かめたいと思った。百聞は一見に聞かず。いくら講義を聞くよりも自分で一回まで見る方が何倍も学びがあると思う。ただそれが難しいから、経験した人に話を聞く。だから私たちは、その話を聞く中で、いかに自分が行ったかのような学びの吸収ができるかが必要だと思う。その人の話から、全てを吸収するつもりで毎回授業を聞けば、スライドなどの発表を作る時も考えて考えて考えぬくことができれば、大きな成長につながる感じた。また、国際学部だけではなく、経済学部でもこのような活動があるというのが驚きであった。国際関係は全て国際学部だけだと思ったが、調べてみたところどの学部にも結構国際関係の活動はあって、大学の学部選びにとっても参考になった。栗田先生の授業には特に、興味が湧いた。
- ・「情熱が大切」とおっしゃっていたのが1番記憶に残っています。確かに何を行うにも、それほどの決意、自分を突き動かすものがないとできないと思いました。ではそれはどういう風に生まれるのだろうと考えてみました。まずは、問題意識を持つことではないでしょうか。なんでも、疑問に思わないと答えを探す気になりません。それと同じように、自分のどんな体験から、どういう疑問を持って、情熱を持って取り組もうとできるかどうかは問題意識を持つことから始まると考えます。私自身を、今、突き動かしているものは、一瞬にして奪われてしまう命に対する悲しみです。途上国ゲームでは、あっという間に子どもが病気や死産で亡くなっていく悲しみを感じました。これが現実だということは受け止めるにはあまりにも辛いことです。しかしそんな悲しみを受け止めている人がいるということに改めて感じた時に、救いたいという強い思いが沸き起こりました。これは発見ではないかもしれませんが、しかしある意味では、同情ではない悲しみを学ぶことができ、当事者に寄り添って問題を解決する糸口となる学びができたのではないかと思います。

設問2：1回目の授業の「途上国体感ゲーム」を通じて「発見」したこと「学んだ」ことは何か、自由に書いてください。

- ・マスの一つ一つの重みが大きく、それが実際途上国で当たり前のように起こっているということを改めて考えさせられた。そしてまさにその瞬間もそんな現状と戦っている自分より小さい子供達がいるとうことに辛いという気持ちと怖いという感情が出てきた。もし自分が生まれたのがこのゲームのような世界だったら、と考えると自分達には世界中の人々とお互いに助け合わなければならないというような義務を感じた。
- ・「子どもを産んだ。①男の子②女の子③死産」というマスが一番印象に残っている。サイコロの目が1か2ならば男の子で3か4ならば女の子、5か6ならば死産、と大学生から説明を受けた時に男の子や女の子のどちらになるかわからない、という可能性と同じだけ死産という可能性もあることに驚いた。医療が発展していない途上国では産まれたばかりの赤ちゃんが亡くなるケースも多いとは知っていたが、もっと確率の低い話だと勝手に想像していた。そのため、実際にゲームの世界に入り体感することで発展途上国の生活の様子や悲しみを身近に感じる事ができた。

設問3：2回目の授業の「国際問題解決のための政策の立案」という英語での発表や、大学のゼミ生との準備を通じて「発見」したこと「学んだ」ことは何か、自由に書いてください。

- ・テーマでは政策の立案だったが、大学生の方に何度も言われたのが「自分たちの力で出来ることを」ということだった。それで私の班はより良い農業方法を伝えるためにパンフレット作りなどを提案した。私たちの班の中ではすべての人に伝わるから、とてもいい案だと思っていたが、発表後栗田先生に文字が読めない人はどうするのかと言われてしまった。その点は班の中で考えきれなかった部分であった。この案で本当に大丈夫なのかももう少し議論を重ねて欠点を解決していくのが大事だと思った。他の班では実現可能なもの

もあり、栗田先生が考えるだけでなく挑戦してみしてほしいとおっしゃられていたのが印象的だった。途上国問題は多くの議論がされて多くの人に考えられていることだが、現地に行ったりして問題解決のために働いている人が少ないというのが問題が解決へとあまり進んでいない原因の1つなのかなと感じた。

- ・ 私たちも、大学生の方も、お互いに手探り状況で話し合いを進めていきました。特に驚いたのはリサーチ力です。こちらからは事前に資料をお渡しできなかったもので、初対面、初耳の内容を伝えました。私が今回の内容の弱点について質問をしたところ、大学生の方がインターネットで検索して詳しいことまで教えてくださいました。私自身もある程度インターネットを使って抜け目なく調べたつもりでしたが、私の検索では出てこなかった情報まですぐに答えていただけなのです。これは検索時の情報の取捨選択が上手いからだと思いました。必要な情報を得るために、自分がどこをどうやって探せばいいのかということは、インターネットだけではなく他の場面でも大切なことだと感じました。英語での発表では、そういう風に先生が評価してくださるか分からなかったのととても不安でした。しかし今回、先生からもしっかりと丁寧なコメントをいただき、嬉しさもありましたが、同時に自分たちにできることが実現するために越えなければいけない大きな壁があることを知りました。とても厳しいコメントもありましたが、それが現実なのだと思います。様々なことができることが考えられるにも関わらず、どうしてもお金の支援とすぐに結びつけてしまう自分たちもいました。実現するためには、たくさんの人の協力と、情熱がないと、プロジェクトを行う上での成功は見込めないのだなと強く感じた1日でした。

【子どもの権利と教育①②：関西学院大学教育学部 岩坂二規先生】

授業内容

グローバル人材育成とグローバルシティズンシップ教育の違いや、子どもの人権がどのようにして守られるに至ったかという歴史を紐解く中で、守られるべき子どもの人権について解説してくださった。「子どもの権利条約」を英語で読み、それに高校生である自分たちがどのような思いや考え、体験があるのかを重ね合わせる活動もした。誰しもが子ども出会った当事者であることから、**advocacy** としての青年期にある高校生たちが、自分のこととして子どもの人権について学ぶ意義を伝えてくださった。さらには、「子どもの権利条約」と関わる自分の体験をペア活動でインタビューで聞きだし、その内容を「インタビュー詩」として、詩と絵で表現する活動も行った。条文が生々しい詩に生まれ変わることで、子どもの人権についてより身近に考えるきっかけとなった。

生徒レポート

設問1：岩坂先生の2回分の講義やコメントを通じて、自分にとっての一番の「発見」「学び」は何か？

- ・ 今回の講義で私は、質の高い教育には質の高い人権が子どもたちにもたれていることが必要だということを知りました。岩坂先生は南北問題を取り上げる時にこの教育と人権の話をしておられました。私自身、ファクトフルネスという本を読んでその本に先進国と途上国という呼び方そのものが古い呼び方だと書かれていたことから、貧しい人々、リッチな人々のいるのは場所によらないという考え方を持っています。でも、その貧しくて教育どころか欲しいものも買えない人たち、特に自分で発言できない子どもには人権もないのだと思います。だからこそ、SDGsがかかげる子どもの権利を守る取り組みはとても必要なことだと思います。
- ・ 子供の権利は発展途上国の子どもたちだけのものというわけではなく、全ての子どもがもつ権利だと学んだ。これはSDGsと同じで先進国の中にも問題が沢山ある、先進国から取り組むべきだという姿勢があるように感じた。また、子どもたちは自分たちを守ってくれる権利を持っているが、まだ小さな子はそのことを主張しにくいと思うので私たちのような中高生が伝えていくことが大切だと思う。(大人と子どもを繋ぐ)

設問 2 : 「インタビュー詩」を通じて「発見」したこと「学んだ」ことは何か、自由に書いてください。

- ・インタビューをする準備期間がなくて、相手からいろんな話を引き出すのはとても難しかった。インタビュアーは、いろんな人から話を聞く中で、もちろん準備はするだろうがその場でできるだけ多くの情報量やその人が持っているものを言葉だけで引き出すのはなかなか匠の技だと思った。また、それを通して、人の話を聞いてそこから自分の空想を膨らませる楽しさ、またそれはきっと授業などで知ったことから(例えば発展途上国のことなど)現地を想像するということにもつながってくると思った。
- ・私がインタビューをした人は、世界のあらゆる宗教や文化などの知識を得ることが、人の育成につながるという話をしてくれました。私は相手の話を聞いて「知ること」が一番大切なことだと感じたのでそのキーワードを主に使って詩を書くとても喜んでいたので、詩で伝えることはとてもいい発信方法だと感じました。私も、自分が一番言いたかったことは詩に何回か入れてくれていて思いが伝わっていたことがわかってよかったです。
- ・人権侵害されていることを、身の回りで考えることがとても難しかったです。このことから、いかに私たちが平和で恵まれた環境にいるかということを感じることが出来ました。それと同時に、すごく身近にある小さなことを例にして詩を作っていく中で、こんな小さなことでも当たり前でないことを考えて、感謝しなきゃいけないなと思いました。インタビューされることで、自分の考えを赤裸々に話すことになりましたが、少し恥ずかしい感じもしました。うまく伝わるかなとか、短い時間の中で要約して言いたいことを言うのはとても難しかったです。自分の考えを発信するということは、大切でもあり、難しいことでもあります。でもこうやって公にできることほど素晴らしいことはないと感じました。世界には口を塞がれている人もいます。そんな人々がもし3分だけ、言いたいことが言えるとしたら何を言うでしょうか。「自由になりたい、助けてほしい」そんなことを言うかもしれません。私は、それに返事をしなければならない時が来たのだなと、そのために世界が少しずつ前進しているのを感じています。私も是非その動きに加わりたいなと思いました。

【国連とジェンダー①②：関西学院大学総合政策学部 西野桂子先生】

授業内容

国連の組織の成り立ち、国連が保障しようとする「世界人権宣言」から生まれた「人間の安全保障」の概念についての解説。次に、国連が保障するジェンダー平等について、equality と equity の概念、国連のコアコンピテンシー (integrity/professionalism/respect for diversity) の概念から解説して下さった。

生徒レポート

設問 1 : 西野先生の2回分の講義やコメントを通じて、自分にとっての一番の「発見」「学び」は何か？

- ・国連、特に安保理は参加国や拒否権などの点から、民主的でないものすごく不平等なものなので、国連がある意義を少し疑問視していましたが、世界規模の話し合いをする場を設けることは、国連にしかできないと聞き、とても納得しました。場を作るという全てのきっかけを設けてくれている国連はやはり必要だと思いました。
- ・一番印象に残っていることは、「平等と公平」です。全ての人に同じものを提供するのか、全ての人と同じになるようにものを提供するのか。これは非常に難しい領域だが、後者が目標ではないかと思った。そのような世界にしようという共通認識を持つことがいちばんの近道だが、同時にその取り組みに対して不満が出てくるのも当然だと思う。どれだけ広い心を持てるかも求められている気がした。

設問 2 : 「ジェンダー」に関わる社会の諸問題について、自分が考えることや調べたこと、を自由に記述してください。

- ・先生が動画を紹介してくださった中にあった少女で、性暴力を受けていた子はとても印象に残った。性暴力は世界のどこの女性でも嫌悪することではないかと思う。いち早く解決をできればと思う。日本の今のクラスでジェンダーを考えた時、聖書の授業で習うなど、知識を得られていると思う。そしてクラスでは、女子の人数は少ないといえど、男子に虐げられていると思うことは特にない。しかし、その感覚は麻痺しているかもしれない。女子更衣室があるのに男子更衣室がないのは男子にとって嫌なこともあるかもしれない。クラブのマネージャーは女子が多い、髪の高さの当たり前など、生物学的違いなのか社会的違いなのか判断しにくいことも多くある。このような今の私の環境で性暴力に向き合うことは難しい。でも実際に性暴力の被害にあっている人たちに会って同年代の友達として話を聞いてあげることができると思う。私も友達に話を聞いてもらうことだけで心が軽くなった経験があるので、一緒に世間話をしたり辛いことを分かち合うことはできると思う。世界史の過去のミスを繰り返さないように勉強していきたい。
- ・平等と公平に関してぼくはどちらも大切なのではないかなと考えました。いろんな立場の人がいるこの世の中では平等と公平、どちらも使い分ける必要があるのではないかなと思いました。また、西野先生が、日本にいと忘れがちな視点と話されていたダイバーシティについては、日本にいてこの問題について話す時、「色々な違いも認めることが大事だよな」と言ってしまうがちがな気がします。けれど、改めてよく考えてみると、みんな違うのは当たり前なのだから「違うことが大前提、前提条件」。この視点を忘れがちだと痛感しました。その考えが顕著に活かされているのは「みんな違ってみんないい」という金子みすゞさんの詩なのではないでしょうか。確か「鈴と小鳥とそれから私、みんな違ってみんないい」だったと思います。少し大袈裟すぎるのかもしれませんが形もそこから出される音も全然違うけど、やっぱり一つ一つが大切であるというメッセージが込められていると思います。金子さんが、「ダイバーシティ」や「アイデンティティ」など横文字羅列の最近のネット社会より前に多くの人に分かりやすい形で詩として残されたことはすごいことだと思います。

【国際協力①②：関西学院大学 国際教育・協力センター 山田好一先生】

授業内容

日本が国際援助をすることは本当に必要なことなのか、という質問について、ODAの仕組みや平和構築の観点から生徒たちに何度も問いかけられた。「人間の安全保障」が守られるための「平和」な状態とはどのような状態なのか、何を必要とするのか、について日本の立場と世界の立場に分けて問い続けられた。

生徒レポート

設問1：山田教授の2回分の講義やコメントを通じて、自分にとっての一番の「発見」「学び」は何ですか？

- ・国際協力とはどういうことなのかしっかり理解できていなかったと実感しました。ODAは約60年も行われてきているけど、「いつまで続けるの？」と尋ねられた時、日本にも余裕があるわけでもないのに国民の税金を使っていつまでするんだらうと、どうするべきなのか分かりませんでした。また、開発協力大綱を読んで思ったのは国際協力は「日本のための利益、他国からの信頼確保」のためなんだということが一番に伝わってきました。国際協力と何なのかはもっと考えないといけないと思ったし、果てしない分野でもあるなと思いました。
- ・国際問題は、日本の問題でもあり、国際協力だからといって貧しい国や発展途上国だけの問題ではないということ。私は、ジェンダー問題というと、発展途上国などの教育や労働問題だというイメージがありましたが、日本にも問題はたくさんあるし、まず自国の問題を解決しなければ、国際問題の解決なんて不可能だと思います。だからこれからは、世界の問題＝日本の問題と考えるようにしたいです。

設問 2 : 「国際協力」というキーワードに関わるテーマで、自分が一番関心のある、あるいは一番興味を持っていることについて自由に記述してください。

- ・日本人の国際協力のような国際的な問題に対して日本人が無知で無関心なのが問題があると思う。国際協力と言われて軽い想像はつくが、国民一人当たり年間三千万円のお金がそれに使われていると思うと額が大きいなと思った。そんなこと知らなかったし、国民はそれを知らないと思うしそれは国民が知ろうとしないのがダメなのかもわからないなと思う。知る機会がないとも思う。なので今回この授業を受けることができてよかった。私は国際協力について、やらないというのは自分から世界を突き放しているように感じるので、行こうと思う。ただ内容については単なる物資派遣よりも技術であり、災害対策など実際に赴くことが必要と思う。
- ・私は、国際協力という言葉にすら違和感を持ち始めた。この授業を受けるまでは、協力というのは互いに助け合い支え合うことで、自分の利益を求めるものだなんて思いもつかなかった。今回の ODA 国際協力は、途上国に何かを支援したり提供したり推進するというものだった。この授業を受けるまではこの文を読んでも、日本は支え合う精神でやってるんだなって思ったと思う。でも、次日本が何かあったときに助けられるように先に恩を売っておくという考え方を聞いた後にこの文を読むと、何か違うなと違和感を感じた。私は、この地球上で起こってしまっている問題は自分も加害者であり、他人事ではないと思う。なぜ人々は目先の今得られる利益しか考えられず、これからの歴史での得られる素晴らしいものを自分で無くしていくのか。興味というか疑問というか、関心を持った。

【高校生公開討論会事前授業：移民問題について 関西学院大学 産業研究所 アンナ・シュラーデ先生】

授業内容

2020年1月25日(土)に関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス中央講堂で開かれる「高校生公開討論会：日本に移民を受け入れるべきか」の事前授業として、アンナ・シュラーデ先生に講義をしていただいた。日本に住む移民の現状や抱える問題、期待される効果などを、メリット、デメリットに分けて生徒に問いかけながらブレインストーミングの形で授業をしていただいた。

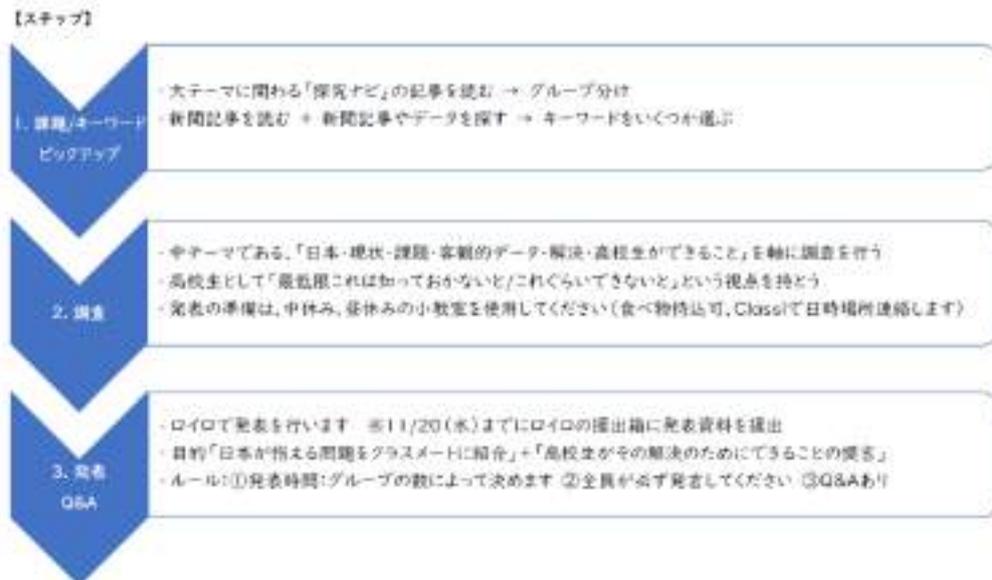
【発表：日本が抱える問題をクラスメートに紹介+解決方法の提言：西室 (GSII 担当)】

授業内容

発表のテーマ



発表のステップ



上記の図中にある

大テーマについて、Classiの「探究ナビ」を用いて、SDGsの1・2・7・13に関わる「子どもの貧困」「食品ロス」「食料自給率」「再生可能エネルギー」「安定したエネルギーの供給」「温暖化現象」「異常気象」のテーマの中から記事を読み、生徒たちはテーマを自由に選んでグループを作った。その後、「日本・現状・課題・客観的データ・解決・高校生ができること」をキーワードに、生徒たちは5分ずつの発表を行った。評価は①目的に合致していたか②テーマに合致していたか③内容に工夫/努力があったか④興味を惹かれたか⑤声、姿勢、視線などが十分だったか、の5つの観点で互いに評価を行った。3学期に行う発表に向けて、アクションプランを考える良いきっかけとなった。

【自分たちが何を学んできたのかの振り返り/経験から得た学びを次のアクションにどうつなげるか

関西学院大学 高等教育センター 時任隼平先生】

授業内容

この1年間で生徒たちが何を学んできたかを、「学び」をいくつかの種類に分類することによって、振り返る授業を展開がされた。「学び」を①知識の記憶②技術の習得③開発④直接経験⑤間接経験⑥実践などに分け、グループワークの中で自分たちが学んできたものを認知させる作業を行った。その後、自分たちの学びを学校外で起こっているテーマ/課題の解決へとつないでいくのにはどうすればよいか、福島スタディツアーに参加した関西学院大学生の実体験をお聞きする中で、具体的なイメージを生徒たちは得ることができた。自分の興味関心、自分のおかれた環境、そして誰か（社会）のためになる、という3つの円が重なる部分を追求することの重要性を伝えてくださった。

【発表 GSIIで学んだ5つのテーマ別のグループ発表 西室（GSII担当）】

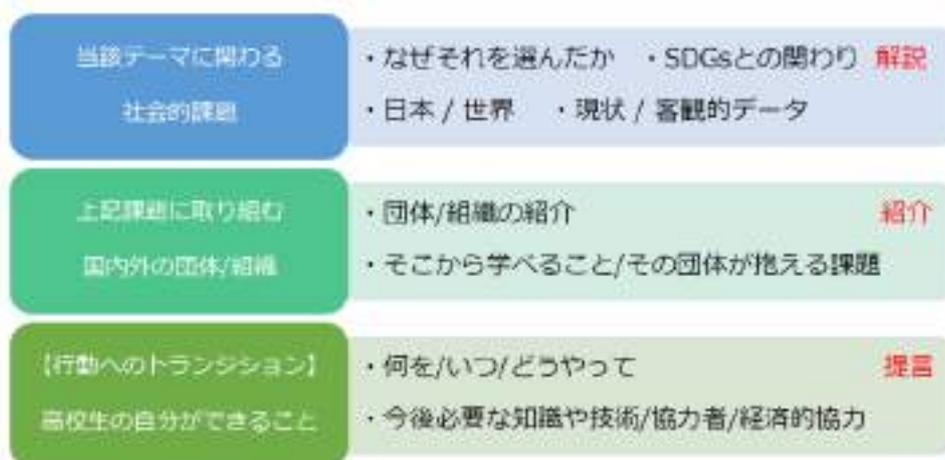
授業内容

来年度には具体的にアクションを起こしていくにあたり、この最後の3学期においては中テーマとして設定した「自分の学びを取り巻く社会と自分以外の社会との接点を探し、自分がどう関わっていくのか」を考えるために、この1年間で学んだ以下の5つのテーマに基づいて発表を行うこととした。



上記の5つのテーマ、あるいはキーワードに関心のある者同士でグループを作り、下図の内容について10分間の発表（質疑応答3分）を行うこととなった。

【発表の内容】



生徒たちは以下のワークシートを用いながら、大きなテーマに関わる社会的課題をさらに具体的にしぼりこんでいき、大きなテーマを自分事としてとらえていく作業を行った。その社会的課題に実際に取り組んでおられる国内外の団体を調べることを通して社会との接点を少しずつ探していき、その後、行動へのトランジションとして、自分ができることについてさらに具体的に考えていった。

【①当該テーマに関わる社会的課題 について】

大きなテーマ]2]を付けてください。	1. 国内の団体の名前(団体名) 4. 活動のリーダー(団体名)	2. 海外の団体の名前(団体名) 3. 活動のリーダー(団体名)	3. 国内の団体の名前(団体名)
テーマ a) 具体的な社会的課題 (海外のイベント) b) コーワード	1)	2)	3)
その社会的課題を深めて理解			
その社会的課題の a) 内容/現状 b) 自分や自分の周りの関係 との関わり(自分事として の関わり) c) ニュース記事(ウェブ 記事) d) 高知のテーマ(キーワード)	a)	b)	c) d)
SDG+との関わり			

【②社会的課題に取り組む国内外の団体 について】

団体の個人名(複数可)	
団体の基本的情報/活動内容	
団体が抱える課題	
行動へのトランジションのた めに、この団体がやるべきこと	

【③【行動へのトランジション】 高校生の自分ができること について】

自分ができること/解決法 [What/Where/When/How]	
今後必要な知識/スキル/経験 など	

グループメンバー(組名前)

--

評価は以下の観点で行った。

観点① 社会的課題に対する問題意識と、その課題の現状がデータを用いて且つ自分事として明確に説明されているか
A 問題意識と社会的課題の関係が明確で、その課題の現状がデータを用いながら自分事として具体的かつ明確に説明されている
B 問題意識と社会的課題の関係があまり明確でなく、その課題の現状についての説明があまり具体的ではなく、少し理解しにくい。
C 問題意識と社会的課題の関係がほとんど説明されておらず、また課題の現状についての説明が抽象的である。
観点② 社会的課題に取り組む団体の設立目的や取り組み、抱える課題についてストーリーの中で明確に説明されているか。
A その団体の設立目的や取り組みなどの基本的情報と、現場の人たちが抱える「課題」についてストーリーの中で具体的かつ明確に説明されている。
B その団体の設立目的や取り組みなどの基本的情報と、現場の人たちが抱える「課題」の両方、もしくは片方が、あまり具体的かつ明確に説明されておらず、つながっていない。
C その団体や設立目的や取り組みなどの基本的情報と、現場の人たちが抱える「課題」の両方、もしくは片方が、ほとんど説明されておらず、つながっていない。
観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。
A 当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、実現可能であることを証明できている。
B 当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C 何ができるのかが抽象的であり、それが当該テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。
観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A 発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B 発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C 情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

生徒たちの発表テーマは以下のとおりである。

- ・日本における外国人留学生について
- ・アレルギーを持つ子供たち、ムスリムの子どもたちも共に食べられる給食の提供について
- ・「違いを認めて国内外での壁をなくす」＝「偏見をなくす」、にはどうすればよいか
- ・日本における相対的貧困をどう解決すればよいか：実体験に基づく世界の絶対的貧困との比較を通じて
- ・女性の社会進出を促進するための育児負担の軽減法について
- ・ODAの実態と問題：認知度を高める方法について
- ・日本のジェンダー問題：女性の政治参加率と育休問題から、どう壁をなくしていくか
- ・

どのアクションプランも実現可能なものであり、1年間で学んだ知見や得た気づきを基にして考えられた発表内容であった。3年生では実際にアクションを起こす GSIII を全員が受講するが、それぞれが社会的課題を自分事として語ることができ、自分が関わる社会を少しでも良いものにしようとするアクションを起こしてくれることを期待させる発表であった。

<課外活動①>

高校生公開討論会 『日本に移民を受け入れるべきか』

日時：2020年1月25日（土）13：00－16：30

特別講演：『各国の移民と多文化主義について』

講師：ドイツ連邦共和国総領事 ヴェルナー・ケーラー氏

アメリカ合衆国総領事館 報道官 アリシア・エドワーズ氏

司会：関西学院大学産業研究所 アンナ・シュラーデ准教授

場所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス中央講堂

主催：関西学院大学

共催：EU インスティテュート関西（神戸大学・関西学院大学・大阪大学）

兵庫県立長田高等学校、兵庫県立姫路西高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部

後援：文部科学省

公開討論会パネリスト：GLP 2年生 6名

フロア参加生徒：GLP 2年生全員

内容：本校の代表6名は、日本に移民を受け入れるべきかというテーマについて、「経済」という観点から見たメリット、デメリットを調査したした内容を基にディベート形式で12分間の発表を行った。その後、フロアも賛成、反対に分かれてディベート形式で議論を行った。

<課外活動②>

カンボジア海外フィールドワーク

日時：2019年8月2日（金）～8日（木）

参加：GLP 2年生 5名

引率：教員 2名

目的：・Global Study で学んだ国際協力に関する実践の場を体験する

- ・カンボジアの歴史や文化を学び、現地で日本が実際に行っている協力の現場、NGO や海外協力隊の活動などを学ぶ
- ・今後の生活に生きる新しい学び、発見を得る

事前研修：

- ・5月29日（木） 第0回オリエンテーション GSII 授業後
地球の歩き方資料、昨年度研修の日報、スケジュール、自分の現時点での目標配布
- ・6月10日（月） 第1回オリエンテーション 15：50～16：50
前回参加者（古市さん・大川さん・畑中さん）からのレクチャー 30分
バイヨン中学、コミュニティセンターの子どもたち、シェムリアップ州盲学校、聾学校、アンコール高校との交流企画検討
しおり作成の役割分担
- ・6月17日（月） 第2回オリエンテーション 16：30～17：30
卒業生 松永晶太さんからのカンボジアについてのレクチャー
バイヨン中学、コミュニティセンターの子どもたち、シェムリアップ州盲学校、聾学校、アンコール高校との交流企画検討
- ・6月随時 中休み・昼休み
現地アクティビティの準備
- ・7月6日（土）保護者説明会（本人同伴） 13：30～14：45
部長/引率者あいさつ
研修旅行内容の説明
日本旅行/伊藤さんより旅行の案内/説明
ケーjukレセント中村さん 保険の紹介
質疑応答
- ・7月29日（月）第4回オリエンテーション 時間未定
最終確認

現地活動：

8月2日（金）	日本出発(VN321)
	シェムリアップ国際空港到着後、市内へ
8月3日（月）	バイヨン中学校へ
	JST 代表 チア・ノルによるガイダンス 「内戦→和平→復興の歴史、農村部の現状と JST の活動について」
	バイヨン中学校校長からのカンボジアの教育についてガイダンス
	中学生からの出し物、学校見学など
	中学生と昼食（ココナッツカレー）
	中学生との交流

	バイヨン中学校の生徒たちとコックベイン小学校で活動
8月4日(日)	アンコールクラウ村コミュニティセンター到着
	村落散策(村の生活について)
	笠原知子先生(元都立高校美術教師)の「村の小さな絵画教室」見学
	村の青年たちとカンボジア料理をつくり、皆で昼食。
	村の子供たちと交流
	地雷博物館見学
	アプサラダンス(民俗舞踊)鑑賞
8月5日(月)	日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JASA)の修復現場訪問
	バイヨン寺院見学、修復体験
	アンコール・トム内遺跡見学
	SALASUSUの工房訪問(旧かものはしプロジェクト)
	オールドマーケット見学、お土産購入など
8月6日(火)	シェムリアップ州盲学校・聾学校訪問
	キリングフィールド見学
	タ・プローム寺院見学
	上智大学三輪先生の講話(市内オフィス)
8月7日(水)	アンコール・ワット見学
	アンコール高校訪問。高校生との交流
	シェムリアップ発
8月8日(木)	ハノイ発
	帰国

<1年間のGSIIのまとめ>

「世界を知る」という大きな目標のもと、5つのテーマに関わる大学の専門家に来ていただいて授業を行った。どの専門家も単に知識を伝えるのではなく、「なぜ」という問いかけを常にされ、生徒たちが主体的に国際的な諸問題を考えるきっかけを与えてくださった。「世界」をいかに「日本」、あるいは「自分事」に落とし込んでいくかが、この授業全体の難しい点ではあったが、生徒たちの2学期後半と3学期に行った2回のグループ発表の内容を評価する限り、世界と自分との接点と自分たちなりの答えを探し出していたように思われる。

オムニバスで授業が展開するため、1つ1つの授業のつながりが見えにくい、あるいは体系的な学びの実感を得にくいのもこの授業を展開する上での難しい点であった。しかしながら、生徒たちのノートやポートフォリオを読む限り、生徒たちはテーマ間の共通となる思想や、考え方のつながりなどをそれぞれに見つけ出しており、「グローバル」な世界で通用する軸となる学びを各自が得ているように感じられた。

3年生のGS IIIにおいては、実際に自分たちが社会的課題の解決に向けてアクションを起こす。グローバルとローカルな視点を持ちつつ、生徒たちがこの1年間で学んだ視座を活かしながら活躍することが大いに期待される。

【研究内容3の具体的な内容とその評価】

<探究型カリキュラムの開発のために>

科目	Global StudyⅢ	学年	3	単位	2
活動の目標	SGH 実施期間の在籍生徒に対し、SGH のプログラムを継続実施する。SGH で設定した、1 年次の「世界を体感する」、2 年次の「世界を学ぶ」というテーマを受けての 3 年次の目標「世界のために行動する」に沿って PBL 型授業を行う。社会問題を身近な問題としてとらえ、その状況や原因、背景などを分析し、そこから自分たちにできる解決策を立案し、実行することをサポートしていく。そのなかで、問題の分析や理解、チーム内での意識共有や役割分担、企画、広報、各方面との調整、実施、振り返りといった、社会で求められる実践的なスキルを養う。				
留意点	SGH の成果と課題を WWLC に有効に活かせるよう、プログラムの内容や評価方法を精査し、WWLC での探究活動へとつなげていく。				

スケジュール 毎週水曜日

		A グループ	B グループ
1 学期		インドネシア通信授業	Meal For Refugees
	4/17	チーム発表/自己紹介/テーマ選択	ブレインストーミング(企画実行に必要なこと)
	4/24	アイデア出し (なぜ問題になっているのか)	問題の分析(難民問題とは?)・スローガン策定
	5/8	自身で取り組める解決策の共有	スローガン策定、役割分担
	5/15	実践①に向けての計画	担当ごとの企画書作成
	5/24	実践①	-
	5/29	実践①の行動結果・次回施策共有	実施に向けた準備
	6/5	実践②に向けての計画	実施に向けた準備
	6/19	実践②	実施期間中の対策
	6/26	実践②の結果共有 (チーム)、最終プレゼンテーション準備	チーム別報告、授業中レポート(企画の実行に必要なスキルやマインドについて)
	7/5	最終プレゼンテーション	最終プレゼンテーション
7/10	感謝のメッセージ交換、修了証授与	-	
2 学期		「私たちにできること」	インドネシア通信授業
	9/11	チーム決め、ブレインストーミング(企画実施に必要なこと)	チーム発表/自己紹介/テーマ選択
	9/18	企画立案、企画書作成	アイデア出し (なぜ問題になっているのか)
	9/25	チームごとの企画発表	自身で取り組める解決策の共有
	10/2	チームごとに企画の準備、実行	実践①に向けての計画
	10/11	-	実践①
	10/16	チームごとに企画の準備、実行	実践①の行動結果・次回施策共有
	10/23	チームごとに企画の準備、実行	実践②に向けての計画
	10/30	チームごとに企画の準備、実行	実践②
	11/20	企画の振り返り	実践②の結果共有 (チーム)、最終プレゼンテーション準備
	11/27	最終プレゼンテーション	最終プレゼンテーション
12/5	-	感謝のメッセージ交換、修了証授与	

1. 1 学期・B グループの学習活動

①ねらい

問題解決のための具体的な行動を通して実践的なスキルを養うという GSIII の共通目標を、食堂と連携しての難民支援プログラムを題材に行う。がある程度整ったプログラムの枠組みのなかで、役割分担やチームごとの目標設定・スケジュール調整・企画書作成・広報活動などの実践に取り組み、成果が見えやすい活動としても達成感を持たせて成長へとつなげていく。

②具体的な活動

難民支援協会が主催する、食を通じた難民支援プログラムである Meal For Refugees (以下 M4R) に、関西学院高等部として取り組む。これは、食堂で難民の出身国のメニューを、寄附金を上乗せした金額で提供し、その寄附金を難民支援協会に寄附するものである。事務局にはマニュアルが準備されているが、マニュアルに則っただけの活動にならないよう、関西学院高等部としての独自性を打ち出す。特に注意すべき点は以下の 3 つである。

まず、メニューを売り切ることが目的化しないようにすること。普段とは異なる特別なメニューを食堂で提供でき、売上(寄附金)が目に見える成果となることで、生徒の達成感につながりやすいが、その分、限定数を売り切る(売上を伸ばす)ことに執着してしまう可能性も高い。あくまでも外国のメニュー提供は目的ではなく手段であるということを意識させる。

続いて 2 点めは、難民支援の本質(難民問題の何が重要・問題なのか)を見極めること。先の、メニューを売り切ることにだけに執着してしまうのと同じく、メニュー提供という手段で何をしたいのか、その一步先をしっかりと見つめる必要がある。既にある程度フォーマットの整ったプログラムに流されることなく、しっかりと学びを深めさせる。

3 点めには、高等部の生徒を対象に何が出来るのかを突き詰めることである。当該クラスは有志の集まりであり、難民問題をはじめ社会問題に関する意識は一般生徒よりも高い。しかし、一般の生徒はけっして同じ意識とは言えず、授業ではないところで難しい問題に関心を持たせることは難しい。そこに取って挑戦させ、対象となる生徒の数や場面に応じた広報を考えさせる。具体的な授業の展開は以下の通りである。

まずは、企画を立案、実行する際に必要なこと、重要なことを個人で書き出させ、クラスで共有する。これによって企画の枠組みやスケジュールなど全体にも意識を持たせ、そこから、役割分担やスケジュールを導き出す。

続いて、難民問題について改めて振り返らせ、難民の何が問題なのかを意識づけさせ、さらに対象を高等部の生徒とした場合のメッセージ(伝えたい内容)を精査する。それにあわせて活動を端的に示すスローガンを定め、漠然とした問題意識ではなく、具体的な問題意識を持ち、生徒を対象とすることで自分自身の世代や社会の問題として捉えられる姿勢を養う。

以降は、生徒自身が策定したチームごとに、チームとしての目的意識とすべきこと、その期限などを設定する企画書を作成させ、それに従って企画を実行に移す。役割分担において、自身のチームのことだけでなく、全体の目標・目的を意識しながら進められる体制、またできる限りチームのメンバー全員が温度差なく同じ目的意識を持って行動できる体制の構築を目指す。具体的には、高等部の生徒を対象にした提供メニューの選定、場面ごとに異なる効果的な告知の内容・手法、生徒に伝えたいメッセージを伝える手段、生徒の意識の変化などを考え、取り組む。

実際には 6 月 20 日の世界難民デーを含む 1 週を実施期間とし、期間中のテコ入れ、終了後のアンケートなどを実施、さらにそれらを踏まえて最終報告のための振り返り・反省を行う。それを踏まえて最後の授業でチーム別の報告を行い、さらにそれらをまとめて学期末に A グループと合同の発表会を行う。

③成果・結果

まず、最初に取り組んだ「企画を立案、実行する際に必要なこと、重要なこと」については、多くの生徒がクラブ活動などで組織の運営に携わる経験を多く積んでいることから、一般的なチームワーク論やある程度具体的な留意点についてはひと通りの回答が見られた。

- ・スタート M4R についての理解、難民・難民支援協会についてのリサーチ
- ・準備 ターゲットを決める、役割分担
- ・反省 前例の反省を活かす、前例と同じようなパターンを避ける
- ・メニュー 魅力ある料理の選定、高校生の嗜好に合うこと、インパクト、苦手のリサーチ、実現可能性
- ・食堂 密に連絡を取り合う
- ・宣伝 いかに関心を持たせるか、実際に数を集める

その後、難民問題について各自のリサーチに基づいて議論し、難民問題のうち、日本の受入数（難民認定数）が非常に少ないことを特に問題意識として設定し、「20 円革命 ～難民の現実（リアル）を知ろう～」というスローガンを決めた。1 食あたり 20 円の寄附金を上乘せすることから、食を通じて難民を取り巻く問題の現状を知ってもらうという主旨である。スローガンの決定は、生徒にとっても予想以上の時間がかかった過程で、単なる言葉遊びに終わることなく、言葉の持つ意味やイメージを吟味し、常に具現化できるよう意識するという点において有意義だった。

以降は、メニュー決定を担当するメニュー班、企画の告知を担当する広報班、難民問題の普及啓発を担当する企画班を設定し、さらに各班の代表者が集まる総括班が渉外と全体の調整を担当した。なお、各班の活動内容により活動する時期が偏るため、生徒自らその都度必要となる作業を補助する流動的な対応をしていた。

メニュー班は、生徒の目線で企画を捉え、男子高校生を主なターゲットとし、インパクトと受けすれやすさのバランスを取るという判断をした。結果、チキンカレーとナンのセットとタピオカを食堂側に希望し、食堂側でもオペレーションや仕入れの調整をしていただき、無事出食していただける運びとなった。この過程において、実際の企画のターゲットに合わせた戦略や予想をするという作業を経験できた。

高等部の生徒への難民問題の啓発（偏見を減らし、現状を知ってもらい、自分たちにもできる支援策を知ってもらう）を担当したチームは、アンケートによる意識調査と、啓発に関わるリサーチと制作とに分かれ活動した。そもそも、このクラスの生徒は一般の生徒と比較して国際問題に対する意識や関心が高いが、必ずしも一般の生徒も同じ意識を持っているとはいえず、その一般生徒の関心と呼び、さらに意識を変えることは難しい。ただ、敢えてそこに挑戦させるのがこの授業の目的であり、単に変わったメニューを提供し、売上を高めるだけに終わらず、その目的を大切にすることを重視した。最終的には、「研究レポート」を作成・配布して難民の現状を知ってもらうという手段に落ち着いたが、その初期では、礼拝（メッセージ）の活用や募金などの案も出され、活動の趣旨と照らし合わせて考えた結果であることは大切な点である。その研究レポート作成の段階では、最初は文字主体のいわゆる「レポート」の域を出ない体裁で、一般の生徒に振り向いてもらえるような効果的な表現とはいえなかった。これまで生徒が取り組んできたような、調べたことを単に文章化して教員に提出する「課題レポート」とは異なる難しさが際だった。ほかにも細かいところでは、アンケートの媒体と回収率や処理方法の兼ね合い（紙媒体では回収率は高いが処理に時間がかかるものの、タブレット端末を用いれば処理は早い回収率が伸びない）や、集計と設問（記号選択か自由記述か）の兼ね合い、誘導にならない設問、事前と事後での比較の重要性、結果のフィードバックの必要性など、物事を論理的に考え進めるにおいて実地で学ぶものが多かった。

その普及啓発の手段、きっかけとして重要な広報においては、生徒集会での告知、企画実施（出食メニュー）のチラシ作成などを行った。特に全校生徒が集まる集会では、時間が短いこともあり、最も緻密に考えた告知

が求められたが、そのなかで、画像や動画を用いて見やすく、メッセージも分かりやすく端的に示すよう努め、聴衆側の立場に立った広報や様々なハプニングの可能性を考えておくことなどを学べた。

一方の反省点としては、どのチームも、事前の計画が不十分だったこと、チーム内の役割分担や情報の共有が有機的にいかなかった（メンバー間の意思疎通がうまくできなかった）こと、事前の準備や交渉が十分でなかったことなどを挙げていた。ほかにも、実際に出食される5日間について、臨機応変な動きが出来なかったことが挙げられる。この授業は水曜日だったが、月曜・火曜の状況をしっかり確認できておらず、それに合わせた対策が水曜の授業時に初めて話し合われた。社会（この場合は全校生徒という限られた社会ではあるが）を相手に実際の行動を起こすのは、授業時間だけで完結しない活動であるという点が生徒にとっては新しい体験だった。具体的には、ブームになっていたタピオカのデザートが意外と売れず、それに合わせた動きが遅くなった。当初の商品名が「タピオカスープ」とされていて魅力的でなかったこと（デザートらしさを伝えきれなかったこと）を理由として考えたが、それは食堂との打ち合わせ不足からくるものであったし、そのテコ入れに取れる対策の検討にも時間を要した。実際に企画を動かすことの多様な難しさを感じた。

結果として、5日間でカレーは203食、タピオカが116食売れ、計6,380円の寄附金を集めることが出来た。カレーは毎日最大の40食を売り切ることが出来た一方で、タピオカは日によっては14食のみと、前述のような問題を露呈した。

6月17日～21日に実際に出食した後、最後の授業となる26日にチームごとに最終発表を行い、上記のような成果と反省点が報告された。それと同時に、授業中課題として「チームでプロジェクトを企画・実行する際に必要なスキルやマインドについて、自身のM4Rの取り組みから論じなさい。」という題でレポートを課した。また、その後、こちらで設定した枠組みで自己評価レポートを課した。

それらのなかで生徒が多く挙げたのがチーム内外の情報共有やスケジュール管理という点で、その他にも、多様な意見を出す重要性、総括するリーダーの必要性、感情的にならないこと、丁寧な作業、大きな目的の設定、文字以外にも何かが伝わる熱意や積極性など、技術的な面以外の、チームあるいは内面的なマインドの重要性に気づいた意見が目立った。

④評価方法

評価は主に書かれたものを対象とし、以下に示したものについて、その内容とそれを支える根拠あるいは説得力という視点で評価を分けた。

- ・個人のワーク（企画に必要なスキルについて、一般的なこと以外のオリジナリティやその根拠）
- ・チームごとの企画書の緻密さ・計画性と大きな目的意識の程度（目先の技術的な点に終わっていないか）
- ・1学期中に4回設定した振り返り（活動に対する振り返りの深さや細かさ）
- ・最終プレゼンテーション（内容の深さ、論理的な組み立て、視覚的な組み立て）
- ・授業中レポート（オリジナリティやその根拠・具体性）
- ・自己評価レポート（根拠・具体性）

以上のような視点で、4段階の評価を重ね、平均点の設定も考慮して評価を算出した。なかでも、自己評価レポートでは、

- ・（個人の）達成感
- ・目的の達成
- ・自身の問題理解
- ・チームでの目的意識の共有
- ・リーダーシップ

- ・リーダーを支える役割
- ・貢献度
- ・熱意やこだわり
- ・アイデアや創造性を発揮できたか

などの問いを4段階で答えさせ、その根拠も示すよう設定したが、生徒は意外と冷静に自己分析していた。

2. 2学期Aグループの学び

①ねらい

問題解決のための具体的な行動を通して実践的なスキルを養うというGSⅢの共通目標を、1学期のMeal For Refugeesとは異なり自由な枠組みで取り組む。生徒の興味関心に応じて社会の問題を身近に捉え、「私たちにできること」をテーマに企画の実践に取り組む。1学期に取り組んだインドネシアとの通信授業のなかで培った企画実践のスキルも踏まえ、役割分担やチームごとの目標設定・スケジュール調整・企画書作成・広報活動などの実践に取り組み、成果が見えやすい活動としても達成感を持たせて成長へとつなげていく。

②具体的な活動

Aグループの生徒に対し、「よりよい社会のために自分たちにできること」をテーマ、「アクション、行動、実践」をキーワードに設定して、各自の興味関心のあるテーマとアクションを考えさせる。2学期には年間最大の学校行事である文化祭があり、対外的な発表や実践ができることを念頭に置いているが、必ずしも「文化祭当日」にこだわる必要はなく、2学期の間で計画、実行、反省までができればよいとした。その他の条件としては、高等部生徒など他の人を巻き込むものであること（Meal for Refugeesのように、他の組織・団体と連携することも可）、取り組む問題は基本的に自由だが、SDGsには関連づけることとした。

最初の授業で、取り組みたいテーマがある生徒を募って発表させ、グループ分けを行った。このことは予め1学期末に告知しており、結果として以下のグループが出来た。また、「企画の立案・実施において大切だと思うこと」を、具体的な経験からまとめるワークシートに取り組みせ、最初の意識付けとした。グループ分けの結果、以下のグループが出来た。

- ・ファストファッション（5人） ファストファッションの問題に取り組む
- ・環境問題（7人） 特にゴミ問題を取りあげ、ゴミ減量のためリユースの推進に取り組む
- ・障がい者（3人） 1学期のインドネシア通信授業の目的、内容を継続し、障がい者差別に取り組む
- ・福祉（3人） 家族の福祉や介護をきっかけに、福祉に関する具体的な理解に取り組む

2回目の授業で企画書を作成させた。作成時のポイントとして、問題意識の整理（なぜ取り組むのか）・問題の整理（何が問題なのか）・オリジナリティ（私たちだからできること）・ターゲット（対象）の巻き込み方、外部との連携・メンバー、役割分担、タイムスケジュールを意識させた。

3回目の授業で各グループが企画書を元に計画を発表した。以降はグループごとに準備・実行を進め、最終の授業でクラス内での成果発表を行った。その際のポイントとしては、取りあげた問題の理解（企画の実施を経て変わった内容も含めて）と企画を実践することの2つを意識させた。また、最終発表終了後に1学期と同様の自己評価レポートを課した。

③成果・結果

具体的な成果をグループごとに挙げていく。

まずファストファッションのグループは、ファストファッションに対するアクションを行っているファッシ

ョンレボリューションという世界的な活動やドキュメンタリー映画に刺激され、その団体に連絡を取って、アンバサダーという位置づけを得て、活動を始めた。生産段階の労働環境や環境問題、大量生産大量廃棄などの問題を知ってもらい、その意識を変えるべく本校の生徒に古着の提供を呼びかけ、集まった古着をフリーマーケットで売ってリユースを拡大し、売上がファッションレボリューションに寄附するという実践に取り組んだ。その際、単に売るだけでなく、ファストファッションの問題に関するチラシを作成し、フリーマーケットで来場者に配布・説明するなどの試みも行った。呼びかけ、回収、整理、値付け、申込、販売、呼びかけ、寄附に至る活動を全て自分たちでこなした。事前の価格設定や当日の価格交渉などは生徒たちにとって初めてのことで、一般的な状況や周囲の状況と照らし合わせながらの作業になったが、臨機応変に対応できた。最終的に7,940円の寄附金を集めることが出来た。本来の趣旨である来場者への呼びかけや説明も積極的に行え、無関心なケースもあれば積極的に聞いてくれるケースもあり、実際に活動したという手応えを得られた。グループは、特にファッションに強い関心を持っていた生徒を中心に、普段からつながりのある生徒で構成されており、役割分担や意識共有の面でも強いチームワークを発揮できていた。

環境問題のグループは、1学期のインドネシア通信授業でゴミ問題を扱ったことを下敷きにして、なかなか個人の行動や意識の改革までに至っていないことを問題とした。当初は、買い物の際のゴミ削減にゲーム感覚で取り組めるアプリの開発、大量のゴミが出てしまう文化祭でのゴミ分別キャンペーンを企画したが、検討を経て、最終的には本校生徒から捨てる予定のものを集め、リメイクするものも含め、文化祭当日にリユースステーションを設けてリユース促進や販売を行うという企画になった。それなりに物資も集まり、「捨てる」ということを改めて意識できた一方で、配布や販売には苦戦し、リユースの難しさも感じられた。ただ、多くの来場者がある文化祭でも配布・販売が苦戦した理由は、メンバーのコミュニケーション不足であり、他の活動に参加する時間が長く、この活動に関わる生徒や時間、労力が少なくなってしまった。グループの人数は最も多かったが、普段からあまり接点のないメンバーの集まりでもあり、連絡や意識の共有などで決定的な課題や不完全さを認識することとなった。

障がい者差別に関するグループも、1学期のインドネシア通信授業で取り組んだテーマを下敷きとしている。「貧困と教育」というテーマで、両国とも障がい者への差別意識のために就学や就職にも差別が生じることを取りあげ、障がいがあってもできることはたくさんあるということを社会に伝える実践に取り組んだ。具体的には、先述の通り、地元の障がい者団体と連携し、一緒にプレスレットを作るワークショップを開催した。2学期は、そこから先に進み、そのプレスレットを文化祭で販売し、売上が系列団体の子ども食堂に寄附し、貧困の問題に関わろうとした。その際、単に販売するだけでなく、意識を変えることも念頭に置き、当初は販売の場に作成者を招待することを計画していた。実際には都合が合わず実現しなかったものの、代わりにメッセージカードの交換を行った。作成時に作者に書いてもらったメッセージカードを、購入者に手渡すと同時に、購入者にも写真を撮らせてもらったうえでメッセージを書いてもらい、後日作者に届けるという企画で、これは作者と購入者をつなげるという生徒のこだわりだった。2学期に実際に行った作業量としては多くはないものの、1学期からの連続や計画性、想いを具現化するこだわりという点において強い意識が感じられた。

福祉に関するグループは、家族の介護など福祉を身近に感じたことがきっかけとなり、福祉に関する現状を広めるべく活動した。「福求(ふくもと)め、祉(さいわい)求(もと)め、相手(あいて)を思(おも)い、たすけあう」という趣旨で「福祉相た」という俳優の名前をもじった名称を冠し、高校生に身近に考えてもらおうとした。ただ、扱うテーマが広範だったため具体化に手間取り、当初は車椅子での移動や日常生活を体験してもらえる企画を計画したものの実現には至らず、最終的には、本校生徒に福祉に対する意識に関するアンケート実施と福祉に関する知識をクイズ形式で校内広報するというかたちに落ち着いた。アンケートの結果、予想通りにネガティブなイメージが強いことが分かった一方で、自分が怪我をした際に介護等について考えたことがある、身近に要介護の人がいる人が200人ほどいながら実際に介護をしたことがある人は140人に留まるなど、高校生の現状も分かった。最終的に、補聴器や車椅子といった道具類にまつわる知識を中心に数問のクイズを作

成し、問題と答えを別の場所に掲示するなどの工夫を加えて広報した。福祉に関するイメージがよくない一方で、それは実際のやり方が分からないからでもあり、福祉の場面では介護者の目線に立った接し方が必要というメッセージを伝えようとした。

④評価方法

この活動に対する評価も、ベースは1学期に倣って主に書かれたものを主な対象としながら、グループ別ということで、グループ評価と個人評価の二段階で評価した。グループ評価としては、主に以下に示したものについて、その内容とそれを支える根拠あるいは説得力という視点で評価した。

- ・企画書（テーマの理解度、目的意識、計画性、役割分担）
- ・計画と最終発表の2回のプレゼンテーション（テーマ理解と企画運営について）
- ・活動記録（話し合いの記録や活動記録の緻密さ）

その上に個人評価として、以下の視点を加えた。

- ・個人のワーク（企画に必要なスキルについて、一般的なこと以外のオリジナリティやその根拠）
- ・学期中に3回設定した振り返り（活動に対する振り返りの深さや細かさ）
- ・自己評価レポート（根拠・具体性）

以上のような視点で、4段階の評価を重ね、平均点の設定も考慮して評価を算出した。自己評価レポートは1学期と同様の内容で実施し、今回も生徒は意外と冷静に自己分析していた。

3.検証

①ねらいの達成度

問題解決のための具体的な行動を通して実践的なスキルを養うというGSIIIの共通目標は、インドネシア通信授業でもMeal For Refugeesや「私たちにできること」の取り組みでも、概ね達成されたと考えている。根底にあるのは、実際に現場に出た、社会に関わったという臨場感や手応えであり、座学が中心であった高校での学びとは一線を画す、生徒にとっておそらく初めての学びだった。その学びは、事前の計画性や対象に合わせた広報戦略、対外的な交渉マナーなどの技術的な面に留まらず、目的意識（何のためにするのか）を大切に個人のマインド、チームの意識や情報の共有といった集団づくりなどにも及ぶ。高校生にとって次の段階となる大学では、高校に比べて行動の範囲や可能性が格段に広がる。高校と大学の、生徒（学生）の置かれる環境は大きく変わることを考えれば、早い段階で社会に関わる経験をすることは有意義である。

実社会に関与し、主体的に問題解決に取り組む姿勢は、社会に求められる人材像であり、それは現在進行している本校のWWLC構築支援事業の根幹にも関わる。同事業でも、PBL型授業は中核と考えられており、その後も見据え、この経験を活用していきたい。

②改善すべき点

GSIIIのPBL型授業における課題は、大きく問題理解の深さと評価方法の2つに絞られる。

問題理解の深さとは、問題解決の実践がどうしても軽薄なものになりがちという点である。およそ10回の授業という限られた時間で完結させるという必要上、本来なら問題の分析や理解にしっかり時間を割かねばならないところ、それが出来ていない。問題の背景や原因、自分たちとの関わりや考案した解決策の客観的な分析が足りないために、どうしても安直な実践になってしまう。また、寄附金を集めたりイベントを実施したりという結果を残しても、それに対する冷静な分析も出来ていない。具体的には、その寄附金の額を、労力と照らし合わせてどう捉えるのか、意識の啓発をめざした活動の結果をどう分析するのかといった事後の取り組

みの不足である。これらは総じて、議論することの不足が問題と認識しており、問題の理解と合わせて、2年生からの2年間で1つの授業として捉える WWLC 構築支援事業においては、議論する習慣や時間の定着・確保を重点的に目指したい。

続いて、評価方法については、従来のような試験が実施できない活動だけに、より細かい目標の設定や評価の基準（視点）や規準が求められるべきところ、それが十分に達成できていない。GSⅢにおいては、ToDoベース（～が出来る）の学習目標を十分に設定しないまま進行してきている。評価においても、生徒のレポートや振り返りといった「文章表現」を、こちらの視点である意味主観的に評価した。細かいループリックの作成や、成長の度合いをどう測るのかという課題には至っていない。

GSⅢのベースとなった SGH 事業の課題のひとつに、担当する教員が一部に限られたという体制の問題がある。WWLC 構築支援事業では、多くの教員が関わり、その点を改善しようとしている。主として評価分野を総括する教員の配置や、同時進行する WWLC 関連科目との共有など、評価の基準・規準においても改善・深化を進めたい。

1. インドネシア通信授業について 授業動画：<https://youtu.be/Pgpl8Pacqag>

■ 昨年度から実施し今年度で2期目となる通信授業は、提携校であるインドネシア・バリのハラパン高校と交流している。元々は、国際交流アドバイザーである五十嵐駿太氏（With The World 社・以下、五十嵐氏）から本校に提案された企画で、「選択授業」という枠組みの中で行っている。共通言語は英語である。

通信授業とは、インターネットによる映像通信を利用して外国の高校生と企画の実践やプレゼンテーションを行う PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）型の授業である。授業自体は、各国（各校）において3～4名のグループを5つ編成し、両国のグループでペアを組んでひとつのテーマに取り組む。1,2学期でメンバーを入れ替え、約3ヶ月間で10回の授業をひとつのサイクルとする。可能な限り毎回インターネット通信（Skype を使用）で協議や提案、議論を重ね、2回の「実践」に至る企画や振り返りを経て、最終プレゼンテーションを行う。授業の目的は、実践的な英語コミュニケーション、単なる異文化交流にとどまらず異なる価値観を持つ人たちと社会問題について深く考える協働、外部や他者を巻き込み展開する行動・実践に関する多様なスキル（問題発見・分析・多面的な理解、解決に向けた発想や企画立案、相手を考慮した様々な広報、チームでの意識共有、PDCA サイクル）を習得することであり、実際に外国人と取り組み、外部を巻き込んでより大規模に展開することで、より大きな効果が得られると期待した。

インドネシアの生徒と一緒に取り組むテーマは、両国に共通する社会問題で、身近なところからでもアプローチできる分野を予め設定して提示し、その中で最も興味のあるテーマを生徒が選び議論した。具体的なテーマとしては、農業人口・産業の縮小打開策を考える農業のテーマや、両国で深刻なごみ問題やマイクロプラスチックについて、貧困と教育課題、共働きによる家族のコミュニケーションレス、食と健康問題、伝統文化と観光問題など多様な社会問題を取り扱う。生徒は問題提起から探究・議論を行い、自らインタビューしたい団体を選定し、学外との連携や、一般生徒を巻き込むプロセスなどの行動・実践に至る過程を生徒自身で作っていく。また、途中でプレゼンテーションを挟むことで、他チームが取り扱う社会問題や活動内容を共有し、更なる知識の習得やモチベーションに繋げている。プレゼンテーションは全て録画をし、授業後に生徒に配信することで、自分の発表を客観視でき、授業の最終回にあるプレゼンテーションに向けてブラッシュアップする流れを作っている。最後のプレゼンテーションでは、ハラパン高校のチームと共同で作成したパワーポイント資料を用いて、オンラインによって全体発表を行っている。



2 拠点で作成したパワーポイント資料を同時に発表

2. インドネシア通信授業の狙いについて

通信授業を通して、①伝える語学力、②異文化コミュニケーション・理解力、③目標達成力の3つの力を習得することである。

- ◇ 伝える語学力：英語を発言することへの躊躇いや恥ずかしさによって、会話が続かないことが多いが、海外生徒の明るい性格と拙い英語でも自信を持って話す姿を見て、英語を発言する勇気とジェスチャーなどを用いて伝えようとする力を習得すること。
- ◇ 異文化コミュニケーション・理解力：共通課題に対して、歩幅を合わせて進行するグループワークでは、文化の違いによる認識のズレが多く生じる。自分の意見を伝える一方通行のコミュニケーションではなく、相手の文化や考え方を理解し、意見を傾聴し、フラットな立場として共創していく姿勢でコミュニケーションを取ることが大切であることを知ること。
- ◇ 計画実行力：グループで決めた目標から逆算し、必要な行動項目を細かく分解・実行する力

3. 具体的な活動

1、2学期合わせて10のグループが以下の通りの企画に取り組んだ。

テーマ行動・実践の内容

【教育】両国の貧困率と教育事情について調べ、貧困のサイクルを抜け出すために教育を受ける環境が必要であると考え、自らの知識を用いて教育機会の提供を考えた。学ぶことへの楽しさ・モチベーションを高めるため、海外文化を教えるプログラムを考えた。事前にオンラインでお互いの出し物の方法を確認した後、インドネシアでは孤児院の子どもたちに折り紙で鶴の折り方を教え、日本では児童館に訪問し、バリ島の伝統的手法で行う編み物教室を開いた。



【障害に対する認知度】教育や経済格差というトピックから、就学や就職課題が原因で貧困に繋がってしまう日本とインドネシアの共通する障がい者への理解の少なさを取り上げた。高等部では、西宮市で障がいのある人を支援している株式会社 YEVIS にインタビューを行った。例え障がいを抱えた子どもでも得意分野や強みはあるとインタビューを経て感じ取った生徒は「才能に障害はない」をコンセプトに、ブレスレット作りイベントを考えた。ブレスレットを作成し、それを販売することで、団体への寄付金のほか、作成者に対してプレゼントを用意することで、自らの手で何かに取り組むことで対価を得られるということを伝えたいと思った。材料費は高等部で開催した寄付イベントにてお金を集め、材料を購入。購入したブレスレットのビーズはハラパン生が来日したタイミングで交換し合い、交流国のブレスレットビーズを用いて、日伊両国で同様のイベント

を開催した。学校に障がいの方をお招きし、ブレスレット作りを楽しんだ後、作成されたブレスレットを文化祭にて1つ50円で販売。購入者とブレスレットの写真と購入者からのメッセージを添えて、寄付金で購入した写真立ての中に入れ、作成者（障がいの方）にプレゼントをした。売上や残りの寄付金は協力団体に寄付をした。



【家族のコミュニケーションの減少】両国ともに両親の共働きが多いバリ島と日本では、基本的に家族との会話は1日の中で限定される。社会に出て地元を離れることになれば、更に親と共に時間を過ごせる時間が少なくなる。そこで生徒たちは「家族の日」を設けることを両校の学校に提案し実施した。具体的には、家族に宛てた感謝の手紙を全校生徒から集め、感謝の手紙を連ねたメッセージツリーを文化祭当日に保護者に披露した。また、日常の家族写真を新設したインスタグラムアカウントを介して高等部生から計161枚を集め、モザイクアート化したものをハラパン生が来日したタイミングで交換し合うことで文化交流を楽しんでいた。



高等部の家族写真



ハラパン高校の家族写真

【伝統文化と観光】両国にある伝統産業品の保護と魅力の発信を目的に活動した。両校は兵庫県西宮市伝統の名塩和紙とインドネシアの伝統産業品であるバティックを選び、若者に日頃から使用してもらえるよう名塩和紙とバティックを両面に貼り合わせたしおりを作成することにした。名塩和紙については、職人である八木米太郎先生のもとに伺い、名塩和紙の歴史等の説明を受けた後、八木先生の講習のもと0から名塩和紙を作り上げた。ハラパン生が関西学院高等部に来校の際に持ち合わせたバティックと貼り合わせ、しおりを完成させた。その後、帰国したハラパン高校はインドネシアの入学式に全校生徒1,000名の前で名塩和紙の説明を伝え、関西学院高等部の生徒はポスター制作やインスタグラムを伝ってバティックや名塩和紙の魅力について発信をした。その後、八木先生から姫路城に名塩和紙の障子を取り入れるプロジェクトを紹介いただき、新たに作成したチラシで高等部生から有志を募り、プロジェクトを遂行した。その時に作成した大きな名塩和紙の一部は、ハラパン高校に送り届ける予定。



【環境問題】マイクロプラスチック問題や温暖化問題について取り上げた。街から出た 8 割のプラスチックが海面に流れ出てマイクロプラスチック問題を引き起こしていることや、ペットボトルを製造・焼却する過程で二酸化炭素を多く排出していること、プラスチックの海外輸出が禁止されることをリサーチし、ペットボトルの使用抑制・再利用を促す取り組みを行った。まずはインドネシアでポイ捨てや不分別が繰り返している点を解決するため、両国でポスターを制作し、インドネシアの教室に掲示をした。次に、ペットボトルの使用を抑制するため、まず現状分析からアンケートを作成し、日伊それぞれどのくらいの割合でペットボトルを普段から使用しているか調査を行い、調査内容をもとに水筒を用いるメリットやペットボトルを使用するデメリットについて記載したポスターを制作・掲示した。また、再利用については、捨てる行為を楽しんでもらえるようアンケート型ゴミ箱を 0 から制作した。質問内容は、例えば将来留学に行きたいか、予定がないかを質問形式に、捨てるペットボトルをゴミ箱に入れることで一票としてみなされるアイデアで、再利用を楽しめる仕組みを考えた。

【農業問題】農業の後継者問題という日本とインドネシアの共通の問題を議題に挙げた。インターネットでのリサーチ、農家へのインタビューを経て、我々若者が農業に抱くイメージと実際は大きく異なっていることに気づいた。農業のやりがいや楽しさを多くの人に体感していただくよう両校ともに、ポスターで農業の魅力や水耕栽培という格安で汚れずに農業を楽しむ方法を発信した。

【食と健康（食文化）】日本とインドネシアで共通に起きている野菜不足を問題提起し、議論した。特に日本では和食という伝統文化があるにもかかわらず野菜不足に陥る人は約 7 割、インドネシアでは約 9 割の人が野菜不足に陥り、それが生活習慣病による病気や死者に繋がっている深刻な問題を探究した。まずはインターネットの情報に加え、身近な人が普段野菜を摂取しているかを両国で高等部・付属大学（関学のみ）にインタビュー調査を行った。1人世帯と家族との同居者によって野菜の摂取頻度・量が異なり、野菜に対する知識が乏しいことが分かった。野菜の重要性を周知したい生徒は、インドネシアの小学生をクラスに呼び、食育として野菜の重要性を伝えた上で、キャラクター弁当料理教室を開き、緑黄色野菜で彩りのあるお弁当を作ってもらい、自作の弁当を食べることで野菜の美味しさを堪能してもらった。同テーマを議論する別のチームでは、普段から栄養バランスの摂れた食事を心がけてもらいたいことから、食堂とコラボメニュー（和風スープ）を開発し、期間限定で販売した。食堂が最低限赤字にならないよう、価格や目標人数を定め全校集会やチラシ配布、昼休憩中の声かけなどを行い、延べ 100 名以上の生徒、先生や保護者に提供していた。

これらの指導体制としては、教員や五十嵐氏に加え、ファシリテータを配置した。まず両校に五十嵐氏サイドからの英語人材が 1 名ずつ付き、毎回の授業を進行して作業シートやプレゼンテーションに関する指導に携わったほか、関西学院大学の協力を得て、大学生ファシリテータを各グループに配置した。英語力が高く、教育プログラムに関心のある大学生（2019 年度前期後期合わせて 13 名）に各グループに張り付けてもらい、毎回の英語によるコミュニケーションや企画立案、プレゼンテーションについてのアドバイスやサポートを行ったほか、各グループ内での成績評価や分析も担当した。

以上のような体制で、最終回の授業では、これまでに取り組んできた活動について、日本とインドネシアの2拠点で共通のパワーポイント資料を作成し、両校1チームに割り振られた8分の英語によるプレゼンテーションをオンライン通信で行った。

また、この教育プログラムには直接相手校の生徒と出会う感動体験を設けており、自身が扱ったテーマについて相手校のチームと直接ふれることで実感を持ち、教育の効果を高めることを目的とし行っている。

2019年度実績：ハラパン高校が関西学院高等部に訪問 6月12日（水）～18日（火）

相互の訪問は以下の日程、内容で行われた。

12日（水）日本到着 13日（木）防災センター見学・神戸観光 14日（金）授業・部活動体験 15日（土）ホストファミリーとの関西エリアの観光 16日（日）・17日（月）京都観光、フェアウェルパーティー 18日（火）日本出発

4. 成果・結果

実際に交流する相手が大人ではなく同年代の生徒という同じ立場であるため、気を遣うことなく友達感覚で話し合えるため、英語をコミュニケーションツールとして自然とアウトプットする場が作られている。また、第2言語が同じ英語であるという点も大きい。アジア人と会話する時は、ネイティブと英語を話す時にある不安感が殆どない。また、交流したハラパン生は例え完璧でない英語でも自信を持って話す姿が高等部の生徒にとって「話す」というハードルを下げていると感じ取れる。インドネシアの生徒は常に明るく笑顔で接してくれるので、高等部生が途中で英語を間違えたとしても、何も問題なさそうに相槌を打ちながら真剣に聞いてくれる。こういった態度が話しやすい雰囲気形成されていると時期に高等部の生徒も気付くため、お互いに話しやすいコミュニケーション（相槌やジェスチャー、アイコンタクト等のリアクション）を相互に行えるようになっていく。このプログラムは各国4人少人数チームで結成し進めていくため、チームワークが大事な役割を占める。最後に記載している生徒の感想を見ても分かる通り、感想では「仲間と協力し合うことの大切さ」を学んだと回答する生徒が多かった。更に、この授業では、大学生ファシリテータの存在も大きい。海外経験や英語に関わる経験が多い大学生を優先的に選んだことで、より具体的なアドバイスが得られた。高校生にとって、同世代の外国人とコミュニケーションができる機会は貴重であり、その経験が生徒の満足度を高めている。価値観の違いを越えて協働することもこのプログラムの魅力であり、たとえばゴミに対する意識の違い、行動力やアイデアといった面で、相互に刺激・影響し合う場面が多々あった。

生徒の活動は取り組む社会課題と解決策は、相手校との議論、地域団体とのインタビュー、各情報媒体でのリサーチから自ら選択して決断し、進めていくことを重みに置いているため、主体的に行動する生徒が多く目立った。大学生、農家、教育NPO法人、名塩和紙の職人等へのインタビュー提案や、インスタグラムを開設した情報発信、児童館で教育プログラムの提供、栄養バランスの重要性を伝える食育やメニュー開発等々、実際に行動できることで面白みを感じ、やりがいを感じている生徒が多かったようだ。典型的なPBL型学習の効果といえ、アポイントを取得するためのビジネスマールの作り方やテレアポの経験、ターゲットを想定した効果的な広報（SNSや動画作成）、綿密な計画や効果的なプレゼンテーションの作成と実践といった実務的能力が培えた。

5. 評価方法

成績評価は、大学生ファシリテータによるグループ評価と個人評価、グループごとの最終プレゼンテーション、個人による振り返りなどで行った。大学生ファシリテータは、それぞれのグループしか担当していないが、五十嵐氏を中心に頻繁に情報共有の機会を持ち、評価基準をできる限り合わせるようにした。主な具体的な評価の視点は以下の通りである。

グループ評価	問題に対する分析や実践に関するリサーチ力、丁寧さ	4段階
	行動・実践に対する計画性、緻密さ	4段階
	行動・実践の度合い、他者の巻き込み、インドネシア側との協働	4段階
	アクションのオリジナリティ	4段階
個人評価	議論のための準備、リサーチ	4段階
	英語力、コミュニケーション力	4段階
	リーダーシップ	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）
	オリジナリティや発想力	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）
	グループワークにおけるサポート	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）
	プレゼンテーション力	特に高ければ加点（程度に応じて2段階）

	評価	点数	項目
チーム評価基準	1	2	話し合いにおいて、自分たちができることのアイディアの立案まで至っていない
	2	4	アイディアの立案はしたが、行動まで至っていない
	3	6	アイディアの実施に必要な作成物を準備まで行うが、実施はできていない。
	4	8	アイディアの実施まで行動できているが、活動結果を振り返る分析まで至っていない
	5	10	アイディアの実施とその後の振り返り・分析、継続的活動のためにできることを考える
	評価	点数	項目
理解度	1	2	両国に起きているトピックに基づいた社会課題の背景、現状を理解できていない
	2	4	相手国・自国のどちらかの国で起きている課題の背景・現状を理解している
	3	6	両国で起きている課題の背景・現状を理解している
	4	8	社会課題理解・相手国の文化理解・チームの進捗の理解・次やるべきことへの理解4軸で判断
	5	10	社会課題理解・相手国の文化理解・チームの進捗の理解・次やるべきことへの理解4軸で判断
	評価	点数	項目
関与・貢献	1	2	関学側・ハラバン側の双方の会話に全く参加していない
	2	4	関学側の日本語の会話のみ参加している
	3	+2	関学側・ハラバン側の双方の会話に参加し、発言ができています
	4	+1~2	アイディアの提案、役割分担時での主体的な発言、認識のズレを解消する説明努力、レポート記入
	5	+1~2	取り決めたことに対する行動（資料作成、アポイントの取得、アイディアの作成、先生への交渉等）
	評価	点数	項目
成長・深度	1	+1~2	出来たこと・成功したこと・身に付いたことにおける分析：【協議・計画】
	2	+1~2	出来たこと・成功したこと・身に付いたことにおける分析：【実施・まとめ】
	3	+1~2	出来たこと・成功したこと・身に付いたことにおける分析：【発表】
	4	+1~2	【できなかったこと】における分析：【反省・改善】
	5	+1~2	活動を通して振り返る自己分析：【自身の変化】

また、毎回の授業後に、各回を振り返るアンケートを実施した。質問項目としては、準備の取り組み・授業への積極性・英語でのコミュニケーション・議論における役割・新しい気づきや学び・改善点などで、それらを自己評価・他己評価する形式で行った。このアンケートは、本校が今年度から第1学年に導入した Classi という WEB ベースの教育プラットフォームの活用を意図したものである。さいごには、それらの集大成として、最終振り返りを課題として設定し、評価対象とした。設定した質問項目は以下の通りである。①グループで取り組んでいるプロジェクトの目的（ゴール）、内容（アクション）とその理由を「なぜそう行動したか」が分かるよう取り組んだ問題に対する理解や分析も含め自分の言葉で書いてください。②グループの目的のために、自身が取り組んだことを時系列で整理してください。③自身がこのプロジェクトで「出来たこと・成功したこと・身に付いた力」を①協議/②計画/③実施/④まとめ/⑤発表の類に細分化して分析してください。

（KG グループ内での立ち位置や役割、両国グループ内の協力体制について、目的実現のためにどのようなことを考え、工夫したか、何を達成できたか、結果の事実だけでなく、自身の内面について分かるように記載ください。④自身がこの活動で「出来なかったこと・今後の課題」を分析してください。（何が出来なかったのか、その原因は何だと考えるのか、今振り返ると何が出来たか、このプロジェクトにこだわらず、自身として今後どんなことに取り組んでいきたいかも合わせて記載ください。）⑤プロジェクト前後での自身の変化に

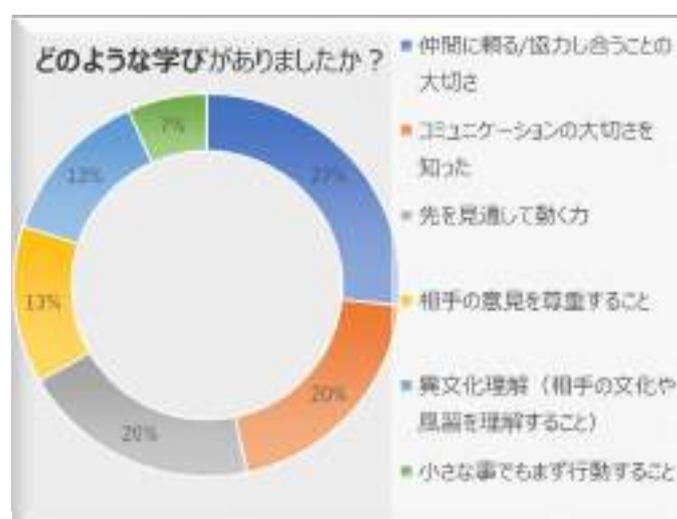
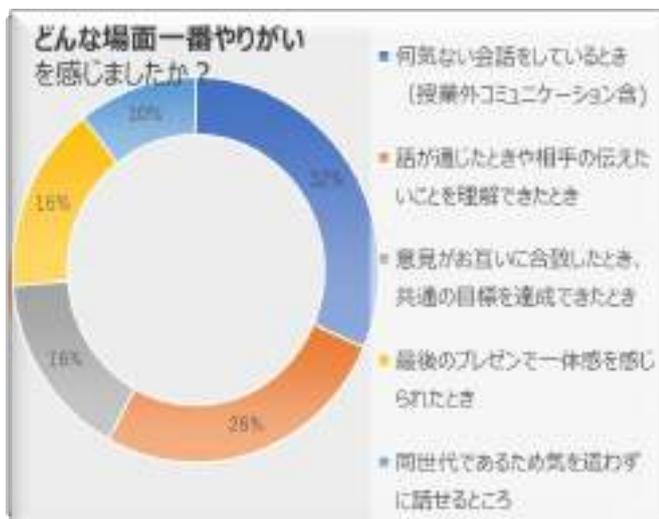
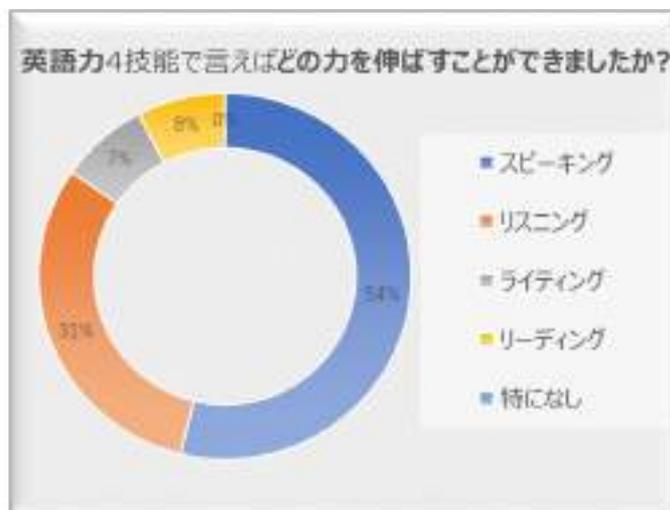
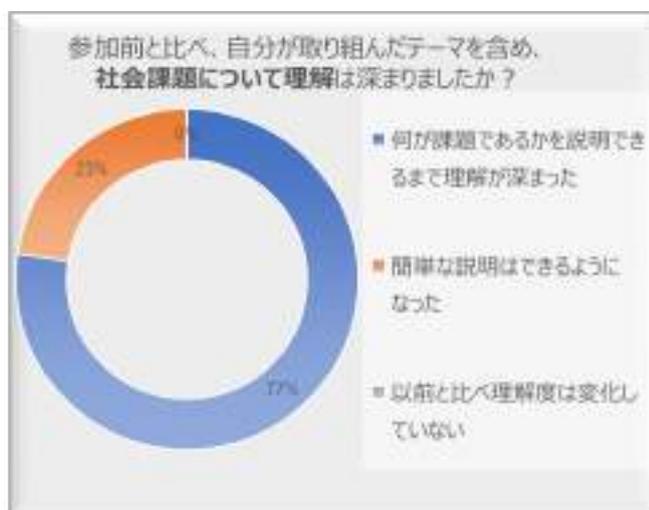
ついて分析してください。(取り組んだ問題に対する意識の変化、国を越えて協議・行動すること、実践(アクション)することに対する意識や授業における積極性(リサーチ/タスク整理/リーダーシップ/コミュニケーション)の変化など)そして、この振り返りに対する評価の視点としては、以下の3つを持った。①問題意識・理解度:取りあげたテーマについて、いかに主体的に(自身あるいは自身に関係することとして)捉えているか、日本やインドネシアの実情と結びつけられているか ②関与・貢献:グループの目的に対して、どの程度貢献できたか ③成長・深度:グループでの活動を経て、取りあげたテーマについての理解や協働について、いかに理解が深められたか。

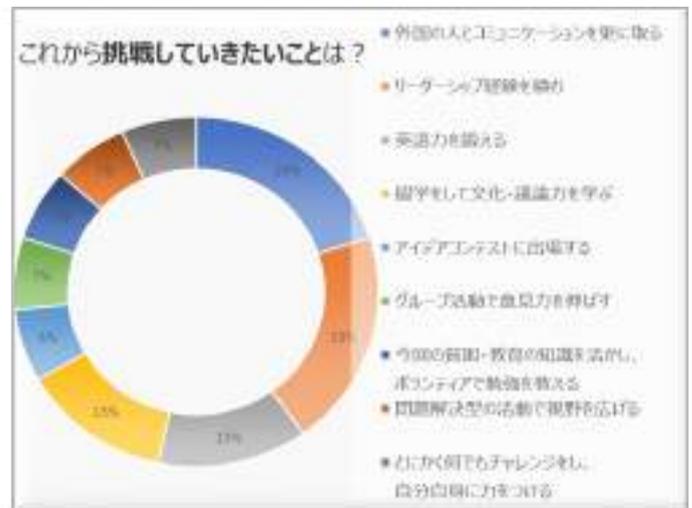
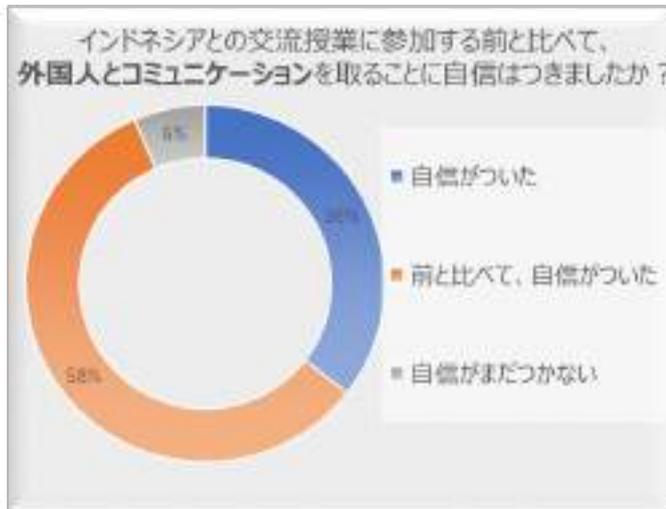
6. 検証

ねらいの達成度

前年度と同様に枠組みの緻密さが成功の理由と言える。日本に関心のある海外の高校生の選定をし、言語障害が起きても乗り越える基盤を作ることが大切である。初対面では、緊張を和らげるため互いの文化を知る楽しいアイスブレイク。その後のアイデアを構築していく過程では、5業種の6つの新規事業経験に基づいたワークシートの配布と10分間の講義の時間で生徒の議論が活発となるよう下地を作っておく。問題意識の共有やリサーチ・企画の立案と実行・プレゼンテーション・相手校の来日に至るまでの綿密なスケジュール構成等において難しいところは事前に研修をした大学生インターンが支えている。以上、生徒を評価する視点や基準のほか、大学生アシスタントへの研修や頻度高いコミュニケーション等、人材や授業体制のソフト面が整っていたことが、内容の濃い、効果的な学習につながったと結論づけられる。

【資料データ① 生徒による感想アンケート】





改善すべき点 持続可能性と通信問題

概ね良好な結果となったが、継続していく上での課題も多い。生徒にとってもストレスとなったのが通信環境の技術的な問題である。前年度に続き、無料のインターネットサービスである **Skype** を使用したが、1つのパソコンにつき4人が振り分けられるため、同時に少なくとも5台のパソコンが一度にオンラインシステムを扱うということがインドネシア側の通信スピードを遅めてしまっている。そのため、音声の聞こえやすさや画像のフリーズ等時々問題が生じていた。（ただし、コミュニケーションが全く取れないというわけではない。）この技術的な課題に対しては、現状使用している相手校であるハラパン高校の **Wi-Fi** だけではなく、別途ルーターを設ける等インフラ面の整備を2020年度は行っていきたい。また、パソコン自体が古いモデルだと、通信の掴みも弱くなってしまうため、余裕があれば相手校が使用するパソコンをより新しいモデルに変更することも1つの手だと考えられる。

次に、持続可能性という問題である。問題提起から解決策の提示、実施、分析、発表までを10回完結型のスケジュールで構成されているため、問題の本質や、具体的な解決策の提案、実施・分析後の先にある持続可能性までの議論では深いところまでまだ到達できていない。今後の見直しとしては、最短で2021年度から1年を通して、じっくり1つの社会課題を探究していく時間を設け、長期的プログラムへと改善していきたい。

①協議

【環境チーム】

・英語で伝える力不足により、日本のグループにしか提供できませんでしたが、日本のゴミ問題として海洋プラスチック問題、リサイクル率の低さ、そして停滞など自分が調べた問題をしっかりと伝えることが出来ました。

・英語力を活かしてハラパンの生徒と積極的に会話しました。時には通訳をしたり、時にはグループの意見をまとめたりしました。電波が悪く、途中で話が噛み合わなかったところもありましたが、無事に成し遂げました。相手とこちらの考えていることを融合するために、役割分担を上手くできるように、話を進めていく工夫をしました。

・協議の面では、自分の意見を主張するだけでなくそのようにすれば両国の意見がまとまるかを考えて発言するようにしていました。

【食文化チーム】

・協議では、Skype を通じて違う国の人々とコミュニケーションを取り合う難しさを学びました。自分が普段外国人の方と話すよりも数倍難しく、向こうの考えとこちら側の考えをきちんと通じ合わせる事が難関でした。

・円滑に話を進めていく方法を学びました。(主に話し合いをまとめ、調整役でした。必要なことが聞けてない場合は個人 LINE を活用して話し合いも行いました。)

・これまで企画を行う際などには、自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、どちらの意見がより効率的な問題解決に繋がるかを考え、選択をしていました。活動を通して、どちらかの意見のみを反映するのではなく、お互いの意見の良い点や問題点の双方を理解し、両者の良い部分を取り入れることで、自分達の当初の案とは違った案を取り入れることができ、多角的な視野で捉えることが出来るようになったと考えます。また、相手の意見に問題点があるときには、問題部分を指摘するだけでなく、改善案を提示することで、話し合いがスムーズに進むということを学びました。

【教育チーム】

・私たちのグループでは、3人の意見が対立することは少なかったのですが、大学生と意見が噛み合わない時があり、大学生とよく話し合っていました。インドネシアと日本では文化や考えが違うことが多く、大変なことも多かったのですが、次第にお互いの妥協点を上手く見つけられるようになったと思います。グループ内では、主に英語が話せるメンバーが上手く両グループをまとめてくれていました。私は、インドネシア側で出た意見について考えることが多かったです。日常ではしないような内容なので、リスニング力はついたと思います。

・協議する時、相手の国の現状やお互いの国の前提が違うことを念頭において、話し合うことが出来ました。はじめは戸惑いましたが、調査したり、ディスカッションを重ねるうちに、違うことを前提として、「協力するためには、何が一番有効か」について積極的に考えることができるようになりました。

・私はもともとインターナショナルスクールに通っていましたが、日本の小学校に入学しました。初めは、日本人の「周りに合わせる」という文化自体が全く理解できず、自分と周囲の人も苦しんだ時期がありました。その経験から、本来の自分を表に出すことが苦手になり、自分の能力を隠すようになってしまいました。しかし、今回のこの経験を通して「できることはできる」や「やりたいことはやりたい」と素直に示すことは決して悪いことではないんだと気づくことができ、またそうした力を身に着けることができるようになりました。

【伝統産業と観光チーム】

・皆で話し合うとき、私は相手の意見も尊重しつつ、自分の意見もきちんと伝えることを意識して取り組みました。インドネシア側とは考え方や環境も違うので、意見をまとめるためにしっかりとコミュニケーションをとり、十分な話し合いをしました。

・日本チームでは、主にコミュニケーションを担当し、議論をリードしていました。

【農業チーム】

・全員の意見を聞いてから、一つの意見を出すことによって、揉めることがなく協議を行うことができました。紙に書き出すことにより、それぞれの意見の良い点を吸収して物事を決めました。みんなの意見を、一つの意見にすることはとても難しかったです。

・アクションプランについて、より具体的な案を出すことができましたと思います。

②計画

【環境チーム】

・この学校の問題として「ペットボトルの分別が甘い」という現状があり、まずはその問題についてのアプローチを計画しました。面白いことが好きな関学生に対してベストな計画をたてられたと思います。

・必要な情報を次の活動の時までに、予め準備しておくことにより、時間を有効活用するための工夫しました。

・計画の面では、メンバーの提案してくれた案がどのような日程で動けば実現するのかを考えて提案していました。

【食文化チーム】

・計画の点では栄養教育の授業をして調理実習をするとう最初の案が取りやめになったことで遅れをとったものの、上手く詰め込んで食堂販売まで持ち込めることができました。

・詳しい予定をなるべく早いうちに立てることが出来たため、調節しながらもある程度予定通りに進めることが出来ました。(メンバーを仕切っていく立場であったため、みんなになるべく負担をかけさせないような予定を考えて組むことが出来ました。)

・目的達成の為に、私たちが行わなければならないことを、順序立てて並べ、具体的な期限を計画することが大切だと学びました。実際には、予定通りいかないこともりましたが、目安となる日付を把握していることで、「今、すべきことは何か」を考えて行動できました。大きな目標でも、細分化して、目的達成のための、手順を考えることによって、結果的には、「大きな目標の達成に繋がる」ということを学びました。

【教育チーム】

・セカンドアクションでは、児童館に行くという案には、子供食堂や孤児院など様々な案がありました。また、そもそも行くこと自体、「子供たちのためになるのか？」という疑問もでしたが、色々な意見を出し合い多くの選択肢があり、みんなで最善の方法を選んだ結果、児童館に行くということに決まりました。

・お互いの前提条件や必要な支援が異なることを自覚しながら、最も有効な方法を考え、準備時間が十分にとれるように事前に計画を立て、安心して動けました。また、グループでその計画がよいか確認をとり、みんなで共有した上で協力して動くことができました。

・計画においては、自分が率先してアポイントメントを取り、準備する時間を逆算しながらできるようになったと思います。文化祭期間中でもあり、個人としてアメリカでの大会を控えていたのでとても多忙な時期ではありましたが、うまく時間を有効活用して行えたと思います。

【伝統産業と観光チーム】

・日本もインドネシアもどちらもの問題を解決できる案を考えました。皆がスムーズに計画を進め

ることができるように、役割分担をして取り組みました。

- ・協議、計画する際に大事なポイントは、私が相手に伝え確認していました。

【農業チーム】

・計画が浅かったことやみんなとのスケジュールの共有ができていなかったため、思うように進まなかったため、次からは、しっかりと計画を立てたいです。

- ・解決策に向けたアクションプランは何を行うのかをチーム内でも積極的に意見を出すことができ、それが採用されました。

③実施

【環境チーム】

・botingbox に関して、設計メインで取り組んでくれるメンバーがいたので、私は作成に関してサポートメインでした。さらに、先生や文化祭の委員会への打診を行うことができたので良かったです。

・ゴミ箱を作るに至って実際に金槌を打ったり、チームのみんなに指示を出したり、三木先生に交渉しに行ったりしてアクションを起こすことで貢献しました。交渉力と思い切って行動する力が少し増したと思います。

- ・できるだけ積極的に活動に参加できるように心がけました。また、自分は「今何をすべきなのか」を、周りを見ながら考えて行動していました。

【食文化チーム】

・実施においては、広報それぞれが頑張った甲斐もあり、女子に人気になると予想していましたが、さらに周りの男子生徒の多くも購入してくれて、上手くいったと思います。

・わかりやすいチラシを作成するため、企画書の作成や呼び込みを行いました。(あまり、メンバーに負担をかけることなく作成、呼び込みができました。)

・食堂での販売期間中、周りの人への呼びかけを行い、アッセンブリーで告知するなど、企画の案内を行うことが出来ました。周りの人に伝えることで、次第に良い影響が伝染することが分かったので、今後からも身の回りの人に伝えるという小さな行動も怠らないようにしようと思います。

【教育チーム】

・訪問などが急にきまる事が多かったですが、臨機応変に対応できました。児童館に行った時は、子供達になにが必要なのか考えて動くことが出来ました。

・実施については、自分たちで一から十まで全てでき、本当に良い経験ができたなと思います。何かを教えるということは初めてのことでしたが、自分から出向かないと関わることのない人たちと接しようとする力が身についたような気がします。

・アニヤマンを教えようとしたのですが、インドネシアのアニヤマンはとても大きいので、子供には難しいと思い、B5の大きさに切って、子供たちに教えました。子供は好きなのですが、普段接する機会がないので不安な面もありましたが、人見知りをしていた女の子と他愛のない話をしながら、アニヤマンを教えることが出来ました。彼女にとっては難しい遊びのようでした。話していると、彼女は大学についてまた英語というものを知らなかったため、本来の目的である教育についてたくさん教えることができました。

【伝統産業と観光チーム】

・皆で分担して取り組んだので、筆箱を順調に作成できました。また、文化祭期間で、他のことで忙しい時期でしたが、順調に取り組むことができました。また、インドネシア側とも進行状況などをラインで連絡を取りながら、取り組みました。

・実施の途中では、相手とのコミュニケーション不足と文化・価値観の違いによってすれ違いが生じてしまいました

【農業チーム】

- ・自分たちがしようと思っていたことはきちんとすることが出来ました。
- ・グループ内でアクションは各々が分担して担当しました。僕は実際にポスターを二種類作成して、高校生の農業への関心を高める取り組みを行いました。

④まとめ

【環境チーム】

- ・全体的にチームの意見を中心となってまとめる努力をしました。いい経験になりました。
- ・結果をできるだけ客観視できるように心がけました。

【食文化チーム】

- ・それぞれが個人的に動くことで時間のないスケジュールもなんとか詰め込み成功できたことだと考えます。
- ・全体の予定を見直して、すぐ調整しできることをすぐ実行するという能力を身につけました。(全体の進捗を管理する立場なので、「何をいつまでにやるか」を把握し間に合わせる必要がありました。)
- ・自分たちが感じている、企画についての達成度だけでなく、周りの人からの反応も聞くことによって、より客観的に物事を捉えることが出来ました。

【教育チーム】

- ・GLPで三年間学ぶ中で、一番多く学んだテーマが「貧困と教育」だと思います。しかし、二年間は教授から教わるだけで自分たちからアクションを起こすことがなかったので、この四ヵ月間は、自分たちで考えたことを実行する機会になって良かったと思います。テーマがとても大きいので、自分たちの力で何かを解決するのは難しいと思っていましたが、子供たちの教育について考える良い機会となり、小さなことから始めることが大切だと思いました。
- ・まとめの時は、自分達は「この活動を通して何を学ぶことができたか」について明確に捉え、伝えることが出来ました。その際、日本側の意見を押し付けるのではなく、インドネシア側との共通点や相違点を発見し、そのことについて、積極的にディスカッションできました。
- ・この経験を通して本当にたくさんの物事を学びました。自分から進んで問題を分析する力、必要なものは何かを考え、その中から自分にできることを見つける力など社会に出てから必要とされるであろうことをたくさん学んだ気がします。

【伝統産業と観光チーム】

- ・二つのチームがうまく連携し、どちらの問題も解決できるものをつくることが出来ました。また、コミュニケーションをとることは大切なので、全員がコミュニケーション取ることを意識して取り組みました。
- ・最終的にはお互い協力することができ無事に解決策を実行できました。このことから、私は「協調性」と「主張の緩急」の力を培うことが出来ました。「主張の緩急」とは自分の意見や考えを主張して押し進む時と相手の意見を聞き、遠慮する時の使い分けのことです。

【農業チーム】

- ・何か一つでも行動を起こすことはとても難しいことだと思いました。沢山アイデアはありましたが、高校生でも実現可能なものを選ぶことが難しかったです。

⑤発表

【環境チーム】

- ・「発表の順番はどうするか」や「自己紹介をどのタイミングですか」といった相談事をLINEでハラパン高校の生徒と連絡を取り、決めることができました。
- ・英語を話せる人がいなかったのになにが言いたいかわからず皆で決めてから原稿を作りました。

・どのようにすれば発表がよりスムーズに進むかを考えて発言していました。

【食文化チーム】

・発表時には全員が視線を下に向けてしまい、カタコトな英語がよりカタコトになってしまうなど反省点が多く見られました。

・わかりやすいスライドの作成やその準備に関して、英語で打ち合わせすることができ、スムーズにプレゼンが出来ました。原稿も練習を沢山して本番を迎えたので、「話し方が上手い」と評価され、嬉しかったです。たくさんのことを学ぶことが出来ました。

【教育チーム】

・私は **problem** と **solution & reason** の両グループの共通点と相違点のパワーポイントを作る担当でした。結果的に、ほとんどの部分をハラパンに変更されましたが、パワーポイントは文字が多いと見づらいので、聞き手が理解しやすいように、イラストを多く用いてスライドを作りました。また、作り終わったあとは3人で集まって読み合わせをし、アニメーションを統一するなどして、聞き手に伝わるように、工夫をしました。

・発表する時は、日本とインドネシア、2カ国でプロジェクトを行った意味を考え、自分達が学んだことも伝えられるよう、プレゼンの流れを考えることができました。また、みんなに伝わるように、プレゼンの字体の大きさや、声の大きさ、目線、有効なイラストを使用するなど、様々なところに気を配りました。

・私たちは幼い頃からこのような活動をしてきているため、発表などに慣れてきています。それとは反対にインドネシア側の生徒はこうした活動にも慣れていなかったもので、本当に連携していくのに苦労しました。しかし、慣れない相手と、環境や背景が違う仲間と活動することの困難さを通して、協調するための力を身につけました。

【伝統産業と観光チーム】

・発表の際は、インドネシア側と連携し、Google スライドを使用し、両校が揃って作成することを意識しました。また、二校の意見をすべて共有し、二つで振り分けて発表をしました。私は、二回目のアクションで何をしたかを語りました。インドネシア側は、学校近くのビーチで両国の伝統的な布を説明し、プロジェクトについて普及啓発をしたことを発表しました。日本側は、文化祭という人が集まる場所でプロジェクトを発表しました。そのことを伝えるときに、そのアクションによって、様々な人、生徒のような若年層から高年層の幅広い世代の方々に知ってもらえたということを伝えました。きちんとアクションによる効果を伝えることは大切だと学びました。

・このプログラムのまとめと発表では、プレゼンをグループ内で役割分担し、プレゼンの能力も向上することができました。

【農業チーム】

・発表では、英語の力がついたと思いました。人前で発表することで、自分の英語力を試すことができました。

・アイコンタクトを取る回数を増やすことができたと思います。ですが、まだ原稿を見ていしまい、前を見て話す勇気がなかったので、今後のプレゼンでも、アイコンタクトを取りながら話すように注意したいと思います。

本研究における評価方法の展望と年度報告

—教科と行事における評価方法の見直しと取り扱い—

「学力」とは暗記力や短絡的な技術だけではなく、生きて働く「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう主体性・多様性・協同性」といったコンピテンシー（資質・能力ベースの学力）を指すことは本校において教育文化として根付いているように考えられる。しかし、一方で、「知識・技能」以外の部分を評価し、生徒の多面的な能力の把握が十分になされているとは言えない。

現状として多くの教科がペーパーベースの「考査」を採点することや、表現活動の結果としての「作品」を点数化することで「評価」としている。もちろん、この中に「思考力」や「判断力」、「表現力」を汲み取った評価がすでになされている※ことも事実だが、その部分を意図的に注目して評価することや、「主体性」や「多様性」といった観点を汲み取ることは至っていない。そこで、WWLC 関連科目をフロントランナーとし、教科を中心とした教育活動全般における評価の在り方について現状を整理しつつ、具体的な目的と方法を整備したい。また、評価はあくまでも目標と表裏一体であることから、教育活動全般に渡るカリキュラムの「逆向き設計」※の必要性を確認したい。

※量化が可能で容易である事実・情報や「知識」の測定結果によって、高次の精神活動の様相も類推可能であるという主張もありうる。

※「逆向き設計プロセス」＝「求めている結果を明確にする（教育目標の明確化）⇒「承認できる証拠を決定する（評価方法の選択・開発）」⇒「学習経験と指導を計画する（教育活動の計画）」

行事

【展望】

各行事において「身につけさせたい知識・能力」を明確にし、それを測るのに適した「問い」を用意する。行事は教科以上に「知識・技能」以外の能力・資質を向上させることに主眼を置いていることは言うまでもない。情操教育として「経験させること事態に意義がある。そこから何を学ぶ取るかも含めてオープンに機会を与えていること自体が教育活動だ」という主張も一理ある。しかし、学校における教育活動である以上、オープンに様々なことを学び取ってもらう機会を与えると同時に、カリキュラムとしてあらかじめ設けられた「教育目標」の達成のために必要なものとして位置づけられるべきである。従来、各行事の要項には「目的」という名目で活動実施者の思いが語られているが、それが行事の内容とどのように結びついているのかといった検証はあまりされてきていない。よって、その「目的の形骸化」、または行事をすることそのものが目的となる「自己目的化」も懸念される。そこで、各行事に「評価（規準・基準）」からの「逆向き設計」を促し、「目的」を形骸化させず、学校全体のカリキュラムの中で実効性のある教育活動として位置付けるよう働きかけた。

教科

【展望】

各単元において「身につけさせたい知識・能力」を明確にし、それを測るのに適した「問い」が用意できているか。能力が知識を確認すれば済むものであれば直接的にそれを問えばよいが、知識だけでなく、思考のプロセスや、主体性を測るべき時、ふさわしい「問い」や「問い方」はどうかを意識しておかなければならない。そのとき、「結果だけ見ればプロセスも評価できる」という考え方もあるが、プロセスにあえて光をあてることによって高次の精神活動（主体性や多様性などのコンピテンシー）を評価し、育むことに繋げたい。よって、その「問い」は必ずしもペーパーテストでのみ測れるとは言えず、必要に応じてパフォーマンス評価（ポートフォリオやルーブリック）を組み合わせる。

【実践報告（2019年度）】

【1】生徒の授業内での学びの深まりを測る。

① 学びの記録

授業中の教員の解説やゲストからの学び、グループワークや友人の発表を聞くなどして「得た知識」がいか
に整理されそこに自分なりの意味付けができてきているか、また、そこから新たな気づきや発見、疑問などに結
び付いているかどうかを評価した。例えば、「～ではないか」「～と驚かされた」「知らなかった～」「～
のはなぜだろうか」といった表現に着目し、全ての授業において記録を書かせて、教員が2段階から3段階
で評価した。その際、あまり厳密なものせず、思考の深まりが表現されていたら「2点」、単に聞いたこ
とがまとめてあるだけのものや単純な感想にとどまっているものは「1点」、あまりに空白が目立ち参加態
度に疑問を感じる程度のもものは「0点」とした。イメージとしては、授業終わりにその単元の「小テスト」
を実施し採点するようなものである。

② 相互チェック

友人の成果物（プレゼン等）を授業の目的から作られた観点別ルーブリックに基づいてチェックさせた。目
標とすべき成果物の質を他者のパフォーマンスを評価することによって自らの省察に繋げることを意図す
る。よって、「相互評価」として友人に評価を下す（点数を付けるなど）ことを目的とするのではなく、あく
までも、「評価（チェック）」を通して自らのパフォーマンスに基づいた発見や気づきを促すものであり
「学びの記録」と同じ趣旨のものとして扱う。評価方法も「学びの記録」に準じる。

③ 振り返り

生徒のメタ認知や、トラブルを解決する能力など生徒のコンピテンシーを生徒の言葉から直接可視化しよう
と試みた。特に、中間発表の際、生徒同士や教員からのコメントは辛辣かつ衝撃を持って受け取ることにな
るが、そこで、「新たに気づかされたことをいかに次に繋げられるか」に焦点を当てたい。振り返りまでの
自分の考え方と最終発表に向けてあるべき自分の姿との違いをいかに意識できているかを測る。（それまで
はこの程度の活動でいいと思っていたがここまでを目指してやるべきだと気付いた、友人と意見をすり合わ
せた時に自分の意見を押し通そうとして雰囲気が悪くなったがどちらの意見もミックスしてより高い次元に
押し上げられるような議論が必要だと感じた、など）これも、「学びの記録」に準じて3段階程度で評価す
るが、配点は少し大きくてもよいと考えた。

【2】生徒の学びの成果を測る。

① 中間発表

今回は生徒に対し成果物として課題解決に向けてのプレゼンテーションを求めた。レポートや企画の実施な
どその他の成果物も想定できるが評価の方法としては同じように授業の目的から逆算した観点別に作成した
ルーブリックによって得点化した。いくつかの観点に対してA～Cとその中間の5段階で評価をし、生徒へ
もフィードバックした。その際は、生徒のプレゼンの様子を動画で確認し詳細にアドバイスを加えた。この
「フィードバック」には点数を明記せずあくまでも次の活動に繋がる資料として生徒に提示した。これは、
【1】の③「振り返り」にも活用されることになった。一方、授業の評価としては、他の評価とのバランス
を鑑みて配点を決め点数化した。グループ発表の場合は、そのグループに属するメンバーが同じ点を得るこ
とになる。

②最終発表

最終発表は、中間発表の際に指摘した点をどのように改善しようとしたかといった視点でもういちど同じ観点で評価をし直した。授業としての活動はここがゴールであるため生徒へのフィードバックは次の学年やこれからの学び、研究に活かされることを期待し、中間発表からいかに伸長したかに焦点をあて激励とした。一方、評価としては、あらかじめ生徒に示した観点に基づいて点数化した。

◇評価における課題：多岐に渡る評価対象、複数教員による評価の等化

今年度のグローバル探究 BASIC では、プロジェクトベースの探究型授業展開が主であったため、知識の定着や技術の習得よりも学びの姿勢や深まりについて焦点を当てて評価した。日々の「学びの記録」の書き方を習得することは、「学び方」そのものの気づきにつながり、生徒の学習に対するパラダイムシフトにも寄与した。また、プレゼンがルーブリックによって評価されることにより、目的意識を持って成果物に取り組む姿勢を養うことも出来た。

一方で、評価の正当性について担保される指標を持つことが今後の大きな課題であると言える。各授業での「学習の記録」や「フィードバック」など生徒の活動一つ一つにおける思考の深さを測ることは、評価すべき対象が多岐に渡ることを前提としているため、いかに教員の負担を最小限に、かつ正確で意味のある評価に繋げられるかが求められる。また、教員が複数に渡ることや教育活動としての継続性を鑑みて、生徒の表現と評価との整合性を共有しておく必要がある。

関連する取り組みについて

今年度の研究開発では、完了報告書にも述べた通り、SGH 事業の課題を抽出し解決しようとしていく過程で、当初 WWL 事業として計画したプログラム開発だけでなく、関連して様々な取り組みを行うことができた。以下にその概要についてまとめる。

1. 教育目標を考える、外部ファシリテーターによるワークショップの開催について（資料 1）

年度当初、WWL 事業を開始するにあたり、高等部長により「Society5.0 の時代を前にしても、地球市民の育成を目指す関西学院の建学の精神は全く色あせることはない。しかし、目の前の生徒達に求められる力は変化しており、高等部はその伝統を守るためにもまずは教員から変わらなければならない。そのための WWL 事業である。」との、本校における WWL 事業の位置づけと指針が示された。

それを受けて、まずは学校としての今ある教育目標の見直しを行い、生徒に育むべき力の明確化を行うこととなった。しかしながら、管理職主導による教育目標の見直しは、どうしても「上から降ろす」形と見えるためか難航した。そこで、より多くの教員が納得感を持って教育目標の作成に関われたという実感を得られるよう、外部のファシリテーターのワークショップ型による、教育目標の見直しに着手した。まだ道半ばではあるが、ワークショップを通じて、普段は日常の忙しさ故になかなか実現できない、教員それぞれの「教育観」をぶつけ合うようなコミュニケーションが年代を超えて行われ、非常に有意義なものであったと考えている。来年度 1 学期を目途に教育目標の見直しを終え、その後、教育目標を踏まえた各教科での教科目標の見直し、その中での ICT 機器の利用を踏まえたアクティブラーニング型授業や新たな評価方法の導入検討、従来の人権講座や各行事等課外活動の位置づけの見直し等、教育目標からの逆向き設計とそれを踏まえた PDCA サイクルを回していこうと考えている。

2. 海外交流アドバイザーによる、探究型国際交流プログラムの新規開拓について（資料 2）

本事業では新規に海外交流アドバイザーを選任し、海外連携校との ICT を用いたプロジェクト型授業の推進や、現在ある海外研修をより探究的な学びに発展させるためのコーディネート業務を実施した。また、国外の高等学校との連携による、テーマと関連した高校生国際会議を 2021 年度に実施すべく、海外交流アドバイザーをアジア諸国へ派遣し、国際会議のための下地作りとして、来年度からの各国との新規国際交流プログラムの開拓を行い、具体的なプラン策定までを行うことができた。

3. Classi 社との e-ポートフォリオにおける新機能の共同開発について（資料 3）

ポートフォリオを活用した主体性の評価において連携している Classi 社とは、「グローバル探究-BASIC」授業でのポートフォリオ（紙及び電子両方）の使用とポートフォリオを用いた「探究学習のプロセス評価」について共同して検証を行った。その過程で、学習支援システム（Classi）の新機能を共同で開発し、「e-ポートフォリオへの手書き文字取り込み機能」を Classi が実装することとなった。

4. 成果普及のため「ICT×探究学習カンファレンス 2020」の実施について（資料 4）

3.の Classi 社との協業の中で、様々な成果が見えてき、また他の学校とのつながりもできたことから、その成果発表の場として、全国の教員を対象とした「ICT×探究学習カンファレンス」を共催することとした。全国から150名を超える教員が参加し、発表者としても、本校のカリキュラムアドバイザーによる基調講演と、事業担当責任者である副部長による本校の取り組み発表だけでなく、本校の教員7名と生徒による、テーマの異なる4つのワークショップを開催した。更には、本校だけでなく、静岡県立三島北高等学校(WWL 拠点校)、私立高槻中学校・高等学校（本校の連携校）、日本大学三島高等学校・中学校からもスピーカーを招き、それぞれの活動を発表・共有する機会とした。北は東北地方から南は九州地方まで全国から集まられた、様々なバックグラウンドを持つ先生方より多くの示唆と励ましを頂き、今後のつながりも作ることができた。また、本校の教員にとっても自らの取組をまとめ発表することは、プログラムの検証の意味でも非常に意義のあることであった。

関西学院高等部
「教員ワークショップ」



2020年1月21日（火）
15:45～17:00

※なるべく「学年」と「教科」が
重ならないようにお座りください。



はじめに

本日のファシリテーター



古瀬 正也

古瀬ワークショップデザイン事務所 代表

関西学院高等部
「教員ワークショップ」



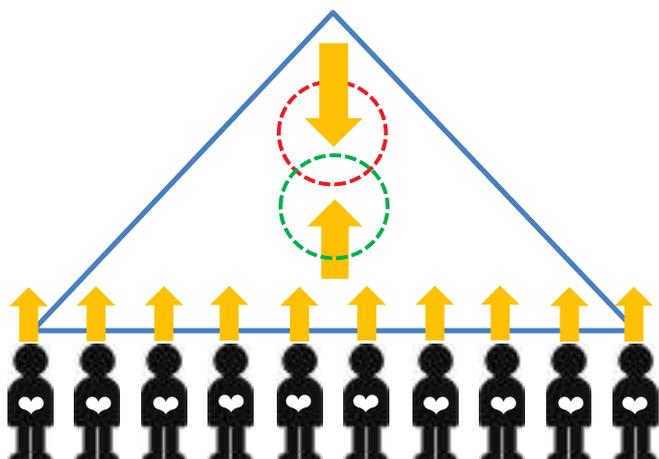
2020年1月21日（火）
15:45～17:00

本日の目的

教員一人ひとりの〈主観〉を
あえて徹底することから
「教育目標」を一緒に考える。

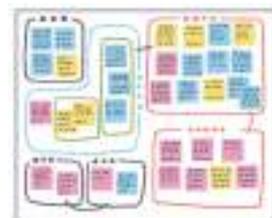


トップダウンとボトムアップの融合型



ワークショップ「KJ法」

1. 個人のブレインストーミング
2. グループ共有と分類
3. 個人のホットチョイス
4. ギャラリーウォーク
5. 個人の振り返り
6. グループ共有
7. 全体共有



本日の流れ

- チェックイン「オープン・センテンス」
- ワorkshop「KJ法」
 1. 個人のブレインストーミング
 2. グループ共有と分類
 3. 個人のホットチョイス
 4. ギャラリーウォーク
 5. 個人の振り返り
 6. グループ共有
 7. 全体共有

個人のブレインストーミング

あなたは、高校での教育を通して生徒の【何を】【どのように】育みたいですか？

何を？
(What)

どのように？
(How)

オープン・センテンス (1人2分)

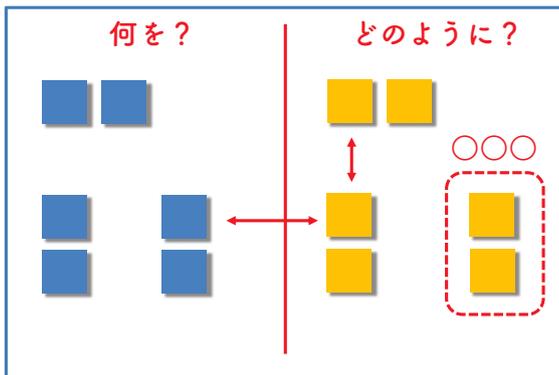
1. 何も考えず、以下の言葉を「声」に出していく。
2. 続いて、自然と湧き出る言葉に身を委ね、話していく。
3. 湧いてこない場合は、冒頭の言葉を何度か繰り返す。

これまでの「教育目標を見直す動き」について正直、私が感じていることは...

グループ共有と分類

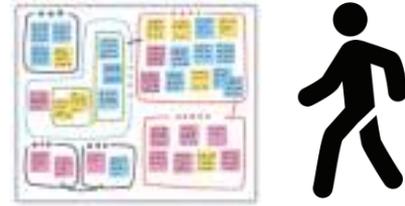
- ① 模造紙を半分に線で区切る。
(左：「何を」 | 右：「どのように」)
- ② 1人ずつ付箋を1枚ずつ説明しながら、模造紙に貼っていく。
- ③ 2人目から前の人が出たものと近しいものがあれば、その近くに貼っていく。
- ④ グループ全員の共有が終わったら、全員で見やすいように分類する。

模造紙の例



ギャラリーウォーク (10分)

自由に他のグループの模造紙を
見て歩きまわしましょう!

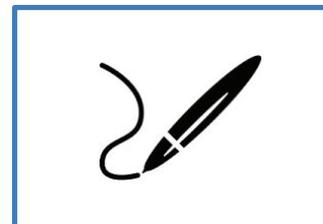


グループ共有と分類

- ① 模造紙を半分に線で区切る。
(左: 「何を」 | 右: 「どのように」)
- ② 1人ずつ付箋を1枚ずつ説明しながら、模造紙に貼っていく。
- ③ 2人目から前の人が出したものと近しいもの
があれば、その近くに貼っていく。
- ④ グループ全員の共有が終わったら、全員で見
やすいように分類する。

個人の振り返り

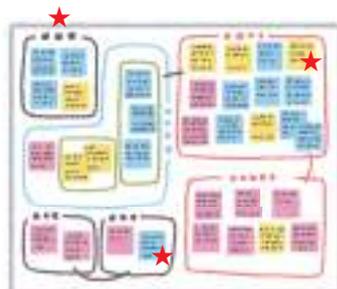
今日の時間の中での
あなたにとっての(一番の)発見
や気づきや学びは?



個人のホットチョイス

私が最も大切だと感じるもの複数に
何らかの「印」をつけましょう!

- 何を: 3票
- どのように: 3票
(合計: 6票)



グループ共有 (1人1分程)



全体共有



おわりに

関西学院高等部
「教員ワークショップ」



2020年1月21日（火）
15:45～17:00

教育目標を考える
「教員ワークショップ」
第2回



2020年3月3日（火）
13:30～14:45

はじめに

前回、自分が制作した模造紙がある
グループにお座りください。



※前回、欠席された方は、どこか
お好きなグループにお入りください。

ファシリテーター



古瀬 正也

古瀬ワークショップデザイン事務所 代表

教育目標を考える
「教員ワークショップ」
第2回



2020年3月3日（火）
13:30～14:45

第1回の目的

教員一人ひとりの〈主観〉を
あえて徹底することから
「教育目標」を一から考え直す

第1回でやったこと

高校での教育を通して
生徒の「何を」「どのように」
育みたいのかを「見える化」する

第2回の目的

関西学院高等部の「今の教育目標」
と「今検討中の教育目標」を
熟読した上で、**グループごとに**
納得のいく「教育目標」をつくる

最終的な目的

納得のいく「教育目標」を
みんなで作る

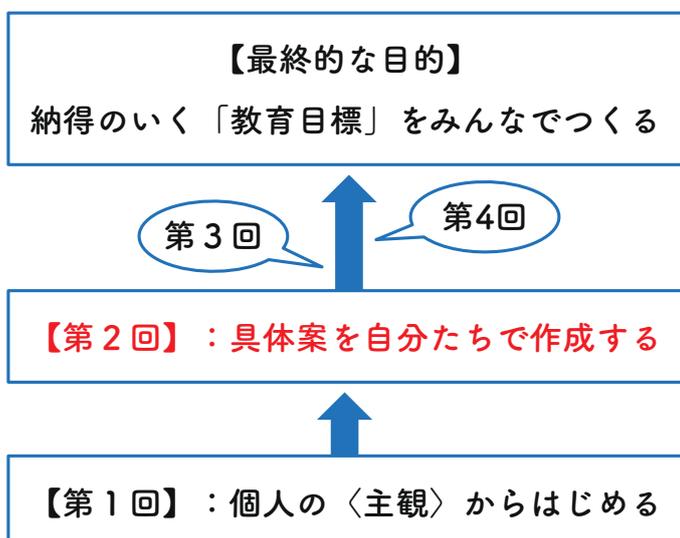


本日の流れ

- 思い出しチェックイン
- ワークショップ：教育目標をつくる
 1. 個人で熟読
 2. グループで共有
 3. グループで教育目標をつくる
 4. 隣のグループと共有
 5. 全体共有

思い出しチェックイン（5分）

- 改めて、前回の模造紙を眺めてみて
- 「いま、感じること・思うこと」を
- 1人1分程でテンポよく順番に話す。



ワークショップ：教育目標をつくる

1. 個人で熟読
2. グループで共有
3. グループで教育目標をつくる
4. 隣のグループと共有
5. 全体共有

個人で熟読（7分）

- ① 「今の教育目標」と「今検討中の教育目標」を一言一句、熟読しながら
- ② 「特に大切だと感じる箇所」は下線を引き
- ③ 「検討の余地を感じる箇所」は丸で囲う



【例】

イエス・キリストを通して、
人と世界に仕える使命感と実力を養い、
豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う

- 「特に大切だと感じる箇所」：下線
- 「検討の余地を感じる箇所」：丸

個人で熟読（7分）

- ① 「今の教育目標」と「今検討中の教育目標」を一言一句、熟読しながら
- ② 「特に大切だと感じる箇所」は下線を引き
- ③ 「検討の余地を感じる箇所」は丸で囲う



グループで共有（8分）

※1人2分程で



グループで教育目標をつくる

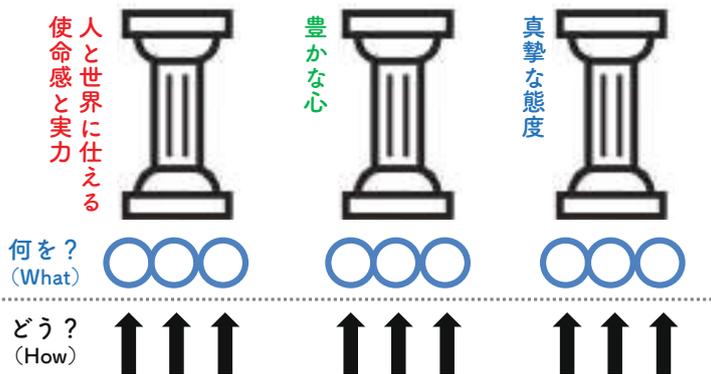
【課題】 各グループの中で
最良の「教育目標」をつくる

【設定】 各グループに「教育目標」を
決定する権限があると仮定する

【手順】

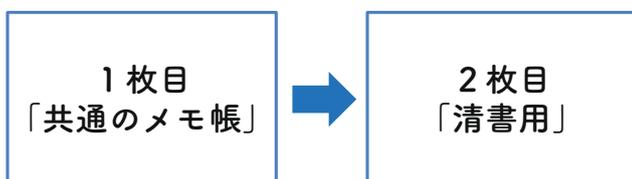
- ① 最上位目標の「高等部教育目標」の文言を定める。
- ② 定めた「教育目標」を実現させていくためには、具体的に生徒の「何を (What)」「どのように (How)」を育む必要があるのか？を話し合う。
- ③ ②の問いを十分に話し合った上で、「教育目標」と「何を (What) どのように (How) 育みたいか」の関係性を図式化する。

【例】 【高等部教育目標】 イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う



模造紙の使い方

- 1枚の模造紙は、話し合いの「共通のメモ帳 (下書き用)」として使う。
- もう1枚の模造紙は、決定したものを「清書用」として使う。



教育目標をつくる (30分)

- ① 最上位目標の「高等部教育目標」の文言を定める。
- ② 定めた「教育目標」を実現させていくためには、具体的に生徒の「何を (What)」「どのように (How)」を育む必要があるのか？を話し合う。
- ③ ②の問いを十分に話し合った上で、「教育目標」と「何を (What) どのように (How) 育みたいか」の関係性を図式化する。

隣のグループと共有 (5分)

※1人2分程で



全体共有



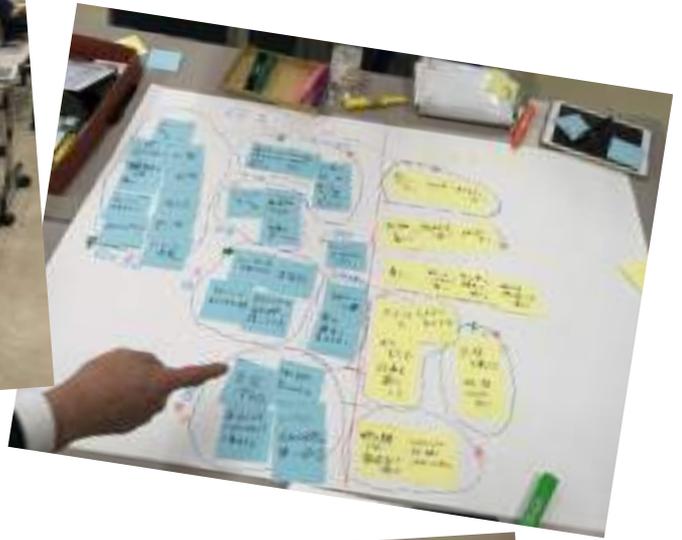
おわりに

教育目標を考える
「教員ワークショップ」
第2回



2020年3月3日（火）
13:30～14:45

教育目標を考える教員ワークショップ



(資料2) 海外交流アドバイザーによる、探究型国際交流プログラムの新規開拓について

<p style="text-align: center;">SDGs Study Tour 2020 August</p> <p style="text-align: center;">Bali island Indonesia</p>			
Japanese Participants (敬称略) GSIIIメンバー+希望学年? (高3)		HARAPAN Students	
Date	Time	Activity	Theme
		<p>【目的】</p> <p>★GSIII 毎週1回のスカイプオンラインで議論してきた社会課題における自分たちのアイデアを現地で実施する。</p> <p>★オンライン上でこれまで毎週議論してきた仲間と実際に会い、直接議論する</p> <p>★インターネット上や友達を伝って情報収集してきたインドネシアの文化を5感をフル活用し、学習する。</p>	
	1050H 1720H 1800H 1930H	日本出発 (GA883) 直行便 デンパサール空港着 (インドネシア・バリ島) 市内レストランにて、HARAPAN 高校バディと夕食、 市内ホテルチェックイン	
Day1	0800H 0900H ~ 1100H 1200H 1300H 1330H ~ 15:30H 1600H 1730H 1830H 1900H 2000H	<p>ホテル出発→バリ島 マングローブへ</p> <p>マングローブの実で作ったウェルカムドリンクを試飲 ボートに乗り、マングローブ観察 (なぜ湖全体が綺麗なのか、マングローブのような環境学習は学校で行われているのか等 現地 NGO メンバーに適宜 Q&A)</p> <p>ハラパン高校に戻り、バディと再会。ハラパン高校の食堂でランチ</p> <p>ウェルカムセレモニー アルティカ校長先生スピーチ/ハラパン高校生によるパフォーマンス (バリダンス<伝統舞踊>) 等</p> <p>ハラパン高校生徒会による歓迎会 ・インドネシア語講座、ゲーム、ダンス等、KG 生からの出し物</p> <p>ハラパン高校の授業参加<バリダンス講座 (練習)></p> <p>翌日に行う移民街にある幼稚園生に対する教育プログラムの準備 With ハラパン高校生</p> <p>夕食 ホテル到着</p>	<p>■マングローブが環境や社会に与える影響や (地球温暖化との関わり)</p> <p>■インドネシアの高校の食堂の雰囲気や物価を知る。ハラパン高校生との会話を楽しむ。 ・校内を歩けば、日本語で話しかけられたり、写真を撮りたいと言われたりと、親日を感じる事ができる。</p> <p>■伝統舞踊であるバリダンスの学習</p> <p>■移民街=ジャワ島からきた移民が住む街。町は貧しく、多くのウェストピッカーが住む。 ■その子供たちに対して教育として提供できることは何か/必要なこととは何かを考える。</p>

Day2	0800H 0900H ~ 1030H 1100H 1200H 1300H 1600H 1830H	ホテル出発⇒移民街のある幼稚園へ 昨日議論して用意してきたプログラムを移民街の幼稚園生に提供 With ハラパン高校生 全体記念撮影 孤児院や訪問した幼稚園を管理している館長にインタビュー ハラパン高校に戻り、バディとランチ ハラパン高校のバディとともにそれぞれ分かれ、授業を受ける。 通訳は随時バディが行ってくれる予定 ハラパン高校の授業参加<バリダンス講座(本番)> 昨日練習した続きを完成させ、実際に舞台上でパフォーマンスを行う。 バディとともにホストファミリーのもとへ帰宅&ディナー 【ホームステイ】KG生2名×バディ1~2名	■自分たちで考えたアイデアの実施。 それを受けて喜ぶ子どもたちに対して幸福度を感じつつも、彼らのバックグラウンド・将来等に疑問を持つ ■子供たちと接して、改めて気になったこと等をインタビュー ■インドネシアの日常の高校生活に溶け込む ■バリ伝統舞踊ダンスを習得(簡単なもの) ■インドネシアの日常の暮らしを体験
Day3	0700H 0850H 1130H 1300H ~ 1500H 1900H	7時ホームステイ先を出発、学校に集合⇒ウブドへ ウブドの大自然を満喫するラフティングアクティビティ ガイドの巧みな会話術も楽しみながら、大自然の森の中を進む 昼食 旧ウブド王国を通り、伝統的なウブドマーケットへ 生産者による直接販売のため、ほぼ原価で商品を購入することができる 大絶景のウブド・ライステラスへ 絶景を楽しみながらカフェでフレッシュジュースを楽しむ (観光業と第一次産業(農業)の関係性。大絶景を作り出すライステラスが今後消えるかもしれない、その理由について考える。) 各ホストファミリーのもとへ【ホームステイ2日目】	■学校の日々の流れを理解する ■生産者は生計を立てるため様々な言語で営業をかけてくる。 インドネシア語 or 英語を駆使しながら値段交渉等会話を楽しむ
Day4	0800H 0930H 1200H 1400H ~ 1600H 1630H 1700H 1900H	荷物を持って出発 ホストファミリーへ各生徒から挨拶 ハラパン高校でフェアウェルパーティ ハラパン高校・KG生からのラストスピーチ ダンス、歌の合唱 記念撮影等 ハラパン高校でハラパン高校生たちと最後のランチ 有名な観光街クタへ 伝統的な市場とその隣にある最先端なショッピングモールのあるエリアでフリータイム。タピオカやマッサージを楽しむのもよし With ハラパン高校生のバディ? ショッピングモールの目の前にあるクタビーチで夕陽を見る。 最後のお土産屋さんへ 洋服/グッズ/土産菓子などすべてが揃う ラストディナー ホストファミリーやハラパンのバディたちも参加 用意してきた感謝の手紙を読む。	■愛情を持って最後まで笑顔や泣いて接してくれるインドネシアの人の良さを最大限に感じることができる。 ■伝統市場の隣に建設された最先端な市場、それでも伝統市場が経営できている理由を考える。“伝統”の良さとは改めて考える。 ■感動のラストディナーと別れ
	2300H 0050H 0830H	チェックイン デンパサル空港 出国 DPS⇒KIX (GA882) KIX 到着	

■ マングローブ林 意外とバリ島に少ないマングローブ。湖には川と繋がっていないため、漂流するプラスチックゴミは少ない。ガイドに乗せたボートで移動し、説明を随時間く。右のジュースはマングローブの実で作ったもので甘くて、酸味がある。



ハラパン高校



ハラパン高校の食堂（小中高共通のためとても賑やか）



親日の生徒が多く校内で多く声をかけられる



ハラパン高校では伝統舞踊を授業で習うため、全員が踊ることができる。パティにコツを教えてもらいながら実践。



「観光」をテーマとした授業でのディスカッションの様子



移民街に住む子どもたちに何を伝えたいか、接した子どもたちにどのようになってもらいたいかを考え、企画を練る。



アイデアを実行に移し、どのような学びが得られたか



ウブドの大自然に囲まれた体感アクティビティ：ラフティング



バリ島大人気のローカルマーケット



大絶景のライステラスを一望できるカフェでひと段落。観光業と農業（一次産業）について考える。



夕陽が絶景のクタへ。ローカルと最新のショッピングモールを比較しながらバディと最後の時を過ごす。

最後のディナーでは大号泣の生徒たち



バリに行った生徒、ハラパン生をホームステイで受け入れた生徒、オンライン授業を受講した生徒は、現在も、インスタグラム等でハラパン生とは繋がっており、時折メッセージをし合ったり、バリを訪れた時に交流しているそうです。



SDGs Study Tour

2020 August

Japanese Participants (敬称略) 最大 30 人(高2)	Filipino Students	LOOB Staff
--	-------------------	------------

Date	Time	Activity	Theme
		<p>★WWLC 生向け 「世界から日本を考える」「社会課題を現場で実感」</p> <p><事前学習> グローバル探究コース テーマ「環境問題について」</p> <p>温暖化現象がより深刻となっている今、改めて「地球温暖化・気候変動」について探究する時間を作る中で、本コースでは、海外の同級生と意見交換・議論する授業を計画しています。</p> <p>●6月18日「グレタ・トゥーンベリのスピーチを受けて、どう考えるか」</p> <p>●7月2日「両国の危機意識と今できることについて考える」</p> <p>★⇒8月のフィリピン実地研修で対象学生と議論&フィールドワーク</p> <p>その他グローバル探究コース以外で参加する生徒「AI/ハンズオンコース」には、別途7月または8月にオンライン授業でフィリピンの学生と事前に交流する時間を設ける予定です。</p>	
	0955H 1320H 1800H 1920H 2000H	<p>Departure from Kansai (フィリピン航空 PR407)</p> <p>Arrival at Manila International Airport</p> <p>Departure from Manila (フィリピン航空 PR2147)</p> <p>Arrival at Iloilo Airport</p> <p>Hotel</p>	
Day1	0830H 0900H 1030H 1200H 1300H 1700H 1800H	<p>NGO LOOB へ</p> <p>NGO LOOB 小林代表よりフィリピン&社会課題についてイントロダクション</p> <p>市内観光:イロイロミュージアム(日本占領下の貨幣等)と戦争の祈念館へ</p> <p>太平洋戦争の戦場となったイロイロ市。犠牲となった日本人、フィリピン人の当時の記録を見て、「戦争がもたらすものとは」「平和とは何か」を考える。</p> <p>昼食</p> <p>★高校訪問交流①</p> <p>英語の授業(All English)を体験。クラスメイトとして参加し、ワークも一緒に行う。その他、授業に枠を設け、フィリピンや日本の遊び・ゲーム等で生徒と文化交流、生徒へのインタビュー(個人的に気になること、普段の日常について等)</p> <p>学びの振り返り</p> <p>夕食</p>	<p>■フィリピンを知る</p> <p>1.車の交通量、物価、インフラ面、ごみの分別など街並み探索。</p> <p>2.日本とフィリピンの歴史を知り、平和について考える</p> <p>■同年代の学生と交流</p> <p>先ずは友達になる。異文化コミュニケーションを楽しむ</p>
Day 2	0830H 0900H 1200H 1300H 1500H 1700H 1800H	<p>ホテル出発⇒イロイロ市の村落散策へ</p> <p>村落散策・地図作り@ナムコン村 <LOOB が学習支援を行っている村></p> <p>村の子どもたちやフィリピンスタッフと村を散策しながら、出てきた問いを質問し合い、感じたナムコン村についてそれぞれ地図にまとめ、共有。</p> <p>昼食 @村の家 でフィリピン料理を食べる。一般的な家の中で食事をする事で、日常の生活感が見える。そのまま日頃の暮らしについてインタビューをしても OK</p> <p>村の子どもたちと一緒に植樹。木を植えることのメリット、伐採されることのデメリットについて学ぶ</p> <p>青年海外協力隊の活動見学、交流会 (社会のために働く楽しさ、やりがいを知る)</p> <p>着任してから苦労したこと、働いて良かったと思える瞬間等を話す。その他 Q&A</p> <p>学びの振り返り、明日の準備</p> <p>夕食</p>	<p>■ローカルライフ(暮らし)</p> <p>を通して、一見不便に見えるがそうでない彼らにとつての幸せ、発展とは考える</p> <p>■キャリアデザイン</p> <p>JICA の活動、継続的な支援の重要性、難しさを知る</p>

Day 3	0830H 0900H	ホテルを出発⇒現地日本人が経営する企業訪問へ 起業家の活動見学(すららネット<オンライン教育>か Glow English<英会話>) 起業することで現地に貢献できることとは何か、なぜ起業しようと思ったか これまでのことを振り返り、高校生・大学生に伝えたいこととは？(24才経営者) その他、インタビュー or Q&A	■キャリアデザイン 起業・一歩踏み出す勇氣 将来のキャリア形成における考え方を学ぶ
	1100H	貧困街に住む子どもたちとの交流 LOOB が学習支援する子どもたち、学校に行くことができない子どもたちを招き、事前に生徒が考えた企画の実施 & インタビュー	■教育とは何か 今子どもたちに一番伝えたいこととは。必要なことを考え、形にしてみる。
	1230H	子どもたちと一緒に昼食？	
	1400H	★高校訪問交流② 様々なアクティビティに参加し学んだことや感じたことを持ち合わせた上で、 現地高校生とフィールドスタディ(温暖化、ごみ問題を一緒に考えるなど) 「私たちに求められていること、できることとは何か」を探究 生徒へのインタビュー&議論(SDGs/社会課題的なこと)	■テーマ企画
	1700H 1800H	学びの振り返り 夕食	
Day4	0800H 0900H 1000H	ホテル出発⇒LOOB シェアハウスへ これまでの学びを整理、最終プレゼンの準備 最終発表 質疑応答	■英語でプレゼン 現地高校生等を招待
	1100H	フィリピン NGO スタッフと、ギマラス島へトリップ ボートに乗り、ギマラス等にある綺麗なビーチで観光 ・シュノーケリングやボートアクティビティ、ビーチスポーツ等を堪能	■地元民が良く休暇で過ごすギマラス島へ 最終日に大自然なビーチを満喫
	1400H	昼食 NGO フィリピンスタッフと協同でフィリピン料理を作る。 【食育】鶏を絞めて、調理することで、食べ物への有難みを理解する。	
	1600H 1700H	振り返り ラストディナー	■現地高校生を招待
	1005H 1110H 1435H 1920H	Departure from Iloilo Airport(フィリピン航空 PR2142) Arrival at Manila International Airport Departure from Manila(フィリピン航空 PR408) Arrival at Kansai	

渡航前	取り組む社会課題は、高校生が事前に選定する(日本とフィリピンで同時進行) 相手の国はどうなっているか?の質問を作り (例: SDGs/貧困・教育格差、ごみ問題、気候変動等)
現地で	準備したインタビューを行う
現地で(もしくは渡航後)、	インタビュー調査からプレゼンをまとめる

NGO LOOB 小林幸恵代表:



小林幸恵。北海道北見市出身。LOOB 代表理事。20歳の時に参加したフィリピンワークキャンプが人生の原体験となり、大学卒業後の1998年にマニラに単身移住。NGO や日系企業での経験を得て、2001年にフィリピンの非政府組織(NGO) LOOB を創設した。以来、青少年の健全な成長が世界から貧困と戦争を減らす最良の手段と信じ、日本とフィリピンの交流事業、研修事業、フィリピン貧困層への支援事業を多数手がける。これまで日本から受け入れた青少年ボランティアは2,000人以上。在フィリピン20年目で、旦那と8歳の息子、白い犬、日本の大学生インターンら15人の大所帯で暮らす。[外務省推奨 SDGs に取り組む運営団体](#)

ミャンマー

- 人口 [約 5,141 万人（日本の半分以下）](#)

ビルマ族が約 70%を占め、そのほかシャン族、カレン族、カチン族など 135 の少数民族が居住。国民の約 9 割が敬けんな仏教徒で、女性を含めた多くの国民が「徳」を積むために一時的な出家もする。

- 面積 約 68 万平方キロ（日本の約 1.8 倍）
- 資源
 - ・宝石の産地（ルビー、サファイア、ヒスイなど）
 - ・カチン州の山岳地帯は高級なチーク材の産地
 - ・天然ガスは東南アジア第 3 位の埋蔵量
 - ・インド洋に面した美しいビーチなどの観光資源
 - ・世界三大仏教遺跡の一つ、世界遺産にもなったバガン
- 首都 ネビドー（ヤンゴンから 2005 年後半～2006 年 3 月頃にかけて移転）



朝の托鉢

タウンジー（シャン州の州都）

- ミャンマーの避暑地。（暑くはなく、夜は長袖で過ごすのが心地良い程度）
- アクセス：ヤンゴン空港から乗り継いでヘーホー空港まで。そこから車で 1 時間ほど。
- シャン州の州都でミャンマー第 4 の都市。
- 24 時間体制の大きな病院が 2 つあり、英語も通じる。
タウンジー在住の日本人もよく使用している病院であり、英語が話せる医師も常駐している。



SDGs Study Tour

2021 March

Myanmar Yangon-Heho

Date	Time	Activity	Theme
		<p><事前学習></p> <p>1回目 ・ミャンマーってどんな国？（テーマ毎に分かれ、リサーチ内容を共有） 食：三ノ宮にある飲食店に行ってみる 文化、洋服、製品、言語、ニュース等身の回りにあるミャンマーの発見 +疑問に思ったことをリストにチームごとにまとめ、全体共有。</p> <p>2回目 ・ミャンマーの教育について調べる。（公立/私立/僧立の違い） +疑問に思ったことをチームごと作成し、共有。 ※17才：日本は高校3年生、ミャンマーは大学2年生</p> <p>3回目 海外現地・大学生との交流 疑問に思ったこと/仕組み等を現地タウンジー大学の生徒に聞いてみる。 →タウンジー大学の学生も、日本の生徒の問いに考え直す良い機会となる</p> <p>4回目 ・タウンジー大学の学生と交流 パート2 僧院や村の現状・課題を調べ、自分たちにできることを考える。 教育支援（教材開発、授業運営等）or トイレや井戸の開発など（寄付金） をグループに分かれて考える。</p> <p>5回目 ・タウンジー大学の学生と交流 パート3 最終準備</p>	<p>■ミャンマーについて知る。調べた中で出た疑問を共有し、その問いについて皆で考える。</p> <p>■ミャンマーの抱える課題、調べて気付いた魅力は何か</p> <p>■徳を積む仏教文化、僧立の仕組みを知る。寄付に対する課題を知る。（継続的支援が続かず問題を抱える僧院がほとんどである。）</p> <p>■自分が持ってきた当たり前の考えをもう一度考え直してみる。</p> <p>■今日支援できても明日支援できるのか。継続する大切さを考える</p> <p>■”してあげている”だけで、現地からすれば必要のないサポートをしていることだってある。本当に現場から必要とされていることを知る。</p>
Day1 木	<p>〇〇H</p> <p>〇〇H</p> <p>〇〇H</p> <p>〇〇H</p> <p>〇〇H</p> <p>〇〇H</p>	<p>日本出発（Flight ）</p> <p>クアラルンプール着</p> <p>クアラルンプール発（Flight ）</p> <p>ヤンゴン国際空港到着後、市内へ</p> <p>市内レストランにてヤンゴン在住の日本人起業家・社会人と夕食</p> <p>ホテルチェックイン</p>	<p>■キャリアデザイン 「海外で働くとは」「やりがい」等</p>

Day2 金	0600H	ホテル出発→ヤンゴン空港へ	<p>■家族を支えるため田舎から農業技術を学びにくる真面目で純粋な子どもたちから学び感じることもまた多い。</p> <p>■生きるために必要なことと、その日常生活が与えてしまっている社会課題について考える。</p> <p>■実際に自分の目で現場を確認し、最終調整に入る。</p> <p>■気になること、日常の課題、日々の楽しいこと&大変なこと等感じたことを自由に聞く →僕たちが感じる幸福感や日常生活の違いを知る。学ぶ喜びは何か。大変さを彼らは苦勞と捉えているのか</p>
	0900H	ヤンゴン空港→ヘーホー空港（シャン州）へ	
	1000H	ホテルチェックイン	
	1030H	ホテル出発→タウンジーへ	
	1130H	地球市民の会 ミャンマー駐在員・鈴木亜香里さんのところへ 教育・農業支援などの取り組みを聞くとともに、農業実習生と交流する。 また、シャン州が直面する環境問題について話を聞く。その後 Q&A (昼食込み)	
	1400H	僧院でタウンジー大学の学生と交流 事前学習で準備してきた教育内容の準備&最終打合せ (英語×○○) 対象は小学生	
	1500H	各チーム、クラスに分かれ、考えてきた内容を実施&インタビュー 気になること、日常の課題、日々の楽しいこと&大変なこと等感じたことを自由に聞く	
1630H	一緒にダンス、歌の合唱		
1800H	夕食 & 振り返り		
1930H	ホテル到着		
Day3 土	0900H	タウンジー大学の学生と待ち合わせ 学生が考える好きなタウンジーを紹介	<p>■普段、現地の大学生がどのような週末を過ごしているのか、彼らが過ごす日常に溶け込み、現地大学生が考える観光コースを満喫してもらう。</p>
	フリー タイム	<ul style="list-style-type: none"> ・お寺で女子トーク ・ローカルマーケット ・大きなショッピングモール ・ミャンマーのローカルゲームセンター ・タピオカドリンク等々 (移動は車) 	
	1800H 1900H	ホテル集合 & 夕食 (ミャンマー鍋ビュッフェ) 振り返り	

Day4 日	0800H 0900H 1000H 1200H 1300H (2H) 1500H 1530H (1H) 1630H 1730H 1800H 1900H	朝食後、荷物を持ってチェックアウト ニャウンシェのホテル(Thanlwin Guesthouse)に到着&チェックイン タウンジー大学の学生とレツマウングエ村(人口100人)に集合 ・村の状況や課題を説明し、その後村落散策 with タウンジー大学の学生 ・村人の自宅でインタビュー(小休憩) ・村落散策&インタビューを経て、感じたことや学んだことを共有 その後、自分たちにできることを考え、村人に提案 村の家で昼食 小学校/幼稚園の空き部屋で提案内容の実現に向けてディスカッション ・実現までにどのようなプロセスが必要か ・次学年にどう繋げていくか、修了生としてどのように関わっていくか ・各チーム発表 ・午後のアクティビティ決め 子どもたちを集め、小学校の校庭を使ってアクティビティ (サッカー/大縄跳び/けん玉等; with タウンジー大学の学生) ホテル到着 夕食&振り返り 希望者 ホテル近くにあるナイトマーケット	<p>■村の人から直接話を聞くことで感じた「自分たちにできること」。それは本当に村人の役に立てるのだろうか。率直に出た“WANT”をアウトプットし、その熱量のまま行動に移す。</p> <p>■自らの提案内容をタウンジー大学の学生とともにアイデアを形作る。</p> <p>■純粋で学ぶことに一生懸命で積極的な子どもたちと共に時間を過ごす。将来の夢等自由に聞ける空間をつくる。</p>
Day5	0830H 0900H 1000H 1100H 1230H 1330H 1400H 1500H 1600H 1700H 1800H 1900H	ホテル出発 インレー湖観光 インレー湖が直面している環境課題を実際に見る ボートで約1時間 ミャンマーの大自然の中に囲まれた人々の暮らしや漁業を観察 約1000の仏塔が並ぶインデインを訪問(今から約1400年前に設立) インター族の村を訪問。村の散策やお菓子焼き(ライスクラッカー)体験 竹でできた民家にて昼食 ボートで移動し、インレー湖の伝統的な水耕栽培、浮き畑を見学 この浮き畑も実は水質汚染に関連している。 1400H 聖地とされているファウンドーウーパヤー(お寺)を訪問 1500H 桑の樹皮で作るシャンペーパー工房を見学 ミャンマーの伝統産業 1600H 蓮の茎で作るロータスの織物工房を見学&インタビュー 伝統産業 1700H 絶景の夕陽を湖上のボートから鑑賞 1800H ニャウンシェのホテルに到着 1900H 夕食&振り返り	<p>■180°開かれた世界に心を奪われ、その中に移る、洗濯板で洗濯をするお母さん、漁業をするお父さんたち、水浴びをする牛など日本にならぬ大自然に圧倒される。</p> <p>■宗教的な争いで殆どの仏像(ブツタ)の顔が盗られている。</p> <p>■村に住む原住民の家の作り、構成、キッチンなど、まるで昔にタイムスリップしているかのよう。それでも楽しそうに暮らす村人を見てどのようなことを感じたか。</p> <p>■昔から受け継がれる伝統産業の今後を考える。 1つ1つ手暇かけて作られていく商品の魅力や守られていくべき伝統をどう次世代に残していくかを考えてみる。</p>
Day6	0900H ~ 11:30H 1200H 13:00	ホテル集合 まとめワーク、最終プレゼンテーション 昼食 ホテルチェックアウト&出発	

SDGs Study Tour

2021 March

Siem Reap Cambodia

Japanese Participants (敬称略) 14人 (高2)		Mango School Students	
Date	Time	Activity	Theme
	1回目	<事前学習> ・カンボジアの勉強会 (テーマ毎に分かれ、リサーチ内容を共有し合う)	<p>■カンボジアについて知る。調べた中で出た疑問を共有し、良い問いについては皆で考える。</p> <p>■カンボジアの抱える課題、住んで気付いた魅力</p> <p>■本当に求められていることは何だろうか</p> <p>■本質を考えるとということ、なぜ?の背景を考えることにも繋がる知りたいを心から思える事前学習</p> <p>■今日支援できても明日支援できるのか。継続する大切さを考える</p>
	2回目	・グローブジャングルの石田さんから講演<9~11月>	
	3回目	・私たちにできることは何だろう 目的から逆算して考えて、企画し、準備をしよう。	
	4回目	商品開発? 商品 PR サポート? or 教育提供? (絵本・紙芝居・劇(ダンス)等) ・石田さんに企画を発表、ニーズと合っているかFBをもらう。	
	5回目	・準備 軸: 本当に困っているところはどこだろうかを見極めるために様々な視点で考え、リサーチする。 例: 教育 ①学校 ②子どもたち ③親 ④社会等々	
	1030H 1415H 1620H 1730H 1830H 2000H	日本出発 (VN321) ホーチミン着 ホーチミン発 (VN813) シェムリアップ国際空港到着後、市内へ 市内レストランにて夕食 ホテルチェックイン	
Day1 歴史を知る 戦争からひも解く平和とは何か	0800H 0900H 1130H 1230H 1430H 1600H 1930H	<p>ホテル出発→バイヨン中学校へ JST 代表 チア・ノルによるガイドランス 「内戦→和平→復興の歴史、農村部の現状と JST の活動について」</p> <p>バイヨン中学校校長からのカンボジアの教育についてガイドランス</p> <p>・中学生からの出し物、学校見学など</p> <p>中学生と昼食 (ココナッツカレー)</p> <p>中学生との交流</p> <p>バイヨン中学校の生徒たちコックペイン小学校で活動</p> <p>地雷博物館見学</p> <p>市内レストランにて夕食 (バンテアイスレイ)</p>	

<p>Day2</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">戦争からひも解く平和とは何か</p>	<p>0830H</p> <p>1200H</p> <p>1400H</p>	<p>ホテル出発</p> <p>日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JASA）の修復現場訪問</p> <p>バイヨン寺院見学、修復体験</p> <p>アンコール・トム内遺跡見学</p> <p>市内レストランにて昼食</p> <p>アンコール・ワット見学</p>	
<p>Day3 実情を知る</p> <p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">暮らしからひも解く幸せとは何か</p>	<p>0800H</p> <p>0900H</p> <p>1030H</p> <p>1100H</p> <p>1200H</p> <p>1330H (2H)</p> <p>1530H</p> <p>1700H</p> <p>1800H</p> <p>2000H (1H)</p> <p>2200H</p>	<p>ホテルから出発→スヴァイチュルム村へ</p> <p>マンゴースクール訪問</p> <p>幼稚園・小学生クラスに訪問（授業見学/自己紹介/外でサッカー等）</p> <p>日本で考えてきた出し物披露</p> <p>トラクター2台に乗り、移動。家庭訪問（日常の暮らしに触れる）</p> <p>少女・スレイソーの日々の生活や村の状況を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本人が井戸を掘って綺麗な水を飲めるようになったこと ・トイレがないこと ・料理に至るまでの準備 <p>スレイソー：妹とおばあちゃんと3人暮らし、両親は出稼ぎにタイへ</p> <p>文房具は買えず、村の花を摘み市場で売ること文房具を買っている。</p> <p>翌日にスレイソーと一緒にご飯づくり</p> <p>昼食（ナチュラルバリューが提供する給食）カンボジアの伝統料理を堪能</p> <p>ナチュラルバリューの工房見学 女性支援/フェアトレードを学ぶ</p> <p>ワークショップ（ものづくり体験：カゴの飾り付け→お土産に）</p> <p>高級路線で勝負するために品質を向上させてきた狙い<2年>を、NPO職員、ボランティアスタッフから伝える。</p> <p>ホテル着 休憩</p> <p>夕食 兼 学びの振り返り サーカスの事前学習 by 石田さん</p> <p>サーカス（難民キャンプの子が世界で一躍スターになれるステージ）</p> <p>「チャンスがあれば誰でも人生は変えられる。」ここに全てをかけている。</p> <p>売上→公立学校、サーカス校、音楽校、アート校の運営・教育費に充て、自立できている成功モデル。</p> <p>フランス NGO がアートセラピーの一環で始めたが、現在はカンボジア陣が運営している。⇒自立が目標であったため、現地に引き継いだのが理由</p> <p>ホテル着</p>	<p>■学校の日々の流れを理解する</p> <p>■設立理由&想い</p> <p>■今までのストーリーや課題や成長</p> <p>■従業員の商品にかける想い、心情の変化、</p> <p>■NGOのゴールとは</p> <p>■支援の最終地点はどこか</p>

<p>Day 4 交流</p> <p>暮らしからひも解く幸せとは何か</p>	<p>0700H ホテルから出発→スヴァイチュルム村へ</p> <p>0800H 市場散策（ローカルマーケット：食品） 野菜・果物ストリート 物価/衛生面/シーズンもの等特徴を掴む 気になるフルーツを買い、交流学生と一緒に食べる (気になったことを質問し合うことで、アイスブレイクに繋げる。)</p> <p>0900H (3H) 1200H 村落散策：田んぼのど真ん中にある少女スレイソーのいる家へ 生徒は、スレイソーとお昼ごはん準備体験へ ・水かまに 50 杯井戸から水を移し、薪割りした木で火起こし、鳥を絞める</p> <p>1200H 昼食 with 交流校&スレイソー（カンボジア料理+購入したフルーツ）</p> <p>1300H (1.5H) 1430H 交流した高校生とディスカッション：（テーマ；??） 教育事情(生徒と先生の立場関係、挨拶の仕方と家族事情を知る)</p> <p>1630H ホテル着 1730H 振り返り 近くにある学びのスペースへ（芝生広場）</p> <p>1900H カンボジアで頑張る日本人とともに夕食 <海外で働くとは><1 歩踏み出す勇気を持てたきっかけ等> [本田監督率いるサッカー選手、カフェ経営&理学療法士、アパレル経営者スパ運営スタッフ<30 才女性>、胡椒屋経営者<24 才女性>等]</p>	<p>■実際に買い物体験 数字や「ください」等 カンボジア語で挑戦</p> <p>■村の暮らしのリアルに 迫る。</p> <p>■スカイプ⇒直接出会う 感動体験 ■挨拶で手を合わせる位 置、先生の教育法等を学 ぶ</p> <p>■キャリアデザイン 海外で働いている 先輩方の話を聞いてみる</p>
<p>Day 5 開発 実施</p> <p>PBL</p> <p>暮らしからひも解く幸せとは何か</p>	<p>0900H ホテル出発⇒近くにある学びのスペースへ（芝生広場）</p> <p>0930H (1.5H) 1100H 自分たちでできることを考え、形にしてみる。<事前学習+今回の学び> テーマ：継続性、自立支援 例：職業 現地の子どもたちの将来の夢は、先生か医者程度。⇒それしか知らない 世の中にある仕事の共有、それををどのように学びになるよう伝えるか。 また、村の 8~9 割の大人が 1 次産業で働いているが、子どもたちはそれをや りたがらない。理想の職業だけでなく、既存の仕事に誇りを持てるよう工夫 も必要。</p> <p>1200H 昼食 Saiju~彩樹~日本人経営のカフェ（前日の日本人会にも参加）</p> <p>1300H (2H) 1500H ●ナチュラルバリューのメイン事業のトンレサップ湖の水草を使用した ミサンガづくり&スタッフにインタビュー(生まれ育ってきた背景、仕事に対 する姿勢、将来の夢など)</p> <p>1530H (90H) 1700H 1730H ★マンゴースクール生交流② 小中学生の 1 コマ分の授業を持つ 考えてきた授業内容の実施 アフタースクール ダンス&合唱「幸せなら手をたたこう等」</p> <p>1900H 振り返り&学びの共有 次学年にどう繋げていきたいか、何を引き継ぎたいか 最後のプレゼンテーション「テーマ：学び・感じたこと」 @芝生広場のカフェ</p> <p>2030H 夕食</p>	<p>■1つの商品を作る手間 とこだわりを知る フェアトレードの重要さ と購入することでどこに 繋がるかを理解する</p>

0900H	ホテル出発	
0930H	トシレサップ湖散策 ボート&道の駅観光	
1200H	昼食	
1300H	オールドマーケット ショッピング&観光	
1400H	自由行動(タピオカ/マッサージ/スーパー) 引率 by 石田さん&アンケート	
1800H	チェックアウト	
2030H	Departure from Cambodia (ベトナム航空 VN842) via Hanoi	
H	Arrival at Kansai	

Classi社との「eポートフォリオ」における新機能の共同開発について

手書き文字取り込み機能報告書

文責：Classi ポートフォリオ開発責任者 高野・マーケティングセールス統括 石川

●概要

- ・Classi2020 年 紙ポートフォリオ取り込み機能 β版開発にむけた検証
- ・貴校の探究学習時に活用いただいた紙ポートフォリオの取り込みを弊社で実験的にを行い精度や活用の流れを検証
- ・貴校で利用している探究学習の振り返りフォーマットをβ版の開発に活用

●検証手順・内容

- ①貴校が活用いただいている紙ポートフォリオフォーム（図①・参考資料①）について協議
- ②取り込む仕様を検討し、Classi 振り返りフォーム（図②・参考資料②）を開発
- ③参考資料②を活用し、12月に実施された探究学習の振り返り（紙ポートフォリオ：参考資料③）を実施
- ④33人64枚を回収→取り込み、検証の実施

図1：関西学院高等部振り返りフォーム

図2：Classi 振り返りフォーム

● 検証結果①：全体の精度について

	精度平均	標準偏差
総合	67.7%	110.03639
漢字	70.4%	39.981374
ひらがな	71.3%	56.465855
カタカナ	65.4%	14.830079
アルファベット	72.0%	8.0627637
数字	69.5%	2.4498704
その他	46.6%	11.450888

- ・各生徒単位の精度については、別資料（参考資料④）を参照
- ・全体精度平均 68 %（Classi が搭載予定の他フォームでは 90%前後を想定）
- ・文字種別で見ると、漢字、ひらがな、数字が平均的（70%前後）、カタカナが一番困難だった（他実証でも同様）
- ・本フォーマットについては、探究学習の利用を主におき、取り込み精度を高めるための下線部や枠作りなどを省いた仕組のため精度が落ちることは予想していた。開発側の感想としては、当初の予想よりも高い結果となった
- ・参考：取り込み精度重視のフォーマットについては図 3 のように下線部を入れることで読み込み精度を上げる形とした

図 3：他取り込みフォーマット例について

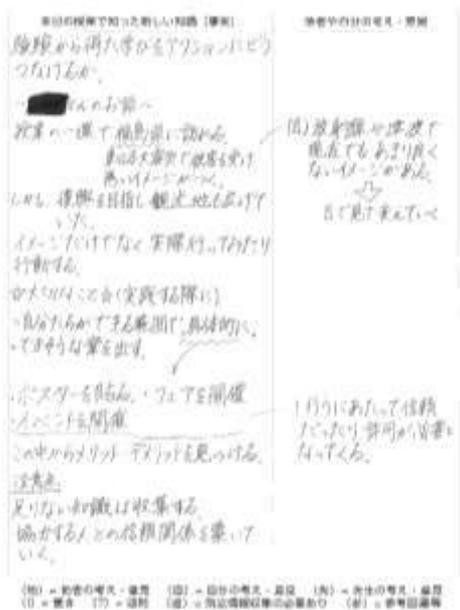
● 検証結果②：検証から見た記載ポイント・読み取り精度の具体例

精度が高かった生徒の記載ポイント

- ・一つ一つの文字をはっきり濃く描く ・少し大きめの文字の方が認識は良い
- ・1行を横に曲がらないで書く ・行間をはっきり分ける

読み取りに優れたポートフォリオ（全体精度 98%）

※参考資料⑤



読み取りがうまくいかなかったポートフォリオ（16%）



●紙ポートフォリオとeポートフォリオの違い・特徴について

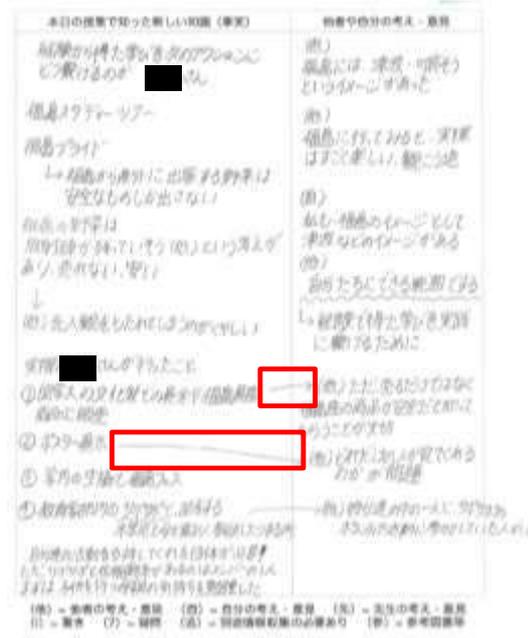
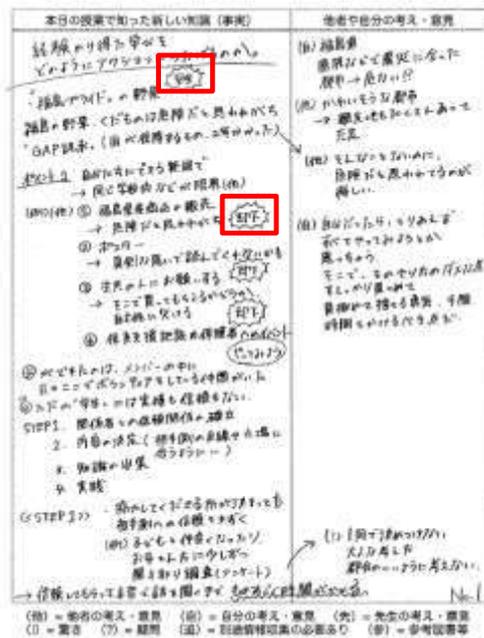
貴校には紙とeポートフォリオを併用いただいたことで双方を分析すると下記の傾向が見られた

1. 手書きポートフォリオの特徴

自問自答での問いかけ・自分自信の教訓の記載・心の本音など日記的な活用

①強調する部分に印をつける

②事実と考えを紐づける・線で結ぶ



2. eポートフォリオの特徴

自問自答での問いかけ・自分自信の教訓の記載・心の本音など日記的な活用

11月8日 第5回 WWLC

- 今日の授業のポイント：一番大切だと思ったことは何ですか？それはなぜですか？
- 「フィールドスタディへ行く」
- 自分の学びたいこと、興味のあることを明確にしておく
- 訪問元の情報は東意的に調べておく
- セックかくグループで訪問するのだから、お話を聞く際、一人ひとりテーマを決めてそのテーマについてのみメモする。(勇になっていることについてより細かく聞くことができるから)
- 相手の顔をみたり相づちをする余裕をもって話を聞く

●感想・質問：興味を持ったこと、疑問に思ったことは何ですか？それはなぜですか？
お話を聞かせていただいている側だからさっさと準備していくのは当たり前のこと。それだけお話を聴取してこれからの活動に活かすことができるが、自分の学びになるだけでなく、お話しして下さった方への一番のお礼になると思うので、無いの無いよう活動したいと改めて感じた。

11月15日 第6回 WWLC

- 今日の授業のポイント：一番大切だと思ったことは何ですか？それはなぜですか？
- ホームページは前から順番で読み込んでから訪問元へ行く。
- 金銭費を聞きたいなら誰からどのように寄付をもらっているのか、誰からいくらもらっているのか、など、ホームページに乗っているからみても、訪問時に直接聞いたら、むこうにどうして都合のいい話しかしてくれない可能性がある。話を聞いている時も冷静な判断ができるよう、準備は万全の状態を心がける。

●感想・質問：興味を持ったこと、疑問に思ったことは何ですか？それはなぜですか？
ボランティアをしている学生、ボランティアを受けている生徒、活動をしている団体、それぞれで価値観やものの見方、求めるものが違うと思うから、訪問時に聞いてみたい。

活動の気づきを再構成・今までの振り返りを繋ぐ→内容が深まっていく過程

フィールドワーク120(画)

※ 今日の記事のポイント：一番大切だと思ったことは何ですか？それはなぜですか？

「チャンスは女神は新妻じゃない」

チャンスは待ってこないから行き過ぎてから後ろ髪を引くとしても、後ろ髪は無い！

この「」さんの言葉を聞いて、チャンスは待ってこないから、自分にチャンスが回って来たら絶対に活かされるようにしっかりと活用することが大切だと思った。 達也さん、上野に落ちたハウ入居上女性の既婚者を知ってみたいな！(汗)とチャンスを持ちかけてもらい積極的に取り組んだ結果の仕事を覚えてどんどん大きな役割を任けてもらったそう。しんがって、まずは自分のスキルを磨き、一層またチャンスは二度と来ないと思い活用するが大層だと感じました。

※ 感想・質問：興味を持ったこと、疑問に思ったことは何ですか？それはなぜですか？

……達也さんに、「あなたも貴族の立場になりなさい」と言われたそう。貴族の立場の例として、実際に使に込められた人はみな様どうにかして困難から救うとするが、彼は決して、「どうして早くならならこの貴族の立場を担って居ないか」ということを問うからだと。何かあればこの立場に頼ればよいとみなすまで外に出ようとせず頑張ったそう。……達也さん、この中で、この人がいるから頑張れる、みんなの意見にになりたいとおっしゃっていた。私も、人の心の支えになれるような解らぬ人になれるように頑張ろうと思った。



9/20 グローバル探求

※ 今日の記事のポイント：一番大切だと思ったことは何ですか？それはなぜですか？

今日の授業を通して私が一番大切だと思ったのは、誰が相手でも自分の意見をしっかりと伝えられることです。なぜなら、意見を伝える、聞いてもらう、と心通らえてもらうことで一人一人は思いが伝わります、考えもいってよくなる様々な経験に出会えることができるからです。

※ 感想・質問：興味を持ったこと、疑問に思ったことは何ですか？それはなぜですか？

今日の授業を通して、9/20を思い出して書くことができました。問題解決方法を考えたり、相手の現状を知ることで社会のために少しでも自分ができることを考える貴重な時間を持つことができました。このような機会を準備してくださりありがとうございます。この授業に是非参加して、多角的な考え方ができたり、新しい思いにもしっかりと自分の意見を持つように成長したいです。この活動を大切にしてくれる先生方や仲間と一緒に、もっと9/20について深く探求したいです。疑問に思ったことはどうすれば「リーダーシップ」が解決されるのか、誰一人取り残さず生活できるのか、です。今の私には、解決方法が思いつけなかったのも、この新しい意見を発信される様に、WWJGの時間を通して、産んでいきたいです。もし私がWWJGの授業を受けることになれば、まだまだ勉強中である国産や性別を理由とした差別や、身体障害者の方々が持っているパフリンピックについて調べたいです。またシングルマザーの皆さん、早くに親と離れて暮らすことになった環境で暮らしている子ども達のための社会活動や、実際に老人ホームや保育園などに出席交流活動をしてみたいです。



紙ポートフォリオのメリット

強調することや関連性を示せる
思考や工夫の跡を残せる
素早く記入できる
回収率を上げられる

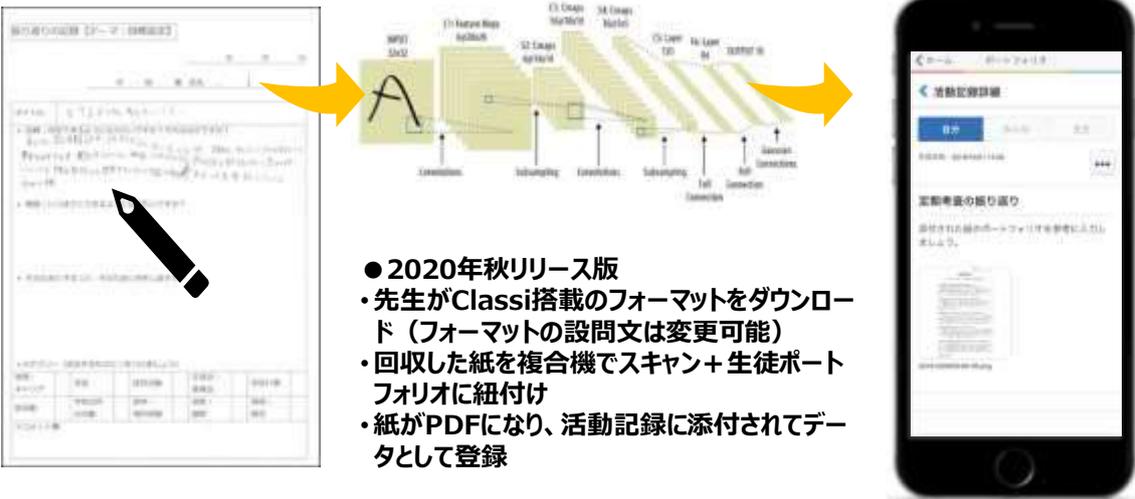
eポートフォリオのメリット

生徒自身の本音がしやすい
内容の再編集や統合が簡単
画像や動画なども扱える
遠隔で相互評価が簡単

●次年度開発予定 紙ポートフォリオ取り込み機能について

1. 手書きの紙ポートフォリオを取り込み、Classi ポートフォリオに格納する機能

デバイス無しでもeポートフォリオ活動が可能な手書き読み取り機能



- 2020年秋リリース版
- 先生がClassi搭載のフォーマットをダウンロード（フォーマットの設問文は変更可能）
- 回収した紙を複合機でスキャン+生徒ポートフォリオに紐付け
- 紙がPDFになり、活動記録に添付されてデータとして登録

2. タイトルはテキスト化されるが、内容面は PDF として添付 ※検索やテキストマイニングには利用可



3. 手書きポートフォリオのテンプレートを利用ケースに合わせて用意
（貴校と共同開発した探究用のフォーマットはここに格納予定）



___年___組___番 氏名_____

【凡例】

- ⊗ = 友達の考え・意見 ⊙ = 自分の考え・意見 ⊕ = 先生の考え・意見 ⊕ = 驚き
⊕ = 疑問 ⊕ = 別途情報収集の必要あり ⊕ = 参考図書等

【本日の授業で知った新しい知識（事実）】

【友達や自分の考え・意見】

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

_____ 年 _____ 組 _____ 番 氏名

本日の授業で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p><福島 スタディー ツアー></p> <p>暗くない → めっちゃ明るい.</p> <ul style="list-style-type: none"> - 復興 - 観光. - 安全なものしか出さない野菜 - 国が保証 (FARM認証). 	<p>(自) 福島 → 原発?</p> <p>(!) 観光地ある知らなかった.</p> <p>(?) Xデミア悪いニュースしか見ない.</p> <p>(自) 福島の方が、はじめても努力してる.</p> <p>(他) 実は県民エネルギーのために 悔しい. ↳ 他者にも知ってほしい.</p>
<p>実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 限界がある. ・ 自分たちが努力して出せる最大は? <p>↳ ホスター, こっちで売る (コマーサー) (英語にしてみよう → 国際!) But. 興味ない人見ない...</p> <p>生協で。 But. 買ってもらは主権性x</p> <p>③ 保育支援 - 保護者へ ↳ 元々の繋がりがある!!!</p>	<p>(他) 自分の興味のあること出せない ↳ 大学生挑戦、出せる.</p> <p>(?) 誰が限界決める? (?) じゃあ、してみよう?</p> <p>(他) たた売っただけx 王理解した上でがいい.</p> <p>(自) 色々な立場の思いを知ること 更に改善できるかも.</p> <p>(自) 根柢なし大変.</p> <p>(他) たたの"学生"は実績、信頼x.</p> <p>協力者探す。大変.</p>
<p>注意</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関係者との信頼関係 — 間に入る人の信頼も... 福島も... 2. 内容明確 3. 足りない知識を収集 4. 実践! <p>↳ 話し → 少くも目標へ</p>	<p>(自) 信用 - 資格大切そう。あれはいいな.</p> <p>(自) 責任がある.</p> <p>(他) 限界がある (?) それをこなすには?</p> <p>(自) 話し相手の立場になる。大切な 様々な観点から計画を立てる。 実現出来るか</p>
<p>雑</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時間をかけて。調査。会話。確認。 2. 明確な目標、最適な手段選び。(リサーチ、Q&A) 3. 調べつくして可能な。時間について、始めからヒントしぼる。 <p>外に手かりで信頼を</p>	<p>(自) 信頼できないと辛くない大変.</p> <p>(他) 何も比較するべき。(?) 元々興味あるからと 現状がわかる?</p> <p>(他) 食の安全を伝える。</p>

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

① 本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>経馬食をどうアクションしようかの? の福島スタディツアー かわいそう → 復興から立ち直る 生活にあふれた土地</p> <p>from 福島の野菜は絶対安全</p> <p>自分たちでできる範囲 ・大学内の人 ・興味のある人</p> <p>KG festival で展示出品 ・海外の人にも知ってもらいたい → 国際学部 ・生協での福島フェア ・学内の保育施設での保護者向け event with 教育学部 ↳ 学生に自由に興味のあることにうちをやる But "F=O" 大学生に信頼なし ↳ 施設との協力関係</p> <p>STEP1 関係者との信頼関係 STEP2 内容の決定 (どのイベントがコア?) STEP3 足りた知識 (子どもの母にちなみ自給) STEP4 リーディングにせよ実践</p>	<p>(他) 実際に自分もかかろう だと思ってる</p> <p>(他) ↓自分の思いでいいこと 全然ちがう!!</p> <p>(他) 県民でも聞いてほしい ↳ どう見られるかは自分たちの 想像とちがうのに 実際は "偏見" あり</p> <p>(他) や、し、り、限、り、が、あ、る</p> <p>(他) 興味のある人も限定的な 人しかやらない ↳ 自分たちのサポート → どうにもならない?? ↳ 主体性に欠ける</p> <p>(他) 大学生に「これは」絶対 できる</p> <p>(他) 何回もこの2つを繰り返す ことが重要</p>

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

② 本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>STEP1. 情報があってもやっぱり信頼が重要。 信頼×T=I=I 本来に知ってる(正しいこと) ↓ (知ってる知らないかも！) ↓ ・正しいほど子どもとふたあう (ご一緒とか) ・ちよとあうお母さんたち (ニキキとリョマ) ↳ 食べ物が福島産だぜどう？ ↳ (何回もキキとると、本音がでる) ・企画書作成で今後のこと決定する</p>	<p>自 自分たちの信頼がいかに大事?? ↓ 最初からこれでも受け入れてくれると思えば大きな問題がい (他) 時間がかかるとこで てもこれ=時間とかい</p>
<p>STEP2. 内容決めるとしては明確に目標(1.2.3) 福島 information 伝える!! ・いつも案を出す</p>	<p>(他) 小さい子ども達もお母さん T=I=I 2人の上の子に話を聞いてもらう? ↓ (何回も話し合いで) 母ら後</p>
<p>STEP3. RISE ヨーグurt → さんざん考えまくる。 ↳ 結局 知識が正しい相手と理解* ↓ 子どものこと知らない ↓ お母さんのバカ 多様な知識が必要 食べ物 お昼の time How long 集中 time. Mother → 子どもの口に入ることは ちゃんとしてお母さんに伝える</p>	<p>不良なわけX → 全て自分たちの 実力が問われる study tour → 自分たちのSNSを ↓ 最大限に活かす (自) 自分たちの時間の管理も必要</p>
<p>大学生の限界 → 理解力がある人 ↓ ターゲットを上げること 興味がある人 せcc</p>	<p>限界があるのが現実 (他) どれも福島 info が伝えられる ためのやり方!!! 全て100%の力でやる必要もある</p>
<p>STEP4 実践! お母さんと子どもに福島 infoを 伝える/実際に食べてもらう (信用) だっけ 相手の納得を得るには??</p>	<p>理想/現実のちがいを理解 細かくSTEPごとに作業にして全員で取り組む 小目標を設定 大人の力も借りる(?) 大抵はいい感じ</p>

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

本日の授業で知った新しい知識

現地での経験を学ぶ



実際にアクションを起こす

大学で求められるカ!!

学びを実際につなげる

具体的にはどのような実践が
できそうか

自分たちのできる範囲で!!

知ってもらうことが始めるために...

・ポスター展示

→ 普通はあまり見てくれない

・生協

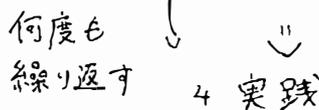
→ 売るのは生協の人

・保育支援施設で保護者向け
イベントをする

* 実践する

1 信頼性の確立 3 足りない知識

2 内容の決定 を集める



4 実践

(自)(他)

・神戸市が政令指定都市

・ホームページが正しいと思っ
ていた

・政策課と市長のコミュニケ
ーションが思っていたよ
りあった

・つなぐ課の対象が意外と
広範囲だった。

・人口減少の程度が予想
以上だった。

・福島のエッセイ

一般人 → 津波・地震

... 悪いエッセイ

実際 → 明るい。にぎやか

... 良いエッセイ

(他)

・学生は信頼がない

・協力していただける施
設や大人を探すことが
困難

考えを聞く

→ アンケート(母)は分かりにくい
から一文でも実際に書いて
もらう

→ 興味のある人(総政)に
しほってきく

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生のご考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>1 信頼性の確立 自分たちの気持ちをぶつけてもお母さんたちが信頼してくれなければ意味がない → 福島へのイメージ・悪化</p> <p>②本音で話合うまで多くの時間がかかる</p> <p>2 内容の決定 実践することが大切なのではなく相手にとって意味のある内容 ・明確な目標決定 ↑ そのためにどのような手段を選ぶか</p> <p>3 足りない知識を集める 知識不足 = 相手に対する理解不足 ・多様な知識が必要</p> <p><u>理想と現実</u> ・理想と現実の違い ・プロセスを細かくステップに作業を分け、グループで確認 ・大人のカを借りる ・ステップを目標するために小目標を定める</p> <p>★信頼の重要性</p>	<p>(他) 本音で話してみると... ・頑張ってほしいとは思っている ・少し抵抗がある (他) = 何を誰に伝えたいか</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>子どもの集中時間 寝る時間</p> </div> <p>(他) 無理な人は無理 → ターゲットをしぼる 興味のない人を引かせるには? (他) SNSでかぎわきでな いもので発信していた (今はしてない → したいと思う) 大きい目標は? (他) 自分たちから何度もイベントを行いた...!!」と言っていたが、最終的には相手から言ってもらった</p>

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

1 年 A

本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見								
<p>福島は今復讐に進んでいて楽しそう 福島の野菜 「ふくしまプライド」 悪いイメージがあるけど実際は安全 個人の果樹園は売れ残らたらダメ 売れる努力してるのに悪いイメージのせいで 売れない → 自分が福島を変えたい → ギャップ認識 (国が安全とみている) 報道やイメージと違う → 変えたい 糸子馬笑で得たことを実際にすることは できる範囲で ・何かできるか話し合い</p>	<p>(先) 大きすぎてもできない 小さいステップもある 問題があれば調整が必要 自分たちでできないことは もっと他の人に頼ってほしい んたな かしらたしせん頼たら かいいものができたらよ 思いました。 協力してくれる人の信頼が ないよっていいじゃないかな</p>								
<p>知ってもらうことが大切 多くの人に伝える方法を探す 学生に協力してくれる大人や団体を探す ための学生 ターゲットを絞る</p>	<p>自分たちができること ・知ってもらうこと トイレとか長い時間人が とどまるところのスター ・全校集会とかの人が集まる所 ・人が集まる所で基金を集める</p>								
<table border="1"> <tr> <td>人間関係</td> <td>何をやるか</td> <td>知識の蓄え</td> <td>→ 僕(人)</td> </tr> <tr> <td>信頼を置いて → 伝えたいこと を伝える 格で話し合える</td> <td>相対的意味のね 目標の決定 良い伝え方を 案の比較</td> <td>多様な知識 相対的心境 相対のこと 相談をする</td> <td></td> </tr> </table>		人間関係	何をやるか	知識の蓄え	→ 僕(人)	信頼を置いて → 伝えたいこと を伝える 格で話し合える	相対的意味のね 目標の決定 良い伝え方を 案の比較	多様な知識 相対的心境 相対のこと 相談をする	
人間関係	何をやるか	知識の蓄え	→ 僕(人)						
信頼を置いて → 伝えたいこと を伝える 格で話し合える	相対的意味のね 目標の決定 良い伝え方を 案の比較	多様な知識 相対的心境 相対のこと 相談をする							
<p>理想と現実の違いを理解 糸子馬笑のステップを全員で達成 大人のカギもわかる SNSの有効な活用</p>									

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

回転角		0度	0~15度		精度の算出方法									
野線		なし	なし / あり(薄い) / あり(濃い)		singleLine、multiLine : MCL / 正解文字列の文字数 ※記載がなかったフィールドは評価対象外									
指標		MCL	LVD / MCL / EaC / CR		checkbox : チェックを認識できたら1、チェックしていないことを認識できても1									
分母		正解文字列の文字数			1		2		3		4			
フィールド名	フィールドタイプ	文章番号	scan-2020-01-09-103702_scan 2020-0	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20	scan-2020-01-09-103702_scan 20		
		文字種	MCL	解文字列の文字	精度	MCL	解文字列の文字	精度	MCL	解文字列の文字	精度	MCL	解文字列の文字	精度
singleLine #3	singleLine	総合	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00
singleLine #3		漢字	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #3		ひらがな	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #3		カタカナ	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #3		アルファベット	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #3		数字	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00
singleLine #3		その他	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #2	singleLine	総合	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00
singleLine #2		漢字	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #2		ひらがな	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #2		カタカナ	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #2		アルファベット	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00
singleLine #2		数字	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #2		その他	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #1	singleLine	総合	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00
singleLine #1		漢字	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #1		ひらがな	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #1		カタカナ	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #1		アルファベット	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
singleLine #1		数字	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00
singleLine #1		その他	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan	0	0	nan
multiLine #1	singleLine	総合	141	199	0.71	214	418	0.51	222	398	0.56	197	236	0.83
multiLine #1		漢字	55	70	0.79	78	120	0.65	72	104	0.69	86	99	0.87
multiLine #1		ひらがな	71	87	0.82	86	120	0.72	108	195	0.55	94	111	0.85
multiLine #1		カタカナ	11	18	0.61	22	35	0.63	5	14	0.36	16	19	0.84
multiLine #1		アルファベット	0	0	nan	26	44	0.59	26	59	0.44	0	1	0.00
multiLine #1		数字	1	4	0.25	1	3	0.33	2	4	0.50	2	3	0.67
multiLine #1		その他	3	20	0.15	3	96	0.03	7	22	0.32	1	3	0.33
multiLine #2	singleLine	総合	166	241	0.69	151	194	0.78	180	289	0.62	128	195	0.66
multiLine #2		漢字	67	77	0.87	42	54	0.78	57	88	0.65	41	51	0.80
multiLine #2		ひらがな	78	98	0.80	95	112	0.85	105	156	0.67	75	101	0.74
multiLine #2		カタカナ	13	37	0.35	0	0	nan	0	3	0.00	6	12	0.50
multiLine #2		アルファベット	0	0	nan	0	1	0.00	5	21	0.24	0	3	0.00
multiLine #2		数字	0	0	nan	1	1	1.00	1	3	0.33	0	0	nan
multiLine #2		その他	8	29	0.28	13	26	0.50	10	18	0.56	5	28	0.18

	scan-2020-01-09-103702_scan 2	scan-2020-01-09-103702_sc	scan-2020-01-09-103702_sc	scan-2020-01-09-103702_sc								
	MCL	解文字列の文字	精度	MCL	解文字列の文字	精度	MCL	解文字列の文字	精度	MCL	解文字列の文字	精度
総合	311	444	0.70	369	616	0.60	406	691	0.59	329	435	0.76
漢字	122	147	0.83	120	174	0.69	129	192	0.67	127	150	0.85
ひらがな	149	185	0.81	181	232	0.78	213	351	0.61	169	212	0.80
カタカナ	24	55	0.44	22	35	0.63	5	17	0.29	22	31	0.71
アルファベット	1	1	1.00	27	46	0.59	32	81	0.40	1	5	0.20
数字	4	7	0.57	5	7	0.71	6	10	0.60	5	6	0.83
その他	11	49	0.22	16	122	0.13	17	40	0.43	6	31	0.19

35		36		37		38		39		40		scan-2					
解文字列の文字	精度	MCL	MCL														
1	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2			
0	nan	0	0	nan	0												
0	nan	0	0	nan	0												
0	nan	0	0	nan	0												
0	nan	0	0	nan	0												
1	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2	2	1.00	2			
0	nan	0	0	nan	0												
1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1			
0	nan	0	0	nan	0												
0	nan	0	0	nan	0												
0	nan	0	0	nan	0												
1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1			
0	nan	0	0	nan	0												
0	nan	0	0	nan	0												
1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1	1	1.00	1			
0	nan	0	0	nan	0												
63	0.68	309	427	0.72	222	398	0.56	166	208	0.80	164	559	0.29	25	121	0.21	226
22	0.68	119	155	0.77	72	104	0.69	68	81	0.84	46	200	0.23	3	42	0.07	74
26	0.62	143	195	0.73	108	195	0.55	66	80	0.83	103	280	0.37	19	66	0.29	102
15	0.80	25	38	0.66	5	14	0.36	11	11	1.00	10	30	0.33	4	10	0.40	33
0	nan	4	4	1.00	26	59	0.44	12	19	0.63	6	11	0.55	0	0	nan	0
0	nan	2	8	0.25	2	4	0.50	1	4	0.25	0	7	0.00	0	0	nan	0
0	nan	15	27	0.56	7	22	0.32	8	13	0.62	2	31	0.06	0	3	0.00	17
		55	71	0.77	180	289	0.62	140	219	0.64	12	105	0.11	4	85	0.05	69
		27	30	0.90	57	88	0.65	26	38	0.68	3	29	0.10	0	24	0.00	21
		18	22	0.82	105	156	0.67	71	111	0.64	7	46	0.15	4	46	0.09	37
		1	4	0.25	0	3	0.00	20	35	0.57	2	16	0.13	0	4	0.00	3
		0	0	nan	5	21	0.24	8	12	0.67	0	3	0.00	0	0	nan	0
		0	0	nan	1	3	0.33	1	1	1.00	0	0	nan	0	0	nan	0
		9	15	0.60	10	18	0.56	14	22	0.64	0	11	0.00	0	11	0.00	8

解文字列の文字	精度	MCL															
66	0.70	368	502	0.73	406	691	0.59	310	431	0.72	180	668	0.27	33	210	0.16	299
22	0.68	146	185	0.79	129	192	0.67	94	119	0.79	49	229	0.21	3	66	0.05	95
26	0.62	161	217	0.74	213	351	0.61	137	191	0.72	110	326	0.34	23	112	0.21	139
15	0.80	26	42	0.62	5	17	0.29	31	46	0.67	12	46	0.26	4	14	0.29	36
1	1.00	5	5	1.00	32	81	0.40	21	32	0.66	7	15	0.47	1	1	1.00	1
2	1.00	5	11	0.45	6	10	0.60	5	8	0.63	3	10	0.30	3	3	1.00	3
0	nan	24	42	0.57	17	40	0.43	22	35	0.63	2	42	0.05	0	14	0.00	25

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・
<p>試験から得た学びをアクションにどうつなげるか。</p>	
<p>授業の一環で福島県を訪れる。 東日本大震災で被害を受け、悪いイメージがつく。 しかし、復興を目指し観光地も広げていた。 イメージだけでなく、実際行ってみたい行動する。</p>	<p>(自) 放射線や津波で現在でもあまり良くないイメージがある。 ↓ 目で見て変えていく</p>
<p>☆大切なこと☆ (実践する際に)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちができる範囲で具体的に。 できそうな案を出す。 	
<p>ポスターを貼る・フェアを開催 イベントを開催 この中からメリット・デメリットを見つける。</p>	<p>! 行うにあたって信頼だったり許可が必要とってくる。</p>
<p><u>注意点</u> 足りない知識は収集する。 協力する人との信頼関係を築いていく。</p>	

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>経験から得た学びを次のアクションに じょう繋げるのか</p>	<p>(他) 福島には、津波・可哀そう というイメージがあった</p>
<p>福島スタディーツアー</p>	<p>(他) 福島に行ってみると、実際 はすごく楽しい、観こう地</p>
<p>福島プライト</p>	<p>(自)</p>
<p>↳ 福島から県外に出家する野菜は 安全なものしか出さない</p>	<p>私む、福島のイメージとして 津波などのイメージがある</p>
<p>福島の野菜は 放射線が残ってそう(他)という考えが あり、売れない、安い</p>	<p>(他) 自分たちができる範囲とする</p>
<p>↓</p>	<p>↳ 経験で得た学びを実践 に繋げるために</p>
<p>(他) 先入観をもたれてしまうのがくやしい</p>	
<p>実際 さんが行ったこと</p>	
<p>① 関学大の文化祭での展示や福島県産 商品に販売</p>	<p>→ (他) ただ、売るだけではなく 福島産の商品が安全だと知って もらうことが大切</p>
<p>② ポスター展示</p>	<p>→ (他) どれだけの人が見てくれる のかが問題</p>
<p>③ 学内の生協で福島フェア</p>	
<p>④ 教育学部内の サポサポで話をする 未学姐と母が集まり、相談したりする所</p>	<p>→ (他) 彼女達の中の一人に、サポサポの ボランティア活動に参加していた人がいる</p>
<p>自分達の活動を支持してくれる団体が必要! ただ、サポサポと信頼関係があるのはメンバーの1人 まずは、子供を持つ母親の気持ちを勉強した</p>	

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究BASIC学びの記録

年組 氏名

本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>① 協力が決定し安心せず信頼関係も築く。 ・子どもとあそぶ ・お母さんたちに聞きとり調査 ↳ 本音で話してくれるまで。 ・毎週企画書作成して さほさほの方からの信頼も得る。</p> <p>② <u>相手にとって意味のある内容</u> することが大切。 ・まず目標を明確に決定。 ・手段について、いくつも案を出し 徹底的に比較と妥協しないこと!!</p> <p>③ 知識不足 = 理解不足。 ・子どもが食べられないもの。 ・昼寝時間。</p>	<p>(自) ③がすごく大事 相手のことについて 何も知らなかったら 良い手段も 考えられない!</p> <p>(先). ぜったい福島の 野菜はいい!!!と 思ってる人に 理解させるのは 無理。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 現実と理想の 違いを理解する </div>	<p>←</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 若年層への 情報リテラシーの 定着。 ○ 基礎研究の 面白さも広める ○ 一般人の目線から意見。
<p>④ 信頼関係がないと実践もできない。</p>	

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

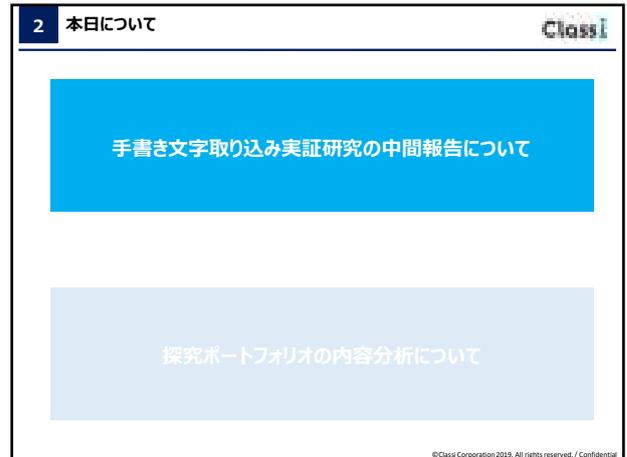
本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>現地での経験を学ぶ</p> <p>⇓</p> <p><u>実際でアクションを起こす</u></p> <p>大学で求められるか!!</p> <p>学びを実際につなげる</p> <p>↳ 具体的にどのような実践が できそうか</p> <p><u>自分たちのできる範囲で!!</u></p> <p>知ってもらうことから始めるために...</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ ポスター展示 → 普通はあまり見てくれない ◦ 生協 → 売るのは生協の人 ◦ 保育支援施設で保護者向けイベントをする <p>* 実践する</p> <p>1 信頼性の確立 3 足りない知識 2 内容の決定 を集める</p> <p>何度も繰り返す ↓</p> <p>4 実践</p>	<p>(自)(他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 神戸市が政令指定都市 ◦ ホームページが正しいと思っていた ◦ 政策課と市長のコミュニケーションが思ったよりあった ◦ つなぐ課の対象が意外と広範囲だった。 ◦ 人口減少の程度が予想以上だった。
	<p>◦ 福島のイメージ</p> <p>一般人 → 津波・地震</p> <p>... 悪いイメージ</p> <p>実際 → 明るい、にぎやか</p> <p>... 良いイメージ</p>
	<p>(他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 学生は信頼がない ◦ 協力していただける施設や大人を探すことが困難
	<p>考えを聞く</p> <p>→ アンケート(母)は分かりにくいから一文でも実際に書いてもらう</p> <p>→ 興味のある人(総政)にしほってきく</p>

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
 (!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

「e-ポートフォリオへの手書き文字取り込み機能」 中間報告



1



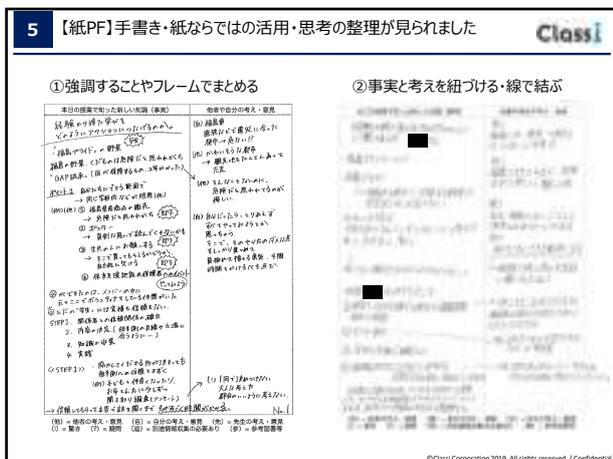
2



3



4



5



6

7 【ePF】デジタル上での特徴②

自問自答での問いかけ・自分自信の教訓の記載・心の本音など日記的な活用も

©Classi Corporation 2019. All rights reserved. / Confidential

7

8 【検証結果】取り込み結果について

◎ 上手く取り込んだ例

▲ 上手く取り込みなかった例

©Classi Corporation 2019. All rights reserved. / Confidential

8

9 【検証結果】取り込みがうまく進んだ例

©Classi Corporation 2019. All rights reserved. / Confidential

9

10 【検証結果】取り込みがうまく進まなかった例

©Classi Corporation 2019. All rights reserved. / Confidential

10

11 ご提案内容について

手書き文字取り込み実証研究の中間報告について

探究ポートフォリオの内容分析について

©Classi Corporation 2019. All rights reserved. / Confidential

11

12 【振り返り】全体のポートフォリオ内容について

9月～12月のポートフォリオ内容のテキストマイニング

©Classi Corporation 2019. All rights reserved. / Confidential

12



13



14



15



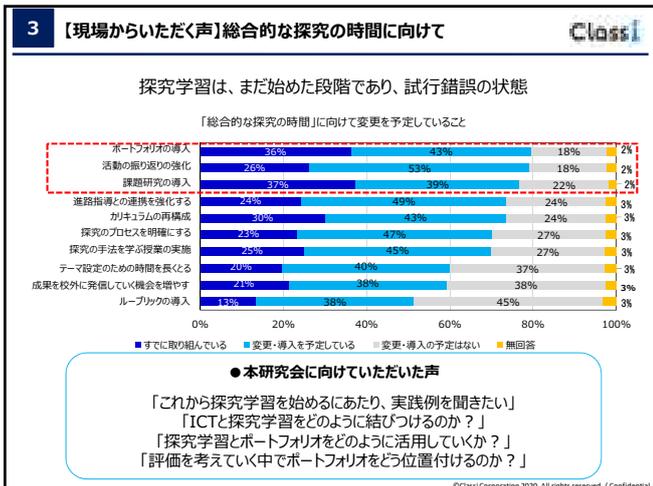
16



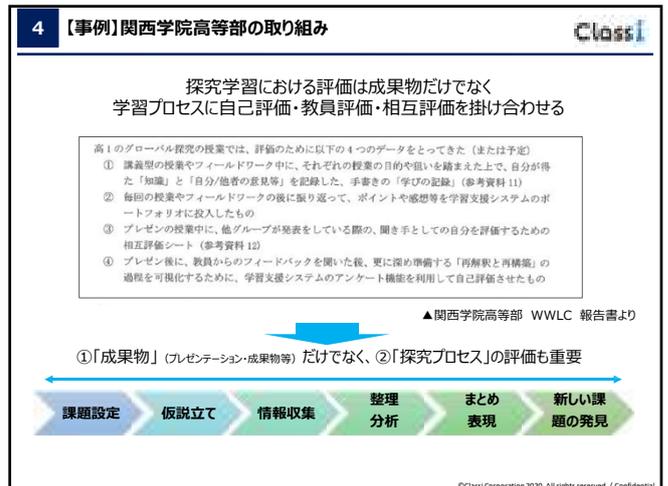
1



2



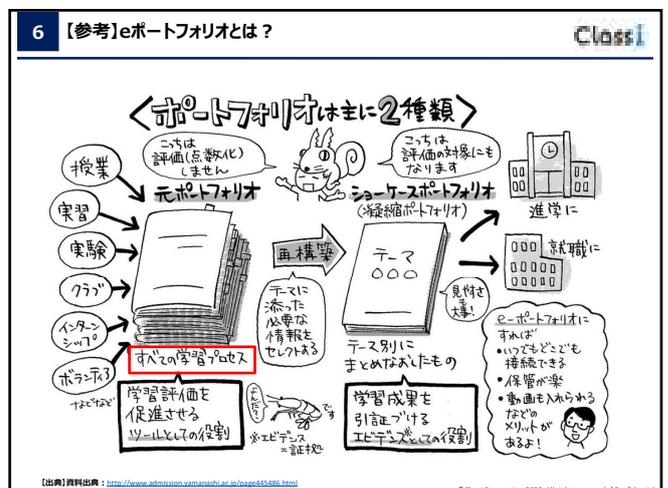
3



4



5



6

7 紙ポートフォリオの特徴

手書き・紙ポートフォリオならではの活用・思考の整理が見られました

① 強調する部分に印をつける

② 事実と考えを紐づける・線で結ぶ

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

7

8 eポートフォリオの特徴①

自問自答での問いかけ・自分自信の教訓の記載・心の本音など日記的な活用

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

8

9 eポートフォリオの特徴②

活動の気づきを再構成・今までの振り返りを繋ぐ→内容が深まっていく過程

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

9

10 【まとめ】紙ポートフォリオ・eポートフォリオの両方のメリットを生かす

紙ポートフォリオのメリット

- 強調することや関連性を示せる
- 思考や工夫の跡を残せる
- 素早く記入できる
- 回収率を上げられる

eポートフォリオのメリット

- 生徒自身の本音がしやすい
- 内容の再編集や統合が簡単
- 画像や動画なども扱える
- 遠隔で相互評価が簡単

紙ポートフォリオ・eポートフォリオの両方のメリットを生かす

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

10

11 New!!! Classi 2020 紙ポートフォリオの取り込み機能

毎日 日々の振り返り ▶ 節目 まとめ・面談 ▶ 受験 進路指導

デバイス無しでもeポートフォリオ活動が可能な手書き読み取り機能

- 2020年秋リリース版
- 先生がClassi搭載のフォーマットをダウンロード (フォーマットの設問文は変更可能)
- 回収した紙を複合機でスキャン + 生徒ポートフォリオに紐づけ
- 紙がPDFになり、活動記録に添付されてデータとして登録

① 先生による取り込み (2020年夏リリース) → ② 生徒による自動取り込み (将来・時期未定)

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

11

12 【検証結果】取り込み結果について

◎ 上手く取り込めた例

▲ 上手く取り込めなかった例

③ 思いがけない誤り発生
知識不足 = 担当先生と生徒の間に
多様な意見が交差している
→ 多様な意見が交差している

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

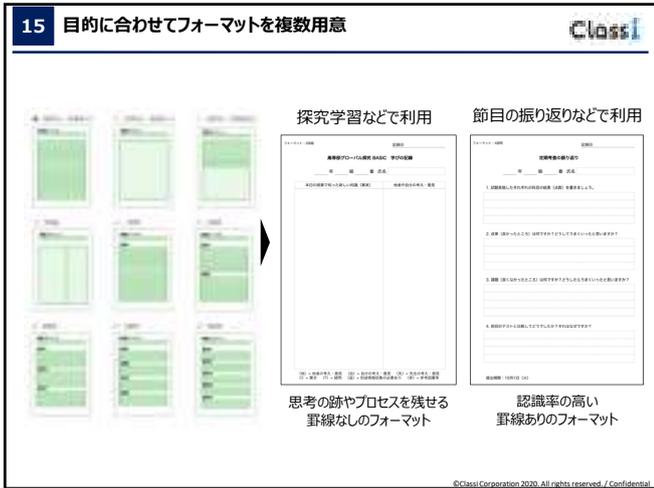
12



13



14



15



16



17



18

19 **New!!!** Classi 2020 探究学習の1歩目を踏み出すコンテンツ集

※本日分科会会場【E】で、探究ナビの企画チームに相談が可能です

STEP1 課題設定 情報収集

Classi が支援する「探究コンテンツ / プログラム」

●無料コンテンツ
授業ですぐに使える素材をご用意

●有料プログラム
場面とコマ数に合わせて選べるラインナップ

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

19

20 **New!!!** Classi 2020 学校を超えた協働学習

2020年 仮版・実証研究スタート

STEP2 協働 外部連携

複数の実証研修を経て
学校を超えた生徒同士のコミュニケーションをClassi上で実現

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

20

21 **New!!!** Classi 2020 ポートフォリオの可視化

2020年春 リリース

STEP3 振り返り 可視化

Classi アルバム機能を通じて振り返りの可視化を実現

※ポートフォリオ機能内の新機能です
※探究学習以外でも活用可能です

●振り返りの内容を可視化

●言葉の概況を可視化

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

21

22 分科会会場【F】にてポートフォリオ相談会を開催中

Classi のポートフォリオ開発チームでお待ちしております

11時～12時	探究教材 福祉ブース
12時～13時	探究教材 コーポレート・コミュニケーション 探究ナビブース
13時～14時	ポートフォリオ相談ブース

●こんなお悩み大歓迎です

- ・ポートフォリオがそもそもよくわからない
- ・Classiの活用の仕方がわからない
- ・ポートフォリオ機能の今後について聞いてみたい
- ・ポートフォリオ機能の改善要望を伝えたい
- ・他校の使い方について知りたい

©Classi Corporation 2020. All rights reserved. / Confidential

22

(資料4)



Classi

探究学習 × ICTカンファレンス 2020

ICTでより深める探究学習のデザイン

○ 事前登録制

「探」り「究」める主体的な学びへ。

探究学習の一步目を踏み出し、ICT活用の可能性を感じる1日に

この度、関西学院高等部と Classi 株式会社で「探究学習 ×ICTカンファレンス 2020 ～ICTでより深める探究学習のデザイン～」を開催する運びとなりました。

関西学院高等部は、「読書科」に代表される独自の探究学習カリキュラムをベースに、2018年度までは SGH 指定校、2019年度から WWL コンソーシアム構築支援事業の拠点校として、新たな探究学習の形を目指し活動してきた学校です。探究学習を通じて、生徒達の学びに向かう主体性育成から学校としてのカリキュラム開発まで、改革を進めている学校です。

前半では、関西学院高等部の先生方による WWL プロジェクト 1年目の活動報告と、探究学習の研究や高校現場へのアドバイスをされている関西学院大学の時任教員より「探究学習」と「評価」について、教育学の視点から基調講演をおこなっていただきます。

後半では、主催の関西学院高等部の「読書科」や WWLの取り組みはもちろん、SSH、SGHなど探究学習を長年実践されている4人の先生方によるパネルディスカッションと分科会をご用意しております。学校現場で顕在化した課題や問題点など、参加者から当日質問を受けて、ご回答いただく情報交換の時間も設ける予定です。また、分科会の中には、Classi 体験ブースや Classi 連携サービスブースもございますので、ICT活用についてお悩みの点や導入に向けたご相談をお聞かせいただく機会となれば幸いです。

これから探究学習を始める学校や、ICTを活用してより学びを深めようとしている学校の先生方や教育委員会の方々に、是非お越しいただきたい研究会です。

基調講演

関西学院大学
高等教育推進センター
時任 隼平 准教授

「探究学習と評価について(仮)」



外部講師 (分科会・パネルディスカッション)

高槻中学校・高等学校 教頭 前田 秀樹 先生

静岡県立三島北高等学校 WWL 探究担当 稲葉 亜矢子 先生

日本大学三島高等学校・中学校 広報・ICT 担当 大川 幸祐 先生

群馬県立桐生高等学校 教務主任/前 資質能力育成部長 七原 登 先生

主催校講演

関西学院高等部
副部長
田澤 秀信 先生

「探究学習の実践を通じた学びに向かう力の
育成と学校としてのカリキュラム開発」



その他のご連絡事項

- 当日は、途中参加・途中退出が可能です。
- 当日は、Classi を活用した質問やアンケートをおこなう予定です。
ご自身のスマートフォンやタブレットをお持ちの先生は、ご持参くださいますようお願いいたします。
- 交通費、宿泊費などの準備はございませんので、ご了承ください。
- プログラムの内容やタイムスケジュールは、予告なく変更となる場合がございますので、予めご了承ください。

詳細
お申込み

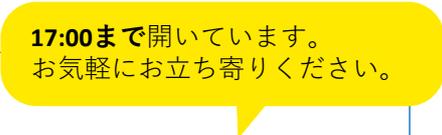
<https://classi.jp/event/accepting/post-1967/>



探究学習 × ICTカンファレンス 2020

ICTにより深める探究学習のデザイン

分科会プログラム

		会場		
14:50~15:30	分科会 【1】	A 中教室	「21世紀型スキルを身に着ける地域探究 ～ グローバル探究 ～」	 日本大学三島高等学校中学校 広報・ICT担当 大川 幸祐 先生
		B 第2視聴覚 教室	「公立高校のWWL挑戦 ～ Society5.0を見据えた外部連携とグローバル人材育成 ～」	 静岡県立三島北高等学校 WWL 探究担当 稲葉 亜矢子 先生
		C 小教室(1)	「オンラインディスカッションを用いた国際協働PBLの実践」	関西学院高等部 三木 真也 先生 株式会社 With The World 五十嵐 駿太 氏
		D 小教室(2)	「授業実践報告と教員・生徒意識の実態」 ※ICT教育についてのご発表	関西学院高等部 佐藤 太亮 先生、前 雅和 先生、徳田 有希子 先生
15:30~15:40	—	休憩 & 移動		
15:40~16:20	分科会 【2】	A 中教室	「『共有』で促進する探究的な学び ～ 論証モデル × プロセス評価 × ICTで実現する新しい指導と評価の一体化 ～」	 高槻中学校・高等学校 教頭 前田 秀樹 先生
		B 第2視聴覚 教室	「資質能力育成のための探究学習」	 群馬県立桐生高等学校 教務主任/前 資質能力育成部長 七原 登 先生
		C 小教室(1)	「高等部読書科の取り組みについて (仮)」 ※探究学習についてのご発表	関西学院高等部 種谷 克彦 先生
		D 小教室(2)	「探究学習の可能性とその評価について」	関西学院高等部 西室 雅史 先生、田中 章雅 先生
14:50~17:00	分科会 【1】 【2】 共通	E 小教室(3)	探究教材 相談ブース ベネッセコーポレーション 探究ナビ開発チーム Classi 連携サービスチーム	 17:00まで開いています。 お気軽にお立ち寄りください。
		F 小教室(4)	ポートフォリオ相談ブース 関西学院高等部 田澤先生 Classi ポートフォリオチーム	

探究学習の実践を通じた学びに向かう力の育成と 学校としてのカリキュラム開発



関西学院高等部 田澤 秀信

3 本日について

1. 私が考える「探究的な学び」と「ICT」の関係性
～相互補完の関係
どっちから行っても、結局は教育目標へ～
2. 関西学院高等部のこれまでの実践について
～「読書科」→「SGH」→そして「WWL」へ～
3. これまでの歩みを経て、ちょっと見えてきたこと
～「プロセス評価」と学校全体としての取り組み～



関西学院について

- キリスト教主義教育
- 幼稚園から大学院までの総合学園。
- 初・中・高・大 一貫教育。



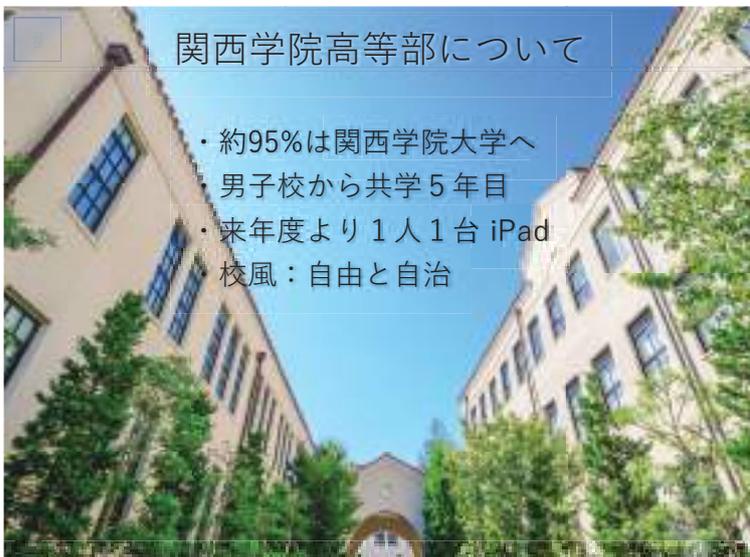
4 目の前の生徒等が直面する社会の変化

1. 世界の物差しの変化
～「AIの発展」の現実～
2. 私達が教えることのできない世界
～「地球環境の悪化」の現実～



関西学院高等部について

- ・約95%は関西学院大学へ
男子校から共学5年目
- ・来年度より1人1台 iPad
- ・校風：自由と自治



The Future of Work の動画
<https://www.youtube.com/watch?v=59d3UZTUFQ0>

6 生徒達に求められる「探究の力」

～時任教員のお話より～



- 日本でも「学力観」が変化した
「生き抜く力を育む」ための「主体的・対話的で深い学び」
- 高校と大学の違い
～高校が「最後の砦」～

探究活動の定義：
生徒自身の「**自己の在り方や生き方**」を考える場
(溝上・成田 2016)

9 行き着くところは？

結局ICTは何のために？

- これからの社会を考えた時に、生徒達にどうなって欲しいの？
- これまでの学校の伝統も踏まえつつ、どういう力を育むために？



教育目標の再構築へ

2017.12.4 高等部教員研修資料(時任教員作成)より

7 私達教員に求められる「変革の力」

でも・・・おそらく、、、

一番変わる・変えるのが難しいのは私達教員では？
(だって経験したことないし・・・)

Q: どうやって、
教員自身の意識改革をもたらすか？

10 おそらくどっちから始めても・・・

探究からスタートしても・・・
ICTからスタートしても・・・
教育目標に行き着くはず

- みんなでやらないと意味がない！
- 何回もやり直し中！



8 ここでICTの出番

A: 「授業」の土台(インフラ)を変えてみた。

教員が、自分達の授業を見直すきっかけをつくる。

「やらない理由」はいくらでもある。でも・・・

- 授業は間違いなく変わります！
- やる気がある人も、間違いなくいます！

ICTは教員の意識を変えるためのツール

本校での詳しい導入の様子と現状は、午後の分科会1
佐藤教諭・前教諭・徳田教諭の発表にて！
～技術面・モラル面・生徒指導面、色々起ります～

11 本日について

1. 私が考える「探究的な学び」と「ICT」の関係性
～相互補完の関係
どっちから行っても、結局は教育目標へ～
2. 関西学院高等部のこれまでの実践について
～「読書科」→「SGH」→そして「WWL」へ～
3. これまでの歩みを経て、ちょっと見えてきたこと
～「プロセス評価」と学校全体としての取り組み～

12 「読書科」について

● 40年以上前から図書館で続く授業。

(読書科専任教諭2名。常勤1名。)

● テーマ設定は自由。

● 3年間をかけて、平均約1.6万字、多い者は6万字程度の論文作成。

高等部独自の探究学習プログラム



2017年度卒業論文テーマ例

「なぜ消費税の高い国に幸福度の高い国が多いのか」
(全国論文コンクール2位)
「世界の神話の共通点から何がわかるのか」
「日本人はなぜオノマトペを多用するのか」
「なぜフェアレードは日本に浸透していないのか」
「フレン上手と雑談上手の違いは何か」
「地震予知が可能な時代はくるのか」
「なぜ社会から犯罪がなくなるのか」
「なぜタナゴ釣りは関東で発展したのか」など

15 SGHの課題

1. 課題研究テーマが「国際協力」にしばられた。
→読書科との有機的な連携が取れず、探究学習の軸が2つできてしまった。
2. 中心となるGLPが、週一時間の課外授業であったため、アクションを起こすには、基礎知識を得る時間が不足し、表面的なアウトプットも。
3. 一部の教員に業務が偏った。また、高等部教員のみで企画・立案していくことに限界があった。
4. 生徒の実践的な能力を伸ばしていくための指針となる、評価の枠組みが最後まで作れなかった。

13 読書科の強みと課題

強み：

1. 徹底的に、テーマは自由
2. 先行研究や文献による確実な基礎知識の獲得



課題：

1. エビデンスの収集
(フィールドでの情報収集)
2. どうしても成果物評価と
なってしまう



詳しい授業の様子は、
午後の分科会2 種谷教諭の発表にて！
～会場は、図書館となります！～

16 SGHの課題からWWLへ

正課の授業としてカリキュラムに盛り込み、読書科とお互いに補完する体制づくりが必須

→学校の軸となる1つの探究カリキュラムづくり

「きれいにまとめる力」は、本当の力ではない。
→能力の高い生徒の「予定調和」を崩す必要性

評価の軸は最初に作らないと、途中からは無理。

学校内のリソースで完結するのは無理と割り切り、外部に助けを求める必要性

14 SGHへ

● 「国際協力をテーマとした、高大連携による実践的課題解決能力の育成」をテーマに構成された二層(GLPとGGP)のプログラム

- ・ GLP (Global Leader Program)
- ・ GGP(General Global Program)

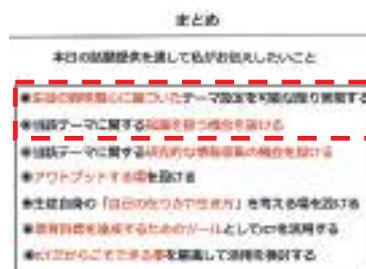
● 「世界を体験する・世界を学ぶ・世界のために行動する」の方針の元、様々な活動を実施



17 SGHの課題からWWLへ①

● 「学校の軸」としての探究学習カリキュラムの策定へ

～時任教諭のお話より～



1. WWLのテーマ：
「AI活用 for SDGs」

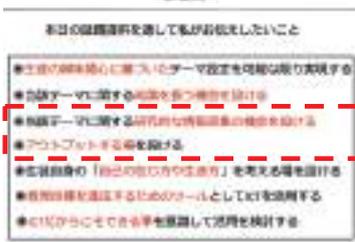
2. WWLの新設科目を、
高2より正課科目へ。

- ①今年度高1は選抜対象の基礎講座グローバル探究-BASICを開講 (コア生徒35名の育成)
- ②次年度高2からは正課の必修選択科目として3科目を「探究型・教科横断型・PBL型」をキーワードに新規開講。対象者を増やし、読書科の論文作成と連動したカリキュラムとする。

★こういう事をしてると・・・

18 SGHの課題からWWLへ②

～時任教授のお話より～



1. 読書科では、テーマ設定と文献や先行研究にあたることによる知識習得を重視。
2. WWL新設科目では、フィールドワークと、アウトプット時の徹底したプロセス評価を必須とし、予定調和を崩す。
3. 企業等外部の力も借りながら様々なテーマ・授業展開を試行予定。

具体的な授業の一例として、
午後の分科会1 三木教諭の発表を少しご紹介！
～SGH最終年度に試行した授業の発展版に～

21 実践例

テーマ:教育,貧困,農業,家族,伝統文化,観光,ゴミ問題,環境問題

教育

◇移民街の子どもたちに
学ぶ楽しさを伝えたい
⇒Skypeで英語の手遊び歌を教えよう



◇障がい者の教育や就職の**差別をなくしたい**
⇒両国で障がいのある人たちと一緒に
作ったアクセサリーを売ろう
& 作った人と買ってくれた人を
メッセージカードでつなごう



19 オンラインディスカッションを用いた国際協働PBLの実践

- ・日本とインドネシア・バリ島にあるハラパン高校の3～4名のグループどうして共通のテーマに取り組む
(テーマは事前に希望をとって調整)
- ・3年生の1,2学期それぞれで完結、各10回ずつ、1回90分授業
- ・With the World社 五十嵐氏の企業での経験を活かし、**プランニングやプレゼンの手法**についても学ぶ



- ・最終プレゼンもSkypeをつなぎ、**両国のグループで1つの発表**
- ・学期末には**クロージングセッション**も

22 実践例

伝統文化

◇自分たちも知らなかった地域の
伝統産業の良さを伝えよう
⇒和ろうそくのランタンを作る
ワークショップをしよう



食文化

◇野菜嫌いをなんとかしたい、
栄養バランスの大切さを伝えたい
⇒Skypeで“キャラ弁”を教えよう



20 スケジュール例

日次/学年	時間	形式	内容
① 4月17日	13:20-18:00	○	チーム発表/自己紹介/アイスブレイク
② 4月24日	13:20-15:00	○	アイディア出し(なぜ問題になっているのか)
③ 5月8日	13:20-18:00	○	自分たちで数個ある解決案の共有
④ 5月15日	13:20-18:00	○	フィールドワークに向けて、スケジュール決め
⑤ 5月22日	13:20-18:00	○	第1回実地回(企業実地&アンケート調査)
⑥ 5月29日	13:20-18:00	○	行動結果・次回課題共有(チーム・クラス単位)
⑦ 6月5日	13:20-18:00	○	フィールドワークに向けて、スケジュール決め
⑧ 6月12日	13:20-18:00	○	第2回実地回(企業実地&アンケート調査)
⑨ 6月19日	13:20-18:00	○	行動結果共有(チーム)、最終プレゼン準備
⑩ 6月26日	13:20-18:00	○	最終プレゼンセッション

2回のアクション・実践
準備、結果の振り返りも含めて

最終プレゼン
～現状,原因,対策
アクション,結果,将来～

23 本日について

1. 私が考える「探究的な学び」と「ICT」の関係性
～相互補完の関係
どっちから行っても、結局は教育目標へ～
2. 関西学院高等部のこれまでの実践について
～「読書科」→「SGH」→そして「WWL」へ～
3. これまでの歩みを経て、ちょっと見えてきたこと
～「プロセス評価」と学校全体としての取り組み～

24 土台としての評価の仕組みづくり①

今年度、先を見据えてのカリキュラム作りをしながら、実際に高1の「グローバル探究-BASIC」を、学校としての軸となる探究学習のスタートとして試行錯誤してきた中で思う事

教育目標を見ながら高等部の教育の在り方を考えた時、本校が重視すべきは、生徒達が最終的に出す成果物（ペーパーテスト結果も含めて）だけではなく、むしろその過程では？

25 土台としての評価の仕組みづくり②

生徒による各種アウトプットも、初回実施後に、教員による一定の「観点」に基づいたフィードバックを与えた後に再度実施すると、発表グループのアウトプットだけでなく、他の生徒による質疑応答の質も飛躍的に上がった。

「プロセス評価」の難しさ

- 教員が磨くべきは、それぞれのプロセスにおいて、生徒の変容を促す「観点」と「問い」を示す力。
- ただし、教員の「観点」「問い」が正しい訳ではない。「評価」ではない→「フィードバック」。

詳しい授業の様子は、
午後の分科会2 西室・田中教諭の発表にて！
～受講している高1生徒達も登場します！～

26 グローバル探究 BASIC：評価

● 評価対象と評価物

- 1) 生徒の授業内の学び/思考
 - a) <平常授業> 学びの記録 8回
 - b) <発表> 相互チェック表 2回
 - c) <振り返り> ポートフォリオ 1回
- 2) 生徒の成果物に関する学び/思考
 - a) <中間発表> 教員による評価 1回
 - b) <最終発表> 教員による評価 1回

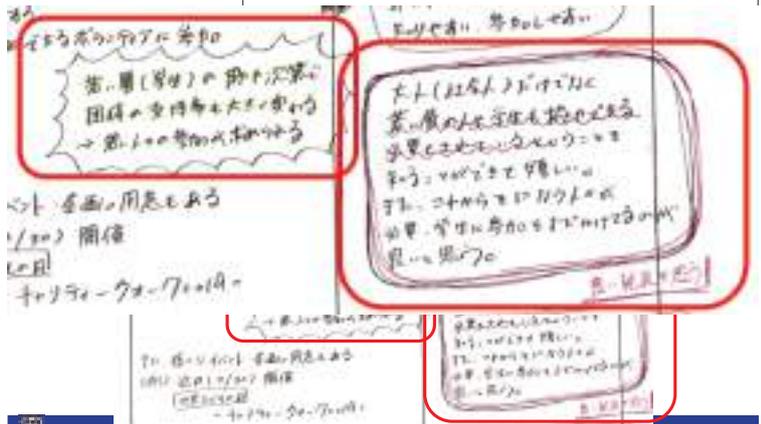
27 グローバル探究 BASIC：評価

※教員による中間（3観点）/最終発表（5観点）の評価
→複数教員による観点別評価
→評価の等価

観点● F5先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりしているかどうか。
A (6点) どのような問題意識（きっかけ）でF5先を選定したのか、訪問の目的（何を知らなかったか）が明確である。
B (4点) F5先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C (2点) F5先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかわかっている。
観点● 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。
A (6点) 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B (4点) 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C (2点) F5先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。
観点● 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。
A (6点) 当該テーマについて何ができるかが具体的に示されており、高校生としての資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。
B (4点) 当該テーマについて何ができるかが具体的に示されているが、それが高校生に実現できることが証明できていない。
C (2点) 何ができるかが抽象的であり、それが当該テーマとどう関連しているのかわかっている。

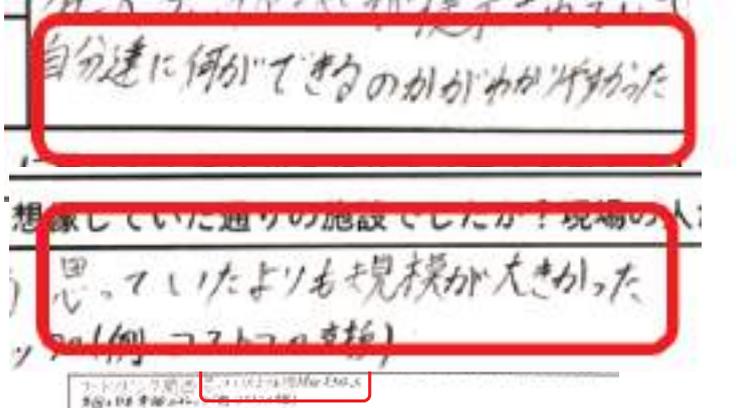
1a 学びの記録

- A 知識：自分の観点を持って自分なりに内容を処理
意見：深い洞察・クリエイティブな広がり
- B 知識：そのままのメモ / 意見：短絡的な感想
- C 知識：記述が少ない / 意見：記述が少ない



1b 相互チェック表

- A 知識：自分の観点を持って自分なりに内容を処理
意見：深い洞察・クリエイティブな広がり
- B 知識：そのままのメモ / 意見：短絡的な感想
- C 知識：記述が少ない / 意見：記述が少ない





オンラインディスカッションを用いた国際協働PBLの実践

関西学院高等部・三木真也(社会科) With The World・五十嵐 駿太

2020.2.24

2 経緯

始まりは、五十嵐氏の営業

- ・大学生の時に、フィリピンの飢餓や貧困に関心を持ち、資材を集め、テニスを教える活動を実践



- ・“子供たちの**潜在能力の高さ**”と、“身近な社会のことを**知らないこと**”の気づき

- ・ICTを使って、国を越えて若者どうしが学び合える環境をつくりたいという熱意から起業



- ・自らインドネシア・バリ島の高校を提携先に開拓したほか、「現場」に出ることを大切に、両国の身近な協力先も開拓

- 1.はじめに (動画)
- 2.経緯
- 3.授業展開
- 4.実践例
- 5.実施体制
- 6.効果
- 7.課題
- 8.Classi
- 9.展望

Contents

2 経緯

関西学院高等部の



1年:世界を体感する

2年:世界を学ぶ

3年:世界のために行動する

- ・その“行動”にあたるプログラムを探していた
- ・受験のない関西学院高等部ならではの自由度の高い**選択授業**の枠組み

バリの魅力

世界第一級の観光地、しかも自然+**伝統文化**
さらに新興国らしい“**生きている社会**”
学べるものは多いはず

➡ハラパン高校とプログラム実現へ

単なる**異文化交流に終わらせない**
両国の**身近な社会問題**解決のための**行動**を、
実践的な英語でのディスカッションで実現



1

はじめに

まずは紹介ムービーをご覧ください

3

授業展開

- ・各国の3~4名のグループどうして共通のテーマに取り組む
(テーマは事前に希望をとって調整)

- ・3年生の1,2学期それぞれで完結、各10回ずつ、1回90分授業

- ・五十嵐氏の企業での経験を活かし、**プランニングやプレゼンの手法**についても学ぶ



- ・最終プレゼンもSkypeをつなぎ、**両国のグループで1つの発表**

- ・学期末には**クロージングセッション**も

3
授業展開

スケジュール例

ASU-アソシエーツ			
1学期/2学期	プレゼン	13:20 - 15:00 30分 Time	
① 4月17日 13:20-15:00	○	チーム発表/自己紹介/アイスブレイク	↓
② 4月24日 13:20-15:00	○	アイデア出し(なぜ問題になっているのか)	
③ 5月8日 13:20-15:00	○	自分たちで取組める解決策の共有	
④ 5月15日 13:20-15:00	○	フィールドワークに向けて、スケジュール決め	
⑤ 5月22日 13:20-15:00	○	第1回実施日(企画実施&アンケート調査)	
⑥ 5月29日 13:20-15:00	○	行動結果・次回実施共有(チーム・クラス単位)	↓
⑦ 6月5日 13:20-15:00	○	フィールドワークに向けて、スケジュール決め	
⑧ 6月12日 13:20-15:00	○	第2回実施日(企画実施&アンケート調査)	↓
⑨ 6月19日 13:20-15:00	○	行動結果共有(チーム)、最終プレゼン準備	
⑩ 6月26日 13:20-15:00	○	最終プレゼンテーション	

2回のアクション・実践
準備、結果の振り返りも含めて

最終プレゼン
～現状、原因、対策
アクション、結果、将来～

4
実践例

テーマ:教育,貧困,農業,家族,伝統文化,観光,ゴミ問題,環境問題

家族

◇家族とのコミュニケーションがだんだん短くなっていることをなんとかしたい
⇒家族へのメッセージを書いてもらってメッセージツリーにしよう



さらに…
⇒“Family's Day”をつくってみんなに家族と過ごす時間について考えてもらう

4
実践例

テーマ:教育,貧困,農業,家族,伝統文化,観光,ゴミ問題,環境問題

教育

◇移民街の子どもたちに学ぶ楽しさを伝えたい
⇒Skypeで英語の手遊び歌を教えよう



◇障がい者の教育や就職の差別をなくしたい
⇒両国で障がいのある人たちと一緒に作ったアクセサリを売ろう & 作った人と買ってくれた人をメッセージカードでつなごう



5
実施体制

・両国にファシリテーター (With The World社)
⇒授業進行、コミュニケーションやプレゼンテーションなどについてのレクチャー



・関西学院側に大学生ラーニングアシスタント (主に関西学院大学より)
⇒各グループについてもらい、生徒へのアドバイスと評価
教員と生徒の間の、絶妙な距離感

◎きめ細やかなプログラムと評価の仕組み

4
実践例

テーマ:教育,貧困,農業,家族,伝統文化,観光,ゴミ問題,環境問題

伝統文化

◇自分たちも知らなかった地域の伝統産業の良さを伝えよう
⇒和ろうそくのランタンを作るワークショップをしよう



食文化

◇野菜嫌いをなんとかしたい、栄養バランスの大切さを伝えたい
⇒Skypeで“キャラ弁”を教えよう



5
実施体制

・評価 (大学生ラーニングアシスタント)
チーム評価 + 個人評価

リサーチ力・丁寧さ	準備
計画性・緻密さ	コミュニケーション
他者の巻き込み・連携	+リーダーシップ
オリジナリティ	+発想力
	+チームワーク

根拠
↑
観察

6

効果

- ・PBLならではの**達成感**
…「現場に出る」「国境を越える」臨場感
- ・**実践的な英語活用**
…文法や単語に限らず、姿勢、意欲、相づちなども⇒自信に
- ・さまざまな実践的スキルを学べる機会
…プランニング、交渉、準備、広報、プレゼンなど
- ・**柔軟性**、ボーダーを超えていく**若さ**
…外国に「友達」ができる
- ・(いい意味で)価値観、性格、スタンスの違い
…“Yes”、“要求”など

8

Classi

- ・毎回の授業レポート、最終振り返りに「アンケート」を使用
⇒蓄積,共有,評価

▲なかなか徹底できず…

- iPadを持たない学年**
スマートフォンやPCでは使いにくい？

- ・自然と多チャンネルに…



ツールとしての可能性はあるが…

- ▲インドネシア側の使いやすさ

⇒2020年度はチャレンジ



6

効果

※実際の交流も
2018年 インドネシア⇒日本 日本⇒インドネシア

現場、文化を学ぶ



「仲間」に会う



9

展望

- ・WWLC事業での再編…2年間のプログラムに
⇒「探究」の要素の強化
しっかり議論や分析を行う
基礎となる**学びや技術**を身につけて「行動」へつなげる
評価の視点、基準のブラッシュアップ

- ・互いに学び合えるように

- ・関西学院大学との連携
…バリ・ウタヤナ大学との連携、大学生のインターン

- ・他の国との実施

- ・多様な生徒、それぞれの可能性



7

課題

- ・ICTインフラ (不安定なコネクション)
- ・生徒の「**自主性**」や「**選択**」
…テーマや行動の選択肢が**限定的**
- ・**安易な「行動」**になってしまう
…議論や分析の不足
- ・**双方向性や共同性の不足**
…それぞれの国でそれぞれ行動する
「途上国」に「**してあげる**」ような意識
- ・価値観の違い
…インドネシア側から、「**貧困**」のテーマを除外の要請

限られた授業回数
「効果」優先

Fin.

ご清聴ありがとうございました



関西学院高等部
KANSAI GAKUIN HIGH SCHOOL



With The World

関西学院高等部の 「読書科」探究学習

— 情報の人間くさを理解し、
創造的な探究の物語を紡いでいける
学習者を育てるために —

兵庫県花・のじぎく



関西学院高等部
読書科教諭・司書教諭
種谷克彦

関西学院高等部読書科の授業

【カリキュラム】

第1学年

- ・図書館利用の達人になる
- ・メディア・リテラシーを習得する
- ・テーマ読書の基礎を味わう
(ブックトークの実践)

第2・3学年 卒業論文の作成

関西学院高等部図書館



情報の物語 … 人間くささ …

☆ 純粹に客観的な情報はない！

一般的に「客観的」と思われている情報

— 学校生活の中で探してみよう —

- ① 新聞
- ② 辞書
- ③ 教科書



関西学院高等部読書科の授業

【目標】

- ① 情報収集のおもしろさを理解する
- ② 研究の楽しさを理解する

人間くさい情報① 新聞

2006(平成18)年4月28日付朝刊

読売新聞

毎日新聞





渡辺恒雄
読売新聞社長
巨人オーナー

「ボクも知らないような人が
入るわけにいかない」
「カネがあればいいというものではない」



三木谷浩史氏
TBS買収事件
2005年10月



2004年
流行語大賞
「新規参入」



堀江貴文氏の
フジテレビ買収を
ホワイトナイトとして
阻止した
三木谷浩史氏



三木谷浩史氏の
TBS買収を
ホワイトナイトとして
阻止した
堀江貴文氏



堀江貴文氏
フジテレビ買収事件
2005年2月



[参考]日本の四大ネットワーク

読売新聞	900万部	日本テレビ・読売テレビ
朝日新聞	650万部	テレビ朝日・朝日放送
毎日新聞	300万部	TBS・MBS
産経新聞	160万部	フジテレビ・関西テレビ
日本経済	270万部	テレビ東京・テレビ大阪

毎日新聞系列のTBSを救ったから？



ほりえもん ペコリ



新聞社は、
「私達スポーツ報知は読売巨人軍の見方です」
とか「デイリースポーツは阪神が大好きです」的
な看板は表向き掲げていない。(中略)
私達が新聞で読んだりテレビで見たりするもの
は「事実そのもの」ではなく「真実」でもなく、
「誰かが編集した情報」であることは承知して
おくべきだろう。

(藤原和博『よのなか教科書 国語』新潮社・
2003年・155頁)

岩波書店

『国語辞典 第四版』

男女間の、恋したう
愛情。こい。
「一結婚」

旺文社

『国語辞典 第八版』

特定の男女間で互い
に相手を恋い慕う
愛情。こい。「一結婚」

人間くさい情報② 辞書

「恋愛」の定義

三省堂『新明解国語辞典 第四版』

特定の異性に特別の愛情をいだいて、
二人だけで一緒に居たい、出来るなら
合体したいという気持ちを持ちながら、
それが、常にはかなえられないで、
ひどく心を苦しめる(まれにかなえられて
歓喜する)状態に身を置くこと。



2012年 本屋大賞



『野生時代』(角川書店)2012年4月号



『新明解』脅迫事件

京都に住む暴力団幹部「進展」という言葉の解説が他社のものと違うのはおかしい。今からドスを持っていくからタクシー代を出せ。・・・と脅した。

三省堂はこの時会社更生手続き中で、金を出そうにも出せない状態だった。



三浦しをん

人間くさい情報③ 教科書
単元編成の個性

東京書籍『精選現代文』
平成20年度版

三省堂『現代文』
昭和63年度版

- 1 評論①
- 2 小説①
- 3 評論②
- 4 詩歌(詩四編)
- 5 評論③
- 6 小説②
- 7 評論④
- 8 小説③

- 1 人間をみつめる(評論・小説)
- 2 方法の発見(評論二編)
- 3 近代の小説
- 4 生活とことば(評論・自伝)
- 5 詩歌の風土(詩・短歌・俳句)
- 6 現代の小説
- 7 批評精神(随筆・評論)
- 8 明治の青春(小説・書簡)

⇒ ジャンル単元

⇒ 主題単元

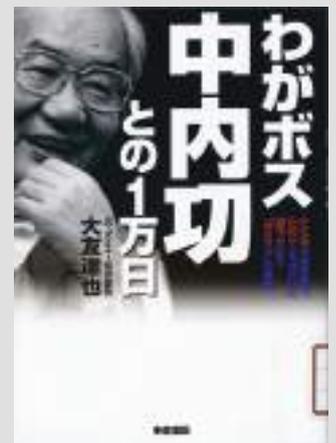
「新明解は、なぜ“いたちごっこ”という言葉にそこまで心血を注ぐのか」問題がありまして、なぜか説明がかなり長く、用例もふたつも載っています。一方、淡々として声高な主張をしない『岩波国語辞典』は用例すらない。

この岩波の辞書は下ネタが一切載っていないことも特徴的。でも「しゃれ」という単語は新明解の方が真面目な説明で、岩波の方が、「へたな……はやめなしゃれ」なんて用例が載っていたりする。

人間くさい情報

④書物

A 表紙・装丁





- 村田治一(1955年ころから約半世紀にわたり邪馬台国・古代史関連書籍を愛読。公務員・証券・自動車関連に転職5回。1990年ころから本格的に研究し、現在...古代史研究家?...に至る・東京大文学部中退)
- 森 繁弘(防衛庁統合幕僚会議議長・空将・旧陸軍士官学校卒・航空自衛隊で10年間パイロットとして活躍)
- 安本美典(文学博士・京都大文学部心理学科卒)
- 久保田穰(弁護士・東京大法学部卒・長年の弁護士活動で鍛え上げた調査能力と理論能力を駆使し、「邪馬台国」論争に終止符を打つべく本書を完成させた。)

人間くさい情報④書物

B 著者(の職業)



人間くさい情報 書物

C 序文・はじめに



邪馬台国論争関係文献

	書名	著者	出版社	発行年月
①	邪馬台国論争批判	安本美典	芙蓉書房	1976年12月
②	発見! 邪馬台国への航跡	森繁弘	講談社	1987年10月
③	テラスで読む 邪馬台国の謎	武光誠	日本経済新聞社	1992年06月
④	邪馬台国のゆくえ	関口昌春	白順社	1994年07月
⑤	邪馬台国論争	岡本健一	講談社	1995年07月
⑥	邪馬台国はどこにあったか	久保田穰	プレジデント社	1997年09月
⑦	卑弥呼 倭の女王は何処に	関和彦	三省堂	1997年11月
⑧	卑弥呼の謎 年輪の証言	倉橋秀夫	講談社	1999年10月
⑨	ヤマトは邪馬台国ではない	村田治一	新人物往来社	2004年07月
⑩	邪馬台国の原点	甲谷忠義	文芸社	2005年03月
⑪	邪馬台国 魏使が歩いた道	丸山雍成	吉川弘文館	2009年04月
⑫	邪馬台国の滅亡	若井敬明	吉川弘文館	2010年04月

岩盤を打ち砕きたい一念で、私は本書を著した。素人なるがゆえに、研究不十分な点は多々あろう。しかし素人なるがゆえに、なにもものにも拘束されず、もっとも自由に、もっとも客観的な立場から、すべての文献や学説に対応することができた。

森 繁弘(防衛庁統合幕僚会議議長・航空自衛隊で10年間パイロット)

高校生にさえ容易に理解していただけるような内容の本が、日本古代史の専門の方々には容易に理解していただけず、繰り返し罵倒に近い批判をうけることになるのは、なぜなのであろうか。(中略)マスコミによる切りすてや、罵倒や、無視をもって答えとするならわしになってしまうことである。そして私がしばしばのべてきた意見は、罵倒のなかにかきけされがちとなる。(目次→「罵倒主義」)
安本美典(文学博士・京都大文学部心理学科卒)

情報の人間くさを理解した学習者たちは

卒業論文の制作(第2～3学年)

★ 情報の多様性の重要さ

- ①書籍 ②雑誌 ③論文
- ④新聞
- ⑤フィールドワーク

依頼先の会社(私は弁護士)の人達には難しいと言われるし専門家には見向きもされなかった。どうせ専門家は素人の書いた本は見ないのだから仕方がない。邪馬台国に憑かれている人の中にはマニアのように珍説を述べる人が多い。しかし私はまだ正気は失っていないつもりである。自分で保証しても当てにならないが、毎日、法律上の紛争を裁判所で議論しているのだから、正気を失ったら、裁判所に受け入れられず、商売をやっていられないはずである。

久保田穰(弁護士・東京大法学部卒)

関西学院高等部生徒のテーマ

- 「日本において神と妖怪を分けるものは何か」
- 「日本人は何故、儂いものに美しさを感じるのか」
- 「日本人の涙の価値観はどう変化してきたか」
- 「日本のトイレと西洋のトイレはなぜ違うのか」
- 「なぜ飢餓に苦しむ国と飽食に苦しむ国が同じ世界に存在しているのか」
- 「武田勝頼は本当に凡庸な武将だったのか」

人間くさい(主観的な)情報

一見、客観的な 文献における

- | | |
|-------|-----------|
| ① 新聞 | ① 表紙・装丁 |
| ② 辞書 | ② 著者(の職業) |
| ③ 教科書 | ③ 序文・はじめに |



武田信玄



武田勝頼

あとがきより

「常識を疑う」という読書科の目標に沿って「武田氏を滅亡させた武田勝頼は凡庸な武将」という常識を疑って、「武田勝頼は本当に凡庸な武将だったのか」というテーマを設定した。

しかし研究すればするほど武田勝頼が凡庸な武将だったことがわかった。

あとがきより

最後に、この研究を指導し見守ってくださった種谷克彦先生と

アリたちの度重なる脱走にも関わらず理解を示してくれた家族に感謝してこの論文を締めくくりたい。

ご静聴ありがとうございました。
先生方との出会いを機会に
探究学習の研究を
これからも深めていこうと思います。



関西学院高等部 種谷克彦

授業実践と生徒実態報告

関西学院高等部
佐藤太亮
(理科・ICT)



4 授業実践・座学での活用(授業の様子①)



5 授業実践・座学での活用(授業の様子②)



- 授業実践(佐藤)7分
- 授業実践と生徒実態(徳田)10分
- 教員実態(前)10分
- Classi活用(佐藤)5分
- 生徒ICT委員会と生徒実態(佐藤)8分

6 授業実践・座学での活用(授業の様子③)



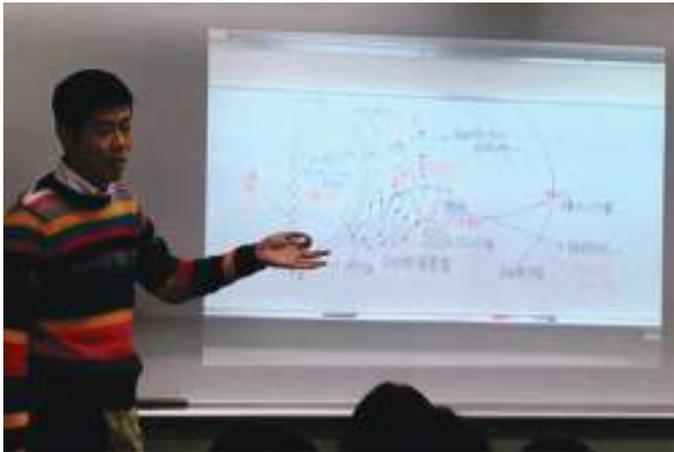
授業実践

7 授業実践・座学での活用(カメラ・写真①)

床の上に静かに立っている人に働いている力を、
全てもれなく、力の矢印で書け



8 授業実践・座学での活用(カメラ・写真②)



10 授業実践・座学での活用(使用アプリ)



クラスルーム



ロイロノート

Classi

11 授業実践・座学での活用(使用アプリ)

ロイロノートとの使い分け

資料保存と一斉配布
のClassi

速さと個別対応
のロイロノート

Classi

教員

アップロード
ダウンロード

Classi

ダウンロード
アップロード

生徒



教員



速い

生徒

9 授業実践・座学での活用(PowerPoint)

原子の相対的質量は原子量だが、同様にして、
分子の相対的質量は **分子量** と呼ばれる。

また、
イオン結晶
金属
イオン } の相対質量は **式量** と呼ばれる。

物質の種類	原子	分子	イオン結晶	金属(結晶)	イオン
具体例	O	H ₂ O	MgCl ₂	Cu	SO ₄ ²⁻
化学式 の名称 (元素記号)	分子式	組成式	組成式	イオン式	
相対的質量 の名称	原子量	分子量	式量	式量	式量

12 授業実践・座学での活用(クラスルーム①)



13 授業実践・座学での活用(クラスルーム②)



16 授業実践・座学での活用(ロイロノート③)



14 授業実践・座学での活用(ロイロノート①)

原子の相対的質量は原子量だが、同様にして、分子の相対的質量は分子量と呼ばれる。
また、イオン結晶、金属、イオンの相対的質量は式量と呼ばれる。

物質の種類	原子	分子	イオン結晶	金属(結晶)	イオン
具体例	O	H ₂ O	MgCl ₂	Cu	SO ₄ ²⁻
化学式の名称	(元素記号)	分子式	組成式	組成式	イオン式
相対的質量の名称	原子量	分子量	式量	式量	式量

17 授業実践・座学での活用(ロイロノート④)



15 授業実践・座学での活用(ロイロノート②)

ロイロカード(+プリント配布)
授業の流れには沿っているが、自分で考えて空欄を埋めていく必要あり。
処理が速い者は授業中に埋められる
+授業者が話すこともメモできるように(したい)。

情報は与えやすくなった。
授業を休んでいる者がカードとプリントを見れば点数が取れる試験にはしない。
メモする力、情報処理能力をつけたい。
情報は散りばめる。カードで全てを完結させない。

18 授業実践・座学での活用(ロイロノート④)

- ・他者との意見共有→アウトプット・知識の定着
- ・隠れることができない→強制参加
- ・他者との比較→自己理解度チェック
- ・エンターテイメント性、クイズ大会の実施

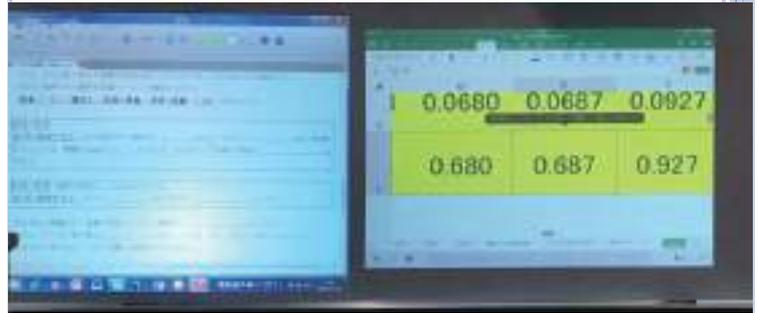
19 授業実践・全般での活用(Classi①)

佐藤 太司 先生

実験動画について

- ・各個人1分以内の動画に編集してもらいます。
- ・写真を繋げたり、動画を加工したり、文字を挿入したりして、編集します。
(次回の授業にて)
- ・そのため、素材の共有は授業までに終わらせておいてください。

22 授業実践・実験での活用(データ整理②)

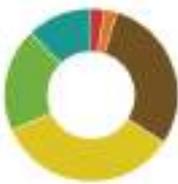


20 授業実践・座学での活用(Classi②)

終了2分前にアンケート配信

化学基礎の授業理解度アンケート(4)

設問1 金属イオンと金属の反応 (金属性)について理解できましたか? 「5」を最高として、あなたの理解度を答えてください。



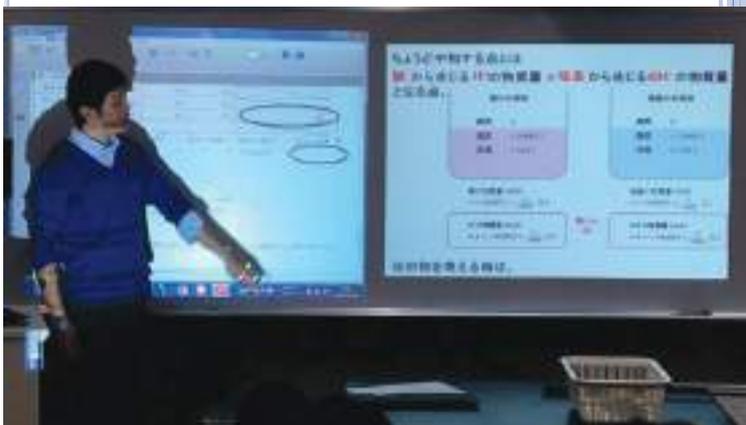
5	理解度	3.1(2.4%)
4	理解度	1.0(0.4%)
3	理解度	32.0(23.3%)
2	理解度	34.3(24.7%)
1	理解度	28.7(20.9%)
平均値		2.3(10.2%)

成績が良い子でも、「1」
成績は良くないけれど、「5」

23 授業実践・実験での活用(実験操作)



21 授業実践・実験での活用(データ整理①)



24 授業実践・実験での活用(実験動画①)



実際の動画→

25 授業実践・実験での活用(実験動画②)

評価ポイントの提示

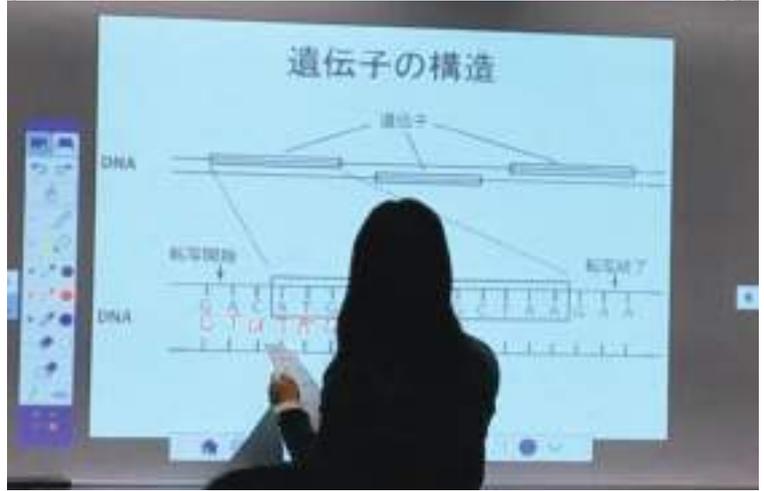
- ・どのような実験だったか無駄なく説明しており、誰が見ても分かるようになっているか
- ・観察の際の変化や注目すべき事柄をもらさず理解できるようになっているか
- ・各手順に強弱をつけて編集されているか。(例)火をつける場面に数十秒使わない。
- ・今回は2つの金属を比較していくことが大変重要です。そのことが分かるようにしよう。
- ・中和滴定の成功判断ができる動画となっているか。(①ビュレット ②ホールビペット
- ・数値をあげての議論

使用アプリ 自由 →提出アプリロイロノート

提出までに長い期間をとる

よい動画とは？

28 授業実践・他教員取り組み(電子マーカー)



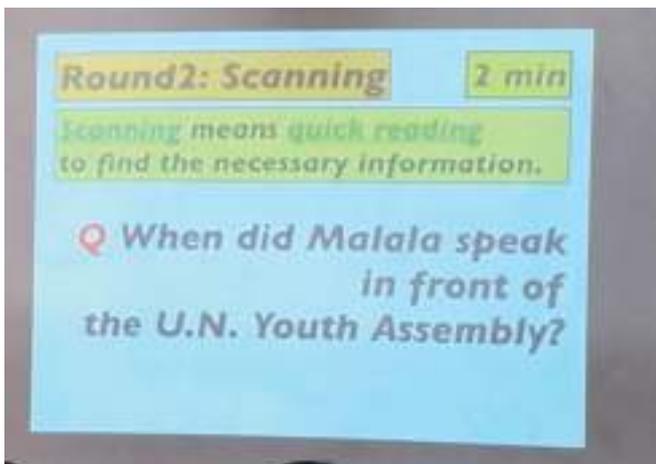
26 授業実践・他教員取り組み(動画視聴)



29 授業実践・他教員取り組み(教科書会社)



27 授業実践・他教員取り組み(指示出し)



30 授業実践・他教員取り組み(意見交換)



31 授業実践・他教員取り組み(読み取り)



Classi活用

32 授業実践・他教員取り組み(調べ&読み取り)



35 Classi活用(校内グループ①目的)



- ①教職員と
 - ・朝礼がない学校
 - ・情報伝達速度・量の増大
- ②生徒と
 - ・情報を掴みにいく訓練
 - ・委員会活動の活発化
- ③保護者と
 - ・学校へのコミットを高める
 - ・情報開示で保護者と共に

33 授業実践・プロジェクター

白板の 1/3 プロジェクター投影
2/3 マーカー

プロジェクター投影は補助教材！
板書と併用してこそ生きる！？

1/3の投影場所は
自由度が高い方がいい！

36 Classi活用(校内グループ②リスク管理)

青系 : 教師のみ

赤系 : 生徒含む

グレー系 : 保護者含む

リスクマネジメント

37 Classi活用(校内グループ③情報伝達)

佐藤 鳩先生

文化祭(クラスパーカー)について

いつもお世話になっております。
 中間試験も終わり、文化祭や秋の大会に向け学校全体が活気付いて行く時期がやってきました。
 成績表に関しましては、来週火曜日に配布予定ですので、お子様を通じて確認をお願いします。
 遅刻や欠席について見ていただけたらと思います。

40 Classi活用(生徒カルテ)

アンケートを生徒カルテへ
 振り廻りアンケート

カテゴリ タイトル

【考査】1年2学期中間考査会振り返り

文理選択【ポートフォリオ】

【考査】1年1学期期末考査振り返り

38 Classi活用(校内グループ④意見交換)

テスト期間中に失礼します。

前回の委員会でもとめた各期のテーマを写真で示します。
 委員会後に出していただいたものに関しては反映しているつもりですが、テスト前でバタバタしてちゃんと反映できていないかもしれません。現状で把握していない場合は黄色で塗りつぶしていき、クラスの委員はコメントしてください。(9/22日2時テーマは○○です。で)

遅くなってすみません、よろしくお願ひ致します。

A組3班 テーマは海外の大手企業について

22人中2人が「見ました」と言っています。

41 Classi活用(ポートフォリオ①)

文理選択【ポートフォリオ】

例題題名と内容、画像のある題名を挙げてみよう。(決められない人は、どんな職業があるのかも調べ、彼に自分がその職業に就くなら・・・で考えよう)
 ①探偵たい・探偵のある職業
 ②なげろ
 ③文壇との関係(文壇/理系/文理共通)

学びたい学部、興味のある学部を挙げてみよう。(決められない人は、どんな学部があるのかも調べ、自分に何がそれを学ぶなら・・・で考えよう)
 ①学びたい・興味のある学部
 ②なげろ
 ③文壇との関係(文壇/理系/文理共通)

1件目
 2クラスマンより、早く朝から責任のある仕事をさせてもらえそう、実務に馴染むスピードが早い、その分仕事の量をこなせたり、自分の実力を試す機会が多くなると思う。
 3文理共通

1法学、医学
 2法学は弁護士に必要、活躍できる場を広げるために法学。
 3文理共通

進路担当とのタッグ
 文理選択や学部選択に生かす

39 Classi活用(校内グループ⑤意見交換)

話合いの場??

教師による監視と「見られている」感覚

LINEという存在

情報提供の場

グループ内で一部生徒にのみ発言を許可したい
 (委員長や各行事の長)

42 Classi活用(ポートフォリオ②)

【考査】1年2学期中間考査会振り返り

文理選択【ポートフォリオ】

【考査】1年1学期期末考査振り返り

【振り返り】1年人権ホームルーム

関西学院大学三田キャンパスツアー

【事前配布】校舎HPポートフォリオ

【考査】1年1学期中間考査振り返り

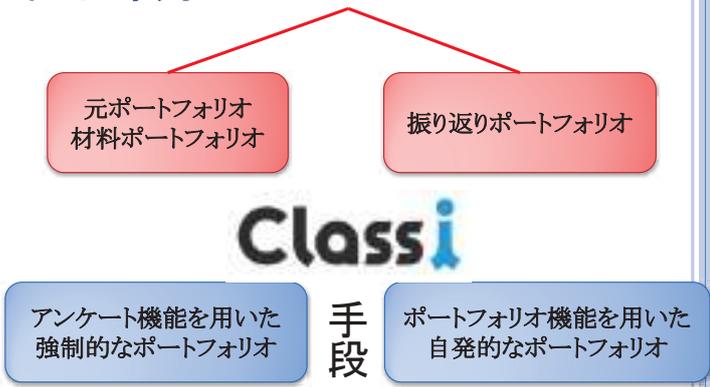
【振り返り】1年人権ホームルーム

関西学院大学三田キャンパスツアー

差は生まれるが・・・

43 Classi活用(ポートフォリオ③)

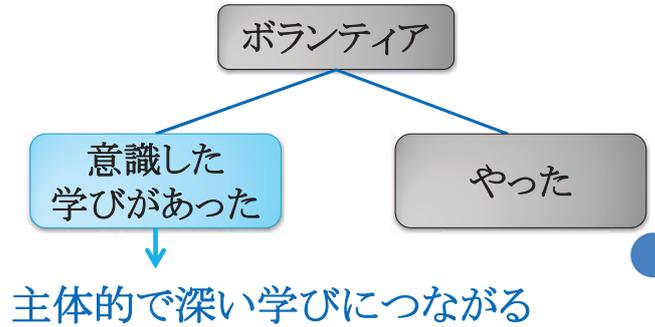
ポートフォリオ



46 Classi活用(ポートフォリオ⑥)

「インスタ映え」ならぬ「ポートフォリオ映え」

強制されるポートフォリオに意味は？

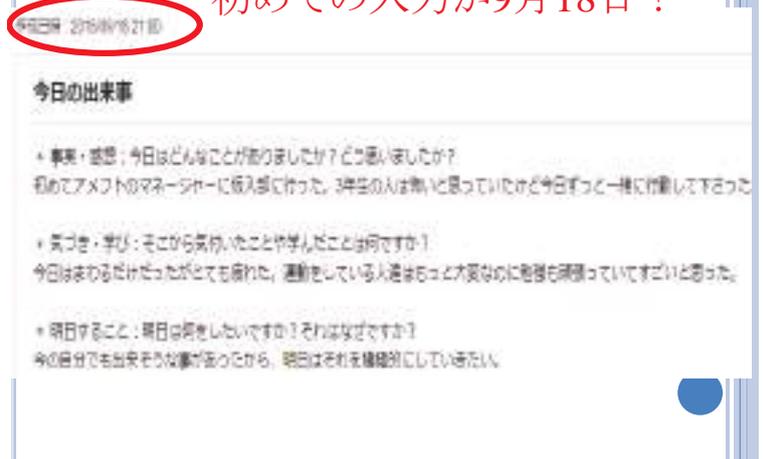


44 Classi活用(ポートフォリオ④)

教員から表示する場合	
A 新ベースの振り返りシート	写真データ化 + C 質問項目に基づいたコメント入力 <small>※表示が可能な項目は異なります。</small>
B 材料ポートフォリオ	
生徒が自ら記録する場合	
B 材料ポートフォリオ	【写真データ化】 + D テンプレートに基づいたコメント入力 <small>※写真データ化に設定された項目は必ず入力してください。</small>
学年全体で必ず取り組ませるポートフォリオ	
定期考査・GTEC	考査結果の出るころに担任から新ベースで振り返りを促しアンケート機能で集約
進路指導	スタディプランニングブックの職員室所を指示しアンケート機能で集約
IBP	課題ごとに新ベースで振り返りを促しアンケート機能で集約
校外研・文化祭	準備・終了段階でアンケート機能を活用し集約
教員から適宜指示をして取り組ませるポートフォリオ	
教科指導	単元ごと、課題ごとに必要に応じてアンケート機能を活用
学芸会活動	委員会ごと、行事ごとに必要に応じてアンケート機能を活用
クラブ活動	練習ごと、大会ごとに必要に応じてアンケート機能を活用
ILP	活動ごとに必要に応じてアンケート機能を活用

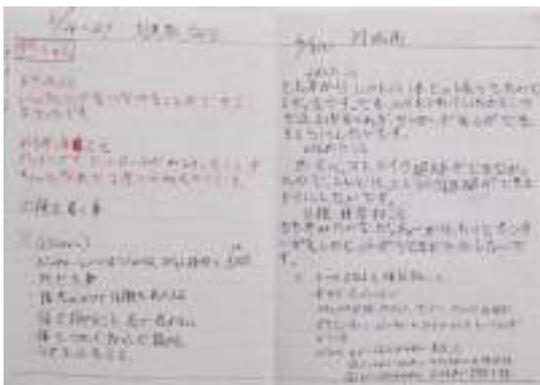
47 Classi活用(ポートフォリオ⑦)

初めての入力が9月18日！



45 Classi活用(ポートフォリオ⑤)

部活ノートの学習、生活版



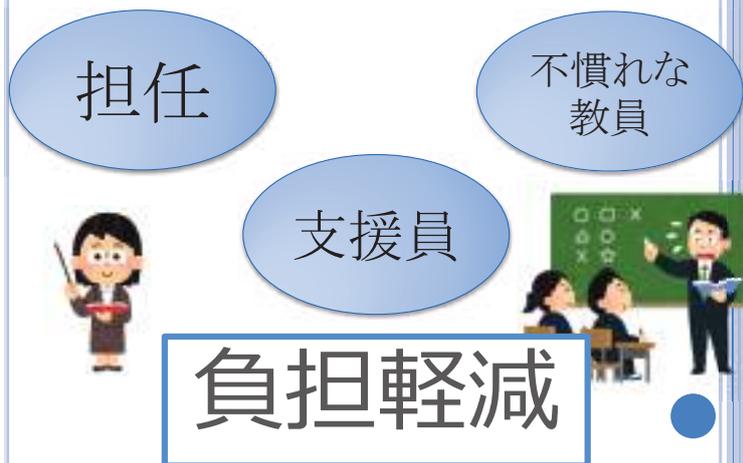
生徒の実態

※スポニチ2016/9/29掲載、大谷翔平選手の野球ノート

49 生徒実態(対応力の高さ)



52 ガイドブックの必要性と課題



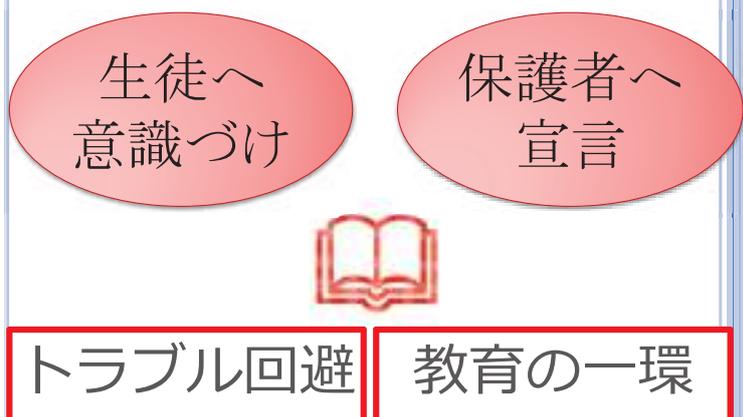
50 生徒実態(対応力の高さ)

個人に任せた初期設定

- Microsoftアカウントの作成 (必須)
- メールアドレスの作成 (必須)
- 個人Apple IDの設定 (任意)

ほとんど対応することなく
初期設定は終了

53 ガイドブックの必要性と課題



51 ガイドブックの必要性と課題

掲載項目

- iPadの初期設定関連
- 主要アプリの使用方法
- 修理と保証サービス関連

- 禁止事項や制限事項
- モラルに関する項目

54 ガイドブックの必要性と課題

アップデートは突然に・・・



紙ベースの変更は年度毎
PDFで随時配信予定

「自由と自治」

自由度を高めたい!

どこまで取り締まれるか

運用についての意義や方法論
を考える場

教師

生徒

教師

生徒

教室プロジェクターの利用について

- ・プロジェクターをスクールアワー以外で使用可
- ・ただし、その教室の責任者に許可を取る事。
- ・ゲーム不可。Youtube可。

個人Apple ID

ゲーム

etc.

4月内容	件数
	導入1週間以内/その後
教育機関向けappleIDをサインアウト	22 / 0
パスワードリセット依頼	2 / 0
App store個人ID入力について	0 / 1
touch ID認証に関して	0 / 1
Officeアカウントについて	3 / 0
ネットワーク接続不調	8 / 2
クラッシャー・ロイロノート関係	0 / 6
修理依頼(画面破損)	0 / 3
iPad紛失	0 / 1
電話	3 / 0

61 トラブル処理件数と内容(5,6月)

5月内容	件数
App store個人ID入力について	4
ネットワーク接続不調	3
クラッシー・ロイノート関係	2
貸出用iPadのアプリケーションに関して	1
iPad紛失	1
6月内容	件数
修理依頼	2
ネットワーク接続不調	1

64 ネット利用アンケート

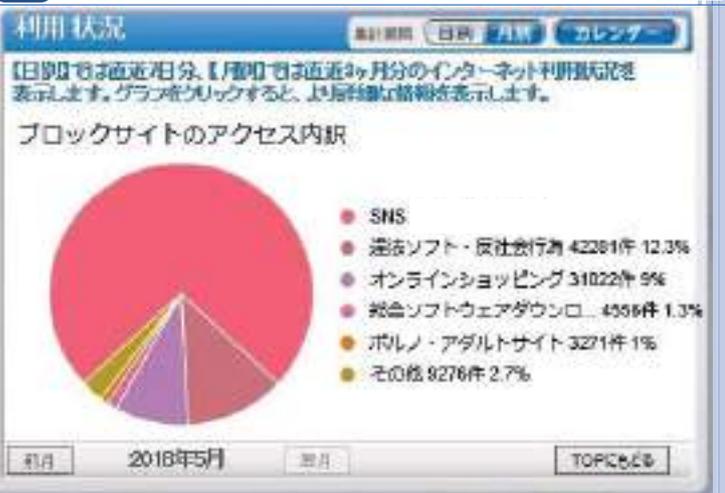
兵庫県立大学
竹内和雄先生



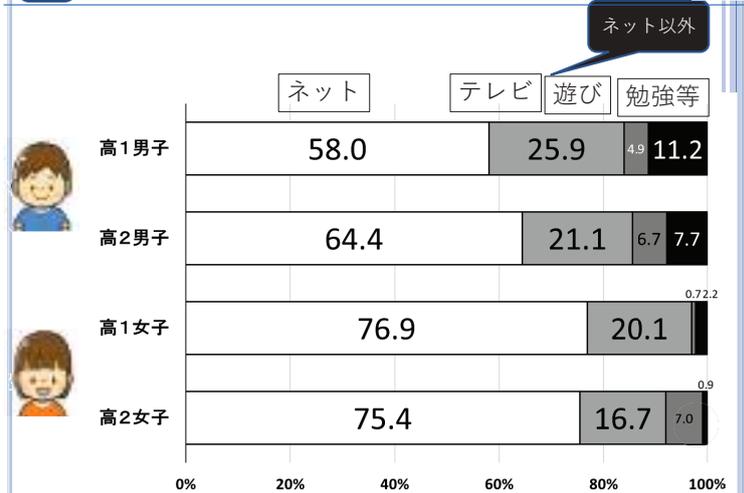
文科省学校ネットパトロール調査研究協力者、総務省青少年インターネットWG構成員、総務省(近畿総合通信局)「スマートフォン時代に対応した青少年のインターネット利用に関する連絡会」座長

	男子	女子	合計
高1	205人	134人	339人
高2	194人	114人	308人
合計	399人	248人	647人

62 4,5月のブロック内容



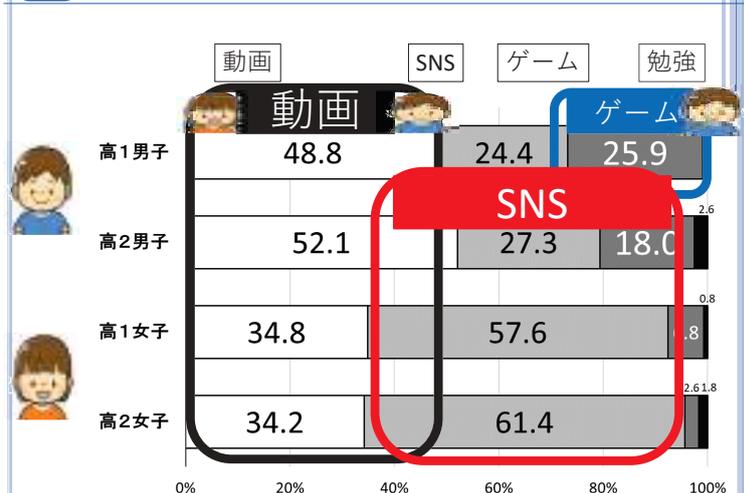
65 家で一番すること(%)



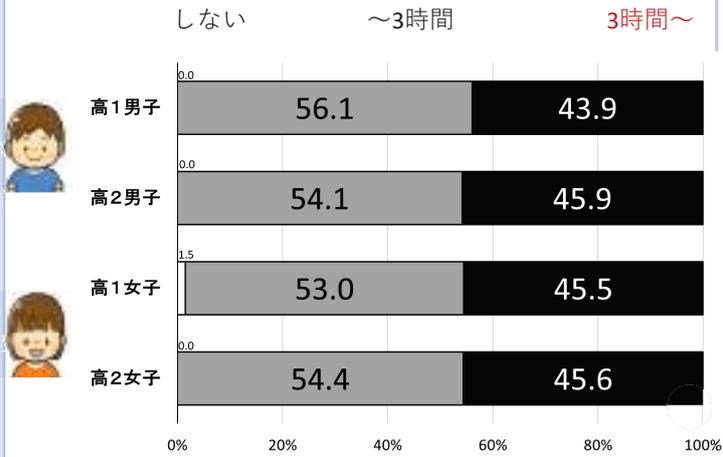
63 4,5月のブロック件数

253685 件

66 ネットで一番すること(%)



67 ネット接続時間(%)



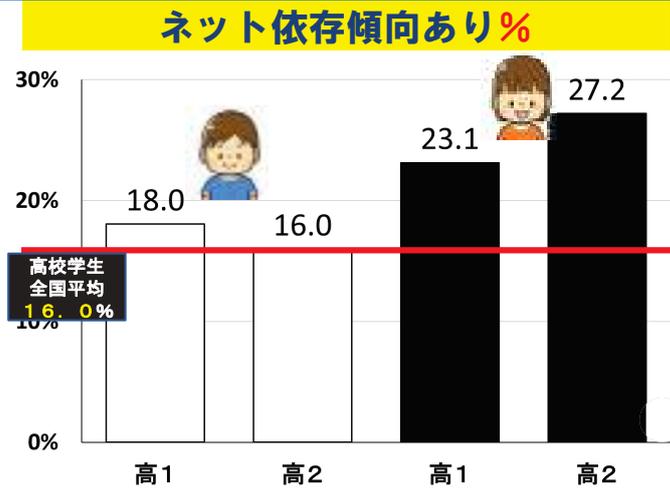
70 ネット依存全国比較



68 ネット依存全国比較



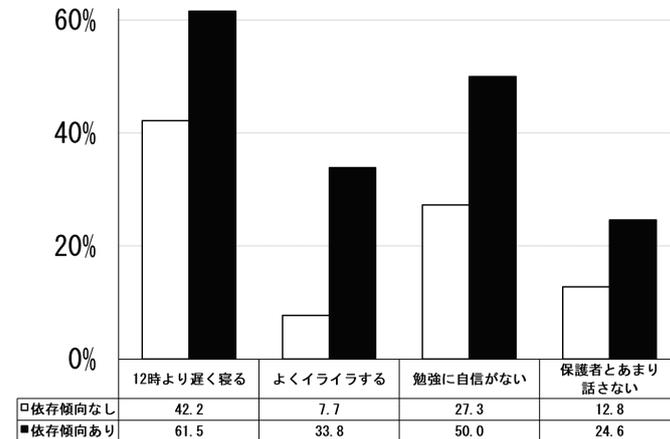
71 ネット利用アンケート



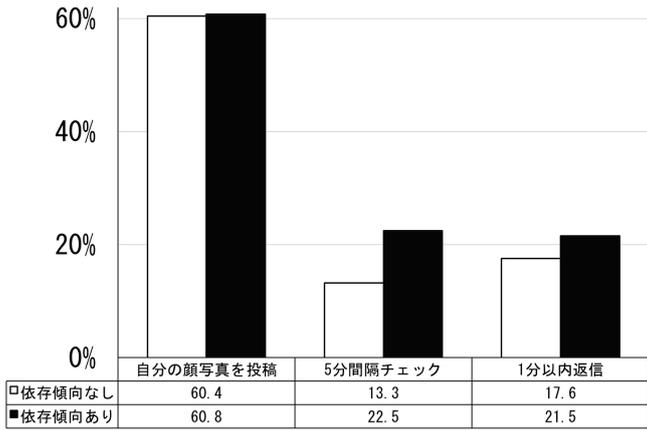
69 ネット依存全国比較



72 ネット依存傾向の有無による違い①



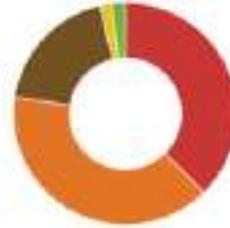
73 ネット依存傾向の有無による違い②



76 iPad利用の実際

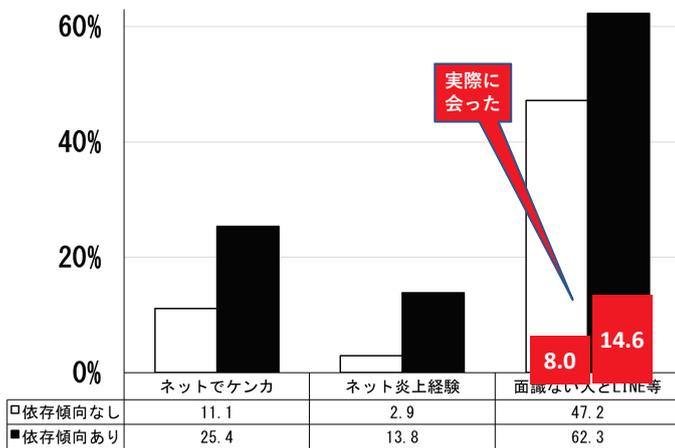
現2年生へ昨年度実施

授業中、授業とは関係のないアプリを何回使用しますか？
ブラウジングを含む。
一番使用頻度の高い授業を想像して



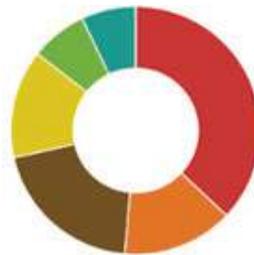
0回	37.6%(133人)
1回	39.8%(141人)
2-3回	18.9%(67人)
4-5回	1.7%(6人)
6回以上	2.0%(7人)

74 ネット依存傾向の有無による違い③



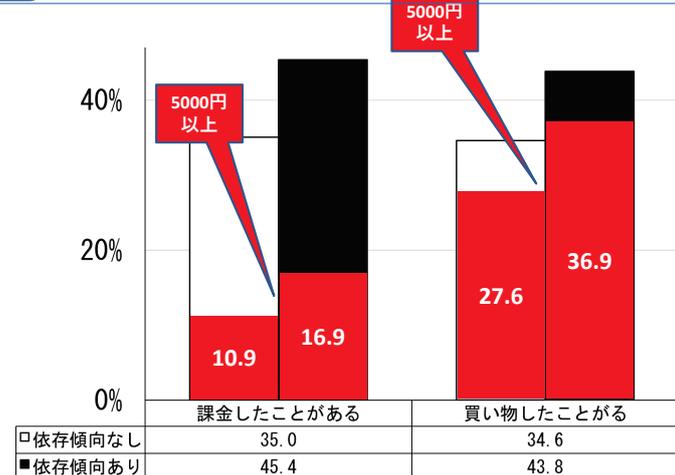
77 iPad利用の実際

授業中、授業とは関係のないアプリを何分使用しますか？
ブラウジングを含む。
一番使用時間の長い授業を想像して



0分	37.0%(130人)
1分以下	14.4%(51人)
2-3分	20.1%(71人)
4-5分	14.1%(50人)
6-10分	7.3%(26人)
11分以上	7.1%(25人)

75 ネット依存傾向の有無による違い④



78 iPad利用の実際

休み時間にiPadを何回使用するか。
すべての休み時間を合計。
※最大授業数7時間→最大6回休み時間あり
中休み(2~3時間目の間)、昼休みあり



0回	15.3%(54人)
1回	25.4%(90人)
2-3回	34.5%(122人)
4-5回	14.7%(52人)
6回以上	10.2%(36人)

79 iPad利用アンケートを受けて

ICT委員会にて

不適切利用・ゲーム利用を問題視
授業によっては、無法地帯となっている・・・

対策案を練る

- ・自己責任論で済ませていいのか？
- ・自治とは？
- ・連帯責任？

82 ICT HRの開催

選択肢II

- A:今まで通り。本人の自覚に任せる。
- B:連帯責任
- C:個人に対する罰則制度
- D:不適切な使い方をしてきたゲームのみ、不可設定
- E:その他

80 iPad利用アンケートを受けて

不可能

特定のカテゴリー(例)ゲーム)だけダウンロード制御

可能

全員、全てのアプリをダウンロード不可、削除不可

個人、全てのアプリをダウンロード不可、削除不可

個別のアプリに対して、ダウンロード不可

83 ICT HRの開催

選択肢II



A	22.8%(86人)
B	3.4%(13人)
C	39.8%(150人)
D	12.5%(47人)
E	5.0%(19人)

- A:今まで通り。本人の自覚に任せる。
- B:連帯責任
- C:個人に対する罰則制度
- D:不適切な使い方をしてきたゲームのみ、不可設定
- E:その他

81 ICT HRの開催

ICT HR開催にむけてのアンケート

選択肢I

①アプリの自由ダウンロードを制限し、教師が申請したアプリのみ配信される形とする。

17人(4.5%)

②今まで通り自由ダウンロード可能な運用とし、次のA～Dのような対応とする。

84 ICT HRの開催



この全員からのコメントを
ICT委員会がまとめあげて全員に提示

85 ICT HRの開催

教員(佐藤)からの意見を例に
各担任からコメント入れてもらいながらFB

④読み終わったら、選択肢II Aを見るように指示してコメントしてください。
「自主性を尊重すべき」・・・その通り、だから、現在のような運用方法を取っている。
「自由と自治」・・・残念ながら、言葉や自由という綺麗な言葉では分からない者が
いるため、日々で時間を取り、考えている。そもそも、ルール作りやゲーム禁止は生徒の
声からスタートであり、アンケート結果も物議を醸している。
「勉強できない・成績が悪くなるのは自己責任だから」・・・
そもそも、授業を受ける態度の話をしている。相手が話している時に、別のことをしてい
ることは自己責任でもなんでもなく、ただの失礼。授業が面白くないは逃げ口上。相手の
せいになっている。相手を不快にしている時点で自制でも自由でもない。矛盾。

88 Classi利用の実際②

Classiを見ない理由とは？(回答者内割合)



(Web利用) 見づらい、通知がない	15.9%(123人)
(アプリ利用) 見づらい	16.0%(124人)
見なくても 教師が教えてくれる	6.3%(49人)
見なくても 周囲が教えてくれる	16.8%(130人)
基本は見ている	30.7%(238人)

「見ました」の数は20前後だが・・・

86 ICT HRの開催

同級生の意見を読む
教師からの意見を読む

→もう一度意見書を作成し、
グループで共有 →提出

回数に応じた罰則規定の制定

89 Classi利用の実際②

Classiを見ない理由とは？(回答者内割合)



その他(特になし記述含む) 14.4%

家でiPadをひらく習慣がない
Wi-fi環境にいないと通知も来ない
休みの日来ていても気づかない
通知から直接情報に飛べない
自分に関係ない情報も多くて面倒

87 Classi利用の実際②

1,2年生(一人一台iPad)へのアンケート
アプリ？Web？



アプリ版	72.7%(539人)
Web版	15.1%(112人)
未回答	12.1%(90人)

通知の利用・・・

90 iPad利用アンケートを受けて

Classiを情報伝達ツールとして認識している？

終礼を無くして、情報伝達を
全てClassiで行ったら、どう思いますか？

91 Classi利用の実際②

意外と(?)

否定的な意見が多い...

・重要な情報は口頭で...

・自己責任放棄

・担任とのコミュニケーションの時間

・お祈りはすべき

94 目指すべきもの



92 Classi利用の実際②

【終礼でClassiを確認する前提で】

【終礼は必要なのか？】



終礼にて口頭で全て確認して 11.8%(38人)

終礼は必要ない 11.8%(38人)

緊急性のあるものは口頭で 45.0%(145人)

Classi + 同じことを口頭で 31.4%(101人)

93 Classi利用アンケートを通して

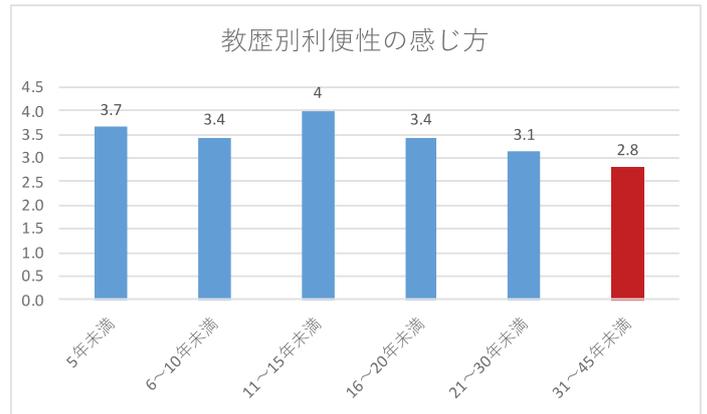
・口だけの自己責任論

・情報収集能力

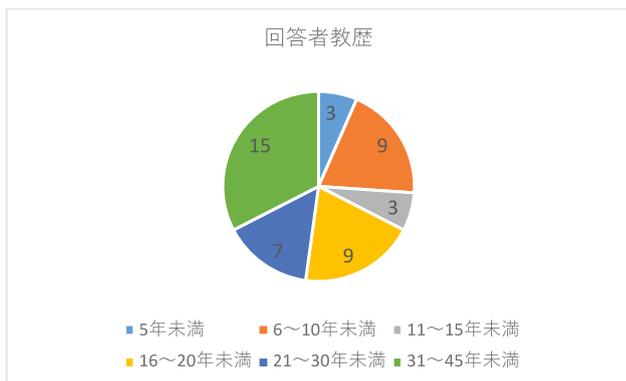
・教師との意識の乖離

会議資料のデジタル化

関西学院高等部 ICT活用に関する現状調査の結果



調査対象

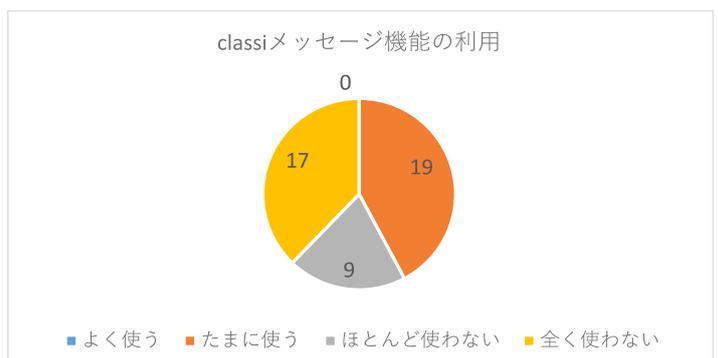
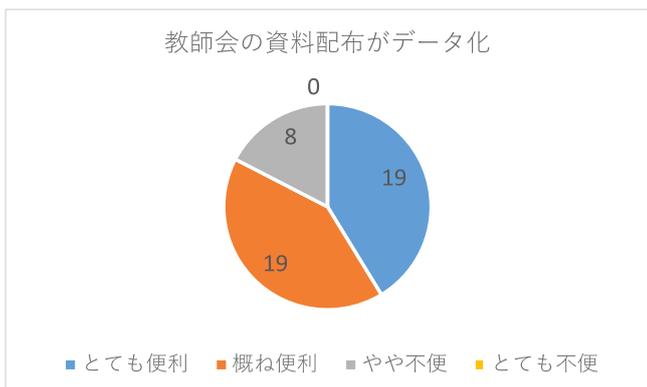


不便と答えた教員の記述

- ・紙の情報の方がわかりやすいことがある
- ・必要な書類を取り出せるかが不安
- ・配信したデータを見てもらえていないことが多い。
- ・たまに、どこにどの資料があるのかわからなくなる。人によると思うが、紙ベースのものを同じ場所にまとめる方が振り返りやすいという人もいると思う。

会議資料のデジタル化

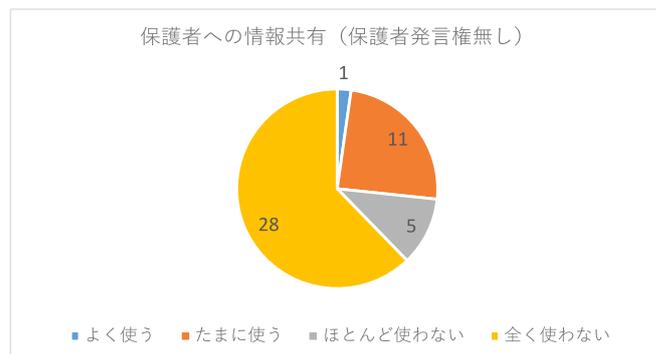
生徒への連絡機能の利用



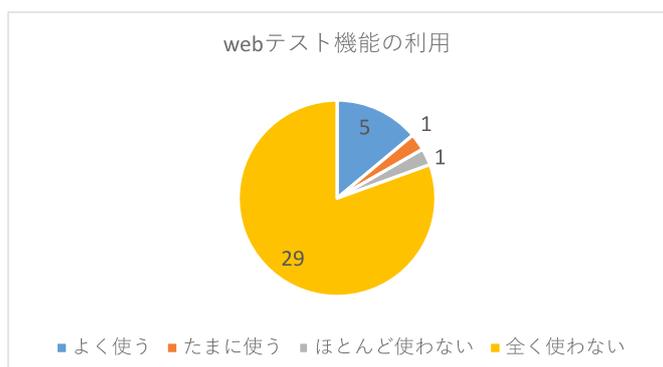
使わないと答えた教員の記述

- ・直接話をした方が早い
- ・生徒への発信には校内グループで事足りている。
- ・1度色々な生徒が自由に発言するようになりその対応が大変だったため。

保護者とのコミュニケーション



Classi上でのテスト機能の利用



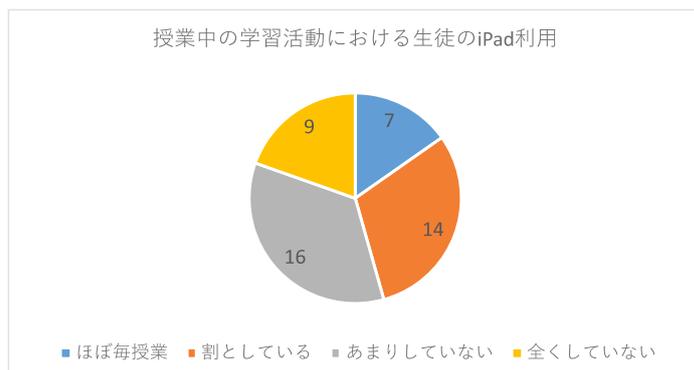
使わないと答えた教員の記述

- ・メールやデジタルでのメッセージは抵抗がある。
- ・保護者からの連絡には一定の壁があったほうがよい。よっぽどのは電話が来る。気楽に発言させると膨大なクレームも予想される。
- ・高校生にもなって生徒を飛ばして親に連絡をしたくない。

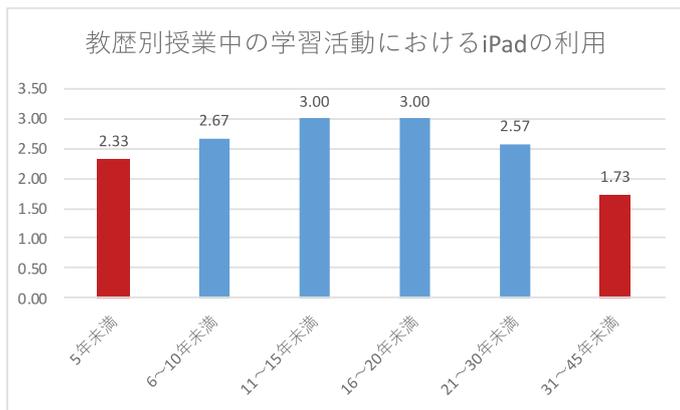
使わないと答えた教員の記述

- ・カンニングが心配
- ・数学のテストは記述式がメインであるため、Webテストは活用しにくいと思う。
- ・web環境が不安定な時に動かなかった場合トラブルになりやすい
- ・今のところあまり便利な機能だと思わない。使い方の例を教えていただいたり、研修などに参加できたらもう少し使うかもしれない。

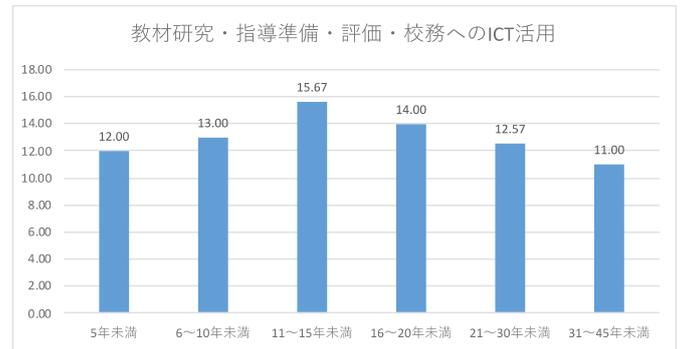
iPadを使った学習活動



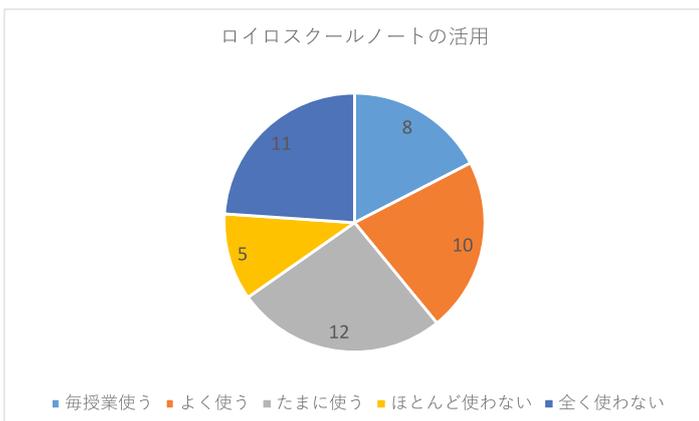
iPadを使った学習活動



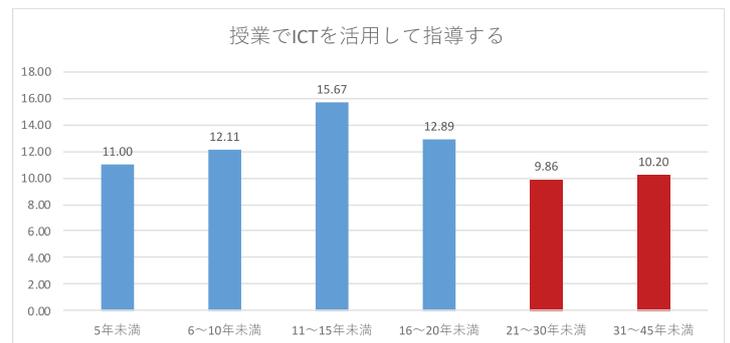
ICT活用指導力 A



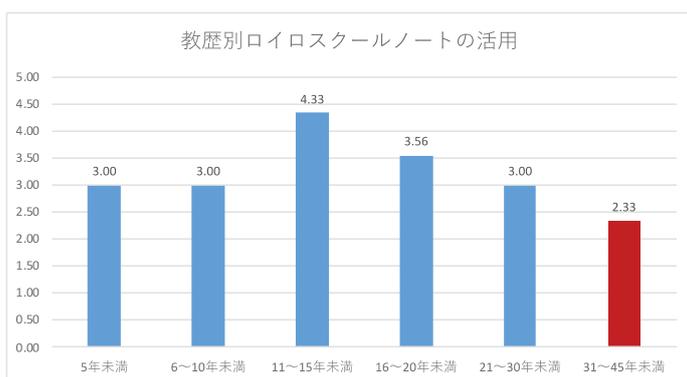
アプリケーションを使った学習活動



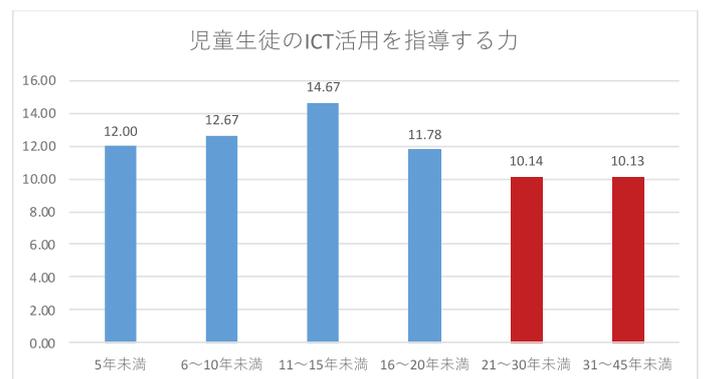
ICT活用指導力 B



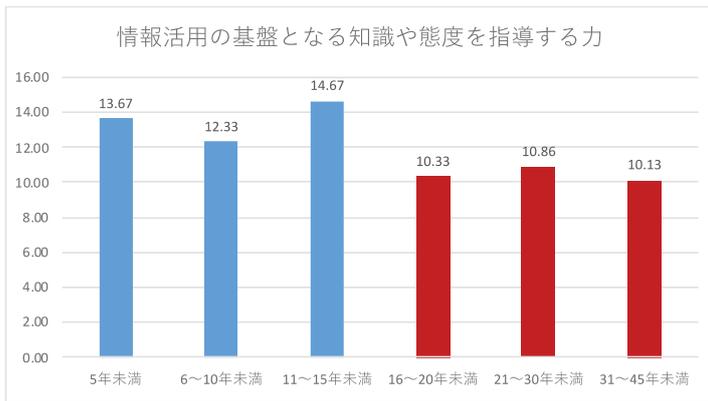
アプリケーションを使った学習活動



ICT活用指導力 C



ICT活用指導力 D





Classi研修会

授業実践報告と生徒意識の実態

報告者: 徳田有希子 (関西学院高等部地歴科教員)



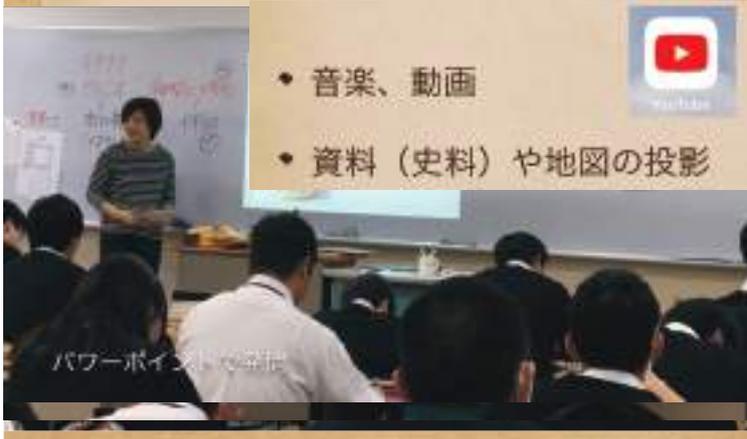
Ipad世代への授業開始前の不安

- ◆ 授業を聞かずに遊ぶのではないかな？
- ◆ メモを取らないのではないかな？
- ◆ その他、想像もできないような混乱が待っているのではないかな？



No

Ipad世代の前の授業での使用



設定したルール

- ◆ ipadの持ち込み、使用は基本的に自由
- ◆ 授業中に他のことをしていたことがわかったら (by クラスルーム→実際は確認せず) 減点する
- ◆ 学期ごとのノート提出は紙ベースで提出する



投影内容の注意点

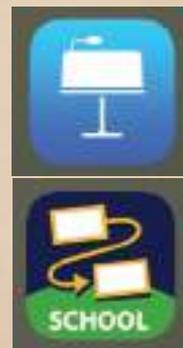
- ◆ 文字数、大きさ、スライド枚数、次へ送るスピード
- ◆ 詳細な内容、重要な資料や情報はプリントに記入



今でも同じ

よく使用するアプリ

- ◆ Keynote
- ◆ Power point
- ◆ ロイロノート



今日はKeynoteで、主にロイロの使用報告をします。

高2世界史の授業における使用例

実際の使用履歴紹介

私を感じる主なIpad使用時の問題点

- ◆ 教材作りの時間拡大と眼精**疲労**（紙+スライド資料）
- ◆ **ネット環境**が全て 
- ◆ ネットで調べる情報の浅さ 
- ◆ ロイロ使用時の**授業時間**



地理で使用したアプリ



生徒側が感じる問題点①（アンケートより）

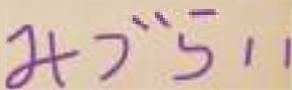
- ◆ **身体的負担**： 首・眼精疲労（寄り目？）、就寝前のブルーライト。重い。 
- ◆ **課題の量の増加**。授業時間外の提出期限。（休日や夜中）→**常に課題に追われるストレス**
- ◆ **情報の整理** →アイコンバッジに通知なし、家と学校でしか受信できず 
- ◆ classicで、教員の送り方の違い。
- ◆ classíで、過去の記録が追いきくい。 

私が特に感じるIpadの利点

- ◆ 生徒個人の意見を拾いやすい（紹介→展開へ）
- ◆ 生徒同士で**意見を共有**させやすい
- ◆ 生徒の、**「協働」への抵抗のなさ**



生徒側が感じる問題点②（アンケートより）

- ◆ ipadで流す + 口頭でも言って欲しい。 
- ◆ **教員間の意識の差**（自由に使いたい。全く使わないのは問題）
- ◆ ipadへの書き込み板書は **見辛く、汚ない**。 
- ◆ **目的**がよくわからない課題がある。
- ◆ 書く機会が減るので**授業が頭に入りにくい**

生徒側が感じる問題点③ (アンケートより)

- ◆ 紙とデータの混合→**どちらかにしてほしい** (紙派も多)
- ◆ **書き込みづらい**。ipad授業では書くペースが合わない
- ◆ (iPad忘れ、充電切れ、ゲームの誘惑、気が散る)
- ◆ **ネット環境**
(一斉に使うと悪くなる、特定のクラスで繋がりが悪い)
→ウェブテストに乗り遅れるetc



生徒側が感じるメリット① (アンケートより)

- ◆ 分からないことを**すぐに調べられる**。(英単語や語句)
- ◆ (絵やグラフの)手描きの**手間が省ける**。
- ◆ **プレゼン**や**グループ発表**がしやすくなった。
- ◆ 他の人と意見の**共有・比較**ができる。
- ◆ 連絡などがデータで来ると保存しやすい、内容が確実。



生徒側が感じる問題点④ (アンケートより)

- ◆ Wifiがつながる**家と学校でしか勉強ができない**
- ◆ ノートではなく**教科書**のように使って欲しい
(持ち運びが大変だから)
- ◆ 暗記ペンで消して赤シートで隠して学習したい。
復習しづらい。
- ◆ プロジェクター画面は小さいので、理系科目は
かえって式がごちゃごちゃして分かりにくい。



生徒側が感じるメリット② (アンケートより)

- ◆ 地図や図などの資料が手元で**見やすい**。
- ◆ 荷物の軽減。映像や音声を送ってもらえる。
- ◆ 少しメモを取ったり、写真を挿入してまとめたり
等、**自分なりに工夫して学習できる**。



「資料が多い教科はどこに何があるのかが
分からない」



生徒アンケートの感想

- ◆ 全体として**肯定的** (あって当たり前?)
- ◆ 紙とデータ**混在**の苦勞
- ◆ 持たせたからには使ってほしい?
教員によって**異なるルール**へのためらい
- ◆ 授業以外での**自己工夫**
(友人と助け合い学習、ノートや過去問コピー)
- ◆ **紙でもデータでも有効性は本人次第**



私の考える主な課題

- ◆ 情報の発信方法の整備 → 受け取り手の **情報整理力**
- ◆ 課題の **タイミング** や量、**提出期限** への考慮
(課題の増加 → 部活との両立の苦勞)
- ◆ 「検索すること」より「検索ワードの入れ方」
(何を探すべきか、必要な **情報を取り出す力**) を。
- ◆ ペーパー試験と活動との **評価** バランス
(→ 関学大への進学基準の問題)

ありがとうございました。

探究授業の可能性とその評価

2020.2.24
西室雅央・田中章雅



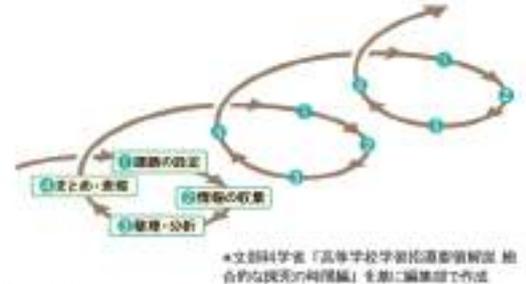
グローバル探究 BASIC : 概要



・「探究」

探究学習とはどのような学びか

探究学習とは、生徒が下図の①～④のプロセスを通じた学習活動を主体的に繰り返していく学び。



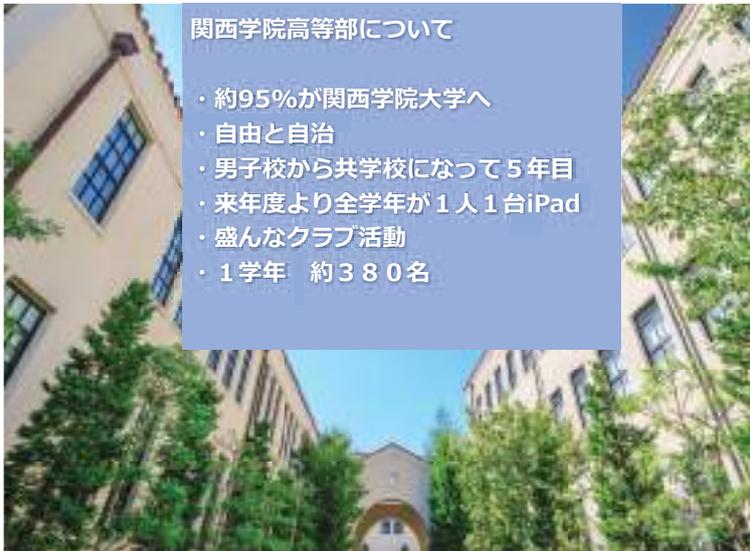
※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の科(探学)」を基に編集部で作成

ベネッセ教育総合研究所

https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_kou_2018_08_overheadview.pdf

関西学院高等部について

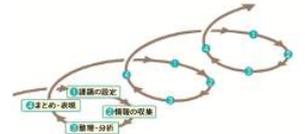
- ・約95%が関西学院大学へ
- ・自由と自治
- ・男子校から共学校になって5年目
- ・来年度より全学年が1人1台iPad
- ・盛んなクラブ活動
- ・1学年 約380名



グローバル探究 BASIC : 概要



- ・授業回数 16回 / 1回60分
- ・金曜の放課後
- ・授業重点テーマ



世界全体の課題である

SDGs

を自分事として考える

フィールドスタディ

を通じて **実社会**

とつながり、リアルな問いや
肌感覚の学びを得る

この授業のキーワード

自分の関心に基づいて訪問先を探し、調査を行い、自分だけの学びを深める

主体的な探究

クラスメートとのグループワークやディスカッション、発表、質疑応答など、積極的な自分の意見の

プレゼンテーション

5

グローバル探究 BASIC : 概要



- ・文部科学省 WWLコンソーシアム構築支援事業
「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」
- ・1年生：グローバル探究 BASIC (今年度のみ2学期よりスタート)
選抜35名・週1/60分・放課後の取り出し
- ・2年生：グローバル探究 A: AI活用
グローバル探究 B: ハンズオンラーニング
グローバル探究 C: グローバルスタディ
必修選択15-35名・週2(2コマ連続90分)
各科目教員2人
- ・3年生：上記3科目を継続
選択科目15-35名・週2(2コマ連続90分)

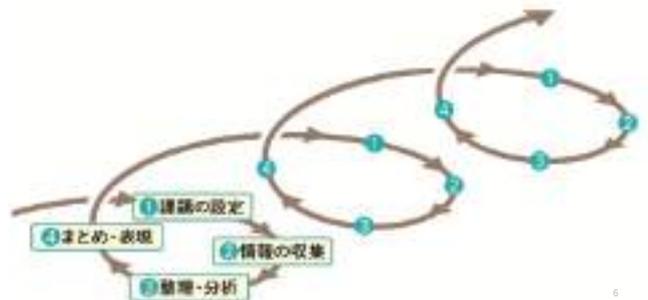
3

グローバル探究 BASIC : 目標



- ・目標 「社会を知る・社会の中の自己を知る」
- ・3つのフェーズ目標

第1フェーズ (2学期前半)	「知る」	①課題の設定
第2フェーズ (2学期後半)	「探る」	②情報の収集 ③整理・分析
第3フェーズ (3学期)	「共有する」	③整理・分析 ④まとめ・表現



6



SDGs / 関心 / 生の声
仲間 / 授業形態

<全4回>

- ・SDGs優先順位
- ・SDGsカードゲーム (KITの加工)
- ・専門家からの講義 (貧困/教育/国際協力)
- ・グループワーク

7



・生徒が決める

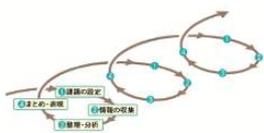
(熊本大学教育学部准教授 苫野一徳)

・予定調和にならない

(関西学院大学高等教育推進センター准教授 時任隼平)

10

③整理・分析



フィールドスタディ(FS)
観点と問い

<全6回>

- ・関心のあるテーマ/団体調べ→発表→グループ作り
- ・FS先調べ→プレゼン→交渉→決定
- ・「観点と問い」の作成
- ・FS実施 (全10か所/一人3か所)
- ・FSの情報の整理

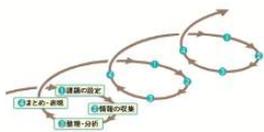
8



第1フェーズ 「知る」 問題意識 関心	<ul style="list-style-type: none"> ・SNSでよく目にするLGBT ・男子クラブ数>女子クラブ数 ・身近に感じる男女差別 →実際の企業の取組はどうなってるの?
第2フェーズ 「探る」 FS先 観点と問い	観点: LGBTと女性の社会進出 問い: 取組開始以前の取組 取組開始後の問題点 LGBT相談窓口
第3フェーズ 「共有する」 FS先の声/課題 アクションプラン	声や課題 <ul style="list-style-type: none"> ・女性に対する偏見 ・女性に対する接し方 ・上司との不一致 アクションプラン <ul style="list-style-type: none"> ・学校での講演/ポスター配布 ・図書館での紙芝居/絵本読み聞かせ ・SNSでの情報発信

11

④まとめ・表現



中間発表/相互フィードバック
最終発表

<全7回>

- ・中間発表: 発表12分 Q&A10分
- ・他/自グループの動画を見て振り返り (Classi)コンツボツク使用)
- ・最終発表: 発表10分 Q&A6分
- ・3~5観点
 - ①問題意識/FSの目的 (観点と問い)
 - ②FS先の情報 (課題/声)
 - ③アクションプラン ④視覚資料 ⑤声や視線

9



第1フェーズ 「知る」 問題意識 関心	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人の6人に1人が貧困 →相対的貧困 ・日常生活に必要な「食」をテーマに
第2フェーズ 「探る」 FS先 観点と問い	観点: 広報活動/支援企業数/国からの支援 問い: 広報が不十分なのでは? 企業の供給率と需要率が釣り合っていない? 国の支援の基本方針案をどう思う?
第3フェーズ 「共有する」 FS先の声/課題 アクションプラン	声や課題 <ul style="list-style-type: none"> ・SNS/イベント ・資金不足/スケールの小ささ ・日本企業の理解×NPO法人化→信用度up ・自由に活動できなくなるのでは アクションプラン <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアへの参加 ・学校の食堂を取材

12



● 評価対象と評価物

- 1) 生徒の授業内の学び/思考
 - a) <平常授業> 学びの記録 8回
 - b) <発表> 相互チェック表 2回
 - c) <振り返り> ポートフォリオ 1回
- 2) 生徒の成果物に関する学び/思考
 - a) <中間発表> 教員による評価 1回
 - b) <最終発表> 教員による評価 1回

13



※教員による中間発表（3観点）/最終発表（5観点）の評価
→複数教員による観点別評価
→評価の等価

観点① 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A (6点) スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B (4点) スライドの構成において結論に向けて論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされていない。
C (2点) スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。
観点② 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A (6点) 発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B (4点) 発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C (2点) 情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

16



● 評価方法

- ・基本的に3段階程度の評価
- ・配点の割合を変化

※教員による中間発表/最終発表の評価
→複数教員による観点別評価
→評価の等価

14



● 評価の割合/配点 <案>

- 1) 生徒の授業内の学び/思考 : 40点
 - a) <平常授業> 学びの記録 8回×0~2点 =16
 - b) <発表> 相互チェック表 2回×0~6点 =12
 - c) <振り返り> ポートフォリオ 1回×0~12点=12
- 2) 生徒の成果物に関する学び/思考 : 60点
 - a) <中間発表> 教員による評価 1回 =20
 - b) <最終発表> 教員による評価 1回 =40

17



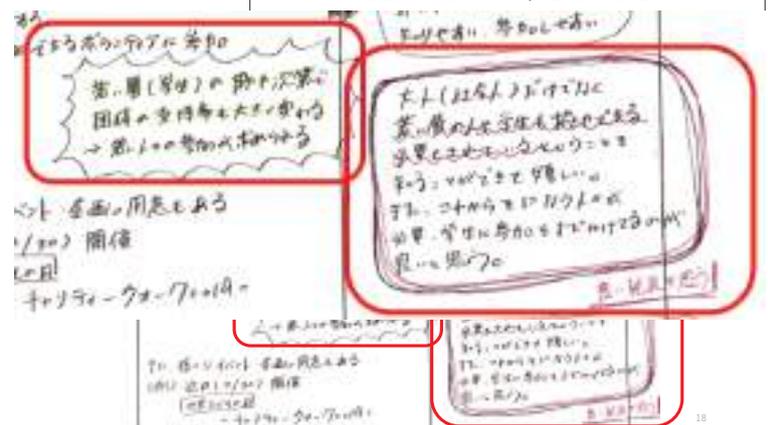
※教員による中間発表（3観点）/最終発表（5観点）の評価
→複数教員による観点別評価
→評価の等価

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりしているかどうか。
A (6点) どのような問題意識(きっかけ)でFS先を選定したのか、訪問の目的(何を知らなかったか)が明確である。
B (4点) FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C (2点) FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに繋がっていない。
観点② 施設独立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。
A (6点) 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B (4点) 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C (2点) FS先の人たちの大きさにして訪問者として感想を述べているだけである。
観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。
A (6点) 当該テーマについて何が出来るかが具体的にあり、高校生としての資源を活用それが実現可能であることを証明できている。
B (4点) 当該テーマについて何が出来るかが具体的に示されているが、それが高校生に実現できることが証明できていない。
C (2点) 何が出来るかが抽象的であり、それが当該テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

15

1a 学びの記録

- A 知識：自分の観点を持って自分なりに内容を処理
意見：深い洞察・クリエイティブな広がり
- B 知識：そのままのメモ / 意見：短絡的な感想
- C 知識：記述が少ない / 意見：記述が少ない



18

1a 学びの記録

A 知識：自分の観点を持って自分なりに内容を処理
 意見：深い洞察・クリエイティブな広がり
 B 知識：そのままのメモ / 意見：短絡的な感想
 知識：記述が少ない / 意見：記述が少ない

ホスト制度が存在して
 117 意義とは？

日本の人口も多
 想像の同僚もいる

1c ポートフォリオ

コンピテンシー A B C A B C

私たちが目指すのは「皆が平等に活躍できる場を創り出すこと」であり、そのために必要なのは、無料型の活動をサポートするのはその過程です。自分のことを考え終わったからと言って思考をやめず、そのさらに先を考えて、冷静行動に移せるようにならなければならないと感じました。

に、中堅企業での経験が「つばの子」への活動のサポートをすることになってしまいました。私たちが目指すのは「皆が平等に活躍できる場を創り出すこと」であり、そのために必要なのは、無料型の活動をサポートするのはその過程です。自分のことを考え終わったからと言って思考をやめず、そのさらに先を考えて、冷静行動に移せるようにならなければならないと感じました。

1b 相互チェック表

A 知識：自分の観点を持って自分なりに内容を処理
 意見：深い洞察・クリエイティブな広がり
 B 知識：そのままのメモ / 意見：短絡的な感想

高等部への
 被信を、クラスで行うのは賢いと思
 った。(興味あるト向け)

興味のあるト向けの被信方法について
 考えるのは和達と同じ課題

予想外で感心。線引(課題②)

1c ポートフォリオ

コンピテンシー A B C A B C

他の班の解決策を聞いていると、周りの意見に流されてしまっていて同じような見方しかで
 でした。せっかくグループで1つのテーマについて考えているのだから、地道でもっと意
 見を交換し、お互いの解決策が思いつくことができればいいと思います。多岐にわたる
 否定的な見方でもできるようにすれば深い議論ができるので
 と思います。VUIの授業の中で、一つの課題について多岐にわたる意見が交差する
 ことがよくあります。

1b 相互チェック表

A 知識：自分の観点を持って自分なりに内容を処理
 意見：深い洞察・クリエイティブな広がり
 B 知識：そのままのメモ / 意見：短絡的な感想
 C 知識：記述が少ない / 意見：記述が少ない

自分達に何かできるのかがわかってきた

想像していた通りの施設でしたが！現場の人
 心で、思ったよりも規模が大きかった

ソファ(例 コスプレ交換)

2a 教員による評価（中間発表）

評価項目	評価
1. 発表の準備	A
2. 発表の進め方	B
3. 質疑応答	C

- 発表の準備 発表の準備が十分で、内容もよくまとまっていた。発表の準備が十分で、内容もよくまとまっていた。
- 発表の進め方 発表の進め方がよく、聴衆の反応も良かった。発表の進め方がよく、聴衆の反応も良かった。
- 質疑応答 質疑応答への対応が良かった。質疑応答への対応が良かった。



【教員からのフィードバック概略】

全体的によく情報収集され、現場の声もきちんと拾っていたと思います。ただ、上述した通り、どうして「女性の社会進出」というテーマにしたのか？どうして、この題材にしたのか？が少しわかりにくかったと思います。最終的に自分達が選んだFS先が自分達の当初の目的と合致していたのかを確認しても良いかもしれません。質疑応答の中で出ていましたが、「自分達が持っているイメージが再確認できたことに意味があった」というのが一つのヒントかもしれません。

FSの後、自分達の考えを深掘りできていると思いますが、アクションプランについては、もう少し具体的なところまで考えて欲しいと思います。これも質疑応答に出ていましたが、最終的に「性別による思い込みをなくそう」というテーマに変わってしまったように思えます。課題からアクションプランのところのつながりをもっと少し考えてみてはどうでしょうか？

プレゼンの方法にも工夫が凝らされており良かったと思います。ただ、スライドの字の大きさ等が統一されていなかったりで、見づらいです。分担して作成しているのでもしいと思いますが、できるだけ文字の大きさをそろえましょう。

25

教科学習では得られない学び

- 授業のほぼすべてグループワーク
協働の力・コミュニケーションの力・
意見をまとめる力
- 学校ではない社会を学ぶ
フィールドスタディを通して、学校以外＝企業という文化の中での活動

28



●評価の割合/配点 <案>

- 1) 生徒の授業内の学び/思考 : 40点
 - a) <平常授業> 学びの記録 8回×0~2点 =16
 - b) <発表> 相互チェック表 2回×0~6点 =12
 - c) <振り返り> ポートフォリオ 1回×0~12点=12
 - d) <質疑応答> 質問内容 2回×0~??点=??点
- 2) 生徒の成果物に関する学び/思考 : 60点
 - a) <中間発表> 教員による評価 1回 =20
 - b) <最終発表> 教員による評価 1回 =40

26

教科学習では得られない学び

- 批判することを恐れない
中間発表・最終発表での途切れない質疑応答
- 批判されることを恐れない
教員からのフィードバックへの応答

29



- ・複数教科の教員が担当（英語科・社会科・数学科）
- ・生徒の探究活動における成長
→ 教員自身の教科授業における生徒への期待
- ・教員同士の関係性
→ 教員それぞれの専門分野からの指摘
→ 教員それぞれの視点からの指摘
→ 各発表グループについて、教員がそれぞれの情報を交換しながら指導に当たる

27

他生徒への波及力

1年生学年活動「ソーシャル探究」
(第1学年3学期に実施)

- ・classiの連携サービス「探究ナビ」を活用
- ・1年生全員がそれぞれ興味関心のあるソーシャル 이슈を設定し、グループ毎に解決提言等を行う
- ・運営は、各クラスの「グローバル探究」受講者が行う
- ・テーマの設定や、リサーチの方法、発表の仕方等について適宜アドバイスを行う

30



- ・フィールドスタディを通して学んだこと
- ・全国高校生フォーラムに参加
- ・英語で発表

31

A photograph showing an aerial view of a coastline with blue water and white clouds. The text "質疑応答" is overlaid in the center of the image.

質疑応答